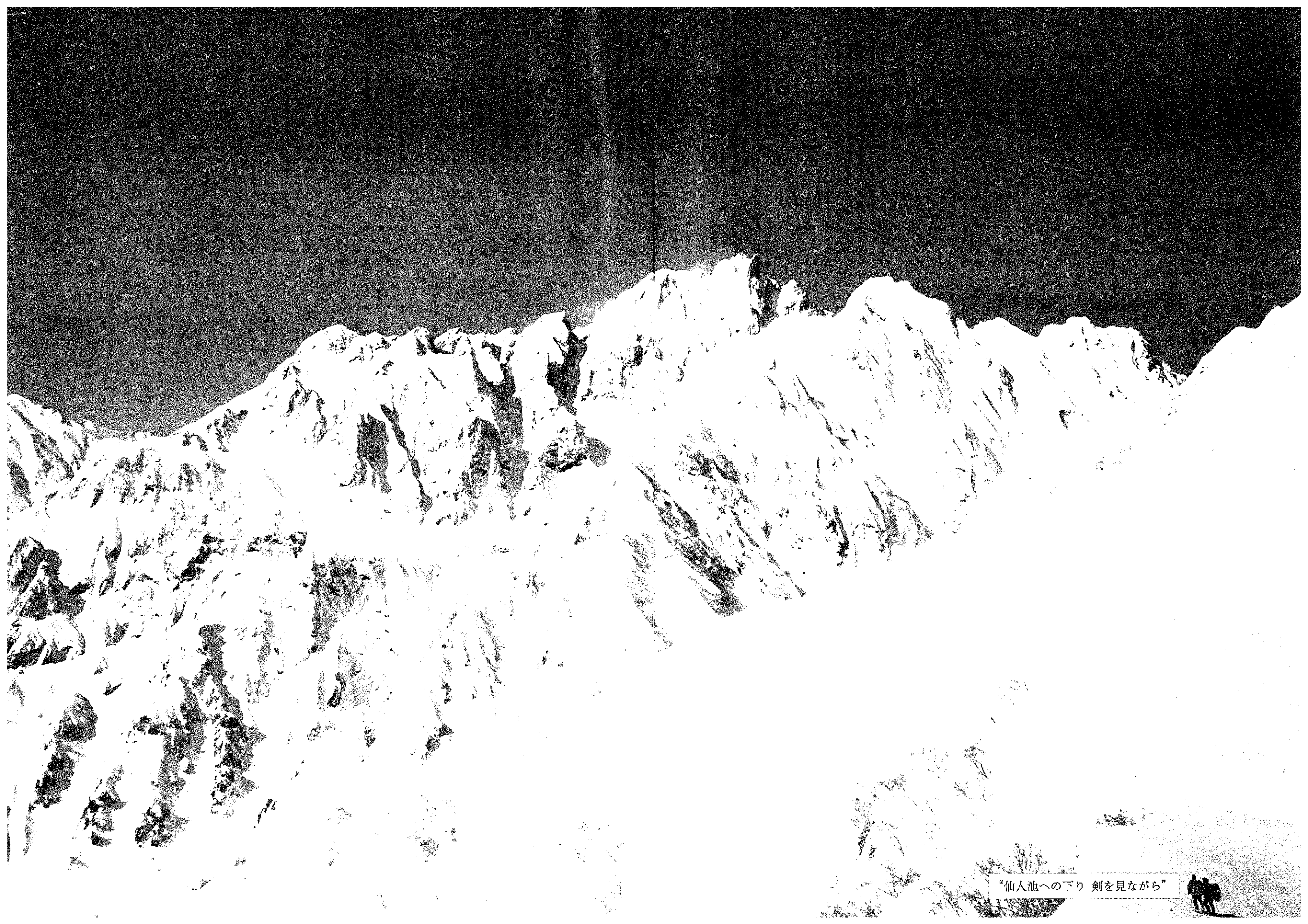


時報

第20号

大阪大学山岳会



“仙人池への下り 剣を見ながら”





89年度 新人歓迎合宿
北穂山頂にて

90年度 夏山定着合宿
真砂にて



91年度 蓬萊峡 岩トレ



92年度冬 大明神山頂上にて

93年度 夏山定着合宿
真砂にて 下山直前



94年度 新人歓迎合宿
立山にて

アイランドピーク遠征
左 紫藤(O.B)、右 大倉(O.B)



序

山岳部部长 大野義照

山田朝治先生が停年退官された 1990 年 3 月の後、部長を引き継いだ。山田先生には 1978 年から 12 年間山岳部々長として現役の面倒を見ていただいた。御迷惑をおかけしないからと、先輩の方々がお願いされたとのことであったが、幸い大きな事故はなかったものの登山中の事故による負傷者の搬出のため 2 度ヘリコプターを飛ばすことがあった。1984 年には先生が工学部長として多忙を極めておられる時に、サンゲマルール峰の遠征隊を出していただいた。準備室を工学部キャンパス内の空部屋に設けていただいたり、登頂の知らせが入ったときは部長室でテレビの取材に応じたことが思い出される。また、その前後に 3 度現役部員の海外登山をご支援いただくなど現役の活発な活動を推進していただいた。

先生に最もご心配をおかけしたのは、部員が年々減っていったことであった。社会的にも若い人々の登山が減り、代わりに中高年の登山者がふえてきた。部長を引き継いだ後数年は毎年数年 5～6 名の入部があり 2 桁の部員数となり、全国の大学でも希な部員数となった。しかし、それもつかの間のことでまた入部者が減ってきた。部員減少には 2 つの問題点がある。まずは登山活動に制約が生じること。対象も、ルートも登山形式も制約される。それ以上に重要な点は大阪大学山岳部の思想と技術の伝承に困難をきたすことである。別報で報告の 1993 年秋の事故の一因もここにあると思う。OB、特に若い OB の支援をお願いしたい。

山岳部は体育会に所属しているが、他の運動部のように応援のあるグラウンドで他大学と登山技術を競うのではない。自分との対決、自然との対話を求めて、あるいは純粹に山に登りたくて登るのである。山登りには、体力、技術力、精神力、判断力、それに生活技術力も必要とされる。学生時代に親しんだ山は、その後一生の伴侶となる。むろん一緒に登った仲間はそれ以上である。受験勉強から解放された新入生にとってクラブは視野を広げ、自己を研鑽し、友人を得る大切な場である。教養部がなくなったいま一そうその重要性が増している。

(1996.12 記)

長い坂道を登りながら、深いラッセルを続けながら“登山とは一体何だろう”と思った事のない男は居ないだろう。しかし激しい登山に明け暮れていたその頃、他に何を考えながら歩いていたのかを覚えて居ないのは何故だろう。ひたすら山登りに徹していた訳では勿論ないし、学問や人生と云った高尚な事を考えて居た覚えもない。ただ苦しい登行の度に“もう山登りは止めよう”と思った事は幾度もある。暇を持って余す停滞のテントの中ではためく天井を眺めながら“俺は一体何をしているのだろうか”とか、“帰ったら——を腹いっぱい食べてやろう”、挙げ句は“どうしてこんなつまらない仲間と何時も一緒に山登りを続けているのだろうか”などと考えた覚えはある。

ただひとつ、登り続けて居るときに何時も思い出して困った事がある。中学の生理の実験で蛙のひらめ筋を電気刺激して収縮運動を起こさせるときに、刺激頻度を増やすともう筋肉が収縮しなくなってしまうあの不応期の事である。登りながらそろそろ不応期が来るぞと思ってしまう。もうひとつは、クロスカントリーで調子よく走っているとき、傍に走り寄って来た友達に“おい、なんでこんなしんどいことをせんとあかんのや”と云われて走る気を無くした事を、ポッカやラッセルの最中に思い出させられたことである。

しかし、生死を分かつ激しい登山の最中にこの様なことを思い出した記憶はない。

“愛国心と云うものは戦場では却って弱く、平和の時に高揚する”とある人が云った。登行意欲も山に入る前の方が高く、登山の恐怖はその最中には無く、却ってその前後に起こるものなのである。それを“登山前夜の不安”と誰かが云った。

嘗て、“人生とは何か”を考え悩み、その内に考えなくなって生きて来た様に、登山とは何かを考え、もう山登りを止めようと何度も決心し、そしていま登り続けているのもただの惰性で、山にいて里を思い、里にいて山を思う事の繰り返しを続けているだけの事かも知れない。

* * * * *

“何故山に登るのか?” “それはそこに在るからだ”と云う応答は実に巧く出来ている、何故本を、何故音楽を、などの難しい質問は全てこれで足りるからである。しかし何故生きているのか、と云う質問に答える事が難しい様に、この答は登山と関係のない一般の人々に対しては適当であっても、真実味のある答とは云えない。“放つといってくれ、俺はただ登りたいから登っているだけだ”でも良いが、人類の進歩が、何故登るのか?に類する様々な一見くだらない様に見える先人の業績の積み重ねに因るものである以上、こう云った各分野のつまらない“何故”を一つ一つ解明して行く必要があると思う。私達は未だ嘗て何故山に登るのかに対する納得を得る答を誰からも得てはいない。

アポロ 11 号で最初に月面に降り立った男は“人類とは探険をせずには居れない動物である”

と云った。モビイデックを追いかけたエイハブ船長は、自分を駆り立てるものは、“一体何なんだ”と叫んでいる。ウィルフレッド・ノイスはその著書（冒険）“この駆り立てるもの”の冒頭で、私は子供の時から、登りたいから登ると云う答に納得できなかったと書いている。

“何が人間を登山や冒険に駆り立てるのか”女王の戴冠式に間に合う様に登頂するとか、衛星中継の為に何月何日の何時に頂上でドッキングするとか、功利心や名誉欲を全て削り去った後にも尚そこには人間を駆り立てる何かがある。その何かの内側に人間社会を捨てて極地に向かいながら、しかし文明や社会に深く係っている深層の事実がある様に思われる。

人間は<苦しみを求める>のと、<苦しみを避ける>二つのグループに大別出来る、七難八苦を吾れに与え給え（山中鹿之介）、新しい世界観は苦業を経て克ち取ることが出来る（サン・テクジュペリ）、苦しみを通しての力（ヒットラー）、そしてスコットやナンセンの修行僧の様に自分を苦しめる事に依って始めて生き甲斐を覚えるのではないかと迄に思えるマゾヒズム——K2、7500mの吹雪のなかで、C.ヒューストンは“これ程のものを娯楽とかスポーツと云えるだろうか、我々はマゾヒストなのか”と自問自答している。

“なぜ登るのか”に表裏一体する登山の持つもう一つの課題、即ち長時間に亘る精神的肉体的苦痛を如何に考えるかは、新しい岳人と21世紀の登山界の大きな課題であろう。

* * * *

“何故山に登るのか”とは別に“何故山に登り続けているのか”は興味のある質問である。同じ様に登っていても夫々の興味の対象は様々である。自然に惹かれる人もあれば、より困難なルートを求めて登り続ける人もある。私達は色々な先輩や仲間を見て来ている。夏山しか行かず、道の無い所や岩登りを絶対にしない男、反対に冬山や氷壁ルートしか興味を示さない男、ジョージ・マロリーやロング・スタツフなど図書を通じて過去に拘る人も居れば、未来の新しい企画を追い掛ける人も居る。急に山を止めた人も知っている。

ウインパーはマツターホーンの後、二度と再びアルプスに行かなかったと云われている。テイルマンやシプトンもあのエベレストの後、全く違った方向に転じている。しかし、彼らが登山を止めたとは誰も思っていない。夫々の世界で夫々の山登りを続けて行ったに違いないからである。

アルプスが終ってもアルピニズムは消滅しなかった様に、ヒマラヤの八千米峰に登られた後に於ても登山の灯は燃え続けている。ただ、ヒマラヤンジャイアンツが了った後に、何が正当な登山であるかといった従来の基準が無くなり、新しい方法論が要請され模索している状態なのかも知れない。旅行や海中でもワングルでも何でも良い。登山家が行う限り山岳界の集會に出ているもそれは山登りと考えて良い。要するに登山は今や多様な時代を迎えたのである。

“何故山に登り続けて来たのか”をもう一度考え直して見よう。私達と山を結び付け、登山を続けさせて来たものは実は山ではなく若しかすると古い仲間であったかも知れない。

(H6、9、8)

1988 年度を振り返って

柴 藤 圭 介

時報前号において 89 年度リーダーから既に指摘があったように、部員数の問題この年も表面化した。しかもこの年以後も結果として悪化してゆくことになるのである。しかしながら、問題の核心は常に一点にあり、これすなわち新人部員の去就である。この問題はパターン化すらしているこのところ続いている現象は、一言で『竜頭蛇尾』とって良いものだ。年度当初は 4 名から 5 名の新人入部を見るのだが、夏山終了前、アイゼン合宿前、さらに冬山終了後それぞれの時期において新人の山に対する意欲が不明瞭になり、明確な理由もなく一人一人と退部してゆく。結果としては一名しか残らぬかあるいは一学年全体が完全に消失してしまうというものだ。過去の時報をひもといてみると、71、72 年度において類似した問題が起こっており、当時の先達も山岳活動の質よりはその存続自体に頭を悩ましておられたようだ。どうやらこうした問題は波のうねりのように時節に従って顕著化するものらしい。大学山岳部は、毎年幾人かの学生が参入し、退出してゆくプロセスのなかで成立している。それは新陳代謝している生物のようなものである。入れ替わりが急激なため、それは元来安定は望めない生物である。部員たちは活動しながら、その中で以前からのあらゆる知識、経験を受け継ぎ、伝えてゆかねばならない。しかしながら総合的な山をめぐる心、登山の喜び、醍醐味の伝承は本質的には可能であっても（私はそう信じている）、一部では形骸化し、無用の固執を生み出してしまう恐れがある。私のリーダー経験を振り返っても、過去の伝統を生かすというよりは、それに安住する嫌いがあったと反省させられる。特に新人に対する指導がその顕著な例であった。自分が経験した訓練方法や計画立案の傾向、様々な習慣などを新人との対話もなしに、雰囲気によって上から押しつけていたのである。勿論責任ある存在に成熟していない新人に対し、あらゆることを迎合的に許してゆくことはリーダーには許されない。それは危険なことだ。しかしながら一方、リーダーそしてリーダー層の、自覚のない無意識な指導もそれが無自覚であるほど、新人の離反を生み出すはずである。さて正直なところ、私は学生の登山離れといわれる傾向については楽観している。実際ここ数年登山に興味を持つ学生が減りつつあるなどとうかがうことが信じられようか。世界中どの時代をとっても、どのような狭い範囲に限定しても、人々の中に確実に何パーセントかの物好きを見いだしているように、毎年阪大の入学生の中には確実に私たちと同好の人間が生きているのだ。それは生理的な問題である。阪大山岳部はそういった士のための受け皿なのである。少なくとも幾人かの新人は毎年顔を見せてくれるのだ。彼らが活動中に退部してゆくとゆうのは、私たちがそれを受けだけの準備を怠っているということだろう。これからの現役部員には、こうした危機的な部員の減少を戒めと取ってもらいたい。ひとつの機会だと自覚してもらいたい。花よ花よの時期を過ごすことができるのは当然のこと、苦しい時期何とかやり過ごしてなんぼと覚悟してほしいのだ。そのためには現役部員は部活動の内容の大胆な改革も辞してはいけないと思う。

更には責任ある存在となつてはいない新人にたいしては、伝統の名のもとに欺瞞することなく正直に率直に接し、育ててもらいたい。何とも説教じみてしまつて心苦しいが、山に限らずすべてのことには昇り下りがあるもの、高い夢を追うには適切な時期があるはずである。今はできるかぎりはっきりと目覚めていることに努め、後々のために力をそそぎ、力を蓄えておくべきである。

1989年度を振り返って

大倉 徹雄

ここ近年の傾向だが、本年度もやはり問題は部員の少なさだった。3年、2年が一人ずつ、1年が2人という状態で春山に表銀～槍縦走を行ったが、このメンバー構成でこのルートに行くにはかなりシビアだった。事実、東鎌でラッセル中トップの1年が雪庇を踏み抜くという事故が起きた。幸いにも20m程度落ちて止まったが、重大事故になる可能性も充分あり、リーダーの力不足に加えてパーティーとしての力不足を痛感した山行であった。

4月になり、新人勧誘の時期となったが、前年同様、部室に訪れる人数からして少なく、結局新入部員は、前年秋から来ている2年以外は2人だけ、その2人も夏山が終わると退部していった。他大学の山岳部を見ていると、部員確保のためソフト路線に切り替えると岩や雪には行かなくななくなる（行けなくなる？）傾向にあるようだったので、特に厳しくはしないが例年どおりの技術は最低身につけてもらうつもりだったのだが、それが合わなかったようだった。冬山は針ノ木岳に登りたいと思い、北葛経由で行く事とし偵察を行ったが、弱気になり、結局目標としていた針ノ木岳を削ってしまった。後で考えると充分に行けていたと思われ、悔やまれる山行だった。

今後山岳部とゆうクラブが流行るかどうかは分からないが部員確保と活動内容が反比例するような事があってはならないと思う。ソフト化するあまり、ザイルワーク等基本的な技術が未熟なまま山行を行うことになると危険だし、また活動内容も技術があればこそ広がって行くものだと思う。今年度このように活動できたかどうかは疑問だが、今後の現役諸氏に期待したい。

1990年度を振り返って

蔭山 健

冬山を終えて、リーダーを引き継いだ時点で現役部員は総勢4名（ただし、学内OBが5名在学中であり、様々な面で協力いただいたことは部にとって非常に幸運であった。）であり、部員減少期の真っ只中であつた。折しも世間は、バブル時代であり「山」以外に様々な享楽の機会があふれかえっている状態であり、また、「山」と一言でいっても、ヒマラヤ登山から、ハードフリークライミングまで多種多様になってきた折でもあつた。その中

で、「大学山岳部」の存在意義とは何か—実力的には、社会人山岳会には遠く及ばず、フリークライミングの波には乗り切れず、過去の山行形態の踏襲に終始している状態—が改めて問われる問題であった。いや、それよりもむしろ、学生にとって、他にあらゆる享楽の機会がある中で、「何のために山に登るのか」そのこと自体が今更ながらに大きな問題であり、部員自体の山への意欲が希薄になっていたことに問題があった。その中であって、次期の活動に向けて、新人獲得問題も含めて新たな指針を立てねばならなかった。岩登り、雪山への参加を強要しないなど活動自体をソフト化し、部員を増やす方向で方針を固めようと幾度となく考えたのだが、結局、当時の部にとって最も大切なのは、私自身も含めて部員個人の山に対する姿勢、情熱であり、それらが部内でぶつかって生まれる活気であり、その活気が足りないことが一番の問題であると認識してこの活気さえ出せば、たとえ少人数であっても逆に機動力のある活動、意志のまとまった活動ができるのではないかと考え、取り立てて大きな変革を行わず、できるだけ個人の積極性をひきだすように努めることにした。結果的に、将来的なビジョンとしての明確な目的を打ち出すことができず、今までの山行形態を踏襲するに終わり、途中新人も含めて退部者を出し、また、冬山は敗退に終わったことからしては、リーダーの実力不足以外の何者でもないことは明らかである。しかし、安易に部の活動方針をソフト化せず、あくまで部員個人の志向をより積極的な方向に導くという方針だけは、間違いではなかったと今でも信じている。というのも、私自身がこの一年間の活動に自分なりにある程度満足しているからである。私がこの一年間の経験から言えるのは、「何のために山に登るのか」を考える際に、今一度「山」の魅力とは何かという原点の問題に立ち返って考えることが重要ではないかということである。私の考える「山」の魅力は、こうである。自分自身にとって未知の自然の世界、またその時々により天候、地形様々に変化に富んだ世界の中で、自分の身一つと、自分の体力、知識、精神力を駆使していかに対応していくのが楽しいのであり、それらを仲間とともに力を合わせて乗り越えたときの充実感が他にかえ難いのである。それに加えて、高度感覚や視覚的な刺激がスパイスとなって、さらに魅力的なものとなっている。所詮は、自己満足の世界なのであるが、それ以上の何かは「山」にはあるのだと思う。自然と相対しているとき、非常に純粋な自己の存在を発見するからかもしれない。

結局、他人がどう判断しようが、過去の山行形態の踏襲であろうが、ハードフリーだろうが、ヒマラヤ登山だろうが、個人にとって未知の自然の世界なのであれば、その中の自分の好きな山に、どれだけの情熱をもって、どれだけ積極的に向かうかが、重要なのである。山は情熱を持って向かえば向かうだけ、それに答えてくれるものであり、逆にそれが少ないければ、山の魅力を感じることも少ないだろう、その個人の情熱の高鳴りが、個人個人が明確な目的意識を持つことにつながるのだと思う。そうした個人個人の山に対するぶつけあう場として、「山岳部」を機能させることが、今後重要であろう。その中で、今後の「大学山岳部」の在り方が自然と出てくるだろうと思う。部全体をこの方向に導くためには、リーダーも含めた上級生自らが、自分の好きな山をやることであると思う。積極的に。

1991年を振り返って

朽尾 豪人

1991年の夏、我々阪大山岳部は剣岳・真砂にベースを置き定着合宿を行なった。この年はリーダー、サブリーダーの上級生2名に対し新人5名と、新人の比率が極端に大きい部員構成であったため計画は新人の遠足と岩登りが中心となっていた。しかしその夏は青空の見える日は結局1日だけで、連日雨、良くて霧雨と言った具合に天候に恵まれず、計画はほとんど消化されないまま下山の日を迎えた。「せめて最後くらいは晴れてくれ」と言う祈りも空しく下山も雨模様となった。「不快な下山になるなあ」と思いつつも、「コースタイム（6時間）くらいで下りられるだろう」とたかをくくって出発したのだが、このとき下山にまさか9時間以上もかかるとは思ってもみなかった。下山ルートはハシゴ谷乗越～黒4ダムであったが、この道は整備が悪く、そのうえ雨のため岩が濡れているので1年生にはきついで、あちこちでこけまくり、さらにはハシゴ谷に転落する者もいたりして、なかなか進まなかった。。やっとのことでトローリーバスの駅についたときには最終のバスはとっくに出了た後だった。体力不足・技術不足と言われればそれまでであるが、山が初めての1年生に上級生並の力を要求するのは無理な話である。やはり部員構成上、上級生がパーティーのトップとラストだけにしかいないと言うことが問題で、これでは1年生全員に目を届かせることは不可能で、ちょっとした悪場が出てきても時間倍増・危険百倍増と思われた。今年のような特異な部員構成の影響は山行前からある程度予測はしていたのだが、その影響は予想以上に大きいと感じられた。

このような夏の経験から冬の計画をたてた。大幅に機動力を欠いた今年のパーティーではフィックス通過に尋常ならざる時間を食うと思ひ、なるべくフィックスのいらぬラッセル中心の尾根として大日尾根を選んだ。この尾根は山域的に十分な降雪が期待され、実際、冬本番では期待どうり(?)二つ玉低気圧が猛烈な降雪と通過後の激しい寒気をもたらしてくれた。この山行で1年生諸氏は冬山独特の雰囲気、冬型と次の冬型の間のわずかな晴天を待ちわびながら、ガスの中じわじわとラッセルして高度を稼いでいくあの雰囲気を堪能できたことと思う。奥大日岳まではいけなかったものの、パーティーの総合力と天候を考えれば大日岳まででも成功だったと思っている。

1991年の主役は1年生だったから、クラブとしての山行のレベルは下げたものの、全ての山行の晴天率は低く新人にとっては不快なことが多かったと思うが退部者が出なかったことは喜ばしい限りである。というのは、ここ数年入部しても退部するものが多く、現役部員が減少し1991年初頭には現役部員二人となっていた。正直「山岳部もいよいよ終わりか？」などと考えたこともあった。「時代の流れ」と半ばあきらめかけていたが、この年の活動を終えて思うことは、退部者が出るのは我々が山の魅力を彼らに十分伝えられなかったことが原因で、伝える努力が不足していたのではないかと言うことである。部員数が

少なくなると、どうしても上級生の好みで山行が決められ、1年生はそれについていけるだけの力を要求される。要求される力が高いと、経験も少なく、山の面白みがまだ十分わかっていない1年生には大きなプレッシャーがかかり、圧迫し、押し潰してしまうのである。これが近年の退部パターンではないだろうか。簡単に言えば上級生の我がままに、訳の分からぬまま1年生が付き合わされると言った形になっていたのではないか。基本的に登山は登山者のやりたいことを自由にやればよいと思うが、当時のように部員が減少している頃は部としては、次の世代のことをもっと真剣に考えて、少なくとも新人を含む山行では、上級生は新人のほうへもっと歩み寄るべきだったと反省している。技術を磨くのは、山の面白みを分かってからでも遅くはないと思う。現在は部員が増えたので上級生は上級生なりの、新人はそれに見合った山行を別々にやれるのでこのような心配はあまりないと思うが、新人のケアには十分注意して欲しい。

早いもので今（1993年）では当時の1年も3年となり最上級生として山岳部を引っ張っている。新人も多く入ったと聞く。充実した山行ができることを願ってやまない。

1992年度を振り返って

森 政人

1992年度を振り返って4、3回生が途絶えたこの年は、大学院1年の私が必然的にリーダーとなった。リーダー層1人に対して1、2回生11人という特異な年であった。当然、本年度の目標は、来期唯一のリーダー層となる2回生の育成に重きをおいたつもりであった。とはいえ、私自身忙しく、本来なら技術、知識そして、部員達との交流の場である岩トレに十分に参加できなかったのは残念であった。

幸い、夏定着においてはOB諸氏の多大な援助を受けることができ、得るものも多かった合宿にする事が出来た。冬は自前で行くことを前提とし、かつ冬山らしい山域として、大明神尾根から毛勝山を目指したが、冬山らしからぬ天候と明瞭につけられたトレースのために、あっけなく終わってしまった。無事に終わったのだからいいではないかと言われるだろうが、私としては、全て我々自身でトレースをつけたかった。そうすることで2回生以下、冬独特の重苦しさ、緊張感を少しでも味わえたであろうにと残念で仕方がない。この山行を冬山の基準としないことを切に願う。

とはいえ、部員も増え部内の雰囲気も明るくなったのは確かである。また、上級生が少なかった分、今迄の山行形態を変える土壌が出来てきているように思う。そこら辺は現役の考えに任せるとして、憂いを1つ。人数の多くなった分、個人の果たす部への役割というのも2年前と比べると大分小さくなってきた。ゆめゆめ、それに甘えることのなきよう。私がリーダーをしていた時も若干そういう傾向がみえていた。部というものは個人の集まりである。各々が力をフルに出してこそ目標達成が近づくということを念頭において頑張るって欲しい。

1993 年を振り返って

川上 和 幸

今年度は現役部員の中に四年生がいないという状態で合宿に望むことになった。幸い一年生が五人も入部してくれ、にぎやかな合宿になるだろうと考えていた。がしかし、クラブ全体としては四年生欠く分どうしても力不足にならざるおえない。来年、自分たちが四年生になるまでは、この年を訓練の年と位置ずけて慎重に行動しようと考えていた。夏合宿を無事に終えさあいよいよ積雪期だと、偵察合宿に入ったときに、くやしい事故が起こってしまった。二年生の飯田君を事故で失ってしまったのである。

私自身、彼が事故に会った場所を通ったことがあり、計画段階で特にその場所だけは慎重に行動するようにと、しつこく注意はしていたが、まさか本当にその場所で事故が起こるとは考えてもみなかった。核心部はすでに過ぎた後であり、絶対的な技術不足だけが事故の原因とは考えにくい。早朝でまだ体が本調子ではなかったこと、下山を目前にひかえての気のゆるみなど様々な要素が重なりあい事故の発生へと至ったのではないかと私自身は考えている。事故以前の合宿でも危うい場面は幾度となくあった。そう考えると私たちが今まで大きな事故もなくやって来れたのはたまたま運が良かったにすぎないのだと痛感した。これから活動を続けてゆく後輩諸氏には、合宿で起こったどんな小さなことでも、後の反省会で取り上げ、原因を考え後の活移動にそれを生かすようにしてほしい。大学での事故報告会の折りに飯田君の御両親も言うておられましたが、二度とこのような事故を起こさないで欲しいと心から願っています。

1994 年度を振り返って

光永正樹

私が 94 年度にリーダーを引き継いだ時、部は 4 年 5 名、3 年 5 名、2 年 5 名、1 年 2 名、計 17 名の大所帯となっていた。私がリーダーになりたいと思った一番の理由は、私の好きな山登りのスタイルを後輩に 1 人でも多く紹介し、できれば部員全員を充実した山行に案内したい、といったものであった。そしてこれは私事であるが、部を引退しても自分と一緒に山にいつてくれる後輩を 1 人でも作りたいこともあった。このことがどの程度部員にわかってもらえたかはなはだ疑問であるが、その姿勢は貫いたと思っている。こういった私の姿勢は信頼できる 3、4 年生に支えられていた。実際、数年前のように部員が数人という状況では、後輩の面倒をみるだけで精一杯だろうし、そうであれば私の好きなスタイルを紹介するというもおそらくできなかつただろう。そういう点で 94 年度は恵まれていたと言える。

さて、他大学の山岳部にも言えることだが、最近部員の山に登る情熱(あるいは動機)が薄れ

てきたようである。それは部の体質、リーダーの資質に大変影響されるものである。1年生は大体やる気のあるものであるが、それが1、2年経つと練習を怠りがちになり安楽な山行に流れていくのは、本人の性格もあるが、部の運営がきちんとされていないためと考えている。私自身ルーズな面もあり、その点は全く改善されなかった。基本的なことだが、1週間に1日は岩登りをする、山行前には自主トレをして体調を整える、コースの下調べをする、をこれから改善して欲しい。そういった基本的なことをやっておかないと山行する際の集中力、やる気が減殺され事故につながるものである。事故の本当の原因はこういったことにあると思う。

安楽な山行とは何か。それは自分の技量にふさわしくない、ただ体が楽なだけの山行である。そんな山行をしても絶対充実感は味わえない。充実感のある山行は自分の技量にふさわしい、あるいはすこし難しいくらいのものでないとできないだろう。私自身、充実感を堪能した山行はまだやってないが、程々の充実感を味わった山行はいずれも苦しい山行だったような気がする。大学4年間で充実感のある山行をするのは決して難しくはない。そして部員全員が充実感を味わうことが山岳部の1つの役割だと考えている。後輩には、是非、充実感を堪能するような山行をしてもらいたい。

目 次

I. 大阪大学山岳部の部	13	新人歓迎合宿	49
1988 年度活動記録	14	剣沢	49
五月合宿 剣沢	16	個人山行	50
夏山定着合宿 真砂	17	丸山東壁	50
夏山縦走合宿	21	夏山定着合宿 真砂沢	52
上高地～黒部五郎～五色ヶ原～雷鳥平	21	夏山縦走合宿	55
～大日岳～称名滝	21	槍～親不知	55
黒部峡谷黒薙川柳又谷完全廻行	22	南アルプス甲斐駒ヶ岳	56
偵察山行	23	明星山 P 6 南壁	58
表銀～槍	23	偵察合宿	60
毛勝～東芦見尾根	24	湯俣～雲ノ平～薬師沢小屋～太郎平小	60
アイゼン合宿 御嶽山	26	屋～折立	60
冬山合宿	27	雄山東尾根～真砂尾根	62
毛勝東芦見尾根	27	アイゼン合宿 御岳	64
春山合宿	28	剣岳、小窓尾根 (関西学生山岳連盟隊)	64
表銀座から槍ヶ岳縦走	28	冬山合宿 雄山東尾根	66
1989 年度活動記録	30	八ヶ岳 (横岳西壁)	67
新人歓迎合宿 涸沢	32	春山合宿 湯俣～雲ノ平～薬師岳～神	68
夏山定着合宿 涸沢	33	岡新道	68
夏山縦走合宿	36	1991 年度活動記録	70
南アルプス縦走	36	新人歓迎合宿 岳沢	72
秋山個人山行	38	安曇川 奥ノ深谷	73
黒部川下ノ廊下	38	夏山定着合宿 真砂	73
安曇川猪谷 (比良)	38	夏山縦走合宿 中房温泉～槍が岳～雲	75
アイゼン合宿 御岳	39	の平～有峰口	75
冬山合宿	39	偵察合宿 大日尾根～奥大日岳	76
鳩峰～北葛岳～蓮華岳	39	アイゼン合宿 御嶽山	76
春山合宿	41	冬山合宿 大日尾根～奥大日岳	77
天狗尾根～鹿島槍～爺南尾根	41	春山合宿 白峰三山縦走	79
三月山行	42	1992 年度活動記録	82
赤岩尾根～鹿島槍ヶ岳～牛首尾根～S	42	新人歓迎合宿 涸沢	84
宇峡～ガンドウ尾根～剣岳～早月尾根	43	夏山定着合宿 涸沢	85
1990 年度活動記録	47	夏山縦走合宿	91
		扇沢～鹿島槍ヶ岳～五竜岳～白馬～朝	91
		日岳～親不知	91

中房温泉～燕山～常念岳～蝶ガ岳～横尾～上高地～西穂山荘～新穂高温泉	92	鋸岳→甲斐駒ヶ岳	121
裏銀座縦走	93	中房温泉～大天井岳～常念岳～蝶ガ岳～上高地～沢渡	124
偵察合宿	94	白馬岳	125
大明神尾根	94	1994年度活動記録	126
弓折南尾根～笠ヶ岳	95	新人歓迎合宿 剣沢	128
アイゼン合宿 御嶽山	96	プレ夏山合宿	129
冬山合宿 大明神尾根	96	小川山	129
春山合宿	98	白山	130
弓折南尾根～笠ヶ岳	98	南アルプス深南部	130
中央アルプス縦走	100	夏山定着 真砂	134
大山北壁 鏡岩ルート	101	夏山縦走合宿	143
1993年度活動記録	102	南アルプス縦走	143
新人歓迎合宿(93年度)	104	後立山	147
白馬大池	104	個人山行	148
白馬双子尾根隊	104	安曇川へク谷	148
小川山夏山プレ合宿	105	奥鐘山西壁 浦島太郎ルート	148
南アルプス深南部	106	大峰山脈縦走	148
夏山定着合宿 真砂	108	中央アルプス南部	149
夏山縦走合宿	110	偵察合宿	150
南アルプス縦走	110	仙人山偵察山行 樺平～阿曾原小屋～池の平小屋	150
後立山縦走	113	仙人山偵察合宿 樺平～坊主山～仙人山～阿曾原～樺平	150
赤木沢縦走	113	中央アルプス偵察山行	152
個人山行	114	表銀座～槍	153
明星山南壁 マニフェストルート	114	僧ヶ岳偵察山行	154
白山	116	御岳アイゼン合宿	155
石鎚山 縦走	117	冬山合宿	155
偵察合宿	117	宇奈月温泉～僧ヶ岳	155
表銀座～上高地縦走	117	北仙人尾根	156
早月尾根	118	Ⅱ. 大阪大学山岳会の部	158
南アルプス鋸岳縦走	118	池ノ平小屋と田中正雄さんのこと	159
中崎尾根～槍ヶ岳	119	アイランドピーク遠征報告書	163
冬山合宿 白馬大池	120		
プレ春山合宿 大山	120		
春山合宿	121		
中崎尾根	121		

山岳部活動報告書

I. 大阪大学山岳部の部

1988 年度活動記録

（ここに活動記録の内容が記載されています）

1988年度現役部員

C. L	紫藤圭介	(理・3)	[4]
	東條公資	(基・4)	[4]
S. L	大倉徹雄	(工・3)	[3]
	蔭山 健	(経・2)	[2]
	枳尾豪人	(理・1)	[1]
	渡辺 聡	(理・1)	[1]

[]内は山岳部学年

5月合宿

五月合宿 剣沢

期間 4月30日～5月6日

参加者 紫藤(L)、東條、大倉、蔭山、
来村(OB)、藤田(OB)

4月30日 曇り→晴れ

室堂(9:40)～別山乗越(12:35)～剣沢(13:30)

紫藤、東條、大倉、蔭山、が入山。

5月1日 晴れ

B. C(5:15)～雪訓～B. C(9:30)

御前の斜面で行うが、いい雪面がない。
また一年がない為、早く切りあげる、夕
方来村入山。

5月2日 曇り→雨

<ハッ峰ピバーク>(大倉、東條)

B. C(5:35)～3稜取付(6:05)～敗退決定(7:10)～再度敗退決定(7:50)～B. C(9:00)

3稜の末端手前より取付くが、雨が降り
雷鳴がしたので敗退。一度雨がやんだので
天気待ちするが降ってきたので敗退する。

<源次郎遠足>(紫藤、蔭山、来村)

B. C(4:40)～取付(5:10)
～ルンゼ上部敗退決定(6:10)～B.
C(8:30)

雨の為敗退。

5月3日 晴れ→曇り

<本峰南壁A1>(紫藤、東條、大倉)

B. C(5:38)～取付(5:10)
～終了(11:00)～本峰(11:15)

～B. C(13:15)

夏のルートの1p目は雪にうまっており、
2p目より取り付く。全体に雪が少なく、
ベルグラもなかった。3p目のハイ松帯が
雪でうまっていたぐらいである。ただ、そ
の為浮石も夏と同じ状態であり、アイゼン
でひっかけやすい。我々も2p目にTop
の落石が下の者にあたったりした。1p目
と5p目がちょっといやらしかったが、後
はアイゼン、手袋による不自由さはさほど
感じなかった。(記 大倉)

<源次郎遠足>(蔭山、来村)

B. C(4:10)～取付(5:10)
～1峰(6:30)～2峰(7:00)～
本峰(8:55)～東大谷偵察(11:00～12:00)～B. C(12:05)

2峰の下りで懸垂1p。終始トレースが
ついていた。

5月4日 雨 沈殿

5月5日 晴れ

<前剣東尾根、下山>(来村、大倉)

B. C(4:10)～取付(4:25)
～前剣(9:20)～B. C(10:20～
13:25)～御前小屋(14:05)～
室堂(15:35)

尾根末端より取り付く。p1の登りは途
中まではゆるいが、だんだん傾斜のきつい
雪壁となるが、上級生パーティならばザイ
ルは不要である。ところどころハイ松もで
てくる。岩も出るが横の雪壁からまけるの
で問題ナシ。p1の上は雪稜で両側に切れ
ている。p1の下降は30mほどで、ザイ
ルを出す。出だしは雪壁だが5mほどでハ
イ松となる、最後は岩が出てくるので平蔵
側の雪面を行く。p2の登りは出だしは雪
壁だが、途中で岩が10mほど出る、ここ

でザイルを出す、3級ぐらいである。その後はきついハイ松の登りとなり、p 2直下まで p 2の下りのギャップはほとんどなく、p 3の登りとなる。最初は雪壁20mほどあるが後はかなりハイ松帯がつづく。p 3手前で両側のきれた雪稜となり、キノコ雪の発達した p 3となる。ここでザイル25m出す。f p 3の下りもほとんどギャップなし。後はゆるい雪面を登れば前剣となる。全体的に雪がかたくないと非常に困難になると思われる。

(記 大倉)

<ハツ峰下半> (蔭山、東條、藤田)

B. C (4:20) ~ 1, 2の科尔 (7:00) ~ 2峰 (9:10) ~ 3峰 (9:50) ~ 4峰 (10:50) ~ 5峰 (12:10) ~ 5, 6の科尔 (13:00) ~ B. C (15:20)

2峰の下りで懸垂15m、3峰の下りで懸垂10m、4峰の下りで懸垂25m、5峰の下りで懸垂25+40m、1峰でfix 20m。全体的に気のぬけないルートだった。

5月6日 晴れ

下山 (紫藤、東條、蔭山)

B. C (9:15) ~ 室堂 (11:50)

藤田は薬師方面へ縦走。

夏山定着山行

夏山定着合宿 真砂

期間: 7/17 ~ 30

参加者: 紫藤 (4, CL), 東條 (4), 大倉 (3, SL), 蔭山 (2), 渡辺

(1), 室谷 (1), 栃尾 (1), 藤田 (OB)

7/17 室堂 (9:40) ~ 雷鳥平 (12:00) ~ 別山乗越 (16:40) ~ 剣沢 (17:50)

先発隊入山。1年のペースがあがらず、雷鳥沢中間で1年1人が荷分け。予定通り剣沢で泊。

7/18 剣沢 (7:30) ~ 真砂 (10:15)

真砂に入山。

7/19 <雪上訓練> B. C (6:20) ~ B. C (13:20)

1年の状態から判断して長次郎出合でキックステップのみ行い、のちハツ峰1・2峰間ルンゼ出合でキックステップ、アイゼン滑落停止を行う。

7/20 沈殿

7/21 沈殿 この日午後、東條・栃尾入山

7/22 <真砂沢> B. C (5:30) ~ 高巻き (7:15 ~ 8:00) ~ 稜線 (11:00) ~ 大汝山 (12:00) ~ 別山 (14:10) ~ B. C (15:55)

全員で真砂沢遠足。下部のシュルントをいくつか越し、滝を高巻いた後は傾斜のゆるい単調な雪渓歩き。人もなく静かで雰囲気はよい。室谷の腹の調子が悪く、大汝で2手に分かれ室谷について、紫藤、蔭山が遅れて帰幕。

7/23 <ハツ峰上半> (東條、蔭山、栃尾) B. C (5:50) ~ 5・6の科尔 (8:15) ~ ハツの頭 (11:30) ~ 剣山頂 (13:20) ~ B. C (15:45)

全体的に特に問題はなかったが、池ノ谷乗越から長次郎のコルとの間の岩峰では、ルートファインディングを要す。西側を巻くと浮き石が多くて悪く、東側をとるべきであった。また、7峰の懸垂後、8峰へうつる岩が崩壊していたが、南側に少し巻いて特に問題はなかった。本峰で北壁隊と合流。

<本峰北壁> (紫藤、大倉、渡辺)
B. C (5:50) ~ 取りつき (9:30)
~ 終了 (13:05) ~ 剣山頂 (13:12) ~ B. C (15:45)

下部、雪のためルート図2Pからの登攀となる。1P目岩硬く快適。2P目ルンゼ内に入り、ぬれている上浮石が多くいやらしい。3P目問題なく、終了だが、雪の状態で1年への配慮から、本峰手前まで、もう2Pザイルを出す。

なおこの日、室谷昨日からの調子思わしくなくT. K.

7/24 <雪上訓練> B. C (6:30) ~ B. C (13:05)

最初は東條、大倉、及び1年3人で行う予定だったが、先発したDフェース隊(紫藤、蔭山)が雨が降り出したため取りつく前に敗退を決定して加わり、全員で行う。

7/25 <剣尾根ビバーク> (紫藤、大倉)

<Cフェース> (東條、蔭山、栃尾)
B. C (6:00) ~ 取りつき (8:00)
~ 開始 (9:15) ~ 1P終了 (9:45)
~ 取りつき (10:50) ~ B. C (12:00)

出発が遅れたため、取りつきで1時間強の順番待ちとなる。1P目終了したところで、雨が強く降り出し、また先行の3人パ

ーティーがもたついて遅いため、敗退を決定。懸垂で取りつきに戻る。

7/26 <源次郎遠足> (東條、蔭山、渡辺、室谷、栃尾、藤田)
B. C (6:05) ~ 取りつき (7:15)
~ 1峰 (12:45) ~ 2峰懸垂終了 (15:00) ~ B. C (17:30)

1年のペースが上がらず、2峰懸垂終了時点で時間的なことを考え、本峰回りを断念。長次郎左俣へ雪渓を下る。ルートは、ルンゼを最後までつめ、尾根に出たが、尾根に出る手前はいやらしいガレで、それまでに尾根ルートに出た方がよい。なお、ザイルは取りつきでワンポイント、トラバース路からのルンゼ出合付近で1P、ルンゼ上部ガレで1P、長次郎谷への下り3P中2P出す。

7/27 <仙人池遠足> (東條、大倉、渡辺、室谷)

B. C (6:00) ~ 二股 (6:45)
~ 仙人池 (8:30 ~ 10:05) ~ 二股 (11:05) ~ B. C (12:05)

二股では晴れてハツやチンネが見えたが、池に着く頃には上部に雲がかかっており、池にうつる姿を期待してしばらくとどまっていたが、途中少し晴れただけであった。

<チンネ左稜線> (紫藤、蔭山)

B. C (5:20) ~ 取りつき (9:00) ~ 開始 (10:00) ~ 終了 (16:30) ~ B. C (18:15)

B. C 出発時には、晴れていたが、池ノ谷乗越付近でガスにおおわれはじめ、取りつきでは、全くのガスの中であった。すでに先行パーティーが取りついていたため時間待ちのち開始する。核心までに小雨がパラつき、ちょうど核心部で雨が強く降り

出す。核心部は人工で小ハングを越したのちのフリーで、所々浮き石もあり、雨の中必死で抜ける。核心は次のピッチと合わせて2Pである。その後も、雨のせいか長く感じられ、ピッチの連続でやっとのことで終了点にたどり着いた。しかし、ホッとしたのもつかの間、着くと同時にさらに雨が強く降り出し、急いでB、Cへ。

<本峰南壁> (藤田、栃尾)

B、C (6:00) ~ 取りつき (8:10) ~ 開始 (11:15) ~ 終了 (14:45) ~ 本峰 (15:10) ~ B、C (16:30)

出発が遅くまた取りつきの確認に手まどり、なんと5パーティーの時間待ちとなる。取りついてからもペースが上がらず、1ルートに何人もがひしめいていた。途中からの雨もありさらにペースが遅くなった。

7/28 沈殿

<ビバーク> (紫藤、蔭山、渡辺、室谷、栃尾)

B、C (20:00) ~ ビバーク地点 (20:20)

雨があがったため翌日の源I中谷・成城隊を残し、ビバークに出る。

7/29 <黒部別山遠足> (紫藤、蔭山、渡辺、室谷、栃尾)

ビバーク地点 (5:30) ~ ハシゴ谷乗越 (8:00) ~ 別山南峰 (10:00) ~ B、C (13:00)

ビバーク隊はそのまま別山へ行く。ハシゴ谷乗越からはブッシュであったが、トレースがついており問題なかった。別山ピークでは、まわりのブッシュで視界が開けず、暑いうえに虫が多く不快であった。

<源I・中谷~成城大ルート> (東條、

大倉) B、C (4:00) ~ 中谷取りつき (5:00) ~ 開始 (5:30) ~ 中谷終了 (9:05) ~ 成城大取りつき (10:15) ~ 終了 (12:00) ~ 源I頂上 (12:35) ~ B、C (15:00)

まだ薄暗い中、先行パーティーを見つけた時は驚く。昨日、沈殿中、天気が回復したため、偵察して作っておいたステップを用いて、容易にテラスへ。時間待ちの後取りつく。

<<中谷>> (1P) — 右のボルトラダーをA1 (2P) — 左ヘトラバース。ぬれていやらしい (3P) — 傾斜のゆるいスラブを左上 (4P) — 左ヘトラバースし左上のち右上。先行パーティーとの関係で変則的なピッチの切り方となる。このあたり岩が特にもろく落石はさげがたい (5P) — 核心のチムニーをオポジションで (6P) — さらにチムニーを登り、チョックストーンのトンネルをぬける (7P) — 短いナイフリッジとなり右の草付から終了点へ

成城大への移動は、傾斜のきついブッシュで快適とはいえない。

<<成城大>> (1P・2P) — リッジぞいに2ピッチで核心下のテラスへ (3P) — 核心。出だしに凹角、途中からフェースへ。フリクションがきき、快適。ダイレクトルートのボルトラダーのさらに向こう側のフレイクを目指してトラバース (4P) — ピンが悪いためAIの方が無難である。10mほどでハイ松となり終了。

7/30 <下山> B、C (9:35) ~ ハシゴ谷乗越 (11:00) ~ ダム (16:30)

去年、最終バスにあやうく乗り遅れそう

になった経験から、早めに出発。ダム下から競走。

(記 蔭山)

剣尾根

Member 柴藤 大倉

7/25 R10取付(10:50)～剣尾根上「コルE」(11:30)～ビバークサイト「コルD」(12:50)

三ノ窓から左俣を下降する。R10は対岸に、ハングを持った大きな岩壁(デルタフェース)があり、すぐに分かる。R10の登りは容易だが、最後の草付は雨でぬれているといやらしい。地図ではコルEは広がっているが、実際はせまく、ビバークサイトには不向き。ここから傾斜の強いトレースに行く。たまに2級ぐらいの岩が出てくる。コルDからは3級ぐらいの岩があるが、ここまでとし、右俣側に3mほど降りた所でビバーク。

7/26 出発(5:20)～コルC(8:10)～核心下部終了(8:30)～門下部(10:22)～終了(11:00)～ドーム(11:25)～コルB(11:35)～コルA(13:00)～剣尾根の頭(13:25)

出だしの岩は前日の雨でぬれていてむずかしい。20mほどで終わり、ハイ松となる。ハイ松のきれる所で平らとなり、核心部見える。いいビバークサイトあり。ここから3級ほどの岩20mと15m、少し岩稜を行くとコルCである。核心下部はピンが多いが、一ヶ所トラバースでナツアブミとなる。カンテを右にまわりこむとこ

ろでフレークが少し動く。まわりこんで人工だが、カンテをフリーでも行ける(4級上?)。ただしピンはほとんどない。門は3回ほどアブミをかけかえ、1ポイント4級が出るほかはあとは簡単である。途中でピッチを切って、この後ルンゼまでザイルを25mほどですが、実際こわいのは1ポイントだけで、あとは不要である。コルBからコルAの途中で、左俣側からまいてチムニー(3級5m)を登るところがあり、ザックがあると、ひっかかって登りにくい。後は右俣側の斜面を行くが、下りすぎない様にする。後は特に問題はない。

行った感じとしては、全体的に気がぬけず、充実した登攀だった。やはり核心部だけ行くのではなく、縦走してこそ、剣尾根らしさを味わえるのではなかろうか。ただしビバークで行くならば水は多めに持っていった方がよい。我々は1人2鉢しか持って行かなかった為、ビバーク中の炊事や茶を雨水からとったにもかかわらず、水がたらずにこまった。

(大倉)

新入感想(夏山を終えて)

柄尾豪人(1)

まず2週間の定着ですが、僕が連れていってもらったのは、真砂沢、八ツ峰上半、源次郎、黒部別山の遠足とCフェース南壁の岩登り、でそのうち八ツ峰と南壁の時の2回剣岳のピークを踏めた。やはり、頂上まで登り切るとそれなりに充実感も得られたし、嬉しかった。南壁の時は、前に雨のためにCフェース敗退というのがあったので何とか晴れて欲しかったが、登坂途中で

らまたもや雨が降ってきた。しかし何とか登り切ることができ、苦しい岩トレに耐えてきたかいがあったというものだ。反省することとしては雪上技術が十分身につかなかったことで、雪渓を下る時などよく転んだりしてまたついた。

次に縦走で、これは毎日6～9時間も歩くので、もう足がボロボロになった。しかし、日の出前に出発するので、歩いていると東の空が白み始め、日の出が拝めるのは素ばらしかった。特に蝶ヶ岳の頂上での夜明けは朝日が穂高連峰を染め上げて感動的だった。ところが雨が降ると最悪で、雨の中テントをたたんだり、パッキングするのは最低だった。槍、薬師のピークで霧が出て何も見えなかったのは残念だった。次の機会を期待しよう。縦走後半は天気も申し分なく、荷物も軽くなり、快適で、下山日、山道からアスファルトに出た時は「無事帰ってこれたな」とホッとした。

夏山縦走合宿

夏山縦走合宿

上高地～黒部五郎～五色ヶ原～雷鳥平～大日岳～称名滝

期間：8月1日～8月8日

参加メンバー：大倉(L, 3), 蔭山(2), 栃尾(1), 渡辺(1)

概況：今年の縦走は参加メンバーが少なく、アットホームで、故障者も出なかったが、天候が思わしくなく、非常に残念であった。しかし全体にいいペースで、日程も完璧にこなせた。

8/1(月) 上高地(11:10)～明神(11:50)～徳沢(12:40)～長堀山ピーク(16:07)～蝶ヶ岳ヒュッテ(16:40)

出発が遅れたのは費用が足りぬため、松本で郵便局が開くのを待ったためである。上高地からは、梓川をはさんで、頂に雪を冠した穂高連峰が横手に見え、桃源郷のように美しかった。長堀山への登りは登りやすいが、長く、時間がかかり、16:00頃、蔭山が天気図をとるために途中で残留。テントの中で、プスの調子が悪く、ポンピングしようとした渡辺にガスがかかり、火だるまになりかけるが、幸い火傷もせず、テントも無事であった。

8/2(火) 発(4:20)～蝶ヶ岳(4:55)～常念岳(7:35)～大天荘(11:45)～大天井岳アタック(往復10分程)

蝶ヶ岳から見た朝日に映し出された穂高連峰と槍ヶ岳、雲海に包まれた山々は幻想的であった。常念への登りでリーダー大倉の判断ミスで80分ピッチとなり、1年2人はバテる。疲労のため、栃尾は大天井に登らず。

8/3(水) 発(4:40)～西岳ヒュッテ(7:07)～水俣乗越(8:03)～殺生ヒュッテ(9:40)～槍ヶ岳山荘(10:40)

この日は有名な槍ヶ岳への登り。水俣乗越の前でガレ場やはしご、くさりがあり、大分手間取ったが、東鎌尾根は予想していたよりしんどくはなかった。この日はとても快適ではあったが、ガス、ガスで景色はよくなかった。天場ではまだら模様の雷鳥が石ころのうえに止まっていた。

8/4 (木) ～(アタック) 槍ヶ岳ピーク(4:40)～発(4:58)～樺沢岳(8:15)～双六岳(9:37)～三俣蓮華岳(10:40)～黒部五郎小屋(11:50)

標高3180Mの槍ヶ岳ピークでの眺めに一同期待していたが、あいにくのガスで何も見えなくて、また一般客がとても多いために、すぐ下りる。高原状の牧歌的な霧困気の漂う双六岳では、天気が悪くなるとよく見るといわれる雷鳥の親子が我々を先導し、愉快だった。

8/5 (金) 発(4:35)～黒部五郎肩(6:20)～(アタック)ピーク(往復20分)～北ノ俣(9:20)～薬師峠(10:45)

黒部五郎山への登りは雪解け水による川の水音以外の音は聞こえぬ静寂の世界であった。太郎山は非常に緩やかで、高山植物が咲き乱れ、まさに野道を行く、の感覚で、日も差し、とても快適であった。

8/6 (土) 発(4:10)～薬師岳(6:06)～北薬師岳(6:55)～間山(7:56)～越中沢岳(11:33)～鷲山(12:55)～五色ヶ原(13:30)

この日は地図上で約15km、登降各1500m以上と、今回の縦走では最もしんどい、核心の日であった。薬師岳までは、快適に登るが、ひどいガスで、景色を拝むことができない。越中沢岳への登りはややきつく、すでにかかなり歩いていた我々は一同疲労の色を隠せない、??山ピーク直前で、渡辺が遂にバテてコケるが、なんとか最後まで歩く。高山植物の宝庫である五色ヶ原は水も豊富で、天場も良かった。

8/7 (日) 発(5:26)～獅子ヶ岳

(7:00)～一の越(8:43)～雷鳥平(9:58)

前日が長かったため、起床を遅くし、出発も遅らせた。この日は前日とうって変わって最も楽で短い行程であった。獅子ヶ岳からの眺めは今回の縦走中、最も感動的な360度パノラマ図であった。今までやって来た山々がその頂を雲海のうえにぬっと出して、天上の音楽を聞くかのごとき観があった。なつかしき雷鳥平へ行く途中で、ものすごい一般客の数に一同うんざりし、迂回して天場へ着く。

8/8 (月) 発(4:08)～奥大日岳(6:00)～大日岳(7:45)～称名滝(11:03)

奥大日からの剣、立山、大日からの槍、薬師、白馬などの眺望は目を見張るものがあった。最後の高度差1400m、傾斜40度の下降路は大変、足が痛くなるが、これを降り切れば、街の灯が見れると思ひ、ガンバった。樹林地帯の下降路を抜け、アスファルトの道路に出たとき、一同歓声を上げた。称名滝を見た後、12:30のバスで、立山へ出て、富山へ戻る。

黒部峡谷黒薙川柳又谷完全遡行

期間：一九八八年八月一四日～一七日

参加者：越智栄次郎(OB)、畑秀信(OB)、紫藤圭介(四年)

八月十四日 晴れ 八時宇奈月発
観光客でごった返す峡谷鉄道に乗車するのを諦め、軌道上を黒薙まで、更に二俣まで歩く。遡行開始十一時半。豊富な水量に驚きつつ、十回近く徒渉しながら進んでいく。広河原までに数名の釣り人を見る。イワナ

が入れ食いの様子であった。こういった谷の下流でよくあるように、数多い蛇に苦しみながら歩く。カシ羅深層谷一時半。この辺りから飛竜峽に入る。それまでのたおやかな谷のイメージから一転して、暗いゴルジュが現れる。水量、流速ともに厳しく感ぜられる。連続する滝は、重量感こそあれ落差は小さい。ザイルを出して度々流されながら果敢に徒渉を繰り返す。核心部は右岸を大きく高巻いてしまった。その後、陽平まで足を伸ばし、四時泊。畑が、いわなを一匹釣り上げる。

十五日 晴れ～曇り 六時半発

陽平では、3パーティが泊していた。冷たい清流に、朝から膝までの徒渉をする。この日は、特別な核心はない。ゴルジュは雄大で、何もかもが素晴らしい。1パーティが先行していた。中の廊下も、特別の核心であるとは感じられない。多分状態が良いのだろう。鬼男谷出会いに泊する。12時。畑と紫藤とで、すぐ先の、上の廊下出会いを偵察してくる。

十六日 曇り 六時半発

実質上今日こそが本当の核心である。上の廊下の出合いから突然幅が六～七mとなっており、両岸は100m近い壁となっている。出合いは、ジェット水流のようだ。たまたまず最初から巻く。右を巻いて懸垂2ピッチで底に降りる。底から、流されそうなへつりを繰り返して、二段10mの滝に出る。嫌らしい左岸の高巻きを2ピッチ。懸垂を2ピッチ。これでかなりの時間を取る。そこからやや落ち着いて、雪溪の現れ始めた深いゴルジュを泳ぎながら進んでゆく。途中、最も狭くなる部分で、右岸を1ピッチ巻いて懸垂する。この辺りから、目の前

に高さ20m程度のブリッジに頭を押さえられる。そこから谷は直角に曲がっている。右岸を、雪と壁の間を登って雪溪のうえに出て飛び移る。飛ぶために1ピッチ。そこからの雪溪はずたずたで、底に降りたり雪溪を登り返したりの連続が続く。300m進めば谷は左に直角に曲がる。その最後の雪溪の割れ目が越せず、右岸の厳しい壁を40mザイルを伸ばす。トラバースして、そこから懸垂。最後の深廊の滝まではそのまま雪溪上に行く。深廊の滝は、この谷最大の滝で、すごい迫力である。完全に雪溪が落ちているので、左岸のシュルトに飛び降り、そこを巻いて1ピッチ。トラバースして懸垂40m。やっとのことでクラガリ峽に入る。そこから1ピッチ動いて、雪溪上に泊する。六時。

一七日 曇り～雨 六時半発

傷む体を奮い起こすように出発する。雪溪が安定しているので、非常に楽である。やがて雪溪も消え、あとは白馬を目指して源頭に行く。それにしてもすごい水量である。九時半、突然白馬西面の湿原に出る。旭岳とのコルはもう目の前だ。三人で固い握手をして、稜線に向かう。稜線十一時。そこから猿倉へ向けて大雪溪を駆け降りた。猿倉一時半。

(記 紫藤)

偵察山行

偵察山行

表銀～檜

期間11月3日～7日

Member 東條(L)、大倉、栃尾

11/3 雪 中房温泉(6:50)～合戦小屋(12:25)～燕山荘(13:15)発～燕岳(17:05)～燕山荘(14:45)

合戦小屋までは天場多し。燕アタックもザイル不用。燕山荘で天場(小屋前の斜面)を指定され天場代400円とられる。

11/4 快晴 出発(6:15)～大天井岳(12:20)～大天井ヒュッテ(12:40)

蛙岩、右衛門吊岩ともに状態によってはザイル不用、大天井を巻こうとするが、ルンゼが雪崩そうでいやらしく、けっきょく途中から山頂に登り、大天井に出る。大天井の下りで大倉が2m程滑落、左膝を打撲しヒュッテまでとする。

11/5 雪 出発(6:55)～10:40～フィックス4P(13:30)～西岳(14:00)～西岳(14:10)、小屋間

出発からラッセル(シングル)でしんどい。赤岩手前の岩峰でザイルを出すのが、流れが悪い為2Pに分けたほうが良い、後は赤岩の下り、小ポコを越えた次の登り、西岳の登りに各1Pずつ。

11/6 快晴 出発(6:20)～水俣乗越(9:00)～槍肩(16:00)西岳から直接水俣乗越に行くが、赤布がたくさんありすぐに分かる。ノーザイルで行ったがリッジから雪渓に降りるときは出したほうが良さそうである。ラッセルがひどい為途中でワカンとなる、2595の下りは懸垂で20m降りる。後の登りで少々いやらしいところがあったが、ザイルは出さず。春は状態によるだろう。天場についたとき

はみんなバテていた。

11/7 曇|雪 出発(7:00)～槍平(9:10)～新穂(12:10)

Memberの都合により、この日に下山すべく飛騨沢を下る。槍平で、北鎌の偵察の帰りの関大隊に会う。なお槍と中崎尾根の偵察は大倉が冬に行ったことがある為省いた。

(大倉)

毛勝～東芦見尾根

期間:11月2日～8日

Member:紫籐(L4)、蔭山(2)、渡辺(1)

計画段階では東芦見尾根から毛勝山をアタックしブナクラ谷を降下するはずだったが思うように進まず、毛勝、釜谷はもとより猫又もピーク直下までしか行かなかった。このため冬山は猫又までの東芦見尾根往復という計画になった。

11/2 雨 馬場島発電所付近の取付(7:14)～950m付近(13:30)

予想はしていたものの、ひどいブッシュに加えての雨、さらには、デポの重さで、遅々として進まない。雪はほとんどなく雨のために足が滑る。900m近くから足下に雪が現れる。900m付近で、手がかりのない、いやらしい土の急斜面でザイルを1P(30m)出し、抜けた所でテントを張る。計画の半分以下しか進まず。

11/3 雪→曇り C.S(7:30)発～細蔵山手前のコル(14:30)

急登を抜けた1200mあたりから、雪はすねあたりまでとなる。シングルラッセルを続けて、やっと1330山頂に達する。ひどいブッシュをゴルまで下り、ここをデポ地とし、テントを張る。デポの重さからは解放されたものの、計画よりはるか下でのデポであり、計画の半分しか進んでいない。暗いムードが漂い、この頃から、早くも釜谷毛勝のアタックは無理との見方が強まる。

11/4 晴れ C.S (7:30) 発

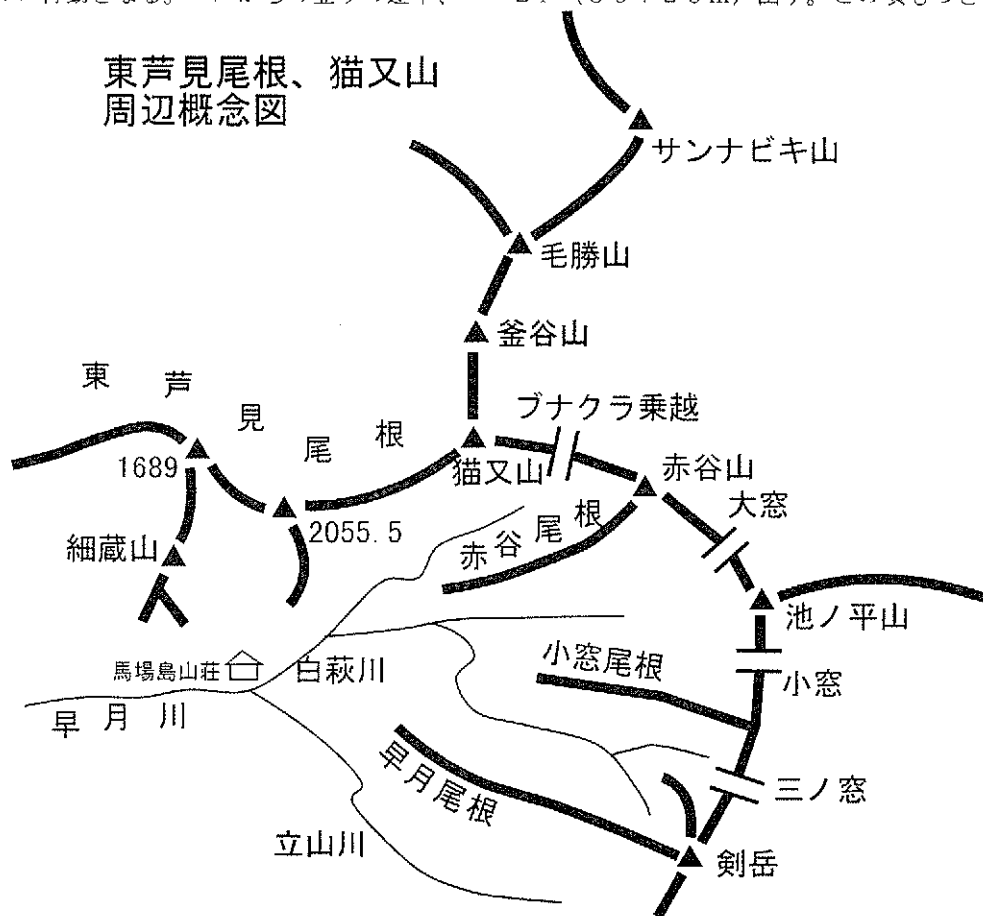
細蔵への登りは、特にブッシュがひどくいやらしい。細蔵を越したコルへの下りの途中、ワカンをはじめてはめる。今後終始ワカン行動となる。コルからの登りの途中、

倒木の多い急斜面でfix 20m、かなり前のものと思える残置fixあり。急斜面を抜けて比較的緩やかになった所でテントを張る。

11/5 雪 C.S発(6:20)～稜線とのジャンクション(10:00)～1827m(9:20)～1940m(14:00)

昨日と打って変わり朝からひどい雪である。すねまでのシングルラッセルを続けて待望のジャンクションへ。その後意外に起伏があり、なかなか1969mへの登りへたどり着かない。核心と思われる1969mへの急登は途中岩峰を巻くようにfix 2P(30+20m)出す。この頃もつと

東芦見尾根、猫又山 周辺概念図



も天候が悪くfixを抜けたところでテントを張る。

11/6 晴れ C. S発(7:00)～1969m(8:00)～2055m(10:00)～2150m(13:30)

信じられないほどの快晴となり、稜線上をすねあたりまでのシングルラッセルで進む。なお稜線上は広くジャンクションを過ぎてからはブッシュもほとんどない。右手に剣岳、左手に毛勝三山、正面には鹿島槍を含めた五山が望まれ、すばらしい景色である。山行中最高の日となる。

11/7 雪 C. S発(7:15)～トラバース地点(10:00)～1900m付近(13:40)

すでに釜谷、毛勝は諦めていた、この日前日に立てた計画はなるだけがなくら乗越への稜線に近付き、そこから軽装で猫又アタックする予定だったがあいにくのガスで視界がきかず、山頂直下30mのところを偵察の後トラバースしてブナクラ谷越えへの稜線へ。結局猫又山頂は踏まずに、ブナクラ乗越へと下る。しかし、この下りもガスのため稜線が分かりにくく、コンパスを頼りにしたため、思うように進めず、コルかなり手前の1900m付近でテントを張る。

11/8 快晴 C. S発(6:45)～ブナクラ谷出会(8:30)～林道出会(14:00)～馬場島(15:00)

コルまで下る予定であったが手前のルンゼが行けそうなのでシリセードも混ぜ快適にブナクラ谷へ。その後ブナクラ谷沿いに進むが途中河渡を数回繰り返し、なかなか進まない。辛抱強く進み、やっとの事で林道にたどり着く。

アイゼン合宿

アイゼン合宿 御嶽山

期間:11/24(木)～11/28(月)

参加者:紫籐(C. L)、渡辺、栃尾、一先発

東條、大倉、蔭山一後発

11月24日 晴 八海山荘(9:40)～田の原(13:30)～幕営(14:15)

予想以上の積雪に遅々として進まない、スキー場まではトレース沿いに歩くが、スキー場を越えてからはひざ上からひざ下までのラッセル。

11月25日 雪 発(8:00)～B. C着(12:30)

ビバーク開始(13:00)～終了(翌3:30)

朝から雪が降り続けひざから腰までのラッセル。チョウセンボッカで進む。頂上付近は風が強そうと判断し、8合目あたりで幕営しここをB. C. とすることに決定。

11月26日 雪 B. C発(6:20)～王滝頂上(10:30)～雪訓～B. C着(13:00)

後発隊 八海山荘(7:25)～田の原(12:40)～ビバークサイト(16:40)7合目と8合目の間

この日も朝から雪で頂上付近ではかなりの強風が吹き荒れる。雪訓はアイゼン歩行、滑落停止をおこなう。後発隊とこの日合流の予定であったが、積雪が多いため、後発隊はB. Cまで到達出来ず、7合目と8合目の間でビバークする。

11月27日 曇 B. C発(5:30)
～後発隊のビバークサイト(6:00)～
紫籐、栃尾B. C着(7:00)
大倉、蔭山B. C着(7:00)
B. C発(9:00)～頂上付近で雪訓～
B. C着(13:00)

下山パーティー(東條、渡辺):ビバーク
サイト発(7:30)～八海山荘着(9:
15)

昨日後発隊と合流出来なかったため、ま
ず合流することを考え先発隊が後発隊のビ
バークサイトまで行き合流。その後東條、
渡辺は下山。のこりの4名で雪訓、滑落停
止、雪上確保, e t c.

11月28日 快晴 B. C発(6:50)
～田の原(7:30)～八海山荘(9:1
0)

快晴でしかも、下山ルートにはトレースが
あったので何の問題もなく下山。

記: 栃尾

冬山合宿

冬山合宿

毛勝東芦見尾根

期間 12月25日～1月2日

参加者 紫籐(L)、東條、大倉、蔭山、
栃尾

12月25日 雪 剣センター手前(8:
30)～発電所(10:30)～1000
m(13:30)

昨晚から雪がふり続けているものの、根
雪は当初予想していたよりはずっと少なく、
タクシーもかなり奥まで入ってくれた。道

にはトレースがあり、快調に進む。早月川
の飛び石づたいに渡るとすぐ藪尾根の急登
となる。尾根も末端では雪が少なく足が滑
っていやらしい。

12月26日 雪 出発(7:10)～1
330m(13:30)～細蔵山手前のコ
ル(13:45)

朝から藪こぎの連続である。偵察のf i
x箇所は雪に埋まって問題ない。高度を稼
ぐにつれ積雪も増し傾斜も緩くなってくる
のでそれなりにピッチも増す。デポはすぐ
にでてきた。樹上の雪を気にしながらテン
トを張る。

12月27日 曇 出発(7:00)～細
蔵山(9:30)～1700m(14:1
5)

デポを四日分置いて出発する。雪の状態
はよく、細蔵山の登りは快調である。細蔵
山を過ぎたコルからの登りで1ピッチf i
xを固定する。尾根上をかもしかが逃げて
ゆく、この尾根は彼の縄張りらしい。尾根
が適当に広がった箇所を整地しテントを
張る。

12月28日 雪 沈殿

昨日から紫籐が熱を出し、今朝になって
も下がらないので沈殿とする。

12月29日 快晴 沈殿

紫籐の調子が良くならず、もう一日様子
を見ることにする。

12月30日 雪のち快晴 出発(6:1
0)～ジャンクション(6:50)～19
69m(9:20)～2055m(11:
30)～2100mT. S(13:40)

やっと紫籐の体調が回復し先を急ぐ。雪
はよく締まって非常に状態がよく、快調に
飛ばす。1969への登りで少々もたつい

たが問題なく通過することが出来た。この登りの途中で雪がふり続いていた天気がいきなり好転し、一同爽快な気分を味わう。ブロッケン現象も見られた。2055上部のだだっぴろいプラトーの最上部にテントを張り、翌日のアタックに備えた。

12月31日 快晴 出発(6:10)～猫又山(8:10)～T.S(?:30)～T.S出発(10:30)～分岐点(13:10)～細蔵山(15:00)

まだ暗い打ちにヘッ電をつけて出発する。富山の夜景がきれいに見える。猫又の山頂から真360度の視界が広がり、後立山から毛勝、日本海から能登半島、白山、そして剣が面白いように見渡せた。あっという間にアタックは終了し、テントで一休みしてから撤収する。昨日のトレースは残っておりペースは夏山並にはかどる。1969の下りでザイルを出す。一昨日の天場からはさすがにトレースは残っていなかったが下りなのでペースは衰えず。この日は一気に細蔵山まで来てしまった。

1月1日雪 沈殿

朝食のラーメンを作るために沸かしていた湯の入った鍋がひっくり返り、栃尾が足首におお火傷を負う。すぐさま水と氷で患部を冷やしたが、患部全体に大きな水泡が出来た。傷口が化膿する恐れがあったので、無理をしてでも明日中に何とか下山することにする。傷に水がたまっただけでは動けないので、寝る前に消毒しながら水泡の水を抜く。

1月2日 快晴 出発(6:10)～発電所(11:00)～伊折(14:00)

栃尾を空荷にするために余分な食料と燃料を置いてゆくことにする。やけどを負っ

たほうの足にはテントシューズの上にオーバーシューズを履かせた。以外にも栃尾の調子は良く行程ははかどった。富山についてから、紫籐が付き添って病院に行き、応急手当をしてもらった。

春山合宿

春山合宿

表銀座から槍ヶ岳縦走

期間：3月2日から10日

参加者：大倉(L) 蔭山 栃尾 渡辺

3月2日 快晴 宮城ゲート(10:22)～信濃坂(12:44)～中房温泉(14:43)

渡辺がサングラスを忘れ、松本で店が開くのを待っていたため遅れる。宮城ゲートには雪がなかったが、信濃坂で雪が深く膝ぐらいのラッセルとなる。

3日 晴れ後曇り 出発(5:40)～合戦小屋(11:30)～燕山荘(13:15)

出発してすぐ氷が出てきてアイゼンとなる。トレースは完全にありラッセルはほとんどなかったが、途中からペースが落ちる。途中で大商大に遭う。

4日 雨曇後曇 出発(6:38)～燕岳(7:38)～燕山荘(8:38)～蛙岩(10:40～11:30)～最低コル(12:45)

アタック時はガスで、風が強く湿気ていて濡れる。蛙岩では岩を右から巻く様に上り、懸垂3mで下りる。次第に風が強くなり倒されそうになる。最低コルでクラストした雪面をきり出したのでテント設営に時間が

かかる。

5日 雪 出発(7:15)～渡辺転落(9:50～10:25)～大天井岳(14:50)～大天井岳ヒュッテ(16:15)

なぜか準備に時間が掛り、出発が遅れる。ラッセルはくるぶしからすねまで、切通岩手前でポコを巻いているとき、セカンド渡辺がワカンで雪で隠れた岩を踏んで、天上沢側に35m滑落。この後アイゼンになるがペースが落ちる。大天井岳の下りでピークからすぐのところ、ザイル40m出す。さらに行ったところで、懸垂40mする。

6日 快晴後曇り 出発(8:40)～2549m(11:25)～赤岩頂上(14:50)

渡辺のアイゼンが凍ったオーバーシューズに入らず、調整に時間が掛る。牛首展望台からの下りで、新雪が板状になって切れ、危ないのでブッシュに行く。赤岩手前のフィックス予定の場所は、槍沢側の雪面をトラバースする。大倉が両足に凍傷をおう。

7日 快晴 出発(6:35)～西岳頂上(9:13)～水俣乗越(14:58)

天場からフィックス40m、西岳の下りでフィックス40m、懸垂45mが3回、フィックス40mが2回(不要だった)。どうもザイルを出す時間が掛る。

8日 雪後晴れ 出発(7:13)～2595m(9:40)～渡辺滑落(12:50～13:20)

出発すると新雪のラッセルが深く膝から腰。2595mの下りで、懸垂支点がないのでフィックスバー2本を支点にして3人懸垂、その後大倉がダブルアックスで下りる。ここからラッセルがさらに深くなるが、新雪

で二層になっているのでワカンになれない。渡辺がトップのとき、雪尻を踏み抜き、天上沢側に20m滑落。ザイルを出し大倉が下りてザックを持ち、引き上げ、ここ(2780m)を天場とする。

9日 快晴 出発(6:26)～槍の肩(9:06)～槍頂上(11:25)～槍の肩(14:25)

前の晩かなり冷え込んだので雪がしまり歩き良い。槍アタックで、先行パーティがいて遅いので時間がかかる。梯子の上で、ザイルを出す。頂上では、快晴で展望がきき心地良い。行きフィックス5m、25m、帰りフィックス40mが2回、10m、15m。

10日 快晴 出発(7:05)～千丈沢乗越(7:45)～槍平(11:20)～新穂高温泉(16:05)

下降には、中崎尾根を使う。トレースは末端まで延びているが、偵察していないため、槍平に下りる。槍平からもアイゼン無しではいやらしかった。

引き継ぎ早々事故を起こしてしまった。今後は気を引き締めて臨みたい。

(記 大倉)

1989 年度活動記録

1989年度現役部員

C. L	大倉徹雄	(工・4)	[4]	
S. L	蔭山 健	(経・3)	[3]	
	栢尾豪人	(理・2)	[2]	
	渡辺 聡	(理・2)	[2]	
	森 政士	(理・2)	[1]	
	矢口 剛	(経・1)	[1]	退部
	仕方 孔	(工・1)	[1]	退部

[]内は山岳部学年

新歓山行

新人歓迎合宿 涸沢

期間：4月29日～5月6日

今回の新歓は昨年の秋より入部1年扱いの森も加えて新人3人、そして在学OBも合わせて、賑やかなものとなったが、雪の状態が悪く、内容としては、計画と大きく異なり、不十分なものとなった。

4/29 快晴 (入山) 上高地(7:25)～涸沢(15:20)

1年が1人疲れ気味でペースが遅くなった。

4/30 快晴 (雪訓) B. C(6:40)～B. C(12:30)

雪訓にはもったいないほどの快晴。北尾根6峰の下部で行うが、雪がズカズカで悪い。なお、この日、北穂沢で雪崩があり、雪訓中ひっきりなしにヘリが飛び交う。

5/1 曇り後雪 (白出の科尔遠足) B. C(5:30)～白出科尔(8:00)～B. C(10:20)

天気があまり良くないため全員で涸沢岳遠足とする。小屋からの注意放送で雪庇が崩れそうだということで、ザイテングラードより科尔へ。科尔で強風、ガスとなり、涸沢岳をあきらめすぐ下る。

5/2 快晴 (北尾根 蔭山、栃尾) B. C(4:45)～V・VIの科尔(6:45)～V峰(7:45)～IV峰(10:10)～III・IVの科尔(10:20)～III峰取付(10:50)～前穂(14:10)～奥穂(17:00)～白出科尔(17:30)～B. C(18:30)

快晴で絶好の天気になり、I番乗りでV・VIの科尔を目指してラッセルをしていたが、後続に追いつかれ交代でラッセルをして科尔へ。ここで後続を振りきってV峰まで快調。ところがIV峰でルートを夏道の右巻きに取り、失敗する。ザイルを出して進んだがいやらしく敗退し2時間のタイムロスとなる。後続パーティは、左の雪壁を巻いたらしい。左からは急な雪壁となるが、なんとなくIV峰へ抜けられる。IV峰でのタイムロスのためIII峰で時間待ちとなる。ザイルはIII峰で4P、II峰で1P、I峰で1P。III峰は夏とほとんどかわらない。

(雪訓) B. C(5:30)～奥穂下(8:40)～雪訓(9:00～10:00)～V・VIの科尔(11:10)～B. C(12:05)

雪訓の後、V・VIの科尔まで足をのばす。

5/3 晴れ後雪 (雪訓) B. C(5:40)～雪訓(6:35～8:25)～B. C(8:50)

大倉、藤田、東條で奥穂北東稜を目指したが、取付のルンゼで頻繁になだれているため、敗退して雪訓隊と合流。

5/4 快晴 (北穂東稜 蔭山、渡辺、東條) B. C(5:00)～恐竜の背(7:15～8:30)～北穂(8:50)

最低科尔を目指し右の稜に取り付いて尾根上へ。恐竜の背手前は非常に細い雪稜。ザイルは恐竜の背で1P、その後の岩稜の下りで1P。しかし岩はほとんど埋まっていた。その後、北穂で遠足隊と合流。天気も良く快適。

(北穂遠足) B. C(5:40)～北穂(8:30～9:45)～B. C(11:30)
南稜も考えたが、結局北穂沢沿いに北穂へ。

5/5 快晴（奥穂・涸沢岳遠足）B、C
（5：45）～白出コル（7：30）～奥
穂（8：20～55）～白出コル（9：5
0）～涸沢岳（10：20～50）～B、
C（11：45）

快適な遠足だったが、奥穂の下り、クサリ
場で、30人のザイルでつながれた行列と
かちあい、待ち時間を多くとられ、うんざ
りする。白出コルにヘリが到着。TVの取
材であった。

（蔭山）

夏山定着合宿

夏山定着合宿 涸沢

期間：7月21日～8月3日

参加者：大倉（4、CL）、蔭山（3、S
L）、栃尾（2）、森（1）、矢口（1）、
米村（OB）、紫藤（OB）、東條（OB）

7/21 快晴後曇り 上高地（7：30）
～明神（8：58）～徳沢（10：20）
～横尾（12：10）

思ったよりペースが良く、予定通り横尾ま
で。

7/22 曇り 横尾（5：00）～涸沢
ヒュッテ（10：10）

バテる者もなく涸沢へ到着。残雪が多い。

7/23 快晴後曇り（雪訓）B、C（6：
30）～B、C（12：00）

キックステップ、アイゼン歩行、滑落停止。

7/24 快晴後曇り（北穂東稜）大
倉、栃尾、矢口

B、C（5：30）～稜線上（7：10）
～北穂ピーク（10：20～10：55）

～B、C（13：00）

快晴の中、2P歩き、東稜に取り付く。フ
リクションのよく効く岩稜歩き。核心手前
で1Pと核心で2Pザイルをだす。10：
00にビバーク隊とシーパー通信。北穂か
らの下りで、夏道を通らず雪渓を下ったが、
かなりの急傾斜で1年生が怖がっていた。
上級生の配慮がたらなかった。

（ビバーク）蔭山 森

B、C（6：10）～取り付き（8：20）
～東稜（10：00）～北穂ピーク（13：
30）～南稜のT、S（14：10）

北穂沢上部カールをトラバースした所より
ブッシュをこいで北穂池、天狗原を目指す。
ところがブッシュに手間取り、北穂池へも
行けそうになかったので東稜に行く。

7/25 快晴後ガス（ビバーク続き）
T、S発（4：30）～北穂（4：45）
～南稜（5：30）～B、C（8：10）
朝食のラーメンを忘れたため、滝谷を少し
偵察した後、すぐにB、Cへと道を急いだ。
この日紫藤入山

（VI峰松高ルート）大倉、栃尾

B、C（4：10）～V・VIのコル（6：
00）～取り付き（7：50）～開始（8：
25）～終了（12：00）～IV峰（12：
40）～B、C（13：20）

B、Cを出た頃は快晴だったが奥又白の辺
りからガスってきた。最初の2P位はピン
が少なく、確保支点到注意が必要。人工は
少ししかなくほとんどフリーで登る。

7/26 雨後快晴（雪訓後遠足）全
員

B、C（5：25）～雪訓～V・VIのコル
（10：50）～fix 開始（10：3
5）（40Mが2回、懸垂20M）～VI・

VIIの科尔(12:40)~B.C(13:30)

天気が良くないので雪訓にできるが、途中で晴れてきたので、遠足に行く。V・VIの科尔からVI峰を登る。VI峰の下りでfix(3P)、VI・VIIの科尔へ20Mの懸垂。VI・VIIの科尔から涸沢への下りは上部がガレていて、慎重に下降する。

7/27 晴れ (ドーム中央稜) 蔭山 森 紫藤(OB)

B.C(4:50)~北穂分岐(7:00)~取り付け(9:40)~終了(13:50)~B.C(16:00)

滝谷はこの日はガス。1P目3人で1時間とやたら時間がかかったが、後はスイスイといく。

(ビバーク、霞沢岳) 大倉 枳尾 矢口
B.C(6:00)~横尾(7:53)~八右衛門沢取り付け(10:45)~最高到達点(11:55)~取り付け場所(12:40)~ビバーク地(17:00)

霞沢岳へ行く予定だったが、矢口が靴擦れをおこし、ペースが落ちたため無理と判断。明神まで引き返し徳本峠へ行く道の途中から黒沢へ入り、少し行った所でビバーク。

7/28 快晴後曇り (ビバーク続き)
発(4:30)~徳沢(5:20)~B.C(10:30)

(前穂北尾根) 蔭山 森 紫藤(OB)
VI峰登りでルートファインディングに苦労する。III峰の登りでガス。涸沢へはアズキ沢の雪渓を下る。

この日来村、東條が入山。

7/29 雨後曇り 沈殿

7/30 快晴 (ドーム西壁) 枳尾 来村(OB)

B.C(6:00)~取り付け(10:30)~開始(11:00)~終了(13:50)~ドーム発(15:00)~B.C(16:30)

第三尾根を下降しトラバースして取り付く。岩がしっかりしていて快適に登れる。4P目の下り気味のトラバースが少し怖い。核心のハングはクラックを利用してフリーでぬけた。天気が良いのでドームの頭で一時間程景色を眺めていた。

(屏風の頭遠足) 蔭山 森 矢口

B.C(7:00)~頭(9:00~11:00)~B.C(12:50)

屏風の頭からの展望を楽しむ。

(フレンズ捜索隊) 大倉 東條(OB)

B.C(6:10)~B.C(12:25)
昨日の登ハン中大倉が落としたフレンズを探しに行く。幸にも発見できた。

8/1 雨 沈殿

8/2 (右岩稜古川ルート) 別記

(清水RCCルート) 別記

(ドーム北壁) 森 来村(OB)

1尾根は、B沢の状態が悪かったため敗退。かわりにD北へ。ゲレンデ感覚の楽しいルート。

8/3 快晴後曇り 例の如く、横尾から上高地まで下山競走。トップは矢口だった。屏風岩右岸壁ルンゼ状スラブルート

1Pから3P、やさしい岩から草付
4P、ルート図ではVのハング越えだが、凹角をぬける。

5P、出だしは だが、ぬれているためA0でいく。

6P、トラバースから右上し、カンテに出る。

7 P、カンテを上まで。IV+だが一箇所Vありそうだった。

8 P、草付バンドを左上して、さらにアブリミ3回で左に行き、IV+のフリー。ピンが15mなくこわい。最後の凹角をA0でぬける。

9 P、フレークの多いフェース。浮き石も多い。

10 P、フリーで5mほど行ってA1。出口がいやらしい。

12 P、木登りとA1のミックス。ピンが遠く苦勞する。

13 P、右上してから2m下降。ふたたび右上して凹角に入る。

終了点から稜線に出、稜線伝い(カモシカ尾根)に下る。行き詰まったところから、懸垂20m、40mが4回、下降すると3ルンゼに出、これを下ると、旧道に出る。本によってルートが異なり、実際にボルトラダーも何回かあったが、全体的にピン少なく、シビアである。

(大倉)

<前穂東壁右岩稜 古川ルート>

(大倉、栃尾)

B. C発(5:45)~V, VIのホル(6:34)~開始(9:10)~終了(14:10)~B. C(17:45)

曇空の下ベースを出発、小雨が降ったりやんだりしていたが、最終日ということもありとりあえず取り付きまで行く。空は相変わらず曇っているが雨はやんでおり岩も思ったより濡れておらず登攀することに決定。

1 P:草混じりの右上バンドを登る。

2 P:1 P目で栃尾がピッチを伸ばしす

ぎたため非常に短いピッチとなる。

3 P:スラブに走る明瞭なクラックを登る。20m程登ると傾斜が急になりハング帯が出てくる。この辺りから凹角状を登っていくのだがここで本来のルートから外れた凹角に入ってしまったらしい。ハーケンも打ってあるので気付かずに登っていく。

4 P:フリーで登ろうとするが、とても無理の様子。ピンがたくさんあったので結局A1になったがこの辺りでルートを違った事に気付く。

5 P:安定した大きなテラスまで1 P伸ばし終了。

この後、北壁大テラス-Aフェースを経て登攀終了。帰幕ルートは北尾根をIII, IVのホルまで下降し(3峰の下りで、懸垂 20m×2 40m×1)雪渓を涸沢へ。

C沢から取り付きへは非常にガレており慎重に行動した。ルートを誤ってしまったのが悔やまれる。

(記 栃尾)

8月2日 曇り

<清水RCCルート> (東條、蔭山)

B. C(5:30)~5, 6のホル(6:25)~開始(9:30)~終了(13:30)~B. C(15:10)

朝から曇の嫌な天気だったが、最終日ということで出発、右岩稜組とアプローチをともにする。取り付き近くで雨がポツポツしたり、ガスになったりもしたが、なんとか天気ももちそうなので取り付きへ。長方形スラブ直下を目指してC沢を上り一段上がった草付きテラスが取り付きである。

1 P:草付きテラスから左上、岩がぬれておりクレッターがすべる。IV+あり。1 P目は一段目のテラスではなく(テラスピ

ンあり) まだ左上してつきあたった洞穴状テラスまで。一段目のテラスで切って右上するとA1のハングとなり、別ルートとなる。(「剣の岩場」の写真集はこのルートをとっているがこれはオリジナルルートではなく誤りと思われる)

2P: 右へトラバース。トラバースで稜を巻いた後ピンまでの少し下りがホールド細かい。

3P: 長方形スラブをA1、ボルトラダーでピンは近い。(一か所のみ遠く残置シュリング使用) 途中、ボルトテラスから左上する(真っ直ぐ上がると高知ルートとなるので注意)。最後のワンポイント、草付きのフリーがピンもなくいやらしい。これを越すとレッジ。

4P: 核心のA1。かぶったり、遠かったり(残置テープあり)、A0になったり、フリーになったり、苦しい。全体的に右上がりみでテラスへ。

5P: 凹角をいく。最初V級らしいがA0となる途中で左の壁へ移りA1。左へ回り込んで草付を少し左上してテラス。

6P: 5Pで実質的に終了。6PはII級の草付ブッシュをつかんでIV峰直下付近。3, 4のコルはすぐそこ。

RCCルートは、全体的にピンも豊富で、高度感もあり、快適であった。

(記 蔭山)

夏山縦走合宿

夏山縦走合宿

南アルプス縦走

期間: 8月5日～8月14日

参加者: 栃尾(L)、森

8月5日 曇り→晴れ

夜叉神登山口(8:50)～夜叉神峠(9:50)～葎平(12:30)～南御室小屋(13:08)

早朝、JRで甲府駅へ。そこからタクシーで登山口。この日は、樹林帯の中をひたすら歩く。後半は、台風の接近のため天気が悪くずれてきた。

8月6日 雨

C. S(7:20)～薬師岳(8:30)～広川原峠(13:53)～早川尾根小屋(14:45)

台風の接近のため、出発を遅らせて様子を見る。行動に支障がなさそうなので出発する。雨の中ひたすら天場目指して歩くのみ。gas、gas、gas、で非常につまらなかったが、天場で途中、一緒になったおじさんからジュースの差し入れがあって、これを温めて飲む、非常にありがたかった。この日、マイクロゼルトは狭く、下はびしょびしょで非常に不快。

8月7日 曇り→晴れ

C. S(6:40)～アサヨ峰(9:05)～仙水峠(11:25)～甲斐駒アタック発(11:40)～頂上(13:30)～仙水峠(15:13)～北沢長衛小屋(16:45)

台風は東北沖にぬけ、好天を期待しながら出発。アサヨ峠で初めて富士山を見る。頭を雲の上にだし〜♪という歌詞はこのことなんだと妙に感動しつつ、甲斐駒を目指す。摩利支天の奇妙な岩峰は、目をみはるようなものがあつた。仙水峠もみずの流れる音が響きわたる、よい所だ。北沢長衛小

屋の人から台風のため左俣の橋が流されたとの情報を得たので、明日は高望池までとし、左俣から北岳はあきらめた。

8/8 快晴 C. S (4:43) ~ 小仙丈ヶ岳 (7:30) ~ 仙丈ヶ岳 ~ 大仙丈ヶ岳 (9:16) ~ 高望池 (11:40)
この日は調子よく、快適にとぼす。それにしても、小仙丈の登りでの中学生(?)の50人程の行列には参った。小仙丈からの仙丈は、雄大である。高望池は、水場が少し遠いが、なかなかよい所だった。停滞食を思いきり食べる。

8/9 快晴 C. S (4:40) ~ 三峰岳 (9:40) ~ 北岳アタック発 (9:50) ~ 北岳 (11:30) ~ (12:00) ~ 熊の平小屋 (15:15)

高望池からの三峰は遠く、途中では、塩見岳の雄姿をながめながら登る。北岳アタックは、栃尾がポリタン片手に、超軽装で行ったためとぼしまくる。熊の平に着いたときはへとへとだった。

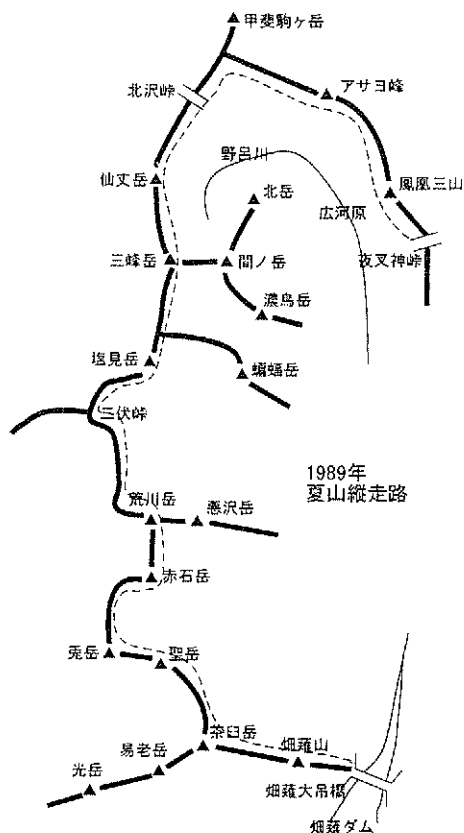
(注) 森は空荷

8/10 快晴のち晴れ C. S (4:15) ~ 農鳥小屋 (6:55) ~ 農鳥岳 (7:20) ~ C. S (10:20)

まだ薄暗い中を出発。早朝の朝日に決まる西農鳥は美しかった。全体として、ゆっくりとしたペースで農鳥岳へ。山頂からは、北岳が形よく見え、八ヶ岳も見え、なかなかの展望。この日は実質休養日。

8/11 晴れのち曇り C. S (4:35) ~ 蝙蝠岳アタック発 (8:40) ~ 蝙蝠岳 (9:45) ~ 塩見岳 (11:15) ~ (12:00) ~ 三伏小屋 (15:10)
北荒川岳のお花畑からの塩見岳は、なかなかよかった。蝙蝠からの荒川岳は重量感にあふれ、威圧感さえ覚える程だ。塩見山頂でおすそわけしてもらったプルーンの味が今でも忘れられない。

8/12 曇り C. S (4:50) ~ 荒川前岳 (12:15) ~ (アタック) ~ 中岳 (12:20) ~ 悪沢岳 (13:20) ~ (13:45) ~ 荒川小屋 (15:25)
この日の核心は荒川の登り。高くなる太陽を恨みながらひたすらに登る。ここは非常にしんどかった。前岳からの悪沢はきれいな三角形である。悪沢頂上で今度はアーモンドをおすそ分けしてもらった。天場で見た、夕日に染まる小赤石岳はきれいだった。
8/13 晴れのち曇り C. S (4:40) ~ 赤石岳 (6:40) ~ 前聖岳 (14:10) ~ 聖平 (15:30)



本縦走核心の日。赤石からは今まで歩いてきた山々が見わたせて、充実&爽快感を味わう。この後の大沢岳から聖までは地獄のロード。ポコの連続。特に聖の登りにはだまされっぱなしだった。聖平はよい天場だった。

8/14 曇り C.S (5:30) ~ 茶臼岳 (8:45) ~ 茶臼小屋 (9:00) ~ 畑薙大吊橋 (12:30)

この日の予定は茶臼小屋までであったが、下界が無性に恋しくなり光岳への未練をふり切って、主稜線を離れる。非常に長い下りだった。大吊橋をわたると、そこは林道。2人で固い握手をして、無事下山を喜んだ。そこから充実感を嘯み締めながら林道を1P行ってダムへ。

(記 森)

個人山行

秋山個人山行

黒部川下ノ廊下

期間：10月 8、9日

参加者：栃尾 (L) 森

10/8 曇り後雨

黒部駅出発 (7:15) ~ 黒部別山谷 (10:19) ~ 十字峡 (12:08) ~ 阿曾原 (14:50)

計画では、本日8pということで、早めに出発できるよう、急行列車、タクシーを乗り継いで松本から扇沢へ。久しぶりの山の空気を楽しみながら黒部ダムを後にする。途中から雨が降り出したが、危険な場所に

は梯子、ワイヤーがあり、核心の白滝峡も、高度感を味わいながらなんなく通過。これに気をよくしたのがいけなかった。11:40頃、森がルンゼ状の滝を横切る時、浮き石を踏んでしまい、3m程水の流れに乗って、黒部川の方へすべり落ちた。幸い水棚があり、止まることができたので、そこから小テラスへ移り、ザイルを上へ投げ確保してもらいながら岩をのぼり一般道へ (この間約20分)。その後は問題なく阿曾原へ。十字峡はうわさ通りの素晴らしい所で、まさに秘境という感のする所だった。

10/9

C.S (5:40) ~ 志合谷 (8:25) ~ 樺平 (10:43)

昨日とはうって変わっての好天。阿曾原からすぐの登りの後、ひたすら水平道に行く。折尾谷、志合谷と、本流からはぐんと離れるが、ここもきりたった所で気は抜けない。右手前方に奥鐘山を見ながらとりあえず樺平を目指す。後立山は、早くも雪が積もっており、唐松から白馬へつなげることは、危険大と判断。樺平で敗退を決定した。概して、この日の方が高度感があり、天気の良い日も合って、楽しかった。

安曇川猪谷 (比良)

参加者：藤田 (OB)、来村 (OB)、栃尾、森

10月15日 晴れ

全体的に滝を次から次へと登って行く好谷。高巻きは3回程。印象に残る滝としては3mシャワー、3mチョックストーン、多段20mの滝など。特に3mシャワーの滝は、冷たい水が体を覆い非常に寒い思いをした。

5時間弱で稜線へ。そこから道を間違え、横谷に入ってしまうが、かまわず沢を下り、林道へ出た。

アイゼン合宿

アイゼン合宿 御岳

11/22～11/26

参加者 蔭山(L), 栢尾 ～ 先発

11/22 入山

渡辺, 森, 藤田(OB) ～ 後発

11/23 入山

11/22 八海山荘(6:25)～王滝(12:15)～二ノ池(13:00)

快晴の下八海山荘を出発。昨年この時期に比べ雪がかなり少なく、スキー場も滑れる状態ではない。二ノ池にテントを張る。ヒマ天に2人だけなのでとても寒かった。

11/23 B. C発(7:00)～剣ヶ峰(8:10)～摩利支天(10:00)～雪訓～飛騨山頂(11:30)～サイの河原小屋(13:30)～B. C(14:00)

朝は風が強くガスだったが、2～3時間のうちにガスは晴れ、昼前は昨日同様の快晴となる。付近の地形を把握するため、剣ヶ峰、サイの河原、摩利支天などを歩く。所々適当な斜面を見つけてキックステップの練習を行う。この日後発隊が濁河より入山。また蔭山と栢尾はビバークに出る。

11/24 ビバーク(11/23 20:00～11/24 3:30) 二ノ池小屋

B. C発(6:30)～剣ヶ峰(7:35)～雪訓～B. C(14:30)

テントを運び剣ヶ峰などで設営、撤収の

練習。また雪訓(キックステップ、アイゼン歩行、雪上確保、e t c.)も行う。この夜渡辺、森、藤田でビバークに出る(剣ヶ峰)

11/25 B. C発(7:00)～fix工作、コンテ、ねり歩き～B. C(17:25)

昨日同様、設営、撤収の練習の後、fix通過の練習。3人パーティーと2人パーティーに分かれて行う。

11/26 B. C発(7:20)～fix工作(8:20～10:10)～下山開始(11:30)～濁河(15:00)

5人パーティーでのfix通過練習の後、下山。下山途中でもテント設営、撤収の練習を1回行った。天気も良く、気持ちよく下山した。

(記:栢尾)

冬山合宿

冬山合宿

鳩峰～北葛岳～蓮華岳

期間:12月26日～1月3日

参加者:大倉(L)、蔭山、栢尾、渡辺、森

12月26日 天気 晴

高瀬トンネル抜けた所(大町ダムほとり)(6:58)～1150mジャンクション(9:00)～1490mジャンクション(12:25)～1503m手前のコル(12:43)

取り付きは草付きの急登だが雪で滑るのでアイゼンを着ける。1200m位から岩

峰となるが、右上に巻き、雪崩そうで恐い。ブッシュにさまたげられるが雪は少なく、偵察とほとんど変わらないペースの明るい入山だった。

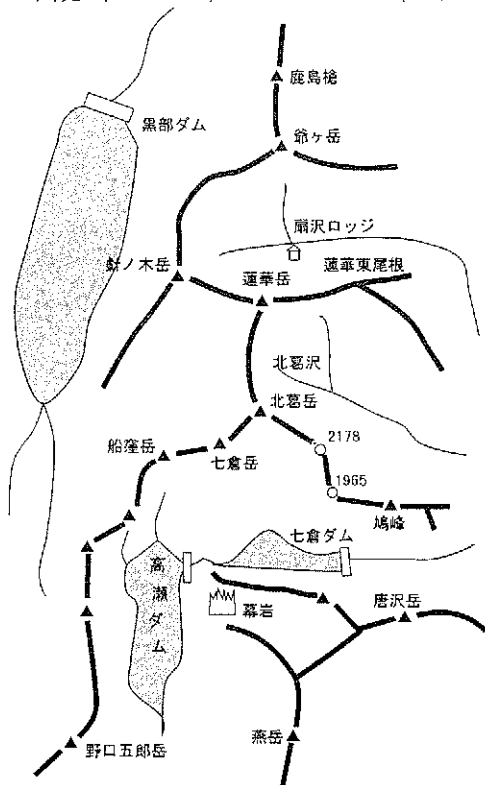
12月27日 天気 曇 後 雪

出発(6:19)～鳩峰(10:00)
～1850m(1826mを越えて少し登った所)(12:30)

出だしは前日同様雪が少なく、踏むとブッシュが出て来るのでアイゼンだったが、鳩峰手前でワカンになり同時にダブルになる。1826mで岩峰が出てきてfixを予定していたが、一段下がった所から右寄りに巻いてno fixで行く。

12月28日 天気 曇 後 雪

出発(7:25)～1965m(11:



鳩峰周辺概念図

14)～2030m(12:55)

1時間寝過ごした為、出発が遅れる。1880m、1900m、1965mの各登りは左が切れ落ち、岩の細い尾根に木があり、いやらしい。結局、総て右から巻いて行くが、雪が薄く、傾斜もあり、ブッシュがひどいのでいやらしく、時間がかかった。1965mの次のボコからの登りでも尾根上に岩が出て来たが左から巻き気味に登って問題なし。

12月29日 天気 曇 雪

出発(6:22)～2178m(8:14)～2480mプラトー(12:40)

出発してすぐ傾斜のきつい所が出て来て苦しむ。これを抜けると広々とした尾根に出る。この辺りはラッセルがしんどいが北葛も見え気持ちが良い。2430mの南側の崩壊した所で北側から巻くが雪崩そうなのでfix55m出す。

12月30日 天気 晴 後 雪

出発(6:38)～北葛岳(7:14)～最低コル(9:30)～fix工作

前日、二つ玉が通り冬型となるので心配だったが、風が強いだけでさほど悪くはない。北葛岳でワカンからアイゼンになる。北葛の下りも一部傾斜のきつい所もあったが、雪が多く問題なし。最低コルで蔭山と栃尾が蓮華の登りを偵察に行くが、風がきつい為か鎖やハシゴはほとんど出ており、10mfixしてきたとの事だった。

12月31日 天気 曇 後 雪

沈殿

風が強く、立っているのが苦しいぐらいなので沈とする。最低コルは風の通り道となっているようで、さえぎる樹林もなく、まさに”最低”コルだった。

1月1日 天気 曇 後 雪

出発(8:06)～蓮華岳(11:00)
～東尾根分岐(12:11)～2400(2
142のある支尾根)(12:34)

この日も風が強く判断に迷ったが、結局
出発する。出だし50mが核心だが、鎖を
fix通過で行く。やがて岩の間をぬって
行く程度となり、最後は単調な登り。わり
と短時間でピークに立てたが、なぜかかな
り疲れる。やはり緊張していたのだろう。
東尾根にはトレース、赤旗があり、楽勝だ
った。2142まで行くつもりだったが、い
い天場があったので泊し、この晩打ち上げ
をする。

1月2日 天気 曇 後 雪

出発(7:03)～2142(10:2
6)～1500(17:40)

今日中に下山、と思いきや2300から
草付のうっすらと出た斜面にfix40m
したりラッセルが腰ぐらまでになつたり
で、思う様に進まない。さらに偵察してい
ない(偵察は針ノ木峠下山)為か支尾根に
入ってしまい1時間ほどロス。正しいルー
トに入ってもシャクナゲのブッシュとラッ
セルに行く手をはばまれ、結局下山できず。
さらにテントのポールが袋が破れていたた
め多数なくなり、最低の一夜をすごす。

1月3日 天気 晴 後 雪

出発(8:11)～有料道路(9:43)
～黒四RoyalHotel(11:35)

前日泊が遅かった為起床を遅らせ、ゆっ
くりと出発。すぐにヤセ尾根となり沢を下
降。道路までのラッセルがしんどかったが、
道路に出たからは、山行をふりかえりつつ、
足どりも軽やかに、ホテルへと向かった。

(大倉)

春山縦走

春山合宿

天狗尾根～鹿島槍～爺南尾根

期間:3/5～3/10

参加者:蔭山(CL、3)、栃尾(SL、
2)、森(1)

3/5 雨時々晴れ 大谷原(8:00)
～荒沢出合(9:30)～取り付き(10:
10)～1700mジャンクション(13:
10)～1900m、T.S(14:10)
数日前のものらしきトレースがあり難なく
取り付きへ。天狗尾根に取り付いてからも
ペースは快調で1900mまで進む。

3/6 晴れ後曇り 出発(6:05)～
第一クローラール(7:00～8:45)
～第二クローラール(9:15～10:4
0)～天狗の鼻(2300)(11:30)
fix隊発(13:05)～帰幕(15:
00)

第一クローラール、fixでトップの栃尾
が手間取り時間を食う。第二クローラール、
予定ではトラバースしてブッシュのはえた
稜を登るということだったが、トラバース
途中が雪崩そうなので変更。雪面を直上す
る。天狗の鼻にテントを張ってfix隊(蔭
山、栃尾)出発。fixロープを最低コル
手前の細い稜線に計100m張った。

3/7 曇り後雪 出発(5:50)～小
舎岩(11:00)～T.S(11:15)
ガスの中出発。屈曲点から昨日のfixロ
ープでfix通過。その後登りが始まる。
雪壁の急登や所々岩も出てくる。小舎岩に

ついたころはガスも濃くなり風雪も激しくなってきたのでテントを張ることにする。
3/8 雪 出発(6:30)～第一岩峰取付(6:50)～昨日のT. S(8:00)

降雪の中出発。第一岩峰で1ピッチfixしたが、昨日の新雪が安定しておらず、足下の雪がボロボロ崩れ落ちてゆく。天候が悪化してきたので、昨日の天場に戻って沈殿とした。

3月9日 天気 快晴

出発(6:05)～第一岩峰(fix 30m+15m)(6:15～8:10)～第2岩峰(fix 45m+45m)(8:25～9:10)～荒沢の頭(9:30)～北峰(11:10)～鹿島槍ヶ岳(13:20)～T. S(15:20)

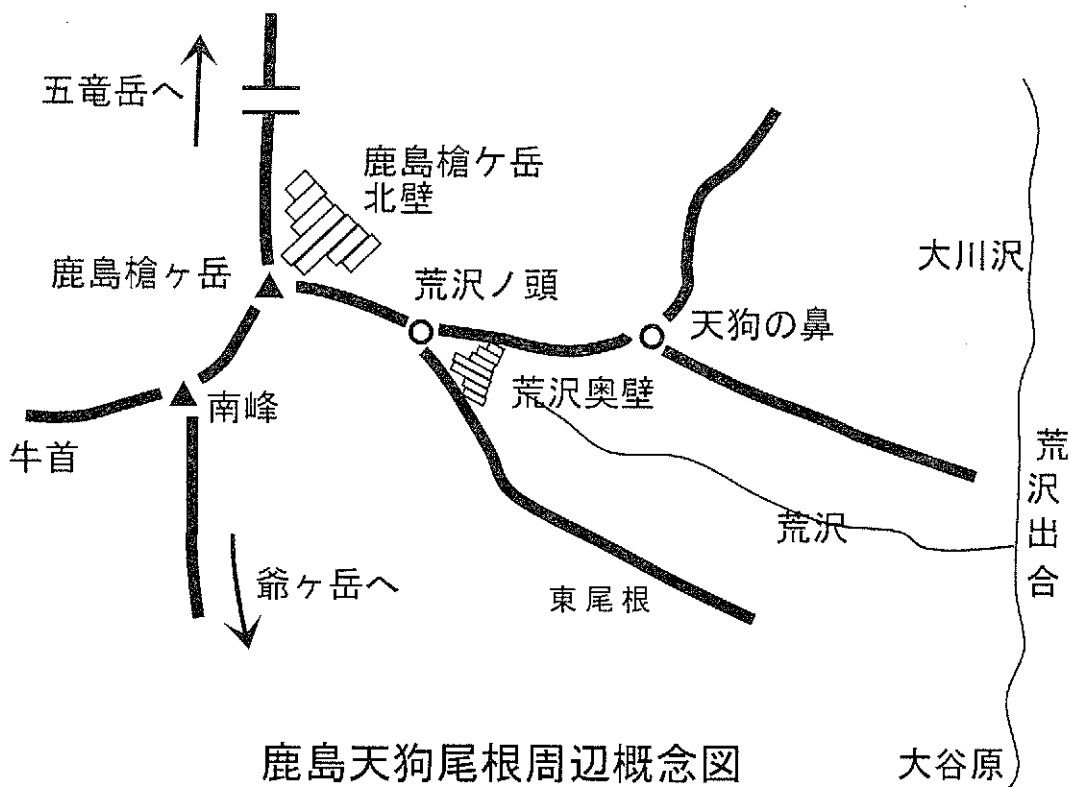
第1岩峰は偵察と同様、右へトラバースし小ルンゼを登るのに1P、続く小岩峰に1Pのfix。第2岩峰は2つのザイルをつなげて約90m伸ばしてfix。岩峰の右の雪面を登った。荒沢の頭からは北側に大きく張り出した雪庇に注意しつつ進む。また本峰直下でfix20程する。本峰からは冷池山荘の天場まで進みテントを張る。

3月10日 天気 快晴

出発(7:20)～爺南峰(9:15)～林道(12:15)
快晴の下、下山。

3月山行

三月山行



赤岩尾根～鹿島槍ヶ岳～牛首尾根～S字峡
～ガンドウ尾根～剣岳～早月尾根

期間：3月21日～3月29日

参加者：藤田（C. L）、東條、蔭山、栃尾

3月21日 天気 快晴

大谷原（6：10）～西俣出合（7：35）～高千穂平（11：10）～2220m（12：45）

完璧な快晴、素晴らしい展望、心地よい風一順調な登高は約束されていた。ペースは速く主稜線に達するかと思えたが、それだけに早い時刻に疲れてしまい、最後の急登を残してドン。

3月22日 天気 晴

出発（5：20）～鹿島槍南峰（9：40）～牛首山（11：50）～牛首尾根上2200m（13：55）

赤岩尾根の頭への急登はクラストした斜面を快適にこなすが、主稜線に出たからがやたらに遠い。さらに東條が極めて不調で牛首山手前で荷分けをする。牛首尾根は全般に広い尾根で易しいが2302m付近は尾根がいくんでおり、ルートはもともと右寄りに行くのが正解。剣岳の展望が素晴らしい。下降するに連れ、黒部別山がどんどん大きくなっている。2302m手前から樹林帯で木々の間から本峰が見え隠れしている。

3月23日 天気 曇 後 晴

出発（6：00）～1350mコンクリート製建造物（9：50）～黒部川（16：30）

1460m付近は枝尾根が多くルートファインディングは極めて難しい。細い尾根

を行くと急にスッパリ切れている所に出、下にコンクリート製の建物が見える。ここをfix45mで下り、建造物を通り過ぎた所から2回のダブル懸垂すると、それまで北向きだった尾根は西に曲がる。再び北へ方向を変える辺りで悪いトラバースの後キノコ雪が出て来る。その通過にfix40m。下にはS字峡の吊り橋が見える。さらにキノコ雪が5個程付いているやせ尾根の下降にダブル懸垂。

ここから尾根を末端までたどらずに、やや西寄りに直接黒部川に降り立つようにルートを取る。黒部川の水量は少なく、直接徒渉しようとするが深い所は腰位までありそうなので断念。栃尾がポリタンのふたを黒部川に流してしまうが、東條が川に飛び込んでこれをナイスキャッチ。本日のファインプレー。

3月24日 天気 雨

出発（6：00）～東谷徒渉終了（7：00）～S字峡トンネル（7：50）

雨の中を出発。15m程の岩峰は黒部川をへつる。雨で濡れていて微妙なバランスを要する。東谷の徒渉は膝まで。吊り橋はルンゼ状を30m程つめた後、ブッシュをトラバースする。皆ズブ濡れで、靴下をしぼったテント内は極めて臭い。行程には約半分で、疲れがたまっているので良い休養になった。

3月25日 天気 雪 後 曇

出発（5：30）～取り付き（7：00）～ガンドウ尾根1349m（9：15）～1833mジャンクションピーク（14：15）～大滝尾根の頭手前（14：50）

吊り橋から真っ直ぐ上のルンゼ状に取り付く。はじめ150m程は傾斜の激しいき

つい登りだが、やがて傾斜も落ちて来て広い斜面になった後、顕著なリッジに移行する。

ガンドウ尾根は

- ・やせ尾根だがキノコ雪は小さい。
- ・大きなキノコ雪、倒木、ブッシュ、岩峰のオンパレードでトップを行けば楽しそう。1500m付近の大きな岩峰は雪が安定していて直上できたがコンディションが悪ければ難しかっただろう。キノコ雪の下り(1550m)でfix12m。
- ・何ヶ所か傾斜は厳しくなる。
- ・1833m直下の登りはきつい。最後に左からまわり込んで小さな雪庇側から主峻へ上がる。昨日の雨、その後の冬型よる気温の低下で、雪はしまり、キノコ雪は安定しており、これ以上ないと思われる程の最高のコンディションだった。ガンドウの核心を1日で抜けられるとは思わなかった。

3月26日 天気 快晴 後 曇

出発(5:45)～仙人池小屋(9:15)～池ノ平(12:30)

大滝尾根へ登りは超急勾配で苦しい。南仙人山手前のコルへの下りが悪く、fix20m。この後は尾根は広くなり、のんびり仙人山へ向かう。この日の核心は池ノ平山への500mの登りで、きついだろうなあと思っていたが、やっぱりきつくて皆バテバテ。雪はクラストしており、雪崩の心配はなかった。南仙人山以降の剣の展望は、“素晴らしい”以上のものだ。何度も立ち尽くして見入ってしまう。幸せなひとときだった。

3月27日 ガス 後 快晴

出発(5:45)～小窓(9:15)～小窓ノ王トラバース(11:30～14:

45)～三ノ窓(14:55)

出発時はガスっていたが見る間に天気は良くなってド快晴に。小窓手前のコルの下りでfix40m。岩を支点にして懸垂をしても良かった。さらに小窓への下りは、始め10mトラバースした後ダケカンバを支点にうダブルの懸垂。3年前の北方稜線時にはこれで終わりだったが、今回は懸垂終了点の雪面がガチガチにクラストしており、さらにダブルの懸垂で小窓に達する。概して雪面は完全なサンクラストで極めて堅い。したがって小窓への急登は雪崩の心配は全くないが大変つらい。

ここから小窓ノ王のトラバースはまずダブルの懸垂の後、2ピッチ(15m+45m)で通過する。状態はそう悪くはなかったが、この通過に3時間以上かかってしまい、もし荒れていたらと思うとゾットする。トラバース中小窓ノ王からずっと氷、つららが落下してうっとおしい。剣尾根、チンネが素晴らしい。

3月28日 天気 曇 後 雪

出発(5:20)～本峰(7:50)～シシ頭fix終了(9:40)～2600mピーク(12:50)～伝蔵小屋(13:40)

池ノ谷ガリーは状態よく、40分足らずで乗越。剣尾根の頭は左から巻けた。長次郎のコルからの登りはまたもガチガチのクラストでダブルアックス。本峰の社は完全に埋まっていた。遥か遠くに鹿島槍を望んで記念撮影。よくもあんな遠くから来たものだ。カニのハサミも状態が良くノーザイル。シシ頭の登りでfix40m。この辺りから慶大のパーティーのトレースがあった。2600mまでいつものように悪い下

りが続く。エボシ岩の次のポコからの下りでfix 45m。昨日に続いてここでもむちゃくちゃ時間を食う。伝蔵に着いた時、やっと終わったとホットした。

3月29日 天気 雪 後 曇

出発(9:50)～馬場島(13:50)

早月は4度目だから、ただ歩くだけで馬場島だと気を抜いていた。が、ガスで視界も悪くトレースも消えている中、ボーッと下っていると、1920.7mから北へ延びる尾根に入ってしまった。幸い気付くのが早く、40m程登り返して正規のルートへ。馬場島で我々を迎えてくれたのは、”試練と憧れ”の立派な遭難碑だった。いつものように詰め所でコーヒーをご馳走になる。

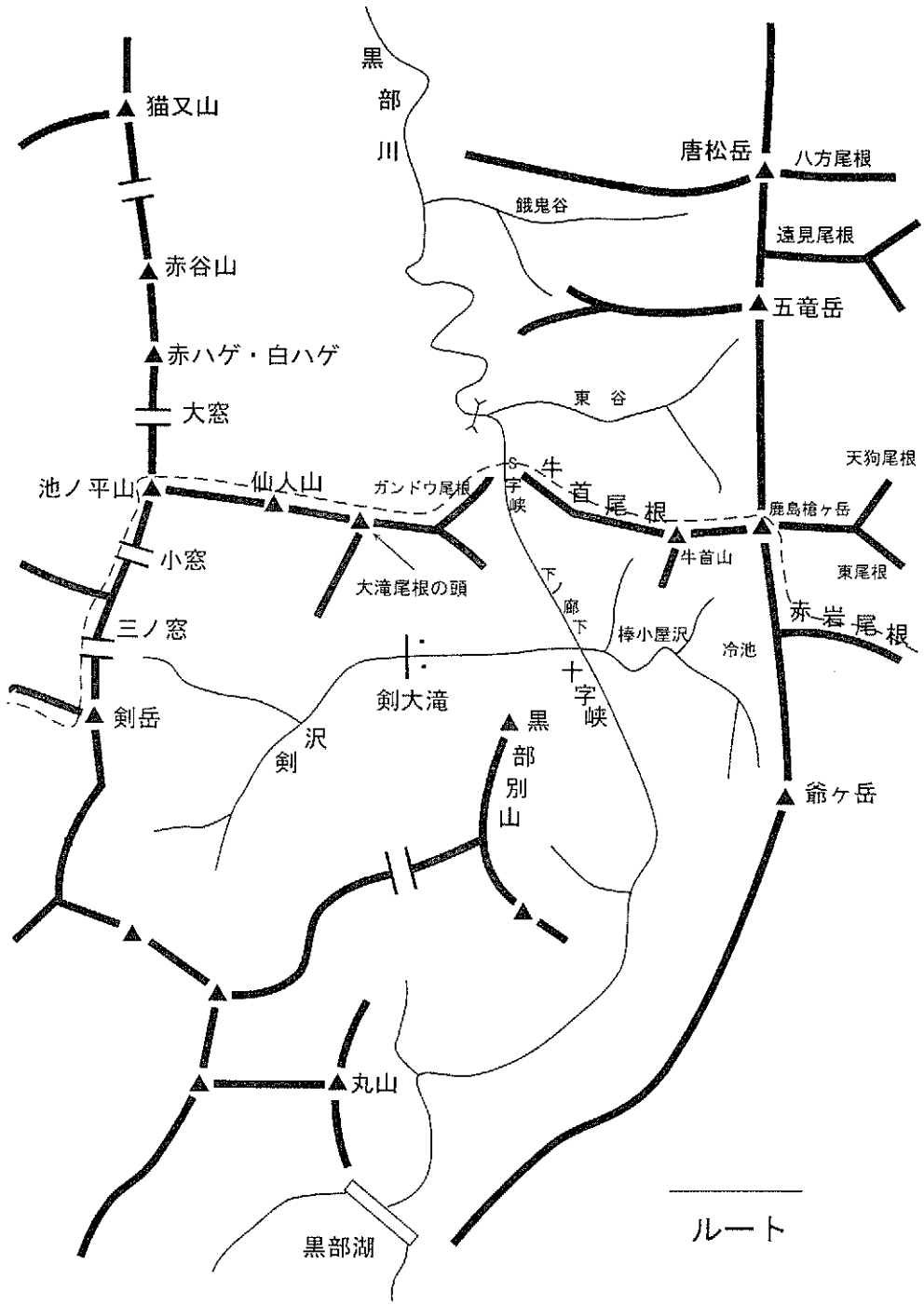
このルートは2年前に敗退している因縁のルートだ。2万5千を見ると嫌になるほど長い黒部越えの計画を無事完登でき、満足感は大きい。

天候・ルートのコンディションともに信じられない程ベストの状態だった。シビアな見方をすれば、成功の最大の原因はこの好条件であって、パーティーの力によるものではないと思う。体力的には十分だったと思うが、問題なのは遅すぎるザイル操作である。実際今回は総ての核心でド快晴でだったがもう少し悪ければかなり予備を使っていたに違いない。

黒部に降り立つと、北アに真ん中にいるという隔絶感を感じる。これが黒部を越えさせる動機になるのだが、必要条件としてかなりの実力が要求される。今回はラッキーにも成功したが、この程度の力で再び黒部に挑めば、容赦なくはねつけられるだろう。

ともあれこのような計画は大学山岳部にしか出来ないものであり、長い山行には独特の満足感がある。黒部はいまだ未知の雰囲気を漂わせている。難しいが短い計画が 트렌ディなのだろうが、今後力をつけて再び黒部を目指してくれることを楽しみにしている。黒部は決して山屋を裏切らない。

(記 藤田)



黒部付近概念図

1990 年度活動記録

1990年度現役部員

C. L	蔭山 健	(経・4)	[4]	
S. L	枳尾豪人	(理・3)	[3]	
	渡辺 聡	(理・3)	[3]	退部
	森 政士	(理・2)	[2]	
	藤井孝宣	(工・1)	[1]	退部

[]内は山岳部学年

新歓合宿

新人歓迎合宿

剣沢

4/29 <入山>

室堂(10:20)～雷鳥平(12:50)

5月とは思えない悪天、ホワイトアウトのため雷鳥平までとする。

4/30 <入山～雪訓>

雷鳥平(5:05)～別山乗越(7:40)～剣沢BC(8:45)～雪訓発(11:00)～雪訓(11:30～15:00)～B.C(15:10)

昨日とうってかわった好天。入山後BC近くの斜面で雪訓を行う。

<剣尾根ビバーク隊>(藤田、東條) B.C(10:50)～熊ノ岩(14:30)

2ビバークの予定で剣尾根へ向け出発、予想外のラッセルに熊ノ岩まで。

5/1 <黒部別山遠足>(蔭山、森、藤井)

B.C(5:00)～ハシゴ谷乗越(7:30)～別山本峰(10:00～40)～B.C(15:30)

好天の黒部別山は、展望もよく最高であった。

<源治郎尾根>(栃尾、渡辺)

B.C(4:50)～ルンゼ出合(5:20)～I峰(9:35)～II峰(10:50)～本峰(13:30)～B.C(14:20)

心配された天候も回復のきざしがあり、ルンゼも状態よかった。I峰下の急登でザイル40m×3P(実質は1Pのみ)を出

す。

<剣尾根ビバーク隊一敗退>

熊ノ岩(3:30)～池の谷乗越(6:30)～B.C(11:30)

早朝、池の谷乗越を目指すラッセルで思うように進まず、強風と悪天のため乗越で敗退を決定。本峰に向かおうとするが、乗越からの登りで東條が持病の肩を脱臼、すぐに戻るが、長次郎下降中、にわかには快晴となり悔やむ。2ビバーク以上はラジオを携帯すべきである。

5/2 <立山中央山稜>(蔭山、森) B.C(4:10)～ハシゴ谷乗越(5:50)～取付(6:30)～内蔵助峰(9:00)～富士ノ折立(13:50)～B.C(16:00)

取付よりアイゼンで高度をかせぐが、途中ラッセルまじりとなる。時間がかかるが、内蔵助峰よりトレースがあり助かる。2744mジャンクション前後、尾根は切れている。その後ゆるやかになり、折立手前は岩峰帯間のクラストしたルンゼを適当につめ、直下の岩場ザイル1Pで折立に飛び出す。

<南壁A I>(来村、栃尾)

B.C(4:35)～取付(7:30)～開始(8:00)～終了(11:45)～B.C(14:40)

別山尾根から平蔵の科尔へ行き、平蔵を下ってA Iに取付いた。ルートは1P目の下部が雪に埋まっていて、1P目の上部のチムニー状の少し下から登り始める。

1P目 : かぶり気味のチムニーを抜ける所が難しい。氷化した雪がホールドを隠し、かといってこれらの雪はアイゼンをけり込むと崩れてしまう。

2 P目 : 1 P目の終了点から左へトラバースし、端のカンテを登る。

3 P目 : 右上気味にトラバースして雪田になっている所から、右のリッジ目指してフェースを登る。

4 P目 : リッジから右のフェースへ移り岩と雪のミックスを登る。途中のハイマツでピレーオフ。

5 P目 : さらにこのフェースを登ればリッジとなりすぐに終了点。

<立山別山> (藤田、渡辺、藤井) B. C (4 : 50) ~ 雪訓 (5 : 00 ~ 6 : 30) ~ 別山乗越 (7 : 20) ~ 別山 (8 : 00 ~ 8 : 30) ~ B. C (10 : 40)

<入山> (紫藤、鷺見)

室堂 (9 : 15) ~ 別山乗越 (12 : 05) ~ B. C (12 : 45)

5 / 3 <前剣東尾根> (蔭山、藤田)

B. C (4 : 10) ~ 取付 (4 : 30) ~ 開始 (4 : 50) ~ P1 (7 : 00) ~ P2 (9 : 10) ~ P3 (9 : 50) ~ 前剣 (10 : 00) ~ 本峰 (11 : 40) ~ B. C (14 : 10)

平蔵谷出合取付より雪質が悪かったが、下部はトレースが残っており助かる。P1まで雪稜の突き当たりに5m程のフェースがある。直登ザイル10m。ホールド細かく緊張する。P1のナイフリッジは最後スッパリ切れており、絶望的に思われるが、右側の雪壁を大きく巻いてコルに降りられる(ザイル45m)。コルよりは、左側のルンゼから巻くことも考えたが、雪壁を直登したP2、P3からコルへは、ギャップなく容易に降りられる。P1、P2、P3のナイフリッジは素晴らしく、緊張させられる。非常に良いルートだった。

<源治郎尾根> (紫藤、森)

B. C (4 : 00) ~ 取付 (4 : 20) ~ I峰 (6 : 40) ~ II峰 (7 : 15) ~ 本峰 (8 : 55 ~ 9 : 30) ~ B. C (11 : 30)

快調に進む。前剣で東尾根隊と出会う。

<雪訓> B. C (4 : 50) ~ 雪訓 (5 : 10 ~ 8 : 40) ~ 別山乗越 (9 : 30) ~ B. C (10 : 55)

雪訓後、適当な斜面より別山乗越へ。

5 / 4、5

雨のため沈殿。非常に残念な2日間であった。

5 / 6 <立山→下山> B. C (5 : 40) ~ 別山乗越 (6 : 45) ~ 富士ノ折立 (9 : 10) ~ 大汝山 (9 : 45) ~ 別山乗越 (11 : 45) ~ 室堂 (13 : 30)

別山乗越に荷物をデポして立山アタック後、下山。非常に良い天気であった。

(記 蔭山)

個人山行

個人山行

丸山東壁

期間 : 1990年6月1日~4日

メンバー : 戸叶(OB)、蔭山(4)

6月1日 曇り→雨

黒部ダム (8 : 20) ~ 内蔵助出合 B. C (9 : 40 ~ 11 : 00) ~ 南東壁取付 (11 : 30) ~ B. C (13 : 20)

B. Cは内蔵助出合の看板、スピーカーのあるコンクリートの台地(1ルンゼ出合も可)。取付まで行くが雨のため敗退。

6月2日 雨→曇り

B. C (11:30) ~ 下廊下散歩~ B.
C (15:00)

前夜より激しい雨となる、昼前には小雨となり下廊下散歩に出かける。

6月3日 晴れ

<緑ルート+南東壁ダイレクトルート>

B. C (5) 15) ~ 緑ルート開始 (6:15) ~ 終了 (12:40) ~ 懸垂終了 (13:50) ~ ダイレクトルート開始 (14:30) ~ 2p 終了 (16:40) ~ 懸垂終了 (17:40) ~ B. C (18:00)

1ルンゼから、右上するガレをつめて取り付く。1P:濡れており、正規凹状ルートの右のボルトラダーをいく。最後左トラバースしてテラスへ。

2P:ボルト連打。

3P:三日月ハングを越えて2つ目のボルトテラスまで伸ばし、ザイルいっぱい。

4P:A1。

5P:右へフリーのトラバースをしてA1。易しいフリーより中央バンドへ。6P:バンドを左トラバースしてハング帯左側壁より垂壁直上後、アブミビレー。

7P:核心。三段の階段状ハングを左上。ピンは近いがやや悪いピンあり。ハング抜けて左上の木のレッジ手前のトラバースがワンポイントいやらしく、木の根にシュリングをかけてレッジへ。8、9P:木登りと凹状A1のミックス。大テラスまで行かず途中より懸垂。ハング帯はレッジより45mザイルいっぱい直接中央バンドへ。

時間があつたのでダイレクトルートに取り付く。岩板状の小テラスが取り付き。

1P:草付クラックに行く。始め横クラックを左へ行くが、ワンポイント、ホールド

無く、細いブッシュをつかんで強引に抜け、凹状の縦クラックへ。非常に怖い。その後もピン無く、やっとのことで小レッジへ。

(ここまで約7m)。ここからもピンありA1。最後。ワンポイント左へトラバースし、40mいっぱいボルトテラス。

2P:傾斜の緩くなったスラブをA1後、左へアブミトラバース。(振り子は不要)。ここまでの時間切れのため懸垂で下降。

6月4日 天気 快晴

<右岩稜ルート>

B. C (5:45) ~ 開始 (7:20) ~ 終了 (10:50) ~ 懸垂 (11:15 ~ 12:20) ~ BC (13:10) ~ 黒部ダム (15:30)

取り付きへは2ルンゼをつめる。(1ルンゼ側からトラバースも容易)。取り付きはシュレントが深くて無理な為、1P:カンテ左のフェースより右へ回り込んで凹角に入り(A1)、大テラスへ(フリー)、2P:カンテを右に回り込み、右岩稜直上(ワンポイントA1)後、草付バンド状テラス。3P:カンテを行くか草付バンドかで迷うが後者をとる。出だし少々いやらしく、その後A0より草付で、快適なカンテ上テラス。4P:カンテ~草付状フェース~大バンドテラス。5P:左カンテを大きく回り込んで稜線沿い。傾斜緩いが、ピン無く、岩もろく、いやらしい。バンドテラスへ6、7P:2ルンゼに入る。どこでもルートをとれる。8、9P:凹角(どこでも可)をいって中央バンドへ。同ルート懸垂下降(ザイルの流れに注意)右岩稜といっても判然としない。(記 蔭山)

夏山定着合宿

夏山定着合宿 真砂沢

期間：7月23日から8月5日

参加者：蔭山（4，CL）、 栢尾（3，SL）、渡辺（3）、 森（2）、 藤井（1）、 紫藤（OB）、 大倉（OB）、 藤田（OB）、 東條（OB）

7/23 室堂（8：40）～雷鳥沢（9：40）～剣御前小屋（12：30）～剣沢TC（13：45）

7/24 TC発（6：05）～真砂B.C（8：30）～雪訓出発（10：40）～八ツ峰1、2峰間ルンゼ出合（11：50～12：50）～B.C（13：30）

途中より雪渓に入る。BC着のあと雪訓、キックステップ

7/25 <雪訓>

B.C（5：15）～源1、2峰間ルンゼ出合（7：00～12：00）～B.C（12：50）

キックステップ、アイゼン歩行、滑落停止

7/26 <六峰Dフェース 久留米大ルート> 敗退 栢尾、森 B.C（4：30）～取付（7：40）～敗退決定（8：15）～B.C（9：45）

1、2峰間ルンゼを越えた辺りからガス。とりあえず、取付を確認して、雨のやむのをまったが無駄。

<源次郎遠足> 敗退 蔭山、渡辺、藤井

B.C（4：45）～取付（5：24）～開始（6：00）～1峰手前で敗退決定（8：10～8：40）～B.C（13：10）

ルンゼを登り切った所で天気待ちしたが、1峰手前で結局雨が降りだし、敗退。L稜を降り手間取る。最後のルンゼトラバース路との合流は、下に向かって左側を懸垂20メートル。右側を巻いてクライムダウンもできるらしい(?)。下部の踏み跡も数種類あり迷う。

7月27日 晴れ

<チンネ左稜線> 栢尾、森

B.C（3：57）～三の窓（7：00）～取付（7：30）～開始（7：47）～T5（9：45）～チンネの頭（13：30）～B.C（15：25）

京大パーティーの後に行く。岩は堅く、高度感あり、快適。核心部は人工で小ハングを越した後、フリー。一カ所、ピンの効きが甘い。

<六峰Cフェース 剣稜会ルート>

蔭山、渡辺、藤井

B.C（4：15）～取付（6：10）～開始（6：30）～終了（10：45～12：00）～5・6のホル（12：45）～B.C（13：55）

一番乗りで取り付くが、あとから、あとから、後続パーティーがあり、下を見下ろしてうんざりする、上部ナイフリッジは、やはり快適。

7月28日 晴れ

<チンネ左下左方> 蔭山、渡辺

B.C（4：40）～三の窓（7：00）～取付（8：10）～開始（12：45）～中央バンド（13：15）～終了（16：10）～B.C（18：25）

取付へのトラバース口を間違え、IV級を

ワンポイントして取付の一段上の冬の取付(?)へ出る、以後ピッチの切り所が狂い時間がかかる。左下の上部2pは浮き石多く、ピンなく不快。左方はルート変化に富み、おもしろい。

<下廊下偵察> 森

B. C (4:25) ~ ハシゴ谷乗越 (6:00) ~ 内蔵助出合 (8:15) ~ 鳴沢出合 (8:30) ~ 内蔵助出合 (9:05) ~ B. C (13:35)

別山谷のアプローチとなる下廊下の状態を見に行く。雪渓はなく、日電歩道がずっと続いていた。

<剣尾根中央壁~ビバーク> 蔭山、栃尾

B. C (4:05) ~ 三ノ窓 (7:00) ~ αルンゼ (9:00) ~ 取付 (10:20) ~ 開始 (10:50) ~ 終了 (15:10) ~ ビバークS (14:45)

R2は上部もろく不快、αルンゼは、懸垂4pで取付へ。

1p目、AI、ハング抜け口にピンなく苦しい。抜けたところで確保。

2p目、快適なAIで右上。

3p目、左ヘトラバース、フリーのはずがAIになる。

4p目、リッジを直上、バンドを少し右にトラバースしてルンゼへ。もろい登攀は、これで終了せず、5p目不安定な草付。6p目、易しい岩峰を登り、ようやくハイマツ帯。ここの岩陰でビバークする。剣の西面歯、非常に新鮮で、中央壁は岩も堅く快適。

7月31日 晴れ

<ビバーク続き>

発 (5:15) ~ 剣尾根の頭 (6:00)

~ 本峰 (6:45) ~ B. C (9:00)

朝起きてみると、剣尾根の頭の縦走路は、すぐそこであった。ルート図の上部ブッシュ帯よりかなり実際は短い。天気も良いので本峰経由でB. Cへ。

<D六峰Dフェース富山大> 渡辺、大倉

B. C (4:30) ~ 取付 (6:45) ~ 開始 (7:05) ~ 終了 (10:40) ~ Dフェース頭 (10:50 ~ 11:30) ~ 七峰 (11:55) ~ 八ツ頭 (12:45) ~ B. C (14:25)

8月1日

<三ノ沢遠足> (森、藤井、紫藤)

B. C (5:50) ~ 三ノ沢出合 (5:14 ~ 5:25) ~ 敗退決定 (8:10) ~ B. C (9:10)

三ノ沢出合10mつめた所より、雪渓は崩壊。よって、沢左のルンゼに取り付いて三ノ沢に入るルートを探して、ザイル2p程のばすが、急登ブッシュに意欲をそがれ敗退。

<チンネ、中央チムニー> (栃尾、藤井)

B. C (4:14) ~ 三ノ窓 (7:00) ~ 取付 (7:35 ~ 8:00) ~ チンネ頭 (11:00 ~ 11:50) ~ 池ノ谷乗越 (12:10) ~ B. C (13:15)

1p目、チムニー内部と右のカンテを適当に登る。2p目も1p目同様。チムニーに入り込むと、ザックが引っかかり少々不快。チムニーを出た所にハーケンが数枚あって、ここでピレーオフ。すぐに中央バン

ド。gチムニーの取付点から右へ回り込むようにトラバースしaバンド経。bクラックも明瞭である。快適。

<ハッ峰北面菱ノ谷> (蔭山、大倉)

B. C (4 : 40) ~ニ股 (5 : 20) ~出合 (8 : 20) ~偵察 (9 : 20 ~ 45) ~5・6のコル (10 : 10 ~ 12 : 10) ~B. C (13 : 30)

菱ノ谷は、状態が良ければ、単なる急雪溪で5・6のコルに通じる。しかし、今回は、5・6のコル手前100mという所で、雪溪が崩壊していた。敗退するか迷うが、そこから、ダブルアックス気味に、いったん雪溪の底に下り、そこから右側の側壁を登り、再び雪溪上にはい出る(ザイル40×2p)。非常に緊張する。5・6のコルで一ノ菱を登攀するか迷うが今度は弱気に敗退してしまう。

<黒部別山左股“敗退”ピバーク> (森、紫藤)

B. C (4 : 10) ~内蔵助出合 (7 : 10) ~別山谷出合 (9 : 30) ~開始 (9 : 45) ~敗退決定 (14 : 10) ~下降終了 (18 : 50) ~ピバークサイト (20 : 00)

別山谷の雪溪は、両俣出合付近で切れており、右岸のブッシュに飛びうつり、ブッシュをこいでトラバースした後、雪溪に降りようと懸垂1pダブルですがシュルントが大きく、しかも、雪溪はR1手前でまたも切れていたため、シュルントから出る際トップの紫藤が8m墜落。幸い無傷で、トップを代わってトラバースしようと試みたが、斜面は急で、上へ逃げる形となる。

シュルントより3pのぼした所で、タイムリミット、左俣には入れず敗退決定。そこから懸垂3p。ピバークサイトは、大タテガビンをさらに内蔵助出合にいった日電歩道上。

8月2日 晴れ

<ピバーク続き>

発 (5 : 30) ~内蔵助出合 (6 : 20) ~B. C (11 : 20)

EPIを忘れたため、メタでラーメンを作る。最大の敗因として、雪溪が切れていたことが挙げられるが、ザイル操作、ルートファインディングなどの総合的実力の不足がその根底にあった。いい勉強になった。

<六峰Aフェース中大> (栲尾、渡辺)

B. C (4 : 15) ~取付 (6 : 10) ~開始 (6 : 40) ~Aフェース頭 (7 : 55) ~雪訓 (10 : 30 ~ 11 : 45) ~B. C (12 : 35)

1p目上部のトラバースが高度感があり緊張する。後のピッチは容易。オールフリーで登る。天気も良く快適な登攀だった。

<六峰Bフェース> (蔭山、藤井、藤田)

B. C (4 : 15) ~取付 (6 : 10) ~開始 (6 : 40) ~Bフェース頭 (8 : 55) ~5・6のコル (10 : 05) ~雪訓 ~B. C (12 : 35)

3p目のリッジの登攀は高度感もあり快適。

8月3日 晴れ

<源次郎I峰、中谷、成城大ルート>

B. C (4 : 15) ~取付 (5 : 15) ~開始 (5 : 50) ~中谷終了 (9 : 45)

～成城取付(10:40)～開始(10:55)～源次郎I峰(13:35)～I峰発(14:45)～B.C(16:15)

<中谷ルート>

1p目、IV+のフリーのはずだが難しくAOと成る。左のカンテを回り込み、さらに左へ登ってゆく。微妙な左トラバースの後ルンゼ状を直上し、大岩溝へ入る。大岩溝はフリーで級位。上部は浮き石が多く、気分が悪い。左のフェースへうつり少し登り、次は右のスラブを右上しブッシュ帯で終了。

<成城大ルート>

草付をホールドに使いながら1p登ると、フリクションの良好な硬い岩の快適な登攀が始まる、ボルトラダーのダイレクトルートに入らないように気をつけながら登る。高度感ば抜群、素晴らしいルートである。

(仙人池遠足)

参加者：森

B.C(5:30)～仙人池(7:14～8:10)～B.C(9:50)

写真で見たとおりの風景の中、一時間ボーとする。気持ちよかった。

(源治郎～クレオパトラニードル～etc.ピバーク)

B.C(4:30)～源治郎取付(5:08)～剣本峰(9:00～9:30)～クレオパトラニードル(11:00～11:30)～三ノ窓(12:45)～ジャンダラム三本クラック(15:35～16:05)～二股(17:55)

源治郎尾根、クレオパトラニードル、ジャンダラムを登り三ノ窓雪渓をくだって、二股でピバーク。

8/4 晴れ (ピバーク続き)

出発(5:15)～仙人池(6:08～8:05)～二股(8:55)～B.C(10:05)

仙人池に立ち寄って帰幕する。

(チンネ北新～hクラック)

参加者：蔭山、森、東條

B.C(4:00)～三ノ窓(6:50)～取付(7:10)～北新開始(7:30)～終了(9:15)～hクラック開始(9:45)～終了(12:00)～B.C(13:30)

下部北新は終始森トップでいく。3p目、少々手強く、AOの際、ピンが一つ岩の奥に隠れており苦しむ。上部hクラックオリジナルは、1p目のトラバースは容易。2p目、ラインがかなり曲がっているが、ピンがベタ打ちですぐに分かる。ピンが多すぎるのを除き好ピッチである。3p目、左稜線に飛び出て終了。

8/5 (下山)

B.C(9:00)～ハシゴ谷乗越(10:27)～内蔵助出合(13:15)～ダム(14:50)

夏山縦走合宿

夏山縦走合宿

槍～親不知

期間：8/7～8/17

参加者：栞尾(L,3)、森(2)、藤井(1)

8/7 晴れ 上高地発(7:40)～横尾(10:05)～槍沢ロッジ(11:55)～槍沢天場(12:35)

当初、渡辺(3)を含む四人で行くつもりだったが、渡辺が家庭の事情で不参加。

長い縦走の幕開けは、幸先よく好天に恵まれ、一般観光客でにぎわう上高地を出発した。ペースも快調だった。

8/8 晴れ 出発(4:40)～槍の肩(8:15)～大槍アツク(8:30～9:20)～槍の肩発(9:35)～双六小屋(13:00)

天場から槍の肩までダラダラとした登りが続く。快晴のもと、大槍アツク。登山客が多く順番待ちとなった。槍を後にし西鎌尾根に入り、双六小屋まで歩く。

8/9 晴れ後曇り 出発(4:40)～三俣蓮華(6:30)～鷺羽岳(8:25)～野口五郎小屋(12:30)～烏帽子小屋(14:50)

三俣から裏銀座コースをたどって烏帽子小屋までだが、これは結構遠く、やっとの思い出天場までたどり着く。

8/10 雨 沈殿

本日台風が日本に上陸。風雨強く、沈とする。

8/11 曇り時々雨 出発(4:40)～南沢岳(6:00)～船窪岳(2549m)(9:50)～船窪キャンプ場(11:35)

午前中、断続的に小雨が降ったが午後から回復。道は少々荒れているが、静かなムードのある山城である。

8/12 出発(4:55)～蓮華岳(8:45)～針ノ木岳(10:30)～赤沢岳(12:35)～鳴沢岳(13:10)～岩小屋沢岳(14:40)～種池小屋(15:46)

蓮華岳までは登山者も少なく寂しい程であるが、針ノ木からにわかに登山者が増えはじめ、人気の高い後立山の山城に入った

ことを感じさせる。

8/13 出発(4:30)～鹿島槍南峰(8:10)～北峰(8:40)～八峰キレット(9:50)～五竜岳(13:25)～五竜山荘(13:55)

順番待ちや通過待ちなどでペースは上がらない。五竜の登りで皆疲れ果ててしまう。

8/14 出発(4:20)～唐松岳(6:30)～鎌ヶ岳(7:10)～白馬頂上宿舎(12:35)

天場に着く頃には雨となった。相変わらず人が多い。

8/15 出発(4:40)～白馬岳(5:10)～雪倉岳(7:30)～朝日小屋(11:00)

早朝は全くガスで、結局白馬岳の姿を見ないまま、雪倉まで来る。途中で海が遠くに見え、一同感激する。雪倉周辺の景色は独特の雰囲気があり趣がある。

8/16 出発(4:15)～朝日岳(5:05)～犬ヶ岳(10:25)～拇海山荘(10:40)

出発時の曇天も、やがて青空に変わってゆき、日本海も時々顔を見せるようになってくる。あつと言う間に山荘到着。この小屋に泊まる。我々の他に2名宿泊者がいた。ここは水場が近くにないので注意。

8/17 出発(5:10)～白鳥山(8:10)～親不知海岸(12:05)

1Pと少し歩いて水を補給し、後はガンガン下る。やがて木々の間から黒い海が一瞬見えた。突然ペースは上がり「あつ」と思うと、国道脇にとび出した。

(記: 柄尾)

南アルプス甲斐駒ヶ岳

期間: 1990年8月11日～16日

メンバー：越智（OB），蔭山（4）

8月11日＜入山～サデの大岩右ルート＞

北沢峠（7：30）～仙水峠（8：40）～9：30）～南山稜のコル（10：40）～取付（12：30）～開始（13：00）～敗退決定（17：00）～取付岩小舎（18：00）

前日車で戸台口へ。仙水峠に荷物をデポして、サデの大岩へ向かう。谷へ降りる道は、初め踏み跡も明瞭で赤布もあるが、途中から判然とせず、適当に谷へ降りる。谷を下っていくと左岸の比較的ゆるやかな稜があり、砂地の斜面をトラバースして南山稜のコルへ（見晴らしはよくない）。そこより細い枯谷を下るが、結構長く、アザミやトゲのある木に悩まされる。合流点手前で左の沢へ移り、今度はひたすら上る。最後右が滝となり、そのまま沢を左へ上り、途中より右の緩傾斜帯より取付へ。サデの大岩はさすがに大きい、雨のあとのせいもあってか濡れており、草付も多くてスツキリせず気分はよくない。

岩小舎付近より右ルートに取付く。1P：濡れているためすかさずA0～A1でハング気味のフェースよりスラブを右上してテラスへ。2P：草付フェースを直上後第1バンド。3P：きれいなスラブを快適なA1（ハングも容易）で第2バンドへ。4P：判然としない草付より右手の小ハング下。5P：そこより左上気味に上ってハング帯へ取付こうとするが、草付が先の台風で落とされたのか、ツルツルのスラブとなっており進めず、第2バンドまで敗退。左へトラバースしてYCCルートへ合流しようとする。しかしバンドとは名ばかりで、2PかけやっとのことでYCCルートのピ

レー点に達するが、その上はみるからにやらしそうなバンド状フェース（II級とは思えない）なので、YCCルートを懸垂で下る。ルート下部はピンもしっかりしており3Pで取付。その日は岩小舎でビバーク。岩小舎は快適。

8月12日＜入山～黒戸尾根7合目B、C＞

岩小舎（5：50）～仙水峠（9：00）～9：30）～甲斐駒（12：40）～B、C（14：30）

仙水峠まで戻ってデポ回収し、B、Cまで入山。やはり遠く長かった。

8月13日＜赤石沢Aフランケ赤蜘蛛～クロスライン＞

B、C（5：30）～8合目（6：00）～取付（8：05）～開始（8：30）～終了（15：00）～8合目（15：35）～B、C（16：00）

取付まで結局迷う。Aフランケの岩小舎手前で八丈沢へ降りる踏跡を左へ降りたが、途中ではっきりしなくなる。岩小舎まで行ってそのまま踏跡をたどるのが正解か（?）。1P：ボルトラダーでテラスへ。2P：大ジェードルは、非常に美しく手足のジャムが良く効き快適である。やや残置ピンが多すぎる。クラックの途中のレッジで切る40m。3P：そのうちクラックがなくなりA1、20mでハング下。4P：ハングを左から右上。5P：やさしいフェースだが気は抜けない。大テラスへ。

6P：凹角からスラブを少し行き、クロスライン下の新しいペツルのあるレッジで切る。7P：越智トップでクロスラインを行く。ガスの天候と昨日の夕立のせいでクラックが濡れ気味の為、緊張感が倍増される。

右上のクラックを行くとすぐオフウィズスとなる。しばらくプロテクションを取れず非常に怖い。半身をクラックに入れ、必死でずり上がる。オフウィズスの出口に浮き石のガバがあり、これをつかんで大きく息を付く。上部はジャムが良く効くがしんどい。クラックが切れたあと振り子で赤蜘蛛に合流。8 P：雨が降り出した為、スーパークラックとあきらめ、赤蜘蛛をそのまま行く。アブミビレー点のピーンが悪く、少し下でビレー。9 P；カンテを右でまわり込んで高度をかせぐ。景色がないのが残念。10 P～11 P：ブッシュ混じりに2 P行くと岩小舎であった。

8月14日 天気 雨 (沈殿)

雨が降り出し沈殿。

8月15日 天気 曇 後 晴 (南坊主岩南東壁 雲表ルート)

B. C (6 : 30) ~ 東綾の科尔 (9 : 00) ~ 開始 (9 : 15) ~ 終了 (13 : 55) ~ 懸垂終了 (14 : 40) ~ 黄蓮沢 (16 : 00) ~ 5合目 (17 : 15) ~ B. C (18 : 00)

甲斐駒はどこに行くにもアプローチが遠い。坊主岩へも5合目より黄蓮沢へ降り、しばらく遡って坊主岩に着くが、その手前右手のルンゼを上がって尾根に合流し明瞭な踏み跡を急登して東稜の科尔へ。5合目よりの下りは途中で踏み跡を見失い適当に下る。踏み跡ははっきりしない。1 P：今回最大の核心であった。ハング下が取り付きだが、そこより右のハング気味の大岩をトラバース気味に右上して一段上り、上り口の抜けそうなブッシュをつかんでやっこのことではい上がる。濡れているのでいちだんと悪い。そこから草付スラブをブッ

シュをつかんで左上。これもいやらしくようやくすっきりしたクラックに出る。全くすっきりしないピッチであった。2 P：1 P目と対照的に快適なクラック。3 P：緩傾斜。4 P：左トラバース。5 P：左コーナークラックに行く。濡れていて上部右トラバースがいやらしい。6 P：快適。ナイスピッチである。8～9 P：8 P手前のテラスより見た眺めは噂通り素晴らしく、美しいものだった。クラックは非常に快適。10 P：核心。傾斜はそれほどない。クラックをレイバック気味に登るが上に行くほどクラックが小さくなり、傾斜も増す。クラックを抜けると右上してビレー点。

8月16日 天気 快晴

B. C (5 : 30) ~ 甲斐駒 (10 : 40) ~ 北沢峠 (13 : 00)

(記 蔭山)

明星山P6南壁

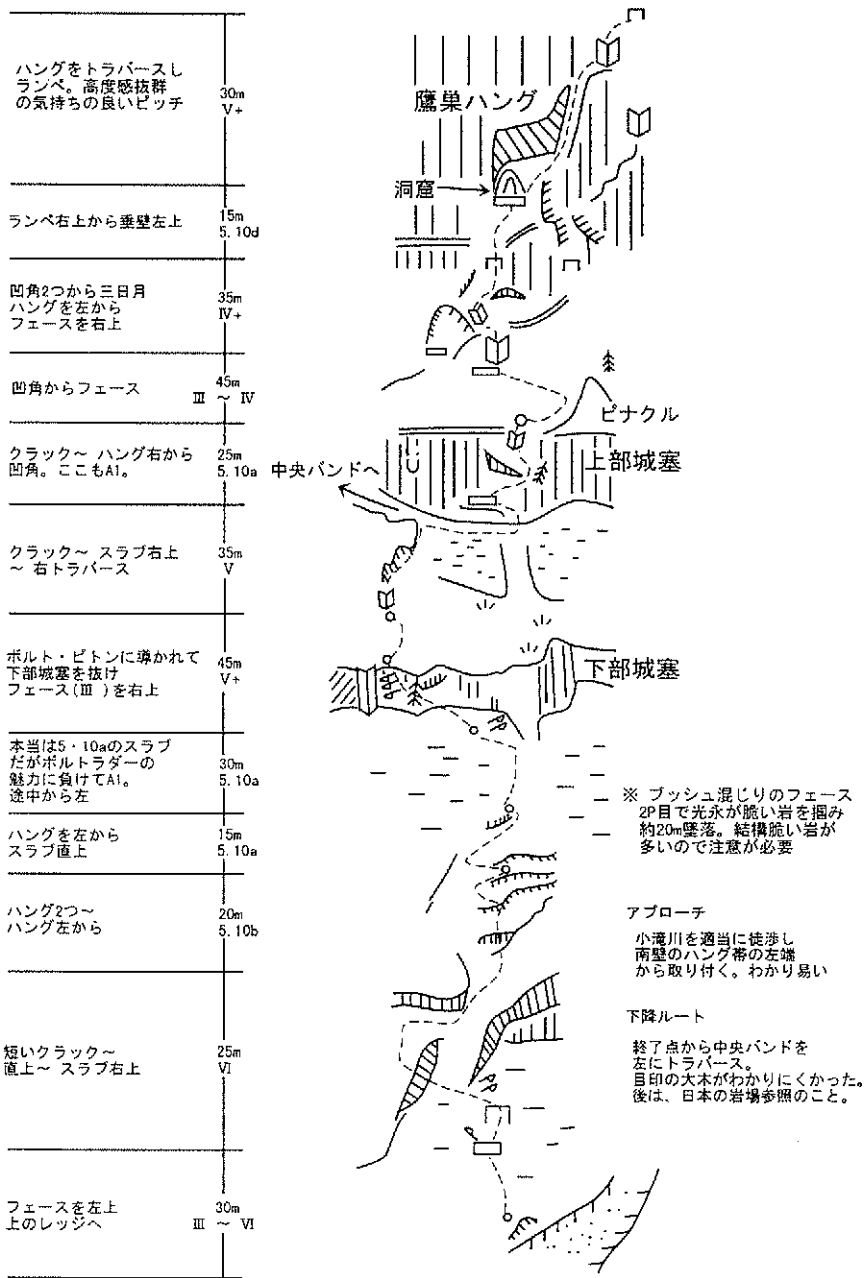
期間：8月25日～8月26日

参加者：越智(OB)、蔭山(4)

8月25日 天気 快晴

<マニフェスト>登攀(8 : 30～14 : 00) ~ 懸垂終了(15 : 40)

昨年の夏は雨のため上部城塞下で敗退。今回こそと意気込んだ。南壁取付まで駐車場より川原へ約10分と近く、ゲレンデ感覚である。砂ルンゼ途中より取付く。2 P目は快適に右上。3 P目が下部核心。何でもなさそうだが、実際は小ハングが3段ほ



明星山南壁 マニフェストルート

春山偵察合宿

ど続き、要パワー。セカンドでやっとのこと抜ける。最後のハングは左から回り込む。4 P目 ホールドが細かい。早めに左へ移ったほうが良い。5 P目 かぶり気味だがホールドが大きく問題ない。8 P目 上部城塞。見るからにもろそうだが、実際はそうでもなく好ピッチ。中間部、ボルトラインから離れて右より豪快に回り込む。ランナアウトとなり怖い。11 P目 核心。傾斜のあるスラブ。ホールドが細かい。特に上部、左奥へ伸ばす一手が遠い。12 P目 ハングの奥より天井部の右側を回り込んでハングを出る。多少、思いきりが要った。(ピンはあり)。終了点の白い木より懸垂下降。噂通り満足感のある素晴らしいルート。

8月26日 天気 快晴

<フリースピリッツ>登攀(9:00~13:50)~懸垂終了(16:00)

取付が判然としないが、とにかく草付を2 P大きく左トラバース。3 P目 快適。5 P目 ハング下のトラバース。高度感もあり素晴らしいピッチ。6 P目 右へトラバースして少し下る。非常に思い切りが要る。7 P目 快適。9 P目 ハングをわざわざ越す感じ。中央バンドよりの11 P目は判然としない。12 P目 カンテを越えるとピンがない。13 P目 左トラバース後、14 P目 核心。ピンもしっかりしており快適だった。終了後、もう1ピッチ。草付を大きく右へトラバースしてマニフェストの終了点の白い木へ。そこより懸垂下降。ライン取りの素晴らしいルートだった。特に下部の方が良く面白い。

偵察合宿

湯俣~雲ノ平~薬師沢小屋~太郎平小屋~折立

期間: 10月31日~11月4日

参加者: 栃尾 (CL)、渡辺

10月31日 天気 快晴

七倉山荘発(6:20)~晴嵐荘(10:05)~2050m(13:20)

晴嵐荘までは特に問題ない。尾根の登り出し、高度差80m位は急登。1644mのポコは両側は切れ落ちており、早めに北側から巻く。1730m~1850mは広いササの斜面で急登。

天場: 1860mのプラト一、1920m~1950mに多数

11月1日 天気 快晴

発(6:40)~湯俣岳(7:50)~南真砂岳(12:45)~2670m(14:15)

湯俣岳まで、はっきりしない尾根(樹林帯の中)を登る。ピークはブッシュが茂り展望無し。ここから樹林帯の中をコルまで下る。コルから50m程適当に登ると視界が開け、わかりやすい尾根となる。2409m手前は切れているがこれを過ぎれば南真砂岳まで容易。南真砂岳から尾根はますます広がる。

天場: 湯俣岳、2409m手前、南真砂岳手前のコル

11月2日 天気 快晴

発(6:10)~水晶小屋(11:30)~岩苔乗越(13:00)~祖父岳(15:

00) ~ 祖父岳下 2700m (15:30)

真砂岳手前 2680m 辺りから一部切れた岩稜となる。ハシゴあり。北側に雪庇。真砂岳は南側を巻いたが場合によってはピークを通った方がよい。

~ 東沢乗越

特に問題なし。2833m 以後、天場多数。

~ 水晶小屋

岩場だが、それほど悪くはないだろう。

北側を通過した。

~ 岩苔乗越

だだっぴろい稜線。天場多数。2841m からの下りは急。

~ 祖父岳

ルートも明瞭で問題なし。天場多数。

11月3日 天気 快晴

発(6:20) ~ 雲ノ平山荘(8:30)

~ 薬師沢小屋(15:15)

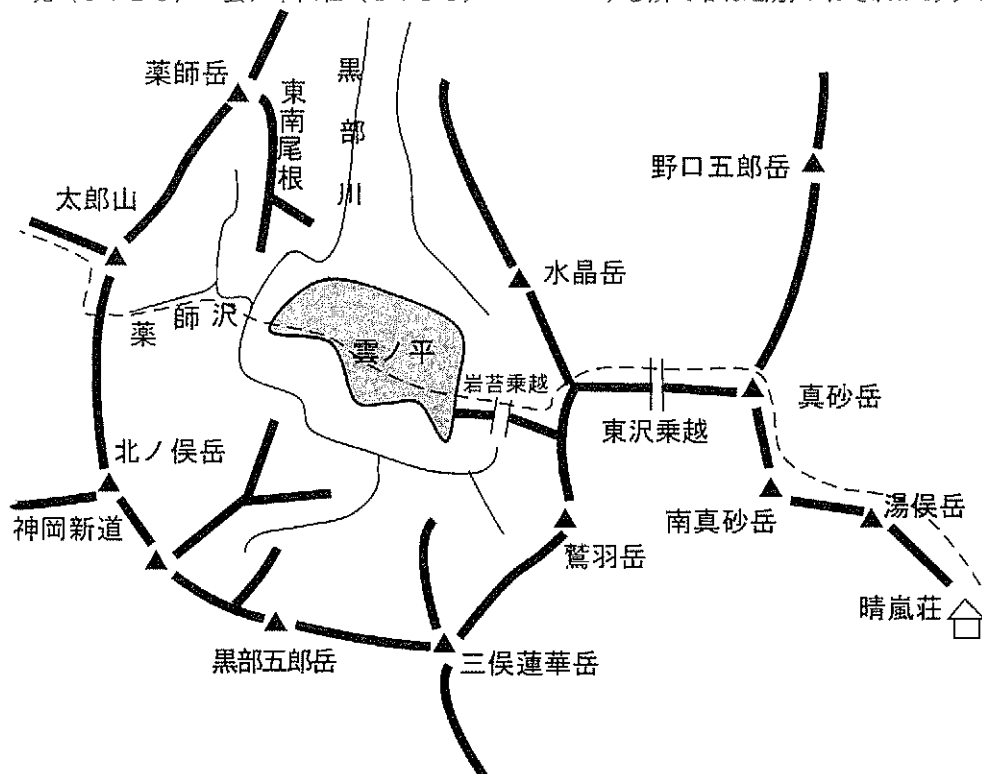
雲ノ平から薬師沢の下りは樹林帯の中なのでルートファインディング要注意。赤布を打ってきたが降り口手前と直後は難しいだろう。技術的に困難はない。この日は薬師沢小屋で快適に眠る。

11月4日 天気 曇一時雨

発(6:40) ~ 太郎平小屋(9:30)

~ 折立(12:00)

薬師岳東南尾根を登るつもりだったが、渡辺の体調が悪く下山することにする。東南尾根へは薬師沢を徒渉しなければならないが特に問題なさそうだった。尾根取付は7~8mの岩稜帯でその上は濃い樹林帯となっていた。敗退ルートは薬師沢沿いの夏道を通った。1カ所だけ急なルンゼをトラバースする所で春は雪崩のおそれがありそ



うだったが、他は全く問題なし。ただ下部樹林帯でのルートファインディングに注意を要する。

(記 栃尾)

冬山偵察山行

雄山東尾根～真砂尾根

期間：11月2日～11月6日

参加者：蔭山（L）、森

11月2日

11月2日に入山予定だったが藤井が熱のため、一但、扇沢へ入ったものの、大町へ引き返し、病院へ連れていく。その後、藤井を帰阪させ残り2人で偵察することにした。この日はカンパ橋手前の広場でドン。

11月3日 天気 快晴

B. C (6:10)～1750m J C (8:20)～黒部平 (8:50)～2068m (9:45)～B. C: 2430m (13:45)

カンパ橋を渡ったすぐの尾根より取付く。この尾根は右側はガレへ切れ落ちていた。ガレが過ぎていくと尾根は緩くなり、ブッシュをかき分け夏道へ出る。黒部平から2100m付近まで明瞭な道があり、快調なペース。2400mへの登りは急登のブッシュ、そこを越すと尾根は開け、ブッシュも薄くなる。

11月4日 天気 快晴

B. C (6:00)～2681m (7:45)～雷殿峰 (12:25)～雄山 (13:10)～大沢小屋 B. C (14:00)
天場から岩峰群を抜け2681mへ。(特

別問題なし)。そこからナイフリッジ。アイゼンを装着するが、依然、中途半端なクラストで、すね付近まで沈む。2790m下りの岩陵は左から巻き気味に下る。雷殿峰への登りはポコが3つあり、2つ目が強いて言えば急登でしんどかった。雷殿峰からは岩混じりの稜線で雪庇は右側。雄山で一服した後、真砂尾根を目指す。中途半端なクラストの為、体力消耗しており、大沢小屋の陰でテントをはる。

11月4日 天気 強風

B. C (6:00)～富士の折立を降りたコル (6:50)～雪洞掘り (11:00)～B. C: 真砂尾根 J C 付近 (13:00)

B. Cからは昨日のトレースらしきものがうっすらと残っている。岩峰はすべて室堂側を巻く。(折立の下り)。真砂岳への登りで突風が吹き始め、それが連続して吹くようになる。真砂岳を過ぎ真砂尾根に入ろうとするが稜線は広く、ガスのため判然としない。さらに風が強くなって前進困難となったのでピバグすることにする。いろいろ試みたが雪洞を掘ることにした。雪洞の中、夕食を作っていると、ラジオで、さらに悪天となると言っていたのを聞き、急いで飯を食べ雪洞を出て、うっすら見えた真砂尾根上にテントを張った。小ケルンが真砂尾根上にあった。

11月5日 天気 ガスのち晴

B. C (13:25)～内蔵助山荘 (13:30)～2400m B. C (17:00)

朝から視界がなく沈黙していたが昼近くラジオで、下界は晴れ、9:10の天気図より、天気は回復していると見て、出発

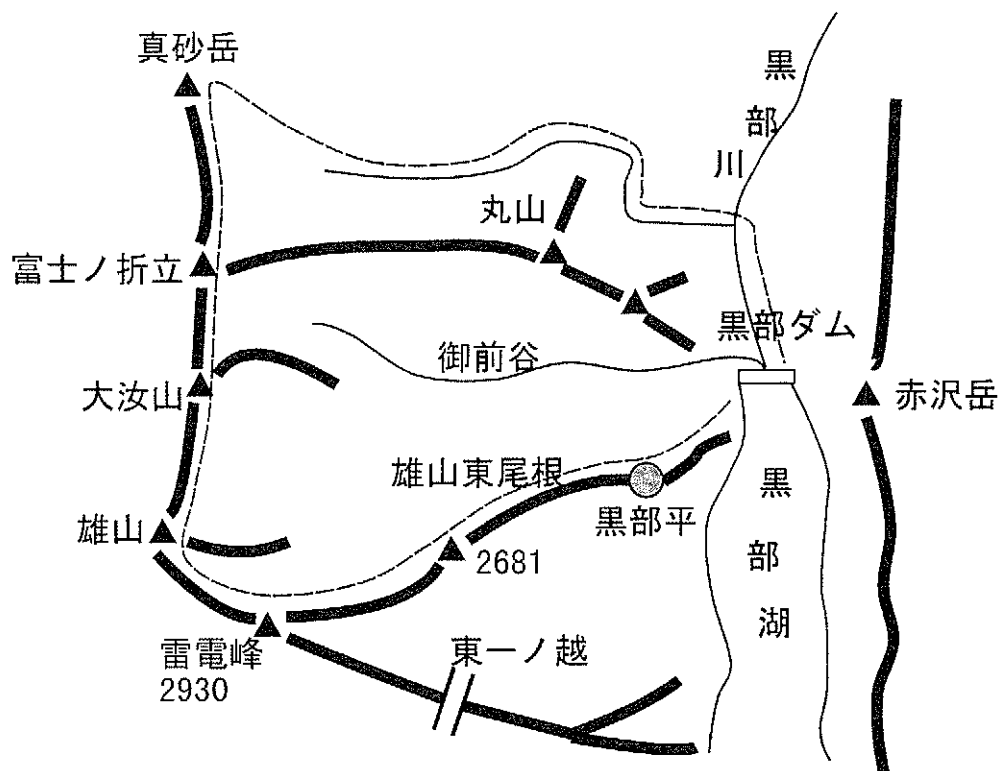
する。真砂尾根は思っていたほど容易ではなく、途中、急なルンゼを下ったり、岩混じりのところを下ったりする。依然、足は膝程まで沈む所多し。2500m近で登り5mザイルを出す。右側は完全に切れていて、カンテを登る。その後はハイマツ混じりの岩峰を下ること2回。カモシカ尾根のJ C付近でドン。カモシカ尾根の降り口を確認。大きなシラカバからルンゼに入り、岩峰を右より巻き気味に下りて、カモシカ尾根に入る。

11月6日 天気 晴

B. C (6:00) ~ 内蔵助平 (10:20) ~ 内蔵助谷出合 (12:20) ~ ダム (13:55)

昨日確認した降り口を降りる。ここへ来て初めてアイゼンの効く楽な下りとなる。途中、尾根は2つの分岐がある。いずれも右側に入る。3Pでカモシカ尾根を下り、まだ雪のない内蔵助平へ下りる。沢浴いに進み、夏道に出た。

全体として、ハードであったが天気の問題にラジオ放送が大いに役にたった。雪洞脱出（雪洞はもろ北西に入り口があり、しかも縦穴だったので、あのままでは雪で埋まっていた。）、テントの撤収（11月5日）（好天を逃さない。）など、天気図だけでは判断は難しかっただろう。なお、11月4日の悪天は台風なみの低気圧の通過による。



雄山東尾根周辺概念図

アイゼン合宿

アイゼン合宿 御岳

参加者：蔭山（CL）、栃尾（SL）、森、藤井

11月23日 天気 曇のち雪

八海山荘（6：50）～田ノ原（8：30～9：00）～王滝頂上（12：10）～二ノ池B、C（13：10）

スキー場はあまり距離がなく、2P強で田ノ原に着く。8合目付近からガスが出てくる。王滝頂上からは長いトラバース。

11月24日 天気 快晴

B、C（6：05）～設営（6：24～6：35）～雪訓（7：05～14：50）～B、C（15：00）

二ノ池を一周した後、設営訓練。その後アタック装備で二ノ池の斜面で雪訓する。アイゼン1、2時間、キックステップ0、8時間、滑落停止、スタンディングアックスピレイ、フィックス工作の練習をする。

11月25日 天気 快晴

B、C（6：35）～剣ヶ峰（7：20）～飛驒頂上（11：15）～B、C（13：15）

お鉢巡りをする。重荷でアイゼンの登降をした後、剣ヶ峰へ。ここで設営。その後、一ノ池を回り、飛驒頂上へ。

11月26日 天気 曇のち雪

B、C（6：03）～王滝頂上（7：10）～田ノ原（8：50）～八海山荘（10：00）

天気がこれから悪くなるようなので、急いで下山する。剣ヶ峰からの王滝まではコ

ンパス頼りに下るが、2回程、進路修正をする。後は問題なし。

雪上訓練としてはまあまあの成果ある合宿だった。ただ、フィックス工作の練習をもう少しやった方が良かったかもしれない。

剣岳、小窓尾根（関西学生山岳連盟隊）

期間 11月28日～12月7日

参加者：

高田（CL、医療：関西学院大学体育会山岳部5回生）

朝日（SL、装備：関西学院大学体育会山岳部4回生）

蔭山（食糧：大阪大学体育会山岳部4回生）
西川（気象：立命館大学体育会山岳部3回生）

11月28日

離阪

甲南大学の西浜君、阿部君をはじめ、各大学のたくさんのOB、後輩達に見送られて、23：23の急行「きたぐに」に乗り大阪を離れる。

11月29日～11月30日

台風28号が日本へ上陸する進路を取っている為、通過するまで馬場島にて待機する。また、上市駅に下りた途端、冬山第1号としてテレビ局、新聞社などの取材攻勢にあって戸惑う。

12月1日 天気 曇のち雨

馬場島出発（6：30）～取入口（7：30）～池ノ谷出合100m下流（9：50）～小窓尾根取（10：30）～1600m（12：00）～1900m付近TS（14：20）

馬場島を出発する時、一昨日の報道陣に、

またもや歩き出すところを撮られながら小窓尾根を目指す。ブナクラ谷出合を過ぎて水力取入口の手前と、その直後で冷たい冷たい徒渉を二人一組になってする。それから、河原通しで行こうとするが、連日の雨の為に増水しており、赤谷尾根の支陵を高巻いて池ノ谷出合手前に降り立つ。雷岩から左岸へ山岳警備隊によって、丸太とワイヤーが掛けられていて楽に取付くことができた。

小窓尾根の取り付きは全く雪がなく、1600mまで単なる夏道の急登を登る。1600mも雪はなく、右へ降りる池ノ谷への道を横目に見ながら雨の中、ブッシュの中に分けいる。しぶといブッシュ漕ぎを雨に濡れながら繰り返し、1900mのピーク上に幕営する。

12月2日 天気 曇

出発(7:13)～2260mピーク下のコル(8:10)～ニードル(9:40)～ドームの頭(10:20)

朝、起きると昨夜降ったらしく、テントの周りほうっすらと雪化粧している。少し寒い中、歩き出す。ブッシュの中を進み、2260mピーク手前のコルにてアイゼン、ピッケル、ヘルメットを装着する。2260mピークへはコルから少し池ノ谷側を巻き、それから左斜上してからほぼ稜線通しに登る。ピークへ出るとニードル・ドームが眼前に見える。そしてニードルへ至る細い岩陵の前のコルでゼルブストを付ける。最初3m程のフィックスロープのあるフェースを登り、その後細い岩陵(両側はスッパリと切れ落ちている)を渡ってから、また少し岩陵を登るとニードルの基部に着く。ニードルはフィックスロープ沿いに5m程

トラバースした後、池ノ谷側へクライムダウンし、バンドを回り込んでからドームと間のコルへ稜線通し(やや白萩川側)で下る。ドームの登りも雪の状態が良く、少し池ノ谷側に寄って取り付いてから登る。ドームに着くとマッチ箱のピークが威風堂々とそそり立ち、見るからにシビアそうに緊張する。ペースがいいのでこのまま三ノ窓へ行くことも考えたが、天気が下り坂でガスってきており、また三ノ窓までテントサイトがないということもあって、早いがドームで幕営する。幕営後しばらくすると予想通りホワイトアウトする。

12月3日 天気 雪

沈澱

一日中ホワイトアウトで沈澱。一時的な冬型で気温も下がり冷え込む。積雪約50cm

12月4日 天気 雪

出発(7:15)～ピラミッドピーク(8:15)～マッチ箱ピーク(9:30)～小窓の頭(10:25)～三ノ窓(12:20)

ドームを出発、三ノ窓を目指す。昨日の積雪で厭らしく雪が付いており、マッチ箱1段目(ピラミッドピーク)の登り、特に上部のスラブ帯の登りが苦しい。下を見ると池ノ谷に一気に落ちていて緊張させられる。2段目の登りで西川トップにてザイルをフィックスし、そのあと細い稜線をしぼらく行ってから、5m程白萩川側へクライムダウンし、三段目は白萩川側の急なルンゼを登る。その後、池ノ谷側の急な雪面を登ってマッチ箱のピークに着く。小窓の頭手前で、ほっと一息入れる。天候はやや回復しているようで標高の低い所は晴れてい

るようだが、我々のいる所はやはりガスっている。小窓の頭より、小ピークと急なピークをダブルアックスで稜線通しで登り切って、少し下り、小窓の王へ。小窓の王からの下りは途中までノーザイルで行き、1ピッチ西川トップにてフィックスし、少し登り返して三ノ窓に到着。早速、デボ缶をジャンダルムに探しに行くと、氷と雪にまみれたデボを発見しほっとする。その日は冬の三ノ窓とは思えないほど、風の少ない日であった。尚、テントサイトはチンネ・ジャンダルムの基部の雪面を削って設けた。

12月5日 天気 雪

出発(7:03)～池ノ谷乗越(7:35)～長次郎のコル(11:40)～本峰(12:19)～早月尾根分岐にて幕営(13:35)

今日は本峰目指して出発する。池ノ谷ガリーはほとんどクラストしていたが、部分的に膝位まで埋まるような状態であった。池ノ谷乗り越しに着いて主稜線に取付くが、雪の付き方がいやらしい。池ノ谷尾根の頭を過ぎた辺りで、蔭山・朝日にてザイルを2ピッチ、フィックスし長次郎の頭へは、長次郎谷側を巻いて登り返し、頭から1ピッチ、フィックスした後、懸垂下降して長次郎のコルに降り立つ。コルからは雪崩のような急登で頭上を越えるラッセルをしばらくして、待望の冬の剣岳のピークに立つ。早月の下りにかかるが、ガスっていて別山尾根との分岐の下から分ならず、小1時間程探した後、分岐の道標まで登り返しここで幕営する。

12月6日 天気 ガスのち快晴

出発(6:33)～2600mピーク(9:38)～早月小屋(10:33～11:4

0)～松尾奥の平(13:15)～馬場島下山(13:54)

今日も出発時にはガスに包まれている。前日偵察して目安をつけていた池ノ谷側のルンゼを下る。獅子頭まで行き、獅子頭の登りは朝日トップでフィックスするが、雪の状態が悪く、非常に不安定である。そこから、ガスの中、早月尾根が分からず捜す。西川が見つけたしっかりとした稜線が正解で、下るにしたがって入山6日目にしてガスが晴れ、初めて視界がきく。2600mまで慎重に下って休憩し、そこから早月小屋まで行き、大休止(1時間)して、自分達の登ってきたところを眺めながらレーションをほおぼる。快晴の空の下、雪の少ない早月尾根を馬場島まで下り、全員無事下山を喜び合う。

12月7日

帰洛及び帰阪

急行「きたぐに」にて西川は京都へ。高田・蔭山・朝日は大阪へ。

冬山山行

冬山合宿 雄山東尾根

期間：12月25日～12月29日

参加者：蔭山(L)、栃尾、森

12月25日 天気 晴のち曇時々雪

ゲート(6:25)～扇沢(8:30)～黒部ダム(10:10)～取付(11:25)～1800m(16:00)

偵察通り、橋を渡ってすぐの尾根より取付く。始めからダブルのラッセル。やはり3人ではすぐに自分の順となりきびしい。終始、平均腿、時に腰、傾斜のきつい所は

頭上のラッセルとなる。途中で栃尾に天気図を任せ、黒部平駅のある丘の下にテントを張る。雪量自体はさほどでもないが新雪が深い。

12月26日 天気 曇時々雪

T. S (6:30) ~ 2068m (10:00) ~ 2350m T. S (14:00)

2400mまでと意気込むが相変わらずのラッセルに終始する。2350mより一段とラッセルは深く腰までとなり、2400mはフカフカの新雪の壁のようである。時間的に無理であると判断し、2350mまでとする。

12月27日 天気 雪

沈澱

冬型の気圧配置となり沈澱。前夜より降雪の為、2~3時間おきに交代でテントラッセルに出る。この日の日中も同じくテントラッセルを続け、夜に入り深夜23:00頃、栃尾がテントラッセル中、エンピを稜線より落とす。傾斜が急だった為、すぐさまザイルを出して捜索したが発見できず、とりあえず全員でテントラッセルを大きくひろげてテントへ入る。

12月28日 天気 曇

T. S (8:20) ~ 黒部ダム (12:10)

早朝、再びエンピを捜したが見つからず、今後エンピなしで前進するのは危険が高いとのリーダーの判断で敗退下山を決定する。

12月29日 天気 曇

黒部ダム (9:30) ~ ゲート (13:50)

続々と入山してくる社会人パーティーとトンネルですれ違いながらゲートへ。

八ヶ岳 (横岳西壁)

期間: 1月12~1月14日

参加者: 蔭山(L)、栃尾、森、奥山(OB)

1月12日 天気 曇のち雪

美濃戸口 (16:30) ~ 赤岳鉱泉 (19:45)

朝10時に大阪を出発。高速道路を使って、5時間程で美濃戸口へ。赤岳鉱泉までヘッドン行動。

1月13日 天気 曇

<無名峰南陵敗退> 栃尾、森

B. C 発 (6:55) ~ 取り付き (8:15) ~ 下部岩壁 (11:00 ~ 13:30) ~ 上部岩壁敗退決定 (16:30) ~ B. C 着 (20:40)

石尊陵に取付くつもりが誤って無名峰南陵へ取付いてしまった。上部岩壁2P目がかぶったチムニーを越せず、敗退決定。登ってきたルートを下降する。上部、下部岩壁でダブル計4Pの懸垂。敗退判断が遅すぎた為、帰幕が大変遅くなり、迷惑をかけたしまった。

<中山尾根> 蔭山、奥山

B. C 発 (6:55) ~ 中山乗り越し (7:25) ~ 取り付き (8:30) ~ 開始 (10:00) ~ 終了 (13:00) ~ 行者小屋 (14:15) ~ B. C 着 (15:10)

取付きまでトップでラッセルをしていたが途中1パーティーに抜かれた為、取付きで時間待ちとなる。しかし我々のあと数パーティーが同じく待機中であった。下部岩壁2P目 出だしがスラブ岩でホールドが細かい。上部岩壁1P目A0しまくり、必死にはい上がる。大変、苦しむ。

1月14日 天気 快晴

B. C発(8:50)～ジョウゴ沢F1(9:10～10:10)～F2(10:20～10:50)～BC(11:30～14:00)～赤岳山荘(15:30)

F1は5m程の滝で気軽に取付ける。1時間程アイスクライミング入門の後、F2 15mの滝を蔭山がリードする。F2を懸垂下降し帰幕。昼食をとって下山。

春山合宿

春山合宿 湯俣～雲ノ平～薬師岳～神岡新道

期間：3/10～3/17

参加者：柄尾(L. 3), 森(2), 紫藤(OB)

3/10 晴れ 七倉山荘(6:00)～晴嵐荘(13:25)

2ピッチほど除雪された林道を歩いた後、登山道へ入る。晴嵐荘手前でアイゼンの要るトラバースがワンポイント。高瀬川を徒渉して晴嵐荘へ。

3/11 曇り 発(6:00)～2150m(13:10)

昨夜から降雪。取り付きから樹林帯の急な登り80mのラッセルで苦勞する。1900m以上はルートが不明瞭だが赤旗が多く、これに頼った。

3/12 晴れ 発(6:20)～湯俣岳(7:55)～コル(8:30)～南真砂岳トラバース(13:00)～2670m(13:20)

1ピッチのラッセルで湯俣岳。広いピークだ。ここからコルまで樹林帯の中を駆け下

る。下りのラッセルは快適だ。コルから再び登りとなりペースは落ちる。南真砂岳の手前のピークへの登りはクラストしており、心配していた雪崩も起きそうになく安心。

3/13 晴れのち曇り 発(6:15)～真砂岳

トラバース(7:20)～水晶小屋(9:15)～祖父岳(12:00)～T. S(12:20)

アイゼンを着け出発。真砂岳直下のハシゴ場も難なく通過。真砂岳を大きく巻いて主稜線に出る。雪は適度に締まり快適。水晶小屋からの稜線はかなり風が強い。2841mのピーク手前でウイングクラストした急斜面をトラバース中、森が滑落。5m程滑り、止まった。手首にちょっとしたすりきずを負う。祖父岳を下り、雲ノ平へ少し入った所で泊。

3/14 雨 発(6:20)～雲ノ平(7:00)～薬師沢小屋(9:55)～東南尾根上2301m(12:10)ガスっているが、視界はさほど悪くないということで出発。雲ノ平はコンパスを見ながら進む。薬師沢小屋へは吊り橋よりも100m程上流の岸に降り立った。豊富な積雪のため、黒部川は楽に渡渉できた。薬師沢小屋で休んだ後、薬師岳東南尾根に取り付いた。それにしても長いアプローチだった。2300mまでラッセルし泊。

3/15 晴れ 発(6:10)～薬師岳(11:15)～太郎平小屋(13:15)

ラッセルも2650mのポコで終り、激しくクラストした登りとなる。しかし単調な尾根で何の問題もない。快晴の下薬師のピークに立つ。太郎の小屋の中でテントを張る。この小屋に富大のワンゲルがいた。

3/16 曇り 発 (6:15) ~ 神岡新道
分岐

(10:15) ~ 寺池山 (12:30) ~
1530m (14:45)

ガスがひどく、視界悪し。赤旗と微かなト
レースを頼りにルートファインディングに
苦勞しつつ下る。

3/17 雨 発 (9:00) ~ 下之本 (1
1:30)

曇天だが、昨夜のようなひどいガスは無く、
視界良好。雪まみれになりながら駆け下る。
あっという間に林道に出た。下之本でタク
シーを呼んでもらい、神岡鉄道の「神岡鉦
山前駅」まで。

(記 栃尾)

1991 年度活動記録

1991年度現役部員

C. L	栢尾豪人	(理・4)	[4]
S. L	森 政士	(理・4)	[3]
	川上和幸	(基・1)	[1]
	藤田哲史	(理・1)	[1]
	光永正樹	(理・1)	[1]
	前田 智	(文・1)	[1]
	寺田浩明	(基・1)	[1]

[]内は山岳部学年

新歓合宿

新人歓迎合宿 岳沢

期間：5/2～5/6

参加者：栃尾（CL、4） 森（SL、3）
川上（1） 紫藤（OB） 大倉（OB）

新人0かと危ぶまれた今回の新歓だが、
かろうじて1人の新人を迎えて行うことが
できた。期間も例年より短く、寂しい感も
あったが、新人川上は、初めて見る雪山に
えらく感動してくれたようである。

	5/2	3	4	5	6	
栃尾(4)	入 山 / 雪 訓	雪 訓 / 沈 殿	コ ブ 尾 根	西 穂 遠 足	雪 訓	下 山
森(3)						
川上(1)						
紫藤(OB)						
大倉(OB)						

5/2 曇 後 雪上高地（6：35）～
岳沢（9：50）

雪訓（11：30～12：00）～B. C
（12：25）

小雪のちらつく中入山。30分ピッチで行
ったので、川上もバテずに何の問題も無く
到達。その後、天場から岳沢へ下りる10
m程の斜面で雪訓。ふぶいてきたため、キッ
クステップを少しやって、切り上げた。

5/3 ガス

天気が芳しくないため、雪訓して沈殿する。

5/4 晴れ後雨 栃尾 森

〈コブ尾根〉B. C（4：45）～コブ基
部（10：10）～（12：00）～コブ
の頭（16：45）～天狗のコル（17：
50）～B. C（18：40）

取りつきは、夏道より手前の急なルンゼ。
新雪が定期的に雪崩ていやらしい。マイナ
ーピーク下りで5mザイルを出す。後ろの
パーティーは、雪きのこで懸垂をしていた。
そこから雪崩そうな広いルンゼを上がると
コブの基部。ここで2時間の順番待ち。1
P目は正規寄り、左に行くが、全体的に少
し外傾ぎみであった。後のピッチは問題な
く、3Pで上へ出た。コブからは懸垂20
m。そこからは4パーティーで交替でラッ
セル。1まわりもしないうちに頭に着いた。
下降は天狗沢。

〈徳本峠遠足〉川上 紫藤 大倉
B. C（5：00）～明神小屋（7：30）
～徳本峠（9：20）～（10：20）～
B. C（13：20）

B. Cから明神小屋までは下りと平坦な道
であった。明神小屋を過ぎたあたりから登
りが始まり、すぐに川上がバテ始めた。原
因は体力不足とトップの大倉の歩幅が大き
すぎたことではないか？（大倉の踏み跡を
川上がついて行くという形で登っていた。）
峠からの眺めは最高だった。途中少しトラ
バースをする部分があり、結構危険であっ
た。

5/5 晴れ 〈西穂高沢〉栃尾 森 川上
紫藤

B. C（7：40）～コル（12：20）
～（12：40）～B. C（13：40）
非常にゆっくりしたペースで登る。天気も
良く、遠足日和。西穂へ行く予定であつた
が、雪訓が充分でないため（アイゼン歩行）、

西穂ピークは断念。帰幕すると藤田OBが入山していた。

5/6 晴れ 下山 B、C (12:40) ~ 上高地 (13:50)

雪訓を少しした後下山。紫藤、藤田両氏は雪訓中、前穂遠足。 (記 森)

安曇川 奥ノ深谷

参加者：栃尾(L)、光永、藤田、大倉(OB)

取りつき (10:00) ~ 大橋小屋 (3:00) ~ 比良駅 (5:30)

グレードが二級ということで技術的困難はないはずであったが、藤田が滝の直登と高巻きで計二回転落した。幸い大した怪我でなく、最後まで頑張り通した。取りつきに行くまでバスの便がなくタクシーを利用した。そのため割高感があった。とはいえ、金糞峠からの眺めは抜群であった。

夏山定着合宿

夏山定着合宿 真砂

期間：7/20~7/29

参加者：栃尾 (C.L)、森 (S.L)、川上、光永、藤田、前田、寺田、紫藤 (O.B)

7/20 曇り後雨 室堂 (9:00) ~ 剣御前小屋 (14:20) ~ 剣沢 (15:40)

4年1名、3年1名、1年5名というケツのでかいような編成で臨んだ今回の定着だが、つくなり室堂は雨。暗い気持ちになって40kgのキスリングをかつぎ、苦しい一日が始まった。真砂まで行く予定だった

が、剣沢の天場にたどりつくのがやっとの1年諸氏であった。御前小屋付近では風雨が強く、小屋の中での休憩がとても有り難い。テントを張るにも風が強く苦勞した。足も腰も背中も全部痛い。一日目はこれでおしまい。

7/21 晴れ後曇り時々雨

剣沢 (9:00) ~ 真砂 (13:40)

今日でやっと苦しい入山が終わった。キスリングをかつぎながら何度山岳部に入ったことを後悔したかもしれない。一年諸氏はコロコロ転がりながらもなんとか真砂に到着。これで一安心だ。夕飯は大量に豚肉の入ったカレーだった。ゲップ。

7/22 雨 沈殿

朝からの雨で文句なしの沈殿。停滞食としてホットケーキがでた。シロップを無茶苦茶かけて食べた。それでも足りずにシロップをペロペロなめた。うーん美味。夕飯はマーボー春雨とマッシュポテトとハム。栃尾さんは“ごつま塩だっけ残るー”と妙な歌を歌って一人笑っていたけど、歌のセンスはともかく、当たらずと言えども遠からずだった。

7/23 真砂BC (7:30) ~ (12:10) ~ 真砂BC (12:50)

朝から雪訓だった。雪訓では、キックステップ、アイゼン歩行、滑落停止をやった。雪訓から帰って、そーめんを作って、冷たい雪溪の水で冷やして食べた。本当にこれはウマイ。3日間雨だったから、行動終了後、全員外で靴下からシュラフまで干していた。夕飯はシチューとハム。平和な一日だった。

7/24 雨 B、C (6:00) ~ 仙人池 (8:50) ~ (9:25) ~ B、C (1

2 : 05)

仙人池に遠足に行ったわけだが、眺望ゼロ。仙人池に映っていたのはガスだった。そそくさと仙人池を離れて帰途につく。今日、OBの紫藤さんが入山。キャベツを差し入れてもらったので千切りにして食べた。夕飯は豚汁、キャベツ、白玉だんご、ゼリーだった。満腹、満腹。

7/25 雨 B. C (5 : 30) ~平蔵沢 (7 : 30) ~ (9 : 40) ~B. C (10 : 15)

予定変更して、雪訓をした。それもこれも雨のせいだ。紫藤さんは雨具の下を履いてなくて、とても寒そうだった。ついに絶え切れず、途中で一人帰っていった。やはり少々金がかかっても装備を一通りそろえようと決意。さてこの日、森、藤田、光永の3名で、真砂小屋の手伝いに行った。報酬は打ち上げ用のジャックダニエル。それにしてもこの天気、どうにかならんのか。

7/26 曇り後雨

〈Bフェース〉川上、寺田、柄尾 B. C (5 : 00) ~取り付き (7 : 30)

取り付きと同時に雨が降りだしたために敗退決定。池ノ谷乗越遠足に変更となった。〈源治郎遠足〉藤田、光永、前田、森、紫藤

B. C (5 : 30) ~取り付き (6 : 30) ~I峰 (10 : 30) ~II峰懸垂地点 (11 : 50) ~懸垂終了 (12 : 40) ~本峰 (13 : 40) ~ (13 : 50) ~平蔵のコル (14 : 40) ~B. C (16 : 30)

取り付きを過ぎ、少し進んだところでザイルを出した。ちよつとした岩だが、雨で濡れているうえに、上部が少しいやらしい

とのこと。ザイルの準備中、後ろから来た人が、待たされるのが厭だと思ったのだろう、いきなり走って岩に取り付いた。上部で案の定足を滑らせ、一瞬宙ずりになったがパワーで強引に登った。あぶねー。II峰懸垂地点で懸垂したわけだが、ザイルを2本つなぎあわせ、40m程下降した。本峰で記念撮影をパチリ。ガスで何も見えなかったが気分は最高。藤田は「2mジャンプしたら3000mや。」とギャグのつもりか知らないが、ひとり笑っていた。そんな藤田に愛想笑いをしてやりながら、天候が更に崩れそうなので、さっさと降りた。下降路はクサリ、ハシゴなどがあり、結構いやらしい。テントでの紅茶が一段とおいしく思えて仕様がなかった。

7/27 曇り後雨〈剣前遠足〉寺田、藤田、紫藤 B. C (5 : 50) ~御前小屋 (8 : 50) ~B. C (10 : 40)

寺田を御前小屋まで見送りにいき、ついでに立山に行く予定だった。しかし、御前小屋で立山は中止と決定。途中、雷鳥を見た。真砂に早くつき、天気も良く、焼き飯や、プリンを作り、のんびりする。

〈Cフェース剣陵会〉前田、光永、森 B. C (5 : 20) ~取り付き (7 : 40) ~登攀開始 (7 : 55) ~終了 (12 : 30) ~5・6のコル (13 : 40) ~ (14 : 20) ~B. C (15 : 40)

取り付きに地藏さまがあるのには、正直ビビってしまった。昼前から降り出した雨のためRCC隊は敗退したが、剣陵隊はそのまま続行。頂きに立つと、天の情けか10分ほどガスが晴れて穂高周辺が見えた。そこでゆっくりレーションを食べて下降。最後に懸垂をして長次郎に降り、RCC隊

と合流して帰途につく。帰れば紫藤さんと藤田が紅茶と停滞食を作ってくれた。感謝。そしてバイトでもらった酒と紫藤さんの差し入れの酒を飲んで、おやすみなさい。

〈Cフェース〉 栃尾、川上 B. C (5 : 20) ~ 取りつき (7 : 40) ~ 登攀開始 (8 : 00) ~ 敗退決定 (12 : 00) ~ B. C (15 : 40)

雪溪の形が悪く、取り付きに意外と苦勞する。それを過ぎた後は非常に易しい岩登りであった。4 P 目まではほとんど階段を登るといった感じであったが、このころガスが突然出て、雨が降りだす。岩が濡れて、滑りやすくなったため、川上がおじけづいてしまい、易しい3+のルートだったが、雨がひどくなってきたため敗退決定。4 P 懸垂下降して、B. C に帰る。この敗退の原因は、天候よりも、むしろ普段の岩トレ不足による技術と体力のなさが原因ではないだろうか。

7 / 28 曇り後雨 真砂 (9 : 40) ~ はしご谷乗越 (12 : 00) ~ 事故発生 (16 : 40) ~ (17 : 10) ~ 黒部ダム (18 : 50)

1 ピッチ目からペースが上がらず、ついに事故発生直前の休憩で、「こりやまにあわんな」ということになったのだが、藤田が内蔵助出合付近で下降路をクライムダウン中転落。川原に落ち、すり傷と打撲ですんだのは不幸中の幸いだった。結局関電の人の車に乗せてもらい、駅まで行き、松本に到着。デポした藤田のキスリングを回収しに行くために、森さんが一人扇沢駅に残ったのは、まさに無念の一言だろう。

7 / 29 晴れ 黒部ダム (7 : 48) ~ 内蔵助出合 (8 : 35) ~ (9 : 35) ~

黒部ダム (11 : 00)

天気が良く、思わず昼寝してしまった。日電歩道へのつり橋は崩壊していた。

(記 光永)

夏山縦走合宿

夏山縦走合宿 中房温泉～槍が岳～雲の平～有峰口

参加者：川上、藤田、前田、光永、紫藤 (O.B)

期間：7 / 31 ~ 8 / 3

7 / 31 曇り 中房温泉～大天荘

入山。松本から中房温泉に生き、そこから歩く。さすが夏山、中房温泉には登山者が多くいた。燕山荘まで、ずっと登りである。1200mぐらいか、長く感じる。

8 / 1 ガス 大天荘～槍岳山荘

峰を歩く。面白い。槍のすぐ近くで渋滞に合う。おばさんが多い。寒い中、テントを急いで張る。しかし、人が来て、「ここは俺らの場所だ。」という。話を聞くと、先に天場の申し込みをして、それから番号札をもらい、そこに張るらしい。紫藤さんが急いで申し込みに行く。

8 / 2 曇り後晴れ 槍が岳～雲の平

雲の平付近はベチョベチョだ。色々な花があつて面白い。天場に着く。久しぶりに遠くまで見える。電気剃刀を使っているやつがいた。

8 / 3 雨後曇り 雲の平～有峰口

雲の平の道はすごく整備されている。薬師沢付近の道は水がたまっているところを石ずたいに進んだりして、おもしろい。太郎平小屋付近はとても平らである。ガスッ

ていたりして、突然小屋が見える。薬師は中止。そのまま下山と決定。すごい下りになった。大股でどンドン下る。有峰口に着くとすぐに富山行きのバスが来る。ラッキー。(記 藤田)

偵察合宿

偵察合宿 大日尾根～奥大日岳

期間：11/1～11/3

参加者：栃尾(C・L)、森(S・L)、川上、光永、寺田、藤田

例年ならばこの時期に冬山と春山の偵察を出すのであるが、メンバー構成の関係で1パーティしか出さなかった。天気よし、雪なしの状態だったため、本番での状態には程遠かったが、終わってみれば楽しいブッシュ山行であった。

11/1 曇り 発(6:57)～取りつき(10:10)～1600m(16:00)

取りつきは、わりと急。1350付近までは細めの尾根。初めてのブッシュで一年諸氏はバテ気味であった。雪は全く無く、明日も雪が出そうに無いので水を節約して晩飯は雑炊のみ。天場1400m。

11/2 晴れ 発(6:05)～早乙女岳(12:30)～2160(15:10)

是非とも大日小屋へと意気こんで出発するが、やはりペースは上がらない。1900付近は左側がガレている。2150付近に池がたまたま見つかって一同歓喜する。天場は早乙女岳を越えた2100稜線上、2380付近。

11/3 晴れ 発(6:05)～大日岳(8:00)～奥大日(10:25)～室堂(13:40)

大日への登りは問題なし。大日からは夏道に出るが、2409のコルへの下りは雪が着くと嫌らしそうだ。後、奥大日直下の岩場ではfixの必要があるであろう(15m程度)。奥大日からの剣を見入ると、是非、積雪期にあの山に行きたいものとおもった。天気も良く快適な一日であった。

(記 森)

アイゼン合宿

アイゼン合宿 御嶽山

期間：11/22～11/25

参加者：栃尾(C・L)、森(S・L)、川上、寺田、藤田、光永、前田、紫藤(O・B)

11/22 晴れ 1ピッチ半スキー場をのぼる。リフトが動いていたが過去に事故があったそうで乗せてはもらえない。火口のすぐそばなので作った水は硫黄のにおいがする。森、寺田、光永でビバーク訓練に出かける。寒くてほとんど眠れない。

11/23 雪 テントを置いたままで雪上訓練に出かける。場所は池のそばの斜面である。吹きつける風で固くしまった雪が顔にあたり非常に痛い。テントに戻ると、1日遅れで入山してきた、栃尾さん、前田がいた。栃尾、川上、藤田でビバークにでる。王滝頂上の小屋の陰で張る。

11/24 雪 撤収する。剣ヶ峰でテント設営訓練、二の池をめぐったあと岸にテントを張る。前田、川上が雪上訓練にでて

いる間に晩飯を作る。

11/25 晴れ 雪上訓練の後下山する。
見晴らしがとても良い、スキー場では滑って転んだ。(記 寺田)

冬山合宿

冬山合宿 大日尾根～奥大日岳

期間：12/27～1/3

参加者：梶尾(C.L)、森(S.L)、川上、寺田、藤田、光永、前田、大倉(OB)

12/27 曇り時々雪 小又川出合
(7:10)～支尾根取り付き(10:30)～1450m(13:45)

相変わらず離阪は慌ただしかった。なんとか全員無事に急行きたぐにに乗り込み、富山地鉄を経て上市駅に到着。タクシーで小又川出合いまで向かうが、道路脇に積雪無く、これが本当に12月下旬なのかと疑うほどである。小又川出合から林道を歩き始め冬山が始まった。一ノ谷出合から一ノ谷の河原を上流へと向かう。途中で一ノ谷を渡渉し、コット谷を一ノ谷の中州へ入り早乙女岳へつき上げる尾根に取り付いた。湿雪でびしょびしょになりながらブッシュ帯を急登する。1450m辺りで狭いテント場を見つけドンする。

12/28 雪 出発(6:36)～早乙女岳(2050m)(14:10)

二つ玉低気圧の通過で降雪。視界も悪いが、ブッシュ帯なのでおまかいなしに突き進む。尾根はところどころ細くなっているが、特に問題となる場所も無くじわじわと高度を上げてゆき早乙女岳でテントを張る。

早乙女岳付近は広い平原状となっており、絶好の天場である。下山時のため高さ2m程の木に赤布を連打しておいた。

12/29 雪後ガス 出発(7:30)
～大日尾根上2195m(13:00)

昨日通過した二つ玉が大発達し冬型となった。今年一番の寒波の影響もあり、厳しい寒さと、激しい降雪に見舞われる。昨日濡れたテントやキスリングはバリバリに凍り撤収に時間を食う。出だしからチョウセンボッカである。2人が空荷でラッセルするが、時には胸まで没する積雪でペースは上がらない。山ノ神尾根とのジャンクションを通過して50m程登ったところで幕営。この日の行動で森が右手に凍傷を負う。

12/30 雪後ガス 出発(7:30)
～2390m(12:35)

寒い。オーバー手は凍りつき指先がしびれて感覚が無い。頭上の雪を両手で崩し、凍てついた足で踏み固めるという動作を延々と繰り返し2200～2350までの急登を終えた。ここから大日直下までは大きなアップダウンもない。直下で泊。

12/31 晴れ後曇り 出発(7:30)
～大日岳(8:00)～七福園B.C(10:45)

偵察隊発(11:15)～奥大日手前最低コル(11:45)～B.C(12:20)

夜明け前の薄暗がりの中大日岳はもう目と鼻の先にある。大日岳ピークに全員が集合する頃合いをみはからったように、ガスが晴れ太陽とのご対面。快晴となった。剣・立山・奥大日・毛勝三山などを眺めながら皆上機嫌である。「今日中に奥大日アタック」という楽観論も飛び出したが、11月の偵察ではここからが核心とおもわれたの

で、七福園までとし、ここにB. Cを設営した。偵察隊（栃尾、森）を出した結果、最低コルへの下りは要fix 20m。

92 1/1 ガス 沈殿

視界10m以下。一人1個ずつモチを食い正月気分を味わう。

1/2 晴れ後曇り 出発(6:45)～大日岳(8:00)～早乙女岳(10:00)～1400m(13:20)

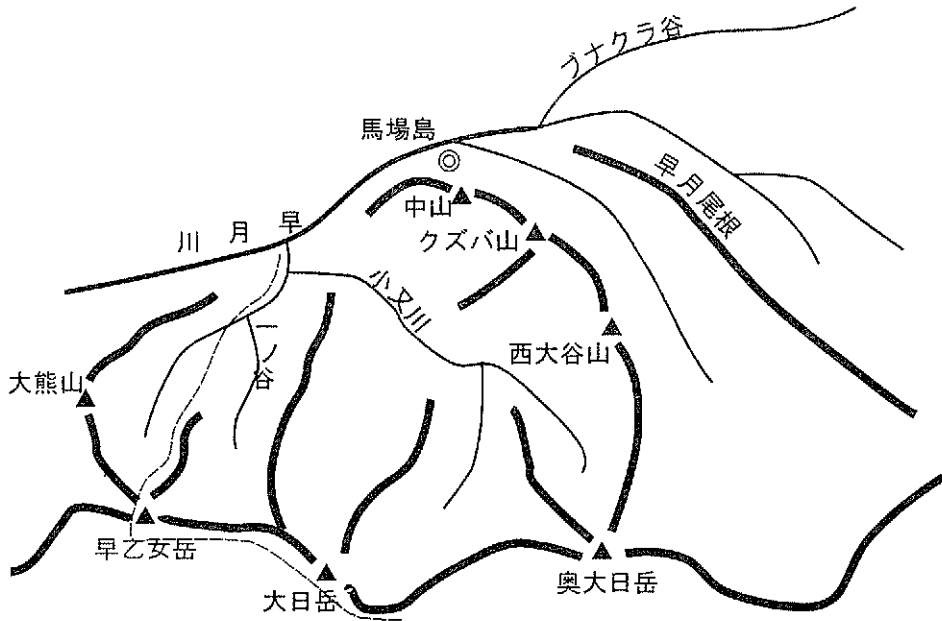
天気図から明日から再び冬型の気圧配置となる予測、天気は下り坂である。下山ルートにトレースが残っている見込みは全くなく、悪天ではルートファインディング等苦勞しそうなので、天候の崩れる前にでき

るだけ下ることにし、奥大日アタックは断念した。ラッセルは深いものの登りとは比較にならないほどのハイペースで早乙女岳まで下る。視界良く、来るときに登った支尾根もすぐにわかった。初日の天場をさらに下り幕営。

1/3 曇り時々雪 出発(7:00)～林道(9:20)～小又川出合(11:50)～伊折(13:55)

万有引力の法則に従い下へ下へとかけ下る。小又川出合から伊折までてくてく歩き、今年の冬が終わった。

(記 栃尾)



大日岳周辺概念図

春山合宿

春山合宿 白峰三山縦走

期間：4月1日～4月7日

参加者：森（C. L）、川上、寺田、光永、藤田、前田、栃尾（OB）

計画では、塩見岳まで行く予定であったが、八本歯及び、北岳～中白根岳間の稜線など、我々には手強く、偵察も行っていないことから、途中敗退した。原因として計画の甘さ、パーティの実力不足などが挙げられよう。とは言っても、1年生にとってはfix通過やアイゼン歩行などの良い練習となったと思う。自分としても明るい春山を堪能できた山行だった。

4月1日 天気 雨

夜叉神（9：30）～鷲ノ住山（11：50）～義盛新道入り口（13：40）～1800m（17：00）

タクシーは夜叉神の森まで。雪は全く無く、おまけに雨である。義盛新道1500m辺りから解け残りの氷が見え始める。ベースは遅く池山小屋まで行けず、1800m付近の斜面に幕営する。タクシーに相乗りしたおじさんから打ち上げ代、お菓子などを頂いた。どうも有り難うございました。

4月2日 天気 快晴

T. S（6：35）～池山小屋（8：00）～2800m（14：15）～八本歯偵察 B. C（14：30）～八本歯の科尔（16：50）～B. C（17：30）

夏道に氷が付いていやらしい。アイゼン

を着けて出発する。尾根に出ると踝ぐらいの積雪。砂払いに着くと北岳のバットレスが眼前に飛び込んできた。偵察には森と栃尾とで行く。八本歯の科尔までは細い稜線で、残置fixがあった。重荷で通過は厳しそうだったので、明日はアタック装備で北岳を目指すことにする。

4月3日 天気 快晴

B. C（6：00）～八本歯下降開始（7：40）～北岳（9：00～9：35）～北岳山荘方面偵察（10：30～10：50）～B. C（12：30）～（前進）～発（13：30）～2860m（14：20）

残置fix（トータル150m）を使って八本歯を通過する。科尔からは雪綾のち雪壁（30m）で主稜線へ。北岳はさらに落ちたらヤバイ30mの雪壁。稜線伝いのほうがまだ安心できた。（下降は稜線伝い。）北岳山荘へはfix 必要な両俣側のトラバース。この日、天場を八本歯手前の科尔に移す。そして塩見まで行くのは諦めて、白根三山～大門沢下山に変更する。

4月4日 天気 晴

B. C（5：15）～八本歯科尔（6：20）～J. C（7：20）～fix（7：40～10：40）～北岳山荘（11：40）

昨日のトレースが階段のようになって、J. Cまでは予想より楽に通過。J. Cから1年が多いためfixを森、栃尾で張りに行く。80m+45m+10mで終了。fixと言っても2人が空荷で各々ニケ所張るといった変則的なものであった。北岳山荘は、窓からの景色もよく、まるでリゾートペンションみたいで、おまけに不足していた甘味料が手に入り、（コンデン

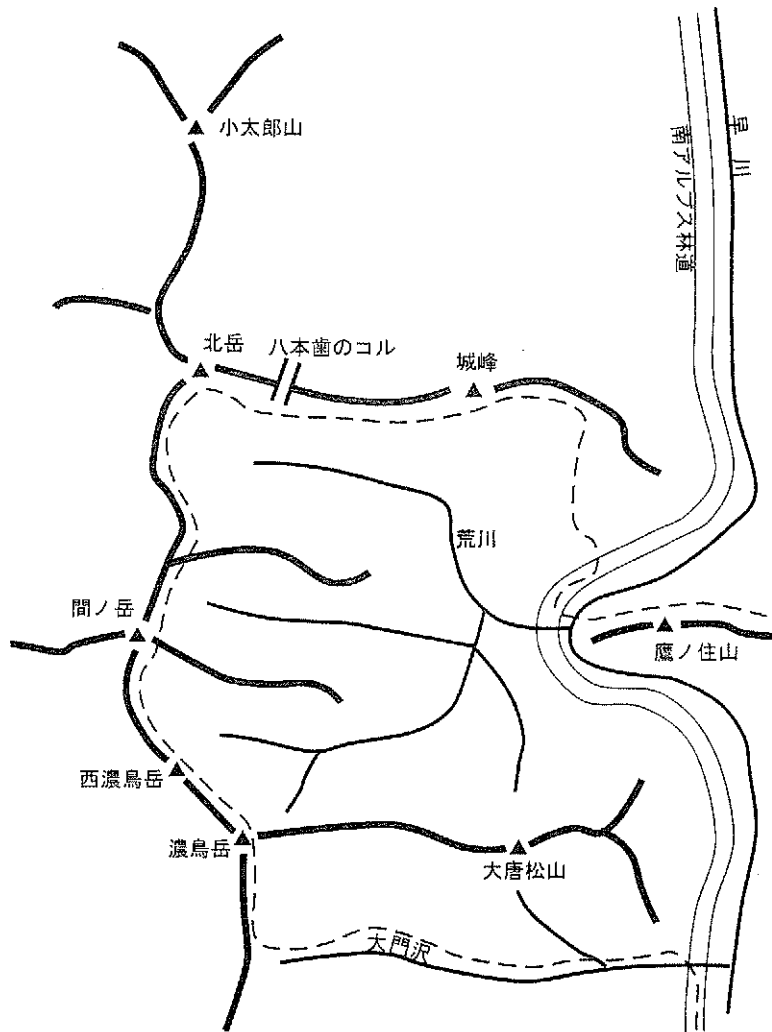
スミルクは砂糖のかわりにならず) 良い休
暇日になった。午後から天気がくずれだす。

4月5日 天気 雪

発 (5:55) ~ 間ノ岳 (10:45) ~
2948m (12:30)

昨日からの新雪で思わぬラッセルを強い
られる。中白根山を越えるあたりから視界

が悪くなる。そこからは細めの稜線。上級
生の二人でラッセルをした。間ノ岳から2
948まではあっさり行けたが、そこから
先、急なルンゼ状の所で進路がわからな
くなり2948まで引き返して幕営した。
雪質も悪く、複雑な地形だった。



北岳周辺概念図

4月6日 天気 快晴

発(5:35)～西農鳥(11:20)～
農鳥(15:10)～大門沢下降点(16:
15)

昨日思っていた進路とは90度違っていた。
西農鳥の登り2900からトラバースにf
ix 30m、稜線づたいにfix 40+2
0mで3000。技術的にはここが核心だ
った。西農鳥を越えてから三つ目のポコを
大きく右から巻くのにfix 40+40+
40m。天気も春山らしい一日だった。

4月7日 天気 快晴

発(6:15)～大門沢小屋(9:45)
～林道(11:50)～奈良田(13:1
0)

大門沢の出だしは急だが、雪質が良く無事
にすむ。700m程くだって、ようやく傾
斜が緩くなる。樹林帯に入るまでは結構気
をつかった。沢の出会をすぎるとのんびり
としたペースで大門沢小屋へ。そこからは
夏道通しに二時間歩くと林道。無事下山を
喜びながら奈良田へむかった。

1992 年度活動記録

1992年度現役部員

C. L	森 政士	(理・4)	[4]
	川上和幸	(基・2)	[2]
	藤田哲史	(理・2)	[2]
	光永正樹	(理・2)	[2]
	前田 智	(文・2)	[2]
	寺田浩明	(基・2)	[2]
	尾崎夏樹	(経・1)	[1]
	中西英夫	(法・2)	[1]
	溝西 慎	(理・1)	[1]
	川口泰宏	(理・2)	[1]
	飯田真宏	(理・1)	[1]
	青木 成一郎	(理・2)	[1]

[]内は山岳部学年

新歓合宿

新人歓迎合宿 涸沢

期間：5/1～5/5

参加者：森（C.L）、川上、寺田、前田、藤田、光永、紫藤(O.B)、栃尾(O.B)

5/1 ガス後晴れ 上高地（6：30）～横尾（9：10）～涸沢（12：50）

とうとう今回の合宿には誰一人として新人は参加しなかった。何とかして夏山までには新人を入れたいものだ。松本駅に着くと空には星が見えた。これはいいぞと思ったのだが上高地は雪+ガスで、思わず暗い気分になってしまった。全くいつになったらまともな入山が出来るのであろうか。上高地～横尾は運動靴で楽勝だった。横尾を過ぎると道はガレガレとなり、プラ靴をだす。雪で埋まった沢の上を歩くのだが、新雪を踏んで歩くのは登りとはいえ快適だった。しばらく登るとカールの底のほうに鯉のぼりが見えるがなかなか着かない。天場に着いてみるとブス板とスピンドルが無いことがわかり全員暗くなった。

5/2 快晴 B.C（5：00）～横尾～蝶ヶ岳～横尾（2：00） 川上、寺田

横尾まで一気に駆け降りた。新雪にアイゼンがよくきき心地よい。横尾は暖かく涸沢とはおちがいがいだ。すぐに蝶ヶ岳への登りにかかる。稜線直下で傾斜がきつい以外は楽勝の道である。頂上はものすごい風雪で一分ととどまらず下山し、しばらく横尾でゆっくりした後また涸沢へ登り返した。北穂遠足 前田、藤田、光永、紫藤(O.B)

入山 森、野口

5/3 快晴 B.C（5：00）～奥穂山荘～奥穂頂上（8：10）～B.C（12：00）

今日も朝3：00起床。昨日の蝶ヶ岳の疲れが残っているのか1ピッチ目から息があがってしまう。ザイテングレードは急なだけで何の問題もない。白出ノコルから奥穂への登りはなかなかの難所で鎖や鉄バシゴをつかって慎重に登る。15分ほどで平坦な稜線に出た。30分程で頂上に到着。ガスが出てはいたが、槍、ジャンダルムが見えた。しばらくすると吹雪始めたので、帰ることにしたが、山荘への急斜面はものすごい混雑で、なかなか下りられずムチャクチャ寒くなったので、ザイルを出して混雑している横をクライムダウンしようとしたが、何処からともなくおじさんが現れて張ったばかりのfixザイルを使ってさっさと下りてしまった。全くけしからん！と思わず腹が立った。このような渋滞を避けるためには、とにかく朝一番早くに出発することであろう。

北尾根遠足 寺田、紫藤(O.B)、野口(O.B)

B.C（5：00）～奥穂山荘（18：00）～B.C（20：00）

順番待ちの為非常に遅くなった。寺田はグロッキー状態であった。

入山 栃尾

5/4 ガスのち雪 雪訓 全員

ザイルを用いた急雪面の登攀、下降およびスタンディングアックスを中心に訓練した。

5/5 晴れ 下山

夏山定着合宿

夏山定着合宿 涸沢

期間：7/29～8/13

参加者：森（C. L）、川上、光永、前田、藤田、寺田、中西、青木、川口、飯田、河村、溝西、栃尾（O. B）、東條（O. B）、大倉（O. B）、戸叶（O. B）、森藤（O. B）、紫藤（O. B）

7/29 〈入山〉晴 上高地（6：00）～横尾（10：00） 森、川上、光永、藤田、飯田、溝西

今年の入山のキスリングの重さは45kgであった。昨年の50kgに比べたら軽いと思ったが、けっこうくるものがあった。この日は心配していた一年生のバテもなく、無事横尾につけた。夕食のジンギスカンは最高にうまかった。これからは食事が指数関数的に悪くなってゆくのであろうかとおもった。OB諸氏の差し入れに期待するところ大である。

7/30 〈入山〉晴のち曇
横尾（5：40）～涸沢（10：40）
森、川上、光永、藤田、飯田、溝西

今日はいよいよ涸沢の登りである。初めて通るこの道は思ったよりも岩が多く、しんどかった。涸沢の旗が見えてからが、本当に長かった。着いてテントをたてるとやっぱり頑張ったかいがあったと思った。

上高地～涸沢（時間の記録なし） 前田

7/31 晴のち曇 〈雪訓〉 五六のコール（6：30～10：10） 森、川上、光永、藤田、前田、飯田、溝西

雪が腐っていてアイゼンの練習はほとん

どできなかった。一年生は五六のコールの傾斜にさすがにビビっていたようだキックステップの下りでスリップする者を止めるのに必死になった。この日はさっさと切り上げて、天場でトランプに興じた一日となった。まだこれから11日もいるのかと思うと少し不安になった。

8/1 雨 沈殿

この日東條（O. B）と戸叶（O. B）が入山した。

8/2 晴のち曇 〈後発隊入山〉 寺田、川口、中西、青木、河村

上高地～横尾（時間の記録なし）

〈後発隊出迎え〉 川上（晴れ）

B. C（4：00）～上高地（8：00）～横尾（12：00）～B. C（14：00）

徳沢まで快適に下りる。もう上高地につきかたとうところに後発隊に会った。川口が丸坊主だったのでほんとうにおどろいた。河村がかなりバテぎみで10kg荷分けして、なんとか予定どおりに横尾に到着した。着いてテントを設営しているところへ東條（OB）が現れ、このとき藤田の事故の知らせをうけた。T4尾根の取りつきで墜落したらしい。どうやら捻挫らしいとゆうことで、この日は藤田を横尾に残してゆくことにした。

〈屏風岩東稜〉 藤田、東條（OB）

B. C（4：30）～取付（8：00）～藤田墜落～横尾（10：00）

取りつき付近につき、用意をして、さあいこうかと2～3m登ったとき、久しぶりでけっこう緊張していたせいもあって、ガバを強くつかんだときそれがはずれ、そのまま落ちた。幸いにも足首を捻挫しただけ

☆夏山定着行動概要

	7/29	30	31	8/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	
川上(2)	入山	雪訓	沈殿	出迎え 上高地	ドーム 中央稜	屏風 雲稜	ビバーク		雪訓	クラック 尾根	沈殿	北尾根	北穂 東稜	沈殿	下山		
光永(2)				四尾根 ツルム	ビバーク	遠足	北新	北穂 東稜		奥穂 遠足		瀬沢岳 遠足	ドーム 北壁				
前田(2)				北穂 東稜	屏風 雲稜	雪訓	北尾根	北壁 A フェース		ビバーク		屏風 東稜	北新	沈殿			
藤田(2)				北穂 東稜	歩荷		ドーム 遠足	ビバーク		屏風 東稜		北新	沈殿				
寺田(2)	入山	雪訓	沈殿	雪訓	雪訓	雪訓	雪訓	雪訓	雪訓	屏風 雲稜	北穂 東稜	ビバーク		下山			
中西(1)										クラック 尾根	沈殿	ビバーク					
青木(1)										北壁 A フェース		ビバーク			ドーム 北壁		
川口(1)										北穂 東稜	ビバーク		ドーム 北壁				
飯田(1)	入山	雪訓	沈殿	北穂 東稜	ドーム 中央稜	雪訓	雪訓	雪訓	雪訓	ビバーク		北尾根	沈殿	下山			
河村(1)	入山			ビバーク						北穂 東稜	沈殿	奥穂 遠足	瀬沢岳 遠足		沈殿		
溝西(1)	入山	雪訓	沈殿	北穂 東稜	ビバーク					遠足	ドーム 遠足	クラック 尾根	沈殿		奥穂 遠足	沈殿	
森(4) (C.L)	入山			北穂 東稜	歩荷					雪訓	遠足	北尾根	下山				
脇尾(OB)										入山	クラック 尾根	沈殿	屏風 東稜	北新	沈殿	下山	
東條(OB)				入山	北穂 東稜	ドーム 中央稜	屏風 雲稜	遠足	北新	下山							
大倉(OB)								入山	ドーム 遠足	屏風 雲稜	北穂 東稜	下山					
戸叶(OB)				入山	四尾根 ツルム	屏風 雲稜	下山										
森藤(OB)												入山	北穂 東稜	沈殿	下山		
紫藤(OB)									入山	雪訓	北壁 A フェース	沈殿	北尾根	下山			

であった。次から同じあやまちをしないようにしたい。

<東稜遠足> 森、前田、飯田、溝西
B. C (5:00) ~ 取りつき (6:35)
~ 北穂頂上 (10:15) ~ 涸沢岳 (13:08) ~ B. C (14:20)

快適な岩稜歩きで皆におすすめしたい。
<滝谷四尾根~ツルム正面壁>

曇のち曇

参加者：光永、戸叶 (OB)

B. C 発 (4:06) ~ 北穂高小屋 (6:20) ~ スノーコル (9:40) ~ ツルム
取りつき (11:10) ~ 四尾根の頭 (16:30) ~ B. C 着 (19:10)

きょうは戸叶OBと念願の滝谷である。C沢左股雪渓が所どころ切れて下り、とても状態が悪い。後続のパーティーはアイゼンを持ってないからということで、途中ドーム西壁に行った。結局懸垂を三回してスノーコルに達する。

1 P目 がらがらの岩稜

2 P目 リッジ

3 P目 高度感のあるリッジ

4 P目 簡単なリッジ ダブルで
懸垂し、ツルムの取り付きに到着

5 P目 フェース この頃から完全にガスに包まれ、岩がしつとりと濡れる。上部が難しくナッツあぶみを使う。

6 P目 スラブ 確保地点のすぐ上のハングをナッツあぶみで越そうとしたらぎしぎしと不気味にハングが開いて行くのにはビビった。ハングを越すと上部はリスが全くないスラブで10数mランアウトしようやくキャメロットを決めることが出来た。薄刃のハーケンが絶対に必要だ。10mザイルを伸ばしたが、残置ハーケン

は一本もなかった。

7 P目 フェース 確保地点のすぐ上に残置ハーケンがあり、ルートが間違っていないことを確認する。

8 P目 カンテ 時間的に余裕がなかったのでカンテのルートに登る。上部が面白い。シングルで懸垂し四尾根に戻る。

9 P目 フェースからチムニー
チムニーではザックをおろし荷揚げした。

10 P目 フェース ルートファ
インディングが悪くキャロットあぶみを使用。

四尾根の頭でザイルを解いた。この登攀は登攀自体は成功だったが、ザイルワーク、ランニング、装備の面で戸叶OBに大変気苦労をさせたと思う。次回からは少しでも向上した所を見せることで恩返しをしたい。

8/3 曇のち雨 <歩荷> 森、藤田
横尾 (4:20) ~ 涸沢 (5:40)

<後登隊入山> 寺田、川口、中西、青木、
河村

横尾 (6:20) ~ 涸沢 (12:00)

<屏風岩雲稜ルート> 前田、戸叶 (O.
B)

取りつき (9:30) ~ 終了点 (14:
40)

<天狗原ビバーク> 光永、溝西

B. C (5:46) ~ 北穂高小屋 (8:00) ~ 南岳避難小屋 (11:44) ~ 南岳
(12:03) ~ 天狗原 (14:10)

天狗原は風が防げて水もある絶好のビバーク地である。ただし幕営禁止なので人目は避けるようにしよう。

<ドーム中央稜> ガス 川上 飯田 東
條 (OB) 取りつき (9:10) ~ 登

攀終了（14：00）

滝谷の岩のもろさは想像をはるかにこえていた。とにかく安定した岩などは、存在しないのである。慎重に取りつきまで下る。1ピッチ目は終了点間際の部分にあるチョックストーンの乗り越しが核心であるが、チムニーの幅が予想以上に狭くてこずる。2P目は、びっくりするほどすっきりとしたカンテの登攀である。左面はフリー、右面は人工ルートらしくボルトが連打してある。左面を登ったが、結構ホールドがこまかくて緊張した登攀がたのしめた。3P、4Pはなんのへんてつもない凹角で、簡単に登れた。

8/4 曇 <天狗原ビバーク> 光永、溝西

C. S（6：00）～横尾（9：10）～B. C（12：00）

<雪訓> 森、前田、飯田、後発隊

B. C（5：40）～6：30開始～11：50終了～B. C（12：30）

<屏風岩東壁雲稜> 快晴 川上 東條（OB） B. C（4：30）～取り付き（6：20）（14：30）

取り付きの道は踏み跡が見えるか見えないかのブッシュ同然の道であった。T4尾根の登攀はやさしい。1P目VI+、2P目Vである。東壁雲稜の1P目はVのノーマルな凹角であり、2P目は上部がハンギングみの凹角である。強引にA0で突破する。このピッチで東條さんの肩が抜け敗退を考えるが結局のぼることにする。3P目はIVのトラバースでいやらしい。扇岩テラスよりの人工ルートが4P目であるがスッキリとした垂壁に一直線にボルトが打たれてお

り、爽快なピッチであった。ただしボルトはかなり古くリングが残っているものは数本しかなかった。6P目はVのトラバースで、ホールドのフレイクがはがれやすいやらしい。7P目は左上の凹角でピンは多い。8・9P目はII級のルートで全くやさしいのだが、腕のパワーがなくなりてこずってしまう。屏風の頭から眺める常念は最高であった。

8/5 晴 <屏風の頭遠足> 光永、前田、飯田、青木、中西、川口

B. C（6：00）～屏風の頭（10：10）～B. C（12：10）

のんびりとした良い遠足だった。

<屏風の頭遠足> 藤田、東條（OB）

B. C（8：50）～（10：00）着～B. C（12：00）

<ビバーク> 川上、河村

B. C（6：30）～奥又白谷（14：30）

猿の群れに遭遇してしまった。夕方から雨が降り始めてみじめな思いをした。

8/6 曇 <前穂四峰正面北条新村ルート> 光永、東條（OB）

B. C（4：40）～取り付き（8：00）～終了点（11：30）～B. C（14：20）

1P目は草付きのフェース。四峰全体がガスっていて、取りつきが良く分からなかった。少し迷ったが、ハーケンをうちこんで登り始めた。2P目はガラ場、3P目は草付きのフェース。4P目はテクニカルなフェースでおもしろい。5P目が核心で、ハンギングをA1で越してからトラバースして直上。このあたりはかなりの高度感だ。6P目は高度感のあるフェース。結局、何の

問題もなく終了した。ルート全体としては、ホールドがしっかりしていて小気味がよかった。とても良い印象を残す登攀だった。

ビバーク続き 川上、河村

<奥又白> (7:10) ~ B. C (11:30)

パノラマ新道の雪渓がすべりやすく危険であった以外はなにも問題なし。

<前穂北尾根> 森、寺田、前田、中西、青木

B. C (5:00) ~ 5・6の科尔 (6:15) ~ 三峰 (8:30) ~ 前穂頂上 (11:00) ~ 白出の科尔 (12:30) ~ B. C (18:10)

8/7 晴 <雪訓> 川上、藤田、光永、前田、青木、溝西、中西、河村、川口、紫藤 (OB)

B. C (6:00) ~ 終了 (10:30)

<下山> 森、東條 (O. B)

B. C (6:30) ~ 横尾 (7:30) ~ 上高地 (10:30)

8/8 晴のち雨 <北穂東稜> 光永、寺田、川口、河村、大倉 (OB)

B. C (5:30) ~ 東穂最低科尔 (7:30) ~ 北穂小屋 (10:30) ~ B. C (12:00)

久しぶりの快晴でとても気分がよい。東穂の稜線に上がると富士山から槍ヶ岳、白馬岳まで見える。ゴジラの背で1ピッチザイルを出す。北穂山頂で先に下山する大倉 O. B と別れてゆっくりしていると、たちまち滝谷からのガスに包まれたので急ぎ下山した。

<クラック尾根> ガス後台風 川上 溝西 中西 栲尾 (OB)

B. C (6:30) ~ 取付 (9:30)

~登攀終了 (18:00) ~ B. C (22:30)

朝、台風の不安を抱きつつ南稜を登ぼる。B沢の下降は最悪で一步下るごとに岩雪崩が発生してひやひやししながら取り付きまで下る。登り始めるとすぐに風と雨がでてくる。まあ大丈夫だろうと登るが風雨はますます強くなり、岩はベタベタで、ラバーソールはつるつるすべり、おまけにザイルは水を吸い鉛のごとであった。ルートグレードはⅢ級ほどでたいしたことはないのだが、さすがにクラック尾根というだけあってクラックが多くザイルがはさまり思うようにながれてくれない。猛風のため声がセカンドにとどかない。ただでさえもろい滝谷はぼろぼろ、ぐちゃぐちゃの状態できながら地獄のようであった。登攀を終了したときにはパンツまでぐちょぐちょで放心状態だった。18:30に小屋を出て下るがすぐに真っ暗になり、つまずきながら進んでいると向こうの方からOUコールが聞こえた。当然のことではあるが、台風が接近しているときには行動すべきではない。

<滝谷クラック尾根隊の出迎え> 光永、寺田、紫藤 (OB)

B. C (18:30) ~ クラック尾根隊と遭遇 (21:00) ~ B. C (22:30) 台風が接近しているというのにクラック尾根隊が17:00になっても帰幕しないので、18:30になったら出迎えを出そうということになった。台風の接近で風雨が非常に強いので、南稜には上らず南稜直下のハイマツの陰で待機した。ツエルトをかぶろうとしたとき南稜を下っている5つのヘッドランプが見えたのでコールをかけたら、それがクラック尾根隊だった。持参

したホットケーキと温かい紅茶を振る舞ってから下降した。よくこの風雨のなかで南稜を下ったものだと感心しつつ帰幕。

<ビバーク> 飯田、藤田

B. C～屏風のコル（時間の記録無し）

<北壁Aフェース> 前田、青木、紫藤（OB）

取りつきで敗退。

8/9 雨 沈殿 藤田と飯田はビバーク地から帰幕。

8/10 晴 奥穂遠足 光永、飯田、河村、溝西

B. C（5：30）～奥穂（8：40）～B. C（11：14）

<前穂北尾根> 川上、飯田、紫藤（OB）

B. C（5：30）～前穂（10：30）～奥穂（12：30）～B. C（14：00）

5・6のコルより雲海に浮かぶ中央アルプスや富士山が一望できた。3峰の岩登りは最高に爽快であった。頂上には多くの一般市民の方々がおられた。吊尾根の道は予想外に長く、疲れる。奥穂～ザイテングラード間はさらに多くの一般市民が多く、うんざりする。

<屏風東稜> 藤田、栃尾（O. B）

途中敗退。（時間の記録無し）

<ビバーク> 前田、青木

B. C～徳沢（時間の記録無し）

<ビバーク> 寺田、川口、中西

B. C（9：00）～蝶ヶ岳ヒュッテ（3：00）

朝ゆつくりと出発する。途中、横尾で水浴びと洗い物をした。蝶ヶ岳のピークに着いたとき、常念行きの予定を放棄し、蝶ヶ岳ヒュッテにツェルトを張ることにする。

8/11 曇 涸沢岳遠足 光永、河村、飯田

B. C（6：00）～穂高小屋（8：00）～涸沢岳（8：15）～B. C（10：30）

<遠足東稜>（南稜～北穂東稜～涸沢岳～ザイテングラード）ガス

B. C（5：40）～北穂東稜終了（9：00）～B. C（13：00）川上 森藤（OB）

東稜に取り付こうとしていたとき、南稜で大きな岩雪崩が発生した。もしあそこにしたとしたらと思うとぞっとする。東稜は両側の切れ落ちた1ポイントのみザイルをだした。北穂～涸沢岳間は1時間くらいであろうと思っていたが、いつまでたっても涸沢岳に着かない。ハシゴや鎖のある岩稜を登ること2時間、ようやく涸沢岳に着いた。

<北条・新村ルート> 藤田、栃尾（OB）記録無し

<ビバーク> 寺田、川口、中西 蝶ヶ岳ヒュッテ（4：00）～B. C（10：00）

夜中寒さのゆえに目が覚めること度々であった。長居は無用と暗いうちに出発した。

8/12 曇のち雨 <ドーム北壁左ルート> 光永、青木

B. C（5：30）～取りつき（8：30）～ドームの頭（12：40）～B. C（14：30）

1P目 フェース 人工で登る

2P目 フェース

3P目 易しいフェース

1P目が終わったあたりから雨が降り出す。敗退を考えたが、核心が人工であるのでそ

のまま続行した。

<北尾根> 藤田、川口、河村、栃尾 (O
B)

雨のため中止。

なお、他のメンバーは沈殿。

8/13 雨 <下山> 10:00 酒沢
～16:00 上高地

『新人感想』

本格的な山岳活動さえ初体験の僕にとって夏山定着はハード以外の何ものでもなかった。その定着も終わり心弾む下山となるはずであったが、2、3日後に控えた縦走に対する不安感から、そしてその心を象徴するような曇天アツド大雨に気分はブルー一体はぐったりという状態で下山開始。

横尾まで下り後は個人別下山となる。早く上高地に着きたいのに足が進まない。顔をあげてさわやかにあいさつしたいのに腰が曲がり地面と四十四時ご対面をしてしまう……。

それでも上高地に近づくにつれ、人の姿が見え始めるにつれ山に侵されていない純粋な人々の目が自分に注がれるにつれ、心の中に暖かいものが満ちてくるのを感じた。今にして思えばそれが二週間ほど前に下界に置き忘れてきた羞恥心というのだったのだろう。

陽気なおばさん観光客、ほほえましい家族連れの人たち、ほのぼのしたカップルの群れを次々に抜き去り目的地に着いたのは15:00ごろだったろうか。

”空虚”というコーヒーの中に1ミリグラムほどの”満足感”というミルクをブレンドしたカフェ・オレのような「少し苦いな…」という感想を胸に抱き僕の下山は終了した。

8/13 雨 下山 酒沢 (10:00)
～上高地 (16:00)

(記 中西)

夏山縦走合宿

夏山縦走合宿

扇沢～鹿島槍ヶ岳～五竜岳～白馬～朝日岳
～親不知

期間：8月15日～8月20日

参加者：光永、藤田、中西、飯田

8月15日 天気 晴

扇沢 (9:30)～冷地山荘 (14:15)

飯田が日射病になりかけでバテた為、稜線上で大休止をとる。

8月16日 天気 晴

C. S (4:02)～竜山荘 (15:30)

不帰キレットと八峰キレット通過に時間がかかり、唐松山荘までの予定だったが五竜でドン。

8月17日 天気 晴 後 霧

C. S (6:10)～山荘 (7:40)
～天狗山荘 (13:02)

天狗の山頂で1時間近く休憩した。近くに高校の山岳部らしき軍団がいたが、汚さとダサさでははるかに我々の方が上だと思った。天狗山荘はとても良い所だ。藤田がシチューをこぼし悲しい気分になる。

8月18日 天気 晴 後 霧 後 晴

C. S (4:30)～朝日山荘 (14:46)

白馬で何かの雑誌社が撮影をしていた。中西が写真に写りたさそうだったが我々が必死に止めた結果、恥をさらさずに済んだ。朝日山荘からは海が見え、いよいよ我々の長い夏が終わるのだなー、とセンチメンタルになってしまった。

8月19日 天気 快晴

C. S (5:07) ~ 梅海山荘 (13:37) ~ 黄蓮の水 (16:40)

黒岩平は全くの田園風景でとても良かった。梅海山荘に残置されているノートに栃尾さんの記録を発見。やはり書く事は飯と風呂だった。みんなで大笑いする。中西がそのノートに英語で書くといい張るので好きにさせてやった。黄蓮の水でドン。打ち上げはやはり楽しいものだ。夜の11頃まで話しこむ。

8月20日 天気 霧 後 雨 後 晴

C. S (6:10) ~ 親不知 (14:20)

ついに日本海を見る。非常に嬉しい。歩きながら何を食べるか考えてばかりいた。親不知に着いた時、さすがに胸にくるものがあった。日本海はとにかくでかい。親不知でなんとバスに乗車拒否をくらってしまう。確かに服装はすさまじいものであったが...。ともかく我々の夏山はこれで終わった。

中房温泉~燕山~常念岳~蝶ガ岳~横尾~上高地~西穂山荘~新穂高温泉

期間: 8月15日~8月18日

参加者: 寺田、前田、川口、尾崎

8月15日 天気 晴

中房温泉 (7:20) ~ 燕山荘 (11:

00) ~ 大天荘 (15:00)

登り始めより天気は非常に良好。少々暑いくらいである。赤トンボがウンカのごとく、たちこめている光景を見たがまさに幻想的なものである。燕山荘から大天荘の間では適度にガスが出て快適であった。大天荘においては稜線上の小屋では通りすがりの者には一定量以上、水を売ってはくれないということが分かった。

8月16日 天気 晴

出発 (4:30) ~ 常念岳 (8:00) ~ 蝶ガ岳 (12:00) ~ 横尾 (15:00) ~ 徳沢 (16:00)

昨晚、早く寝てしまったので気付かなかったが、隣のテント辺りの連中が花火を打ち上げて騒いでいたようだ。困ったものである。夕食は定着合宿の残り物をふんだんに使った豪華なものだった。川で冷やしているゼリーを狙ってやって来るカモみたいな鳥には参った。

8月17日 天気 晴 後 曇

出発 (6:00) ~ 上高地 (9:00) ~ 西穂山荘 (13:00)

山荘までの登りで意外と手間取った。尾崎が少し足を痛めている様なのでピークに行くのは止して昼寝した。

8月18日 天気 雨 後 曇

出発 (7:00) ~ 新穂高温泉 (11:00)

雨の中を出発した。ロープウェイで登ってくるのであろう、沢山の人達と行き会う。ロープウェイ駅の少し手前で下山道に入る。ここからは道が非常に廃れた感じで誰に会うこともなかった。地図が無かったために道を間違えるということになってしまった。やはり、行くところはすべてカバーせねば

と改めて感じさせられた。

裏銀座縦走

参加者：川上 (C.L)、青木、溝西

期間：8/15～8/19

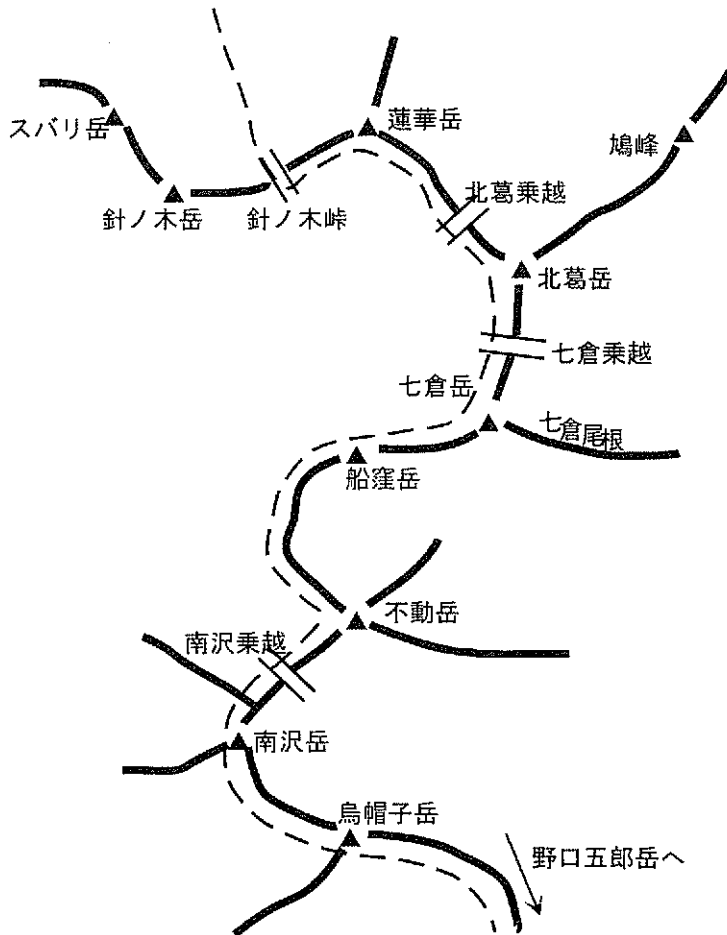
8/15 (晴れ) 大町 (5:30)～扇沢 (6:20)～針の木峠 (11:30)

前日より大町に泊まり込み扇沢に向かう。針の木雪渓にでるまでは暑苦しい樹林帯であり退屈である。雪渓は崩壊部分もなく、スプーンカットもおおきく非常に歩きやすい。途中から溝西がバテはじめる。雪渓をすぎたあたりからグネグネ道のたたらした登りとなり、かなり長くてしんどい、針の木アタックを中止してテントでくつろい

で寝た。

8/16 (晴れ) 針の木峠 (5:20)～蓮華岳～北葛岳～船窪テン場 (11:30)

コマクサの群生する蓮華岳から眺める朝焼けの雲海は最高であった。蓮華の大下りは予想以上に急激で、最低の所についたときには足にかなりのダメージを受けていた。ここから北葛岳への登りにはところどころ切れ落ちた崩壊部分があり、気をぬけない。ここから七倉への道には、両側の切れ落ちた部分にかかるハシゴがあるが、固定の針がねがかなり痛んでいて、いつきれてもおかしくはない状態であった。船窪テン場は小屋、水場と少しはなれており不便であつ



た。しかし、非常に人が少なく、静かで、下界を忘れ去ることのできるテン場ではある。

8/17 (快晴後ガス) 船窪テン場(5:30)～不動岳(11:11)～南沢岳～烏帽子岳(14:50)

船窪テン場より不動岳まではところどころ崩壊部分があり慎重にゆかねばならなかった。また、急登、急下降がつづきかなりしんどかった。途中二つのピークで船窪岳とかかれた道標を見つけたが、高いほうのピークが船窪らしい。国土地理院の地図では低いほうのピークが船窪岳となっているが、これはまちがいだろう。南沢岳より烏帽子岳への道は池塘の散在するすばらしい山域である。途中、烏帽子岳をアタックしてから小屋にむかった。

8/18 (ガス) 烏帽子岳テン場(5:00)～野口五郎岳(8:10)～三俣山荘(13:00)～双六小屋(15:00)

この日の道は、前日までの道とはうってかわって非常に歩きやすい快適な道だった。しかし、なにしろ距離が長いので双六小屋についたときには全員疲れはてていた。

8/19 (晴れ後ガス) 双六小屋(5:30)～樫岳山荘よりピークに寄り道をする。運悪く頂上はひどいガスで展望はゼロだった。ひだ乗越より下り槍平キャンプ地つをめぐして下るがなかなか着かない。ここから新穂高温泉へ向かうが道が悪く思うようにとばせない。右には遙かかなたまで続いているような中崎尾根がみえるだけで、全く退屈だった。中崎尾根の末端

にあるキャンプ場でこの日は一泊した。翌日、朝9:00のバスで高山出て、しばらく観光をした後、高山号で帰阪した。

偵察合宿

偵察合宿

大明神尾根

参加者：森、川上、藤田、川口、溝西、飯田

10/30 離阪(雨)

10/31 入山(雨時々曇り)きたぐにで魚津に着いたとたんにも雨+川口のピッケル忘れという暗いスタートとなった。しようがないので朝、店が開くまで駅で待つことになる。駅では駅長さんに大明神尾根についていろいろと教えていただいた。12時を過ぎてからようやくタクシーで第五発電所へ向かう、最初の階段は予想通りすさまじい長さで、腰に来るものがあった。ここから300Mほど登りどんする。途中かなり傾斜が急になり、てこずるが、右からまいてなんとか通過した。

10/1 (雪)朝から湿雪がちらつき、気温は低い、傾斜は緩いが、ブッシュがひどく、ポコとポコの間がかなり細くなっていてFUCKな道である。クマザサの上につすらと雪がつもった所にテントを張る。11/2 (快晴)朝からすばらしい好天に恵まれ、やる気が出た。大明神まではひといきで、頂上にデポをして、毛勝の肩でテントをはる。

11/3 (快晴)今日あたりから雪庇が出てくる。雪庇はすべて毛勝にむかって左側に張り出しており、右側は傾斜がゆるく、

ザイルを出す必要はないと感ぜられる、肩への登りはかなりの急登で、途中のブッシュには fix の跡があった。ここで明治大学の人に会う。かれらも冬山は大明神尾根らしい。毛勝と釜崎山の間この日はテントを張る。

11/4 (雪後晴れ) 朝、起床すると湿雪がしんしん降っていた。午後から晴れるという天気予報に望みをたくして、ラッセルを始める。猫又山頂付近で天気待ちをする。1時間ほどのんびりしていると天候が回復したので、コンパスと地図を頼りに、下り始めるが、尾根を1本間違えてしまう。ブナクラの科尔へのくだりは、予想外に急で、かつ細かった。狭い尾根の途中でテントをはる。打ち上げの日だが酒もないのでしかたなく寝ることにする

11/5 (快晴) 今日はいよいよ下山の日だ。科尔から下るとまたブッシュにつかまる2個目のヒン堤で左が崖となり徒渉となる。1時間程渡れそうな場所を探してウロウロするが見つからない。諦めてみんなのいる所に戻るとなんと飯田が向こう岸に渡っているではないか！両足をビニール袋につっこんで強引に徒渉したらしい。そこから20分ほど歩くと林道が始まり、小1時間歩くと馬場島についた。

弓折南尾根～笠ヶ岳

期間：10/31～11/4

参加者：光永(2.L)、寺田(2)、青木(1)

10/30 雨

新穂 16:30 ～ ワサビ平小屋 17:50

青木と高山駅で合流。青木は寝坊をし、特急で来たとのこと。しっかりしてほしい。

入山はまたもや雨。早くもヘッ電行動で気分が悪い。

11/1 曇り 後 雪

CS 6:00 ～ 弓折南尾根 2200m 15:20

弓折南尾根の取り付けに2ピッチかかる。予想外に雪が多くワカンを持ってきてなかったため、ラッセルが深くなりなかなか進まない。

尾根上ではブッシュに雪がつき、とても滑る。2200m地点は急なブッシュだったので、そのブッシュ帯を越えて幕営した。春にはfixを出すかもしれない。天場は、1650、1800、2000mと豊富にあった。青木がひどくバテ、テントの中でぐったりしていた。

11/2 晴れ

CS 8:00 ～ 鏡平小屋 10:00 ～ 弓折岳
13:30 ～ 弓折岳直下 ～ 15:00

CSの目の前にある急なブッシュ帯を越えるとなだらかな尾根が続く。つねに膝までのラッセル。時折腰までもぐる。ペースが上がらない。鏡平小屋から弓折岳まではトレースがあり、とても助かった。しかし重荷をかかえているのでとてもつらく、バテル。鏡平小屋から弓折岳には斜面をトラバース気味に登ったが、春は雪崩の怖れがあるので尾根を直上することになるだろう。とりあえず弓折岳に到着して西鎌尾根に向かうため北上するが、稜線上のラッセルが膝まであったので、このままのペースでは予備日をつかっても西鎌尾根を通過できないのではと思い、進退を寺田と相談した。結局西鎌尾根の通過を断念し弓折岳に引き返した。

11/3 晴れ

CS 6:00 ～ 秩父平 10:00 ～ 弓折岳

14:00 ~ 鏡平小屋 16:00

春にアタックするつもりの笠ヶ岳の方に歩き出す。秩父平から稜線までの登りは要 fix。そこからは偵察の必要がないと判断し、秩父平から引き返した。一気に鏡平小屋まで降りた。槍ヶ岳と西鎌尾根がきれいに見えた。

11/4 晴れ

CS 6:00 ~ 新穂

鏡平小屋からはトレースがあったので、谷に下った。とても速く下山できた。ただ春は雪崩の危険大なので、この谷を使用できないだろう。新穂で食べた温泉タマゴがやたらうまかった。

(記 光永)

アイゼン合宿

アイゼン合宿 御嶽山

期間 : 11/22 ~ 11/25

参加者 : 森 (C・L)、川上、光永、前田、藤田、寺田、青木、川口、尾崎、飯田、溝西

11/22 晴 青木、光永は都合により入山は遅れる。スキー場を登る、雪はそれほど多くはなく苦労はないが、少ない雪を荒らす自分たちにスキーヤーの視線が痛かった。八海山荘からの登りは氷が張っているところが多く滑りやすい。この日は王滝頂上の神社の境内に幕営、罰当たりな事を少々。

11/23 晴 前日、硫黄臭のため良く眠れず気分が悪い。1ピッチ半で二の池に到着。設営、撤収の訓練を行った後アイゼン

ワーク。この日藤田がコールマンから滑り落ちたコッヘルの熱湯で火傷を負う。

11/24 雪 お鉢めぐり。テント付近は小雪だったが、お鉢めぐりの途中から吹雪に変わる。自分は御鉢が丸くなっているのに気付かず悩む。4分の1程巡ったところで尾崎が突風にあおられて滑落、キスリングの下敷きになり亀のように私の横を滑り落ちて行った。幸い怪我はなかった。帰って設営訓練、終わるころに後発隊到着。藤田は青木につき添われ下山。

11/25 晴 先発のうち森、溝西は事情により先に下山。(以下川上記)テント設営訓練。大滝頂上でフィクス工作を行う。その日のうちに大滝頂上まで下山する。この日のカレーは最高にまずかった。

11/26 晴 一気にスキー場まで下山。

記、溝西(一年)

冬山合宿

冬山合宿 大明神尾根

期間 : 12/25 ~ 12/30

参加者 : 森 (CL)、川上 (SL)、藤田、光永、寺田、前田、溝西、尾崎、中西、川口、飯田、青木

12/25 東蔵 (7:30) ~ 第4発電所 (10:20) ~ 片貝山荘 (14:05) 曇り時々雪

魚津の警察でヤマタンを借りた後、出発。東北大が前日入山とのこと。タクシーは、東蔵を過ぎたセメント工場のところまで。脛ぐらいのラッセル。この日はひたすら林道を行く。

12/26 T.S (7:00) ~ 1480 (14:80)

晴れ 発電所後の階段から、水パイプ沿いに尾根に取り付く。そこで1箇所左に切れた所が合った。ダブルのラッセルのペースは遅く、天候が良いのが非常に惜しい。別に問題無し。

12/27 T.S (6:40) ~ 1520 J.C (7:00) ~ 大明神山 (11:00~11:30) ~ 2240 (14:20) 曇り後 gas

天場から5分程ラッセルすると、1520 J.C. そこからトレースが続いておりペースは上がる。1700付近で東北大に追い付き、総勢21人の大部隊でのラッセルとなる。東北大は大明神山まで。我々は、デボを確認した後、アタックキャンプ地点まで行くことにした。2200への急坂は、ブッシュがでいたため fix 出さずにすんだ。

12/28 沈殿 gas 低気圧通過で視界悪く、沈殿。とはいっても気温は高く、冬山らし

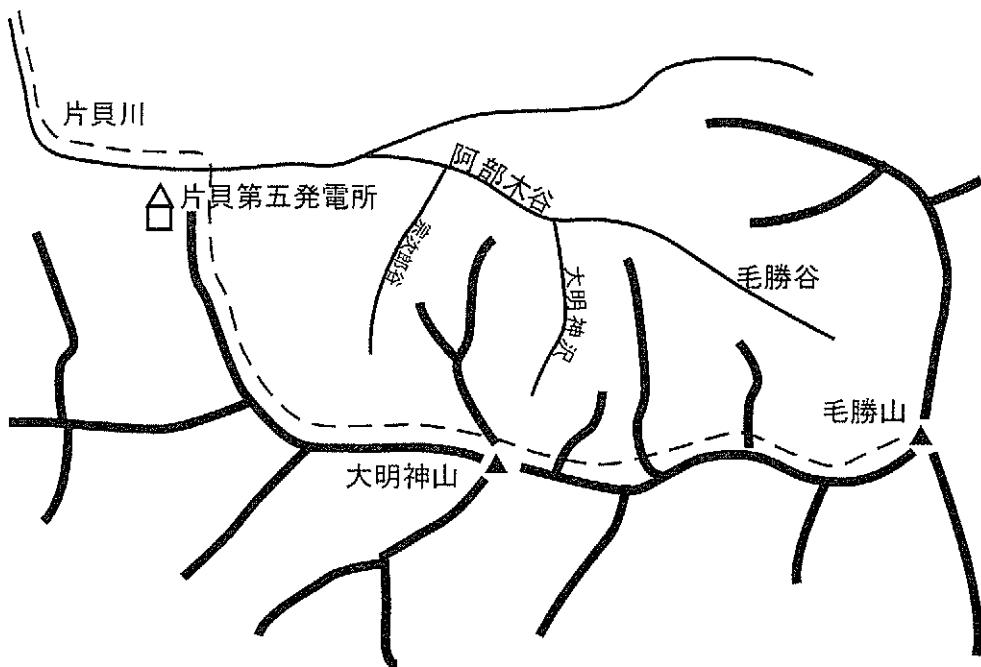
くない楽な沈殿だった。

12/29 T.S (7:30) ~ 毛勝山北峰 (9:30~9:40) ~ T.S (10:35)

撤収 T.S (13:50) ~ 大明神山 (15:10) 曇り 視界が昨日よりよかったため (15m程)アタックにでる。南峰からは、ホワイトアウトぎみで、コンパスを見ながら進む。北峰ピークで藤田が小黒部谷側に1m程転落。一瞬ひやりとする。帰りに東北大とすれちがう。彼らのトレース&赤布をたどって大明神山までおりる。この日食料開放。

12/30 T.S (7:20) ~ 1525 (9:05) ~ 片貝山荘 (12:30) 曇り 下から登ってくるパーティとすれちがいながら、一気に山荘まで。例の左の切れた水パイプの箇所は、コンクリートを巻かず、上から乗越して通過。快適な山荘でうちあげ。

12/31 片貝山荘 (9:40) ~ 東蔵 (12:



大明神尾根概念図

50) 雪 のんびりラッセルしながら下山。年内下山など初めてであった。とてつもない豪雪を想定しての山行だったが、気温も高く、雪量もこの山域にしては少なめ、そして、入山パーティが多く自分が思い描いていた内容と大きくちがった拍子抜けの山行だった。だが、けっして我々の実力ではなく、好条件に恵まれたことによることを後輩らは肝に命じて欲しい。

(記 森)

春山合宿

春山合宿

弓折南尾根～笠ヶ岳

期間：2月8日～2月14日

参加者：二年 光永(L)、寺田

一年 尾崎、川口

2月9日 晴

新穂(14:00)～秩父沢出会(18:00)

はじめてリーダーとなって挑むことになった。寺田と事故だけはすまいと誓う。偵察と違いかなり雪が多くラッセルに苦しむ。

2月10日 曇のち雪

C.S(4:50)～鏡平(13:00)

ヘッ電行動でクラストした秩父沢を1ピッチでトラバースした。このデコボコした沢を陽が当たって雪が溶けたときにトラバースするのは結構苦労しそうだ。尾根は積雪で容易な尾根となっており楽勝。鏡平からきれいに槍が見えた。

2月11日 晴のち曇

C.S(5:40)～弓折岳(7:50)～秩父平(12:20)

fix 工作(13:50)～(18:00)

出発時、あたりは朝焼けに映えて素晴らしい景色となっていた。弓折岳へは途中でトレースがあり、楽勝。その後腰または胸までのラッセル。弓折岳は丸い山なので下降路を間違えないように赤旗を差しまくる。fix 工作はザイル操作が悪いためになりに時間がかかった。150 mfix。

2月12日 ガス

C.S(5:40)～fix 終了点(6:10)～笠ヶ岳(10:30)～笠ヶ岳山荘(10:50) (11:10)～C.S(15:20)

今日は笠ヶ岳アタック。出発時かなりのガスのため判断に苦しむが、とりあえず出発した。抜戸岳のあたりでホワイトアウトしてしまい、トップは雪庇を確認しながら進んだ。

笠ヶ岳頂上ではガスで何も見えなかったが、ニコニコしている仲間とテルモスの紅茶で乾杯しているとやっと実感が湧いてきた。帰りは問題なし。

2月13日 晴

C.S～秩父沢出会

中央アルプス縦走

上松～木曾駒ヶ岳～宝剣岳～濁沢大峰

期間：3/11～3/14

参加者：川上（C.L）、藤田（S.L）、前田、溝西、飯田、川口、青木、中西

3/10 離阪

3/11 快晴 木曾駒ヶ岳二合目（3：50）～七合目（14：00）

何と9ピッチ行動しても8合目にはたどり着かなかった。最初は全員快調であったが雪が深くなるにつれて全員バテ気味となった。しかし、五合目の金懸小屋まではかなりの急登ではあるが、ルートのにも何の問題もなく快調にとぼせた。あえて危険な箇所を指摘するとすれば金懸小屋直下に急なルンゼをトラバースするところがあるが、慎重に一步一步進めば何の問題もないだろう。金懸小屋を過ぎると後は急登プラス緩傾斜の繰り返しである。とくに尾根がやせた部分もなくまばらな樹林帯の中のラッセルが続いた。時折、視界の開ける場所があり、宝剣岳方面の真っ白い稜線と空の青とのコントラストがすばらしかった。

3/12 ガス時々雪 七合目（8：00）～玉の窟（14：16）

朝3時起床の予定であったが、昨日の疲れからか全員寝坊してしまった。昨日と同じような広い尾根のラッセルがしばらく続いた後、非常に広い八合目らしき所に出た。八合目には石碑があり、雪田といった感じのところで、晴れていれば素晴らしい展望が楽しめるのではないだろうか。しばらく登ると木曾前岳直下についた。ここから頂上までは約50メートルのナイフリッジと

20～30メートルのクラストした急斜面であった。ナイフリッジで2ピッチfixをはりなんとか頂上へ抜けた。頂上は広々としていてところどころに夏道に沿って張られたロープが見え隠れしていた。ロープにそって進み木曾駒ヶ岳との間のコルにテントを張った。

3/13 快晴 玉の窟（7：00）～木曾駒ヶ岳（8：30）～宝剣岳（12：50）～宝剣山荘前（1：30）

朝、テントから出ると素晴らしい快晴であった。コルから木曾駒頂上までは1ピッチならずで、頂上からは宝剣岳～空木岳までの中央アルプスの主脈が一望できた。ここから宝剣山荘前まではまったくの平坦な広々とした稜線で快適なラッセルであった。宝剣山荘前にテントを張り宝剣岳アタックにむかう。頂上直前までは何の問題もないがそこから頂上までは岩の急斜面に氷が張り付いた感じで結構こわい。夏道の鎖が所々出ているので、それを頼りに2Pフィックスを張る。

3/14 快晴 宝剣山荘前（6：00）～千畳敷（7：00）～極楽平（9：00）～濁沢大峰（10：30）～敗退決定（11：00）～千畳敷（14：00）

朝、出発と同時にアイゼンバンドが切れるとゆうアクシデントに会った。乗越浄土から千畳敷までの下りは急なクラストした斜面で突風に煽られながら慎重に下る。極楽平への登りは上部ではかなり急で所々雪庇が手前に張り出したようになっている。檢尾岳を目指して1ピッチ程行くと途中、濁沢大峰があるがここののぼりは完全にクラストした急斜面でかなりきつい登りであった。頂上まで何とか登りきって稜線ぞいに

行こうとするが、左は雪庇で右はクラストした急斜面で非常に緊張するザイルを出すことにして偵察をしたが岩峰と岩峰の間のアップダウンが大きくザイルを出すにしても時間がかかりすぎることと上級生が二人しかいないことを考えてこれ以上進のは危険と判断して敗退を決定した。千畳敷まで引き返してそこからロープウェイで駒ヶ根に下山した。

が入っているようだった。しかし2人ともヤッケなので少し恥ずかしい。

この日風が強かったのでリフトが動かず、スキー板をかついで上まであがり2回ほど滑ったがシンドイのでやめた。米子で畑と別れ、帰途についた。

(記 光永)

大山北壁 鏡岩ルート

期間：2月19日～2月21日

参加者：二年 光永(L)、畑(O.B)

2月19日 雪

米子駅で集合。光永は大阪からバス、畑は広島から車で来た。集合後、車で大山スキー場へ。

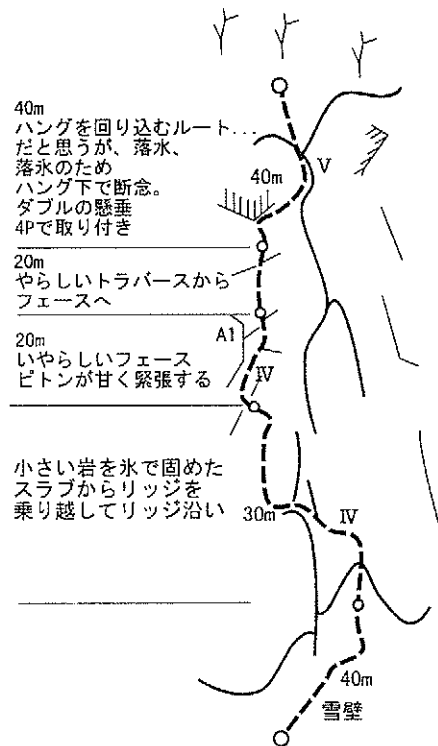
2月20日 快晴

大山スキー場駐車場(6:30)～元谷小屋(7:30)～取り付け(9:30)～最高到達点(14:10)～大山スキー場駐車場(17:00)

信じられないような青空のもと、出発した。取り付けまでわずか3時間、楽である。1ピッチ目でカンテをまわりこむところを間違えてルンゼを直上してしまい、時間をロスした。この晴天で水がながれているのか、すべての岩に薄く氷がはり、いやらしい。最高到達点はハングのすぐ下だった。岩に日光があたって落石、落氷がはじまり、ハングから水がザーザー流れていたため、敗退を決定した。懸垂4ピッチで取り付け。

2月21日 雪

いちおう登攀を終えたので、スキーをした。畑はスキー板、ストック持参で気合い



大屏風岩 鏡ルート....

※ 元谷小屋は結構人気があり休日、祝日にはほぼ満員になるので、幕営の準備をした方がよい
大山寺→元谷小屋 2ピッチ弱

1993 年度活動記録

1993年度現役部員

C. L	川上和幸	(基・3)	[3]
S. L	藤田哲史	(理・3)	[3]
	光永正樹	(理・3)	[3]
	前田 智	(文・3)	[3]
	寺田浩明	(基・2)	[3]
	尾崎夏樹	(経・2)	[2]
	中西英夫	(法・3)	[2]
	溝西 慎	(理・2)	[2]
	川口泰宏	(理・3)	[2]
	飯田真宏	(理・2)	[2]
	青木 成一郎	(理・3)	[2]
	中村 聡	(理・1)	[1]
	磯部 寛	(理・1)	[1]
	山田 茂	(理・1)	[1]
	給田俊文	(理・2)	[1]
	赤井知司	(工・3)	[1]

□内は山岳部学年

新歓合宿

新人歓迎合宿（93年度）

白馬大池

楡池より入山

期間：4/30～5/3

参加者：川上 光永 藤田 前田 寺田 飯田
尾崎 川口 中西 溝西 磯部 給田 中村 山
田

4/30 雪 楡ノ森駅(8:30)～行動終了(18:00)

前夜、急行きたぐにに乗り離反した。白馬大池駅で藤田たちと別れ下車した。スキー場には雪がまだらに残っていて、ゴンドラが動いていたのでこれに乗った。行動を開始したころは雨が降っていた。

天狗原付近で雨が雪に変わり始めた。雨具が更に冷たくしめった。乗鞍岳の登りで山田が著しく遅れ始めた。そこで二班に別れ、川上、尾崎、山田を残し残りのものは先にテントを張るべくすすむことにした。このとき尾崎にも残ってもらったことは幸運であった。この日、彼等に会うことは無かったのであった。

私も吹雪に方向を誤り、大禍は無かったものの何とか大池に辿り着いたころにはもはや暗くなりつつあった。この手の失敗は後の同じ場所での冬山合宿でもあったので今後特に注意が必要であろうと思った。

5/1 快晴 昨日別れた川上のテントが付近に見あたらなかったため、飯田、溝西と共に捜索に出かけた。残りの者たちは待機してもらった。目的の物は乗鞍岳頂上にあっ

た。この日は二隊に別れ、雪訓と防風壁設営を交互に行った。

5/2 雪 沈殿

やがて曇に変じたらしく、せつかくの立派な壁もあらかた解けてしまった。

5/3 快晴 出発(8:50)～到着(10:50)

～帰幕(12:30)～楡ノ森駅(17:00)

小蓮華岳まで全員で遠足に出かけた。登りの途中で疲れ切った表情の藤田、前田、そして青木の白馬尾根隊に出くわした。テントに帰ってきてからこの日のうちに下山しようということに決まり、これを実行した。まさにゴンドラの終了時間ぎりぎりの楡ノ森駅への到着であった。

(記 寺田)

白馬双子尾根隊

期間：4月30日～5月3日

メンバー：藤田、前田、青木、

4月30日 雨

白馬駅に5時30分頃ついたが、雨のため、出発を遅らし、11時に発。バスが使えず、タクシーで猿倉まで行く。二股までと言われたが、最後まで行けた。そこにテントを張る。藤田と前田で偵察に行く。雨が降っていて、ガスっているし、少し見てすぐ帰った。

5月1日 曇り後晴れ

4時40分発～6時10分白馬尻～16時杓子頂上～17時テント場

2時20分起床。用意に時間がかかり出発が遅れた。白馬尻らしきところから取り付く(実は間違っていた)。ガスっていて見通しが悪く、アイゼン後があり、登っていったが、もっとちゃんと調べるべきだった。稜

線に出ると大雪溪と山小屋が見え、白馬主稜と違ふことが分かった。しかしだいぶ来ていたので、このまま行く。頂上を越えて、ドンした。

5月2日 ガス雪混じり後雪、風

5時30分発~10時白馬~11時テン場

3時起床。ガスで視界がわるいが、白馬過ぎまで行く。ガスのため進めず、テントを張って天気待ち。15時まで待つがいけず。このままドン。

5月3日 ガス後晴れ

8時発~9時白馬大池

今日分の食料しかなく、今日行動したい。ガスがまだあって少し待つ。朝食はスープとレーション三分の一で非常に寂しかった。今後のため我慢。8時天気がましになったので、出発。9時白馬大池隊の小蓮華遠足と出会う。そのままそのテントに向かい、合流した。

プレ夏山合宿

小川山夏山プレ合宿

期間：1993年7月12日~21日

参加者：光永、藤田、給田、中村

7月12日(月)

離阪。

7月13日(火)

鉄道、バスを乗り継ぎ、その後1時間強歩いて、昼過ぎにキャンプ場に到着。早速父岩へ行く。光永、藤田は”小川山物語”(5・9)にトライ。給田、中村は”モラル”(5・10a)、“弱点主義”(5・11a)へ。途中より雨が降り出し、登攀中止。中村はプロテク

ションを1つ残置するが、後日回収に行く
と消失していた。

7月14日(水)

左岸スラブへ。光永、給田は”ブラック&ホワイト”(5・10a)に取付き、その後”雨がやんだら”(5・11b)へ。彼等は後日もこのルートに何度かトライ。藤田、中村は”ジャーマン スープレックス”(5・10b)。スメリングのみで登るスラブルートであり、緊張する。その後”ブラック&ホワイト”。2つ目のプロテクションがやたらランアウトし、落ちるとグランドフォールゆえ恐ろしい。この日も途中から雨が降り登攀終了。

7月15日(木)

光永、給田は左岸スラブ。藤田、中村はマラ岩へ。マラ岩はまるで塔のような岩である。まず”川上小唄”(5・8)でマラ岩の頂上へ。中村はそこで写真を撮る。次に”イレギュラー”(5・10d)にトライ。3つ星ルートだけあっておもしろい。しかし少々ランアウトしており、藤田は4mほどの墜落を3回ほど続けざまにした。最後に”JECCルート”(5・10d)というスラブにトライ。藤田のLaserはこのスラブでその寿命を直ちに終わらされた。

7月16日(金)

屋根岩へ。少しアプローチが長い。少々迷うが屋根岩1峰周辺のルートへ。”ヤッホ一元気”(5・10b)、“ムーランルージュ”(5・11c)にトライ。その後、水晶スラブで”あばたもエクボ”(5・10b)、“ノイズ”(5・11a)。中村は後者の登攀中に5mほどの墜落。軽傷を負う。以上で終了。

7月17日(土)

光永、給田は左岸スラブ。藤田、中村はスラブ状岩壁。後者は道に迷いヤブの中を1

時間ほどさまよう。しかし何とか見つける。続オジサン岩を登っていると光永、給田も現れる。昼食後、光永、給田は再び左岸スラブへ。藤田、中村は”水曜日のシンデレラ”(5・11a)、“放浪癖”(5・10b)にトライして登攀終了。

7月18日(日)

リバーサイドへ行くが、まもなく降雨。昼より止むが休むことにした。

7月19日(月)

光永、給田は左岸スラブ。藤田、中村は妹岩でクラックルート”カサブランカ”(5・10a)にTrでトライする。昼にキャンプ場に戻り、藤田はこの日下山。残った3人はリバーサイドへ。中村は”ジョングダ”(5・10d)をオンサイト。それから光永は”DOKUFU”(5・11a)にトライ。雨が降りだし、濡れながらの苦しいプロテクション回収作業をする。登攀は終了。

7月20日(火)

午前中は父岩にて登攀。昼過ぎにキャンプ場に戻り、下山。バスで駅まで行き、そこで一泊。Endyはいい奴だった。またファームステイがあんなに流行っているとは知らなかった。

7月21日(水)

青春18きっぷで大阪へ。

南アルプス深南部

水窪～前黒帽子山～バラ谷山～黒帽子岳～等高尾根～水窪ダム

期間：7月21日～7月24日

参加者：青木、飯田

7月21日 天候 曇(始め雨)

水窪～登山口(9:40)～麻布山(12:10)～前黒

帽子山(13:46)～最低コル(15:48)

まだ梅雨が明けていないが暇がないのでこの山へ行くことにした。昨日の夜に豊橋駅でステーションビヴァークをしたが変なおやじにからまれて(登山者がよく狙われる)いやな気分のまま出発することになった。いきなりタクシーに乗っている最中から豪雨。タクシーの運ちゃんに「これでも本当に行くのー？」と言われてしまう。いわゆるにわか雨だ。天気が不安のまま(ガスもひどかった)登山口に取り付く。着いてみたら問題はなかった。一日の行程をこなしてみたが今日のルートは特に問題はない。最低コルの付近で少しわかりにくかった程度。また麻布山に水窪町の宣伝がしてあったのは驚いた。

7月22日 天候 雨

最低コル(7:19)～バラ谷山(9:50)～水場のコル(10:48)～黒帽子岳(13:08)

今日はずっと雨だった。昨日と比べれば多少道はわかりにくい。バラ谷山からの下りに気を付けた。あとは黒帽子岳に登りがまあまあ急で登りにくいことぐらい。特に問題はないようだ。黒帽子岳の頂上に高校の時に部でつけたプレートがなかったのは残念だった。あと記憶よりも頂上は木が立て込んでいなかった。

7月23日 天候 曇のち雨

黒帽子岳(9:55)～等高尾根分岐(10:45)～等高尾根分岐(14:40)～林道(16:10)～林道の途中(20:10)

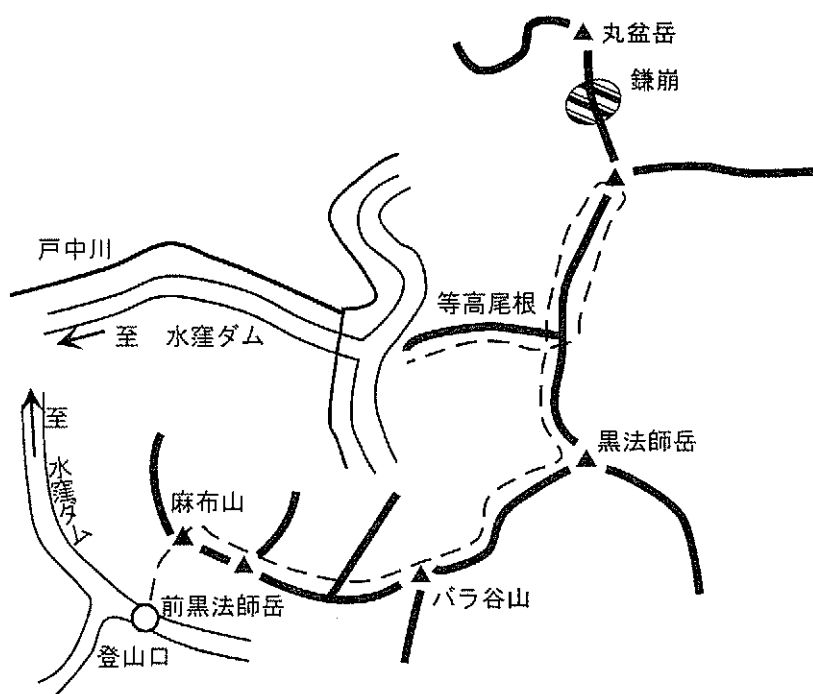
今日の天気が悪く、結局ずっと天気が悪かった。特に問題なし。黒帽子岳から等高尾根まで右にガレがあって少し気を付ける程度。丸盆岳から鎌崩までを少し見てきたが多少ともわかりにくい。あと重荷はちよ

っと危ないようだ。丸盆岳では展望なし。
等高尾根は今迄で一番わかりやすい。林道
はけっこう長い。今日はひたすら歩くこと
にして夜まで歩く。

7月24日 天候 曇

林道の途中(8:45)～水窪ダム(9:30)

今日は昨日の林道の残り。ダムまです
ぐに着く。ダムからタクシーをよんで駅ま
で行く。



南アルプス深南部 麻布山、黒法師岳周辺概念図

夏山合宿

夏山定着合宿 真砂

期間：7/27～8/9

参加者：C.L 川上和幸[3]、S.L 藤田哲史[3]、
光永正樹[3]、前田 智[3]、寺田浩明[3]、
尾崎夏樹[2]、中西英夫[2]、溝西 慎[2]、
川口泰宏[2]、飯田真宏[2]、青木 成一郎[2]、
中村 聡[1]、磯部 寛[1]、山田 茂[1]、
給田俊文[1]、赤井知司[1]

7/27 快晴

室堂(9:10)～御前小屋(1:10)～剣沢キャン
プ場(3:00)

出発と同時に山田が遅れ出す。御前小屋
では快晴となり、剣の迫力ある姿がすばら
しかった。

7/28 ガス

剣沢(10:00)～真砂(14:30)

今日も一年生がバテて少し遅れたが、な
にごともなく到着。行動中に雨が降らな
かったのは幸運だった。

7/29 快晴

BC(11:00)～取りつき(13:30)

マイナーズラブ取りつきに偵察にいった。
三ノ沢はいつもより雪が多いみたいだ。縦
走路から入った。すこしいった所に小さい
滝があり、左側からまくが浮き石だらけで
いやらしい。なかなかいやなアプローチだ。
取りつきは大きなハングがあり、すぐわか
った。

<源次郎 I 峰、成城大ルート偵察> 光永、前
田

源次郎尾根取りつき(11:30)～中央バンド

(14:10)～BC(16:13)

雪訓を終えた後、二人で偵察にいった。
源次郎尾根は思ったより難しい。

BC(6:00)～長次郎雪渓～BC(18:00)

キックステップ、アイゼン歩行、滑落停
止を行った後に5、6のコルまで全員でのぼ
るが、雪が腐っていて下降に手間取ってし
まった。長次郎の下降で一年がひとりおじ
けずいたのか、なかなか下れない。僕も一
年のときはこんなだったのかなあとって
しまった。

7/30 曇ときどき雨

<本峰南壁 AI>

川上、前田、溝西、中村

南壁敗退(12:00)～BC(15:00)

台風が接近している。取りつきの確認に
手間取り、ルートミスで敗退、別山尾根を
経て剣沢へ。

<雪訓>

BC(5:40)～剣沢途中の斜面(8:20～9:50)～

BC(10:30)

雪訓後、光永が一人で中谷ルートの取り
つき偵察。

<マイナーズラブ>

藤田、飯田

BC(4:00)～BC(5:00)

事故のため敗退(落石)

7/31 雨

<八ツ峰、六峰 A フェース中大ルート> 光
永、飯田

BC(8:30)～取りつき(11:05)～登はん(11:15
～13:50)～BC(16:20)

一ピッチ目はルートを間違え手間取る。
下降は魚津高ルートを懸垂で。

<C フェース剣稜会ルート>

藤田 青木 磯部

BC(9:00)～取り付き(12:00)～終了(16:00)～BC(20:15)

ガスの為下降路が分からず、大分時間を食う。

7/31 遠足 川上 中村

この日は朝からどんよとしたガスがかかっていた。雨が降りそうなので、とりあえず予定の行動は中止し、この日入山の寺田の歩荷を手伝いに行く。剣沢からの道が雪渓に消える所で寺田にあった。

8/1 曇り時々雨

<八峰六峰魚津高ルート> 光永 給田

BC(5:20)～取り付き(8:15)～登攀(8:30～10:45)～BC(15:10)

下降は魚津高ルートを懸垂。

<黒部別山遠足>

川上 藤田 青木 中村

BC(5:40)～BC(10:00)

<ピバーク訓練>

寺田 山田

BC(5:30)～仙人池(9:00)～仙人湯(10:00)～池の平(14:30)～二股(18:00)

北股への道は悪い。

<仙人池遠足>

8/2 晴れ

<チンネ左下左方カンテ>

光永 青木

BC(4:20)～池の谷乗越(7:30)～チンネ(9:00)～敗退決定(11:30)～BC(16:40)

一ピッチ目のルンゼを間違えて、そのまま三ピッチを登ってしまった。どうも左稜線の左のルンゼに入ったらしい。結局その場から三ピッチ懸垂した。さすがに帰途は足が重かった。

<C フェース剣稜会ルート>

川上 中西 中村

BC(4:50)～取り付き(7:30)～終了(11:00)～BC(13:50)

下部は少しもろいが、問題なし。

<立山遠足>

前田 飯田 給田 磯部

<チンネ左稜線> 藤田 溝西

BC(4:00)～池の谷乗越(7:00)～取り付き(9:00)～登攀(10:00～16:30)～三の窓(17:30)

岩も固く、ピンも多く快適。池の谷ガリーは浮き石が多く要注意。

8/3 雨 藤田達を除く全員が沈殿

8/4 雨

<ピバーク> 川上、中村

・二股で行う。雨が降って本当に寒かった。

<源次郎I峰、中谷成城大ルート敗退> 光永、青木

BC(4:40)～取り付き(6:10)～敗退決定(11:00)～BC(13:00)

・ルートが濡れており、フリー主体の中谷ルートは非常に困難。天候も悪化してきたので、三本目で敗退を決定。

<遠足:北方稜線の一部> 寺田、溝西

BC(4:50)～剣岳(8:10)～小窓(2:20)～BC(4:50)

・平蔵谷を登り剣岳山頂へ。小窓より雪渓下降。ルートファインディングの難しい、厳しいルートであった。

<A フェース魚津高ルート>

藤田、山田、中西

取り付き(9:00)～終了(12:00)

・問題なし。

8/5 晴後雨

<丸東塚田小暮ルート偵察> 光永、青木

BC(5:00)～ハシゴ谷乗越(7:20)～取り付き(11:00)～BC(15:20)

・丸東はさすがに威圧感があった。

<別山遠足>

寺田、溝西、山田

出発(6:00)~別山(9:20)~BC(12:40)

・城砦のごとき剣岳の様に改めて感心する。
帰りの途中、剣沢の小屋の跡で一時間ばかりの快適な昼寝を楽しむ。

<A フェース魚津高ルート> 川上、飯田

BC(5:00)~取り付き(7:30)~BC(12:00)

・先行パーティーの順番待ちが長く、敗退を決める。

<A フェース中大ルート> 前田、尾崎

BC(6:00)~取り付き(8:40)~終了(10:00)

8/6 雨のため沈殿、またこの日 OB の柄尾さん入山。

8/7 晴後曇

<A フェース魚津高ルート> 川上、尾崎、中村

BC(4:30)~取り付き(6:30)~終了(9:15)~BC(12:00)

・ルートは快適。下降路も下りやすい。

<D フェース久留米大ルート> 光永、前田

BC(4:20)~取り付き(7:40)~終了(10:00)~BC(12:20)

・核心部はA1。特に問題なし。

<D フェース富山大ルート> 寺田、藤田

8/8

<雪訓> 寺田、川口、溝西、山田

・帰りの楽しみであるグリセードによる下降を再びあじわおうと長次郎雪渓を下る。不幸にして雪はざらざらに凍りつき滑るどころではなかった。早々に登るのを中止し雨の中を引き返す。

8/9

<下山>

・台風の接近がラジオで分かったので、早

めに下山することにした。それにしても天気にめぐまれない合宿だった。

夏山縦走合宿

夏山縦走合宿

南アルプス縦走

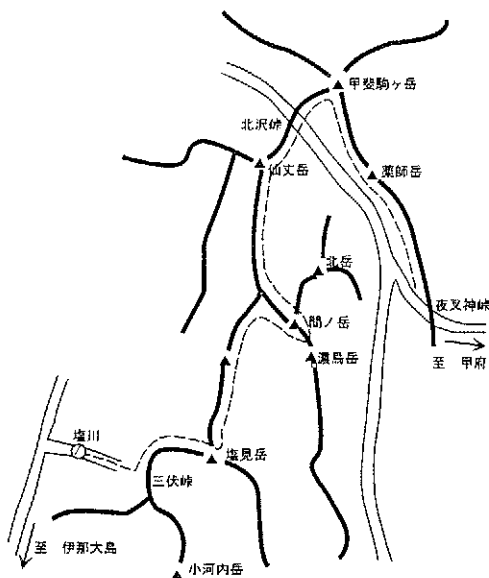
参加者：飯田、溝西、青木、給田

8月11日(晴れ後雨)夜叉神峠入山

朝一のバスに乗ればよかったのだがお金が無かったので銀行が開くのを待って11時半夜叉神峠到着、ちょっとバス酔いしていたので12時迄休んで出発、オーダーは飯田、給田、溝西、青木。ゆるい傾斜の巻き道がだらだら続く、天気がよく、かいた汗をTシャツから絞る。いったん杖立峠を登ると南御室小屋まではゆるやかな道が続く。南御室小屋直前から雨が降り始める。

8月12日(雨)南御室小屋

前日の雨でダンロップ六人テントはズブズ



ブで重い。薬師岳への登りが意外に堪える。始終降りつづける雨に気分も暗い。地蔵へは赤抜沢ノ頭手前で荷物をおいてピストン、オベリスクは近くに寄ってみれば確かに鋭く突き出ているが、雨の為展望はなく、少し離れるとオベリスクも見えなくなる... 悲しい。この日は頑張って早川尾根小屋まで歩くが、五時にテン場につくと設営できるスペースは既に無く、しかたなく黙って(テン場代をけちるつもりもあって)小屋の横に設営したが後で怒られる。ずっと雨。

8月13日早川尾根小屋

朝から雨、暗い気持ちのまま出発する。尾根の登りは相変わらず樹林帯の中を進む。アサヨ峰に着くころ俄に晴れ始め、頂上では甲斐駒の白い姿が望め、来た道には鳳凰三山のなかにオベリスクが空を刺している。明るい気分が仙水峠への樹林帯の急な下りをいっきに下る。仙水峠で鋸岳アタックの為、いらぬ装備を切り詰めて飯田のキスリングに置いて残置する。雨天時は沢になりそうな非常に急な駒津峰への登りを飯田がどンドン飛ばす、駒へは先に魔利支天からのぼる別に危なくはないが、溝西が駒津峰からの疲れでしゃりばて状態になる。この頃からまた雲行きが怪しくなり霧雨が降り始める。強風とガスのなか駒山頂に立つが何もみえず、帰りの展望に期待して六合石室へ下る、この下の途中には切れたところや鎖場が少し有り、重荷の時は気を付けたい。六合石室は床はないが屋根と壁はしっかりしておりなかなか快適、神戸大学の人と一緒になる。水場は下って30分のところにあるがなかなか遠かった。

8月14日六合石室(大雨)沈殿(飯、ラーメン半分づつ)

8月15日六合石室(雨)

このまま晴を待つのは日程の無駄と見て鋸アタックは断念、雨の中甲斐駒を登り仙水峠に下る、昼頃から少し晴れ始めるが、甲斐無し。仙水峠からゆるい下りを北沢長衛まで下る、途中の小屋で餃子の匂いがしてレトルト一色の食生活を送っている者にはこたえた。

テン場に着くころには雨もやむ。

8月16日北沢長衛(雨)

朝からまた雨、少し雨足が弱まるのを待って出発、仙丈への登りは小仙丈への登りは超急な斜面の巻き道、所々崩れたところもあるが問題なし。急坂を登り切ってしばらく岩稜帯を偽ピークに数度だまされながら大滝の頭につく、展望は無し、風雨有り。ここの道はロープがはって有った。相変わらずの雨の中を仙丈避難小屋が立派なことを祈りつつ小仙丈をこえ、仙丈へ。この日は仙丈へは登らずに小屋へ。小屋は立派なのとぼろいのが二つ建っていたので当然立派なほうへ、しかし雨漏りがする... うーなんて小屋だ。

8月17日仙丈避難小屋(大雨)

沈殿、沈殿の為食料は半分、暇なのでシュラフにくるまっていると北沢峠から入山したらしいおっさん達がやって来て突然焼肉を始める。牛肉らしき香りが小屋に充満して、我々の飢えた胃袋を残酷に刺激する。結局一片の肉も分けてもらうこともなく、「肉だけで腹いっぱいだな～」の台詞に拳を噛みながら眠りについた。

8月18日仙丈避難小屋(雨)

前日とそう変わらない雨ながら、これ以上の沈殿は計画に差し支えるので出発する。岩礫地を少し登ると仙丈岳に着く、この辺

になると展望が無いことは当然のように気にならなくなる、仙丈岳をすぎて少し下るとまた南アらしい樹林帯に入る、昼前には雨が止み、稜線からは北岳が木々の間から見える。野呂川越への急な下りとそこからのまあまあ急なながい登りをクリアーすると三峰岳を経てすぐ間岳へ、ここからの農鳥小屋への道は大小のがれがれ、下りでは足をくじかないように気を付けて下るが、延べ4、5人転んでいた。

8月19日農鳥小屋(曇のち雨)

農鳥岳アタックの後悪天を理由に北岳も却下してトラバース路を利用して熊の平小屋へむかう。熊の平山荘は村営で新築のきれいな小屋だった。熊の平からの道はしばらくほぼ水平、途中営林所のおっさんが開いたらしい勝手なわき道があるが、迷い込んでも引き返せばすぐに分かるだろう。こののんびりした道に慣れた身体に最後の上りは急に感じられたが実際にはそれほど急でも無かったみたいである。水場は二十分ほど下った所にあるが、とりかぶとを含むとってもきれいなお花畑の下からわき出ているのでちょっと怖かった。この日テントを張ってしばらくすると明治大学山岳部の大パーティーがやって来た、ゲロ天一張りダンロップ天二張りで一年生が上級生に(まさに)こき使われていた、食事の支度にすごい時間をかけ、最後に明日の弁当を作り終えた時には既に12時をまわっていた、すべて一年生の作業である、しかも翌朝には4時に起床し(一年のみ)5時過ぎには出発していた。そのなかに「弁当は上級生に晩飯配ってから作れ！」とか「なによ〜ここ私のねどこなのよ〜汗こぼさないでよ〜」などと文句垂れ流しのお姉ちゃんが

たのでちょっとしばきたくってウズウズしてしまった。山に入ったら自分のできる事は進んでやろう。

8月20日北荒川岳(快晴のち曇)

遠くに富士山が見えた(気のせいかな?)。明大パーティーに後れを取ることに30分、出発する。三十分ほど歩いて北俣岳への上りで、かけごえを絶叫(変な表現)しながら登っていく所を追い越す。北俣岳で小休止の後塩見へ、この日給田は左足の調子が悪く、飯田は腹が気持ちが悪く言い出す、給田の足に合わせながら塩見を下る、この樹林帯の下りはお花畑に囲まれて女の子と歩いてたらどれほど楽しいだろうなあ、写真なんか撮っちゃったりして・・・などと妄想を旗めかせながら下る。下りが一段落したところで水場に自縛霊のようなおばちゃんが出た、がそんな話はいい。ここからしばらくトラバースの後、本谷山への上り。かなり長いトラバース、頂上では女の子のピクニック集団みたいなのがお菓子を分け合っていた「おれにもくれ〜〜」という心の叫びを無視しつつ三伏沢小屋へ、ここは水場も近いが便所も近くちょっと臭い。沢沿いなので大雨の日は上の小屋にした方がいいだろう。この日飯田の腹の悪さは極限に達し折角の茸ご飯も食べられない状態であった、話し合いの結果飯田だけを下山させるわけにも行かないという事で、次の日全員塩川に下山する事になった。この結果余った食料で飲食パーティー・・・なのだが飯田は食べられない・・・が・・・非情にも我々は少し飯田に遠慮しつつもめしを炊きまくるのであった・・・。

8月21日(快晴)三伏峠〜塩川下山

_夏らしい強い日差しが湿った落ち葉のう

えに木漏れ日を作る朝、我々は最後の天場を後に帰路についた。いつものごとく青木、溝西は下山パワーで飛ばしまくるが、さすが山行歴の長い青木は後が続いていないのに気遣って止まるが喜びにうかれた溝西はみんなより一時間も早くバス停に降りこの報告書の一部を書いているのであった。

文責、当然溝西

後立山縦走

期間：8月11日～8月15日

参加者：中西（CL）、尾崎、磯部、山田

8月11日 ● 柏原新道出合（11：30）～冷池山荘（17：00）

明日以降の天候悪化を鑑み、電車の中で急きよこの日入山を決定。種池山荘、爺ヶ岳付近で大雨、強風に遭遇、大幅に計画が狂う。後日、この日は、他の北アルプス山域で強風にあおられ尾根から滑落という事故が2件程発生していた事を知る。それにしても途中で山田が疲れたからといって自分のザックを爺ヶ岳のふもとに残置、それを冷池山荘から豪雨の中取りに行かされたのには参った。テント設営にも強風、暗やみで手間取り就寝は10時頃。明日の行動は無理と判断。

8月12日◎→○ 明日の八峰キレット越えのため沈殿。

8月13日◎→● 冷池山荘（5：00）～鹿島槍ヶ岳（7：00）～五竜山荘（15：00）

八峰キレットは去年同コースを通り、全行程で一番の核心と確信、気を引き締めるも、鹿島槍下山中に山田が滑落、2回転ほどして私の上におちてきた。幸いにも怪我はなかったものの、後に待ち受ける関門を

前に暗澹たる気持ちになった。五竜を前にしてまたしても雨。

8月14日● 雨と霧で視界0。沈殿。明日は五竜遠見トレッキングコースから下山を決定。

8月15日◎ 五竜山荘（5：30）～南神代駅（14：00）

下山路に指定した五竜遠見トレッキングコースはトレッキングコースとは名ばかりの猛烈なブッシュ道で、それがえんえんと続くうんざりするものだった。山のふもとまでダラダラ続く下り道と、横でパラグライダーにいそむ奴等を見ては、陳腐ながら“翼があれば…”と思ったものだ。山行（こう言うのもおこがましいが）を終えて考えた事は、結局、山田が怖かった、（正直、私の初リーダー山行ということもあり、やっぱり事故は恐ろしかった。）ということだ。去年ここを通った自分にとって、終わりゆく夏の日本海を他隊員に見せてやれなかった事が残念でならない。きつい提言かもしれないが、山田には、他隊員に迷惑をかけない程度の馬力は身につけて欲しい。“山岳部”として活動するかぎりは…。

（記 中西）

赤木沢縦走

室堂～五色が原～薬師岳～赤木沢～折立

期間：8/11～8/14

参加者：藤田(C.L)、川上(S.L)、寺田、川口、中村

8/11 雨 富山駅（5：25）～室堂（8：10）～五色が原～スゴ乗越小屋（16：30）

出発前から強い雨が降り、ガスのため道もよく見えず、浄土山からの下りで道に迷

個人山行

った。幸い五色が原へ着く頃には風雨も弱まってきたが、道が悪いためかなり苦勞しつつスゴ乗越小屋に着く。しかし余り整備されていない天場には驚かされた。

8/12 快晴 スゴ乗越小屋 (6:10)～間の岳 (7:00)～北薬師岳 (8:15)～薬師岳 (9:00)～太郎平小屋 (14:15)

前日とは打って変わり雲一つない晴天。途中、薬師の辺りでは少々きつめの風も心地よく感じられた。黒部川にてキャンプ設営後、何かの係員に注意を受けたものの、それ以外は何事もなく、実に楽しい一日であった。

8/13 晴れ後雨 出発 (5:30)～赤木沢出会 (7:20)～大滝 (9:30)～中川乗越 (11:00)～薬師峠

最初は冷たい水につかるのを嫌がっていたが、慣れるとなかなか楽しく、腰までつきりながら漕いでいく。赤木沢の出会いの直前でコースを間違え、そのために藤田が滝壺に落ちるといったアクシデントもあったが、他にはこれといった危険もなく順調に進む。沢を上り切ったところで天気が崩れだし、この日はテントの中の湖で寝ることになった。

8/14 雨 薬師峠発 (7:55)～折立 (10:10)

雨の中をひたすら下る。折立では世間の目が冷たかった。そこからバスで有峰口へ行き、富山地鉄で富山に戻る。今年の夏はずっと富山にいたような気がする。

記 川口泰宏

個人山行

明星山南壁マニフェストルート

期間：9月23日～9月24日

参加者：三年 光永(L) 畑 (O.B)

9月23日 晴

起床(6:00)～取り付き(7:30)～終了点(14:00)～帰幕(18:00)

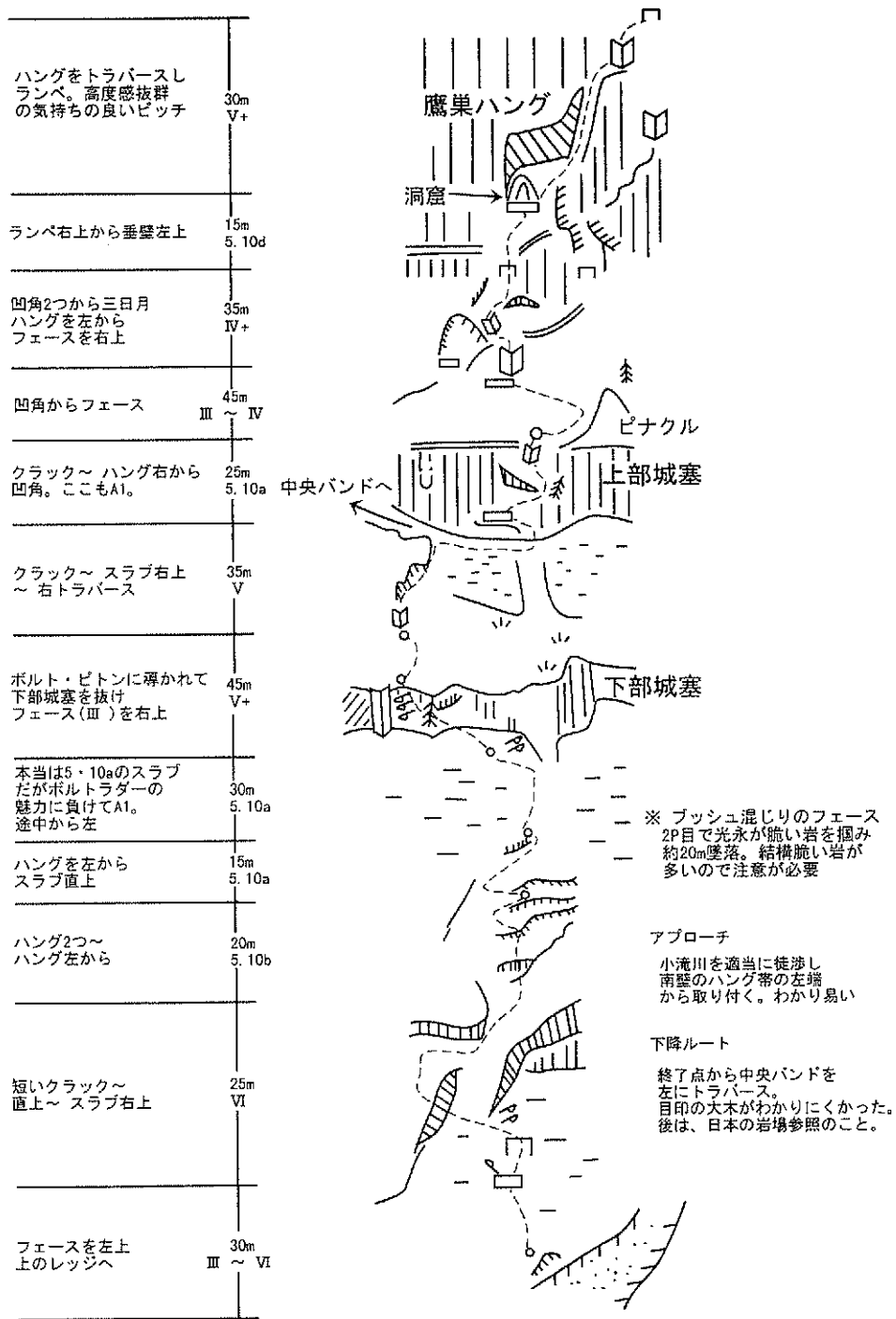
核心の5.10dはフェースっぽいスラブだったが、A0で抜けた。ランニングがハーケンだったことと高度感から足がすくんで動けなかった。鷹ノ巣ハングの乗越しはバンド沿いにいけば難しくはないがすさまじい高度感を味わえる。そこから2ピッチで終了点。終了点から緩斜帯をアンザイレンで行った。光永が途中脆い岩をつかみ約20m落下したが、幸い足をくじいただけで自力で帰幕できた。本当に運が良かった。下降路は迷いやすいので要注意である。その夜は温泉に入りに行ったが、光永は怪我のため水風呂しかつかれなかったのに、畑はゆっくり湯につかって、おい光永、気持ちええぞ、と勝ち誇ったように叫んでたのが妙に印象に残った。

9月24日 晴

光永の怪我のため帰ることにした。皮肉にも空は澄みきったように青かった。

(ルート図は次項)

(記 光永)



明星山南壁 マニフェストルート

白山

加賀一宮～白山一里野～長倉山～奥長倉避難小屋～四塚山～七倉山～大汝峰～室堂～南竜ヶ馬場～別山～三ノ峰～六本松～鳩ヶ湯～越前大野

期間：10月10日～10月13日

参加者：飯田、青木、中村

10月11日 天気曇

白山一里野(10:00)～桧新宮参道(10:50)～しかり場分岐(14:00)～長倉山(14:10)～奥長倉避難小屋(15:20)

この日の道は階段のようになって非常に歩きにくい。長倉山まで結構長い。曇りで何か気分的にもくらい一日だった。ちなみに今日の避難小屋はとても快適であった。

10月12日 天気曇

奥長倉避難小屋(5:30)～天地室跡(8:00)～四塚山(11:10)～御前峰(14:40)～室堂(15:30)～南竜ヶ馬場(16:20)

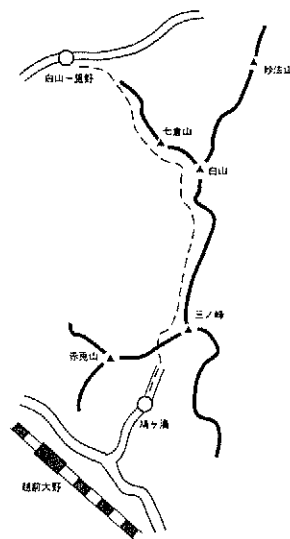
日の出を見ながら登ってゆく。百四丈滝の展望台で休憩をとる。それにしてもいい感じのところだ。大汝峰をこえて血の池のほとりでマウンテンバイクに乗ってきている人に会う。よくやるな一というかんじだ。昼寝をしたいと二人とも言うので一時間ほど昼寝の時間をとる。自分はただ寒かっただけだが……。ここからは白山の御前峰は近い。御前峰では人が沢山いた。この季節でもこんなに人がきているとは……。室堂までずっと人が多い。それから今日の天場の南竜ヶ馬場に向かうが途中で自分の靴が壊れる。まいったものだ。両足共にソールが前半分はがれてしまう。だままだまし歩きながら何とか着いた。取り敢えず針

金で修理する。夕方になってとても寒くなったと思ったら雪が降ってきた。今年初めての雪であった。夜はきれいに星が見える。

10月13日 天気晴

南竜ヶ馬場(6:00)～別山(8:40)～三ノ峰(10:00)～六本松(12:40)～上小池(1:30)～鳩ヶ湯(4:20)

やっときっちり晴れてくれる。別山まで結構長い。別山で記念撮影をしたらもう下山気分となる。三ノ峰までひたすら歩く。そこからずんずん下ってやっとのことで六本松につく。ここから林道まではもうすぐ。途中で靴を修理したところの針金に靴を引っ掛けてしまう。勢いよくこけたが運良く何ともならなかった。林道についてからはただ延々と道路を歩いてゆく。長い……。へろへろになってバス停へつく。バスが来るまでの時間であまった食料を食べる。なんか犬が近寄ってくる。自分は犬がきらいなのでいやなのだが。向こうはただの好奇心らしい……。そしてバスがやってきて帰れることになる。



白山周辺概念図

春山偵察合宿

石鎚山 縦走

期間：10月12日～10月15日

参加者：尾崎(L)、給田、磯部

10月12日◎

打除(9:40)～銅山越(13:10)～中七番(17:00)

銅山峰の尾根を登っていると、ところどころに煉瓦造りの廃屋や廃坑があり昔を偲ばせる。銅山越から笹ガ峰に行く予定であったのだが道がなくなっており、いったん中七番におりた。

10月13日○

出発(6:00)～笹ガ峰(10:20)～伊予富士(14:50)

中七番から一ノ谷越への道は一部崩壊していたが強引に通過した。乗越しから笹ガ峰までは一面に熊笹の生い茂る稜線が延々と続き、快適な山行となった。伊予富士に着く頃には林道がすぐ近くにきた。

10月14日◎

出発(5:00)～伊吹山(11:30)～石鎚山(14:00)

伊予富士から道は林道と平行しており時には林道を歩くことにもなり、意外に早く石鎚山にたどり着けた。平日なので小屋は閉まっていて雨水しか使えなかった。

10月15日◎

出発(5:30)～面河(9:30)

石鎚山からの下りは道が分かりにくかったがほどなく川沿いの林道に出られ、そこからは面河溪谷の景勝を鑑賞しながら下山した。

偵察合宿

表銀座～上高地縦走

中房温泉～大天井岳～蝶ヶ岳～長堀山～上高地

期間：10/30～11/2

参加者：寺田 青木 尾崎 川口 磯部 山田

10/30 雨 中房温泉(7:30)～合戦小屋(11:00)～燕山荘(12:30)

穂高駅ではタクシーを予約していなかったのではし順番待ちをしなくてはならなかった。中房温泉は、季節柄表銀座の起点にもかかわらず閑散としたものであった。しとすと降り続けている小雨に気を滅入らせながら登山届けを書き終え登り始めた。雪は少なく合戦に着く辺りからやっと現れ始めた。雨に打たれながらどえらく寒い思いをしながら高度を稼いでいった。燕山荘が見え始めるとやっと暖まることができる。無論冬期小屋を利用して頂くつもりであったのだ。だが何と山荘は営業していたのだ。がっかりしつつもしぶしぶ幕営料を払い眠りについた。

10/31 快晴 出発(6:30)～大天井岳(11:00)～常念乗り越し(14:00)

本日の蛙岩、為右衛門岩、切通岩、そして大天井岳の登りが今合宿のポイントなのであった。そのうち2つ、蛙岩と大天井岳がどうも雪の着いた状態ではどう通るのか不安であった。先輩方の経験を開けば良かろうと思うことにした。

東天井岳付近にて猿の群れと遭遇した。稜線上で烈風に耐え、佇んでいるその姿は驚

嘆の感を我々に与え、かつ奇異の念を引き起こし、さらには窺われているかのごとき圧迫感を我々に与えるに十分なものであった。

常念小屋が見えた辺りでちょっとした不安を覚えた。どうも発電機を動かしているらしい匂いが感じられたのである。はたしてここもまだ営業していたのであった。またもがっかりしつつ眠りについた。

11/1 曇り 出発 (5:40) ~ 常念岳 (7:40)
~ 蝶ヶ岳 (13:20) ~ 蝶ヶ岳ヒュッテ (14:20)

強風の中常念岳を登り始めた。雪庇は東、信州側に現れると考えられた。常念岳ピークよりの下りは急であり積雪が多いであろうと考えられる春について不安を感じざるをえなかった。他に特に注意すべき危険箇所はなかった。

11/2 快晴 出発 (6:35) ~ 徳沢園 (10:00) ~ 上高地 (12:00)

朝焼けの槍、穂高連峰に別れを惜しみつつ、下山パワーで一路上高地へと辿り着いた。バスは五日か六日まで入るとのこと。

(記 寺田)

早月尾根

別冊の時報を参照

南アルプス鋸岳縦走

期間：10月30日～11月2日

参加者：光永 (L)、溝西、絵田

10月30日 ● 北沢峠出発 (12:20) ~ 赤河原 (13:40) ~ 角兵衛沢とりつき (14:00) ~ 岩小屋 (16:09)

戸台口から北沢峠までバスで入る。朝から雨が強く降りつづき1ピッチ目からずぶぬれになってしまう。赤河原まで下り、戸台川に沿って角兵衛沢に向かうが思わぬ水流で渡しようするのに苦労した。角兵衛沢ののぼりは道がはっきりせず、ときどきめにつく赤布をたよりにのぼっていくが、かなりしんどく日も暮れてくるので予定のテン場に到着しないまま大きな岩のかげでテントを張る。

10月31日 ○のち◎ 出発 (7:10) ~ 大岩下の岩小屋 (9:20) ~ 角兵衛沢のコル (13:10) ~ 第一高点 (13:30) ~ CS (14:10)

出発してからコルまで急なのぼり。しかもコルまでのピッチは足をだせばすぐずれてしまうガレ場で、非常にあるきにくい。しかし天気は快晴で、きのうの雨がうそのようだ。コルのちかくは風がきつく寒い。雪はまったくないが第一高点まで慎重に上った。明日にギャップの通過をひかえているので今日にははやめに行動を終え、第一高点を少し下りたところでテント設営。

11月1日 ○ 出発 (6:30) ~ 小ギャップ通過 (7:20) ~ 風穴通過 (9:30) ~ 大ギャップ手前 (10:30) ~ 大ギャップ通過 (12:20) ~ 第二高点 (13:00) ~ 六合目石室 (16:30)

幸いにも天気は快晴で、南アルプスの景色がすばらしい。小ギャップへの懸垂はしっかりしたアンカーがありさほど問題はない。しかし落石には注意。おりたらすこしのぼりかえし、切り立った稜線をFix通過で鹿の窓まで移動する。風穴を懸垂で通過し、出たところからもう一度懸垂下降。信州側のガレた斜面に下りる。大ギャップは

ここにもしっかりしたアンカーがあるが、なにしろ風がきついのでザイルを盲く垂らすのが難しかった。下りたら信州側にもう2ピッチ懸垂して、そこからまた登り返し第二高点に到着する。このへんからは夏道を通り、中の川乗り越しを越え、六合目石室までひたすら歩く。

11月2日 ○ 出発(6:30)～甲斐駒ヶ岳頂上(8:20)～黒戸尾根七合目小屋(10:10)～横手口(15:20)

甲斐駒ヶ岳の登りは岩稜で、所々危険な場所もあり、しかも偽ピークが多いと来れば頂上に着いたころはみんなふらふらである。しかしこの日も晴れわたり、頂上では360°のパノラマが楽しめた。黒戸尾根の下りはただらと永遠に続くかのような長さでうんざりしたが、何とか最後の力を振り絞って足を進め横手にたどり着いた。

中崎尾根～槍ヶ岳

期間：10/30～11/3

参加者：川上(L)、赤井、中村

10/30 雨 新穂高温泉着

10/31 曇り時々あられ後雪

新穂高温泉(6:30)～中崎山(9:30)～1800m(13:30)

キャンプ場からの登りはまさに廃道といった感じで結構しんどかった。中崎山手前のトラバースは道の崩壊が進んでおり、非常に細く濡れた落ち葉に足をとられて苦労した。所々、小さな沢を渡るための木の橋があったが完全に腐っており、上に乗るとすぐに折れてしまった。中崎山のピークは腰までの笹原でありそこからしばらくは前のパーティーの打った赤旗に導かれて、

ほぼ水平な道を進んだ。再び急登が始まりそれを登りきって平坦なところでたところてんとテントを張った。午後三時ぐらいから雪が積もり始めた。

11/1 ガス後快晴 1800m地点(7:00)～奥丸山(12:00)～千丈沢乗越手前(13:00)

昨日の疲れから4:00起床のつもりが4:30になってしまった。奥丸山手前のクレットはかなり危険であった。クレットの長さは10mほどだがクレットの底までの下降はかなり急であった。しかし残置fixがあったので、ザイルを出すことはなかった。クレットから20分程登ると奥丸山であるが頂上はかなり狭かった。ここからは夏道の上に雪が少しついたところを快適に一時間程歩くと西鎌までの道が見渡せたがこの地点より先は尾根の幅が狭く雪も少ないので、ここでドンすることとした。ドンしてから一時間ほどすると快晴となり、槍から北穂までの稜線が美しかった。

11/2 快晴 テン場(5:30)～千丈沢乗越(7:30)～槍ピーク(9:00)～テン場(11:30)

千丈沢乗越への登りはかなり急で積雪期は雪崩に注意したほうがよさそう。西鎌は所々細いところがあるものの特に問題はないが、雪庇らしきものが千丈沢のほうにできていた。また肩への登りはかなり急であった。今回は雪が穂先になっただけでなく登れた。30分ほどくつろいでからテン場へは2Pで下れてしまった。

11/3 快晴 テン場(6:30)～槍平小屋(8:30)～新穂高温泉(12:30)

中崎尾根から槍平への下りは道がかなりの長さにもわたって崩壊しており、とても道とよべるようなものではなかった。槍平小屋から新穂高温泉まではただの林道で秋の

紅葉をたのしみながらてくてくと下った。
もちろん下山後は温泉にはいりのんびりとくつろいだ。

冬山合宿

冬山合宿 白馬大池

期間：12/25～12/30

参加者：三年 川上 (C,L), 藤田 (S,L)、
寺田、前田、光永、二年 尾崎、青木、中
西、溝西、川口、一年 給田、中村、赤井、
磯部

12/25 晴れ後雪

9:25 ゴンドラ終点～15:03 天狗原

TOTAL13名での入山だが一年生は新歓
で入山したこともあり、上級生にとっても
数回目の道なので問題なし。

7:45 ビバーク隊出発 (光永、藤田、磯部、
中村)

12/26 快晴

4:10 ビバーク隊帰幕、無線訓練 7:10～
8:30、雪練 9:00～11:20、搬出訓練

11:20～12:20、帰幕 12:40、移動設営、15:10
行動終了

雪訓は乗鞍への登りを使って行う、つい
でに雪洞訓練も行ったが、予想以上に雪を
掘るのは疲れる、実際に使うにはかなりの
体力の余裕が必要と感じた。この日は良く
晴れてとても気持ちがいい、夕方には雪に
夕焼けが映えてきれいだった。

12/27 雪

5:00 起床～7:30 BC 発～12:00 乗鞍岳頂
上～12:40 白馬大池

少し吹雪なか出発したところ、乗鞍への

登りは粉雪の流れる少し危険な状態で、数
メートル先のトレースが消える始末だった。
平坦な乗鞍頂上で少し迷ったが、コンパス
を頼りに進む、アイゼンバンドが切れたも
のがいた。終始ほぼ腰までのラッセルだっ
た。

12/28 雪 沈殿

12/29 晴れ

4:00 起床～6:30 出発～8:40 小蓮華～
10:10 白馬岳～14:30 T.S 着

小蓮華までは問題なし、小蓮華で一年生
と一部三年生は別れて白馬アツクへ向か
う。白馬手前の二度程度の急な登りが少し
危なかった他は問題なし、ただ全体にペー
スが早くトップがセカンド以降を見ていな
いことがあったのは反省すべきだと思っ
た。全行程天気が良く、春よりも快適なアツ
クができた。

12/30 晴れ

7:10 B.C 発～11:00 までフィックス
工作練習 12:25 B.C 発～15:15 ゴンドラ
乗り場

明日以降の天気がおもわしくないよう
なので早めの下山を決定する。天気もよ
いのでショートカットを繰り返しながら下
りる、下山ペースは良かったがもう少し一
年生を見るべきだったと思う。

プレ春山合宿

プレ春山合宿 大山

参加者：三年 光永(L)、畑(O.B)、畑田(広島
山の会)

日程：2月11日～2月13日

2/11 曇時々雪 入山

10:00 大山スキー場駐車場→14:00 元谷小屋

米子駅で光永、畑、畑田が合流。元谷小屋に向かう。光永は小屋までの4ピッチの道のり(スキー客の真っ只中)をキスリングフルオープンの重荷だった。畑さんと畑田さんは50%ザックだった。

2/12 吹雪

7:00 元谷小屋→11:00 敗退決定→16:00 帰幕

吹雪で登攀は断念。せめて頂上だけでもと思い夏道ルートから頂上をめざすが、股までのラッセルと立ってられないほどの強風のため、途中で引き返した。帰りに道に迷い、スキー場の近くまで行ってしまった。光永、畑田が買い出しのためそのまま下り、畑が小屋に引き返すことにして、別れた。1、2分後、畑が雪崩に巻き込まれた。畑を含め5人埋まり、1人死亡した。畑さんには怪我はなかったものの、まさかと思うような場所だっただけにショックだった。

2/13 雪 下山

(記 光永)

春山合宿

春山合宿

中崎尾根

参加者：川上 (C.L、三年)、中西 (S.L、二年)、赤井 (一年)、中村 (一年)

期間：2/25~2/29

2/25 曇り時々雪 新穂高温泉 (16:00)

高山は悪い天気ではなかったが、新穂高温泉は半ば吹雪でどんよりとしている。まさに秘境にやって来た気分であった。新穂高温泉泊。

2/26 曇り時々雪 新穂高温泉 (6:30) ~ 中崎山 (10:00) ~ 1670m 地点 (13:30)

中崎尾根の末端から出発。雪は深くない。所どころに踏み跡があり、ルートを見極めるのは楽でどンドン歩く。視界はそれほど悪くないが、遠くの山は見えない。笠ヶ岳の方の山の斜面が時々見える程度である。中崎山を越えて、しばらく進んだ所で幕営。

2/27 曇り時々晴れ B.C (7:00) ~ キレット手前 (13:00) ~ 奥丸山 (13:30) ~ B.C (15:00)

樹林帯を黙々と歩く。レーションがすぐになくなるため後半は苦しい。意外と早くキレット手前にやって来た。幕営地を定め、それから奥丸山へ。なんなく登頂、戻るときは、一か所、念の為懸垂下降する。夜は天気が良かった。

2/28 快晴 B.C (7:00) ~ 新穂高温泉 (13:00)

日程の都合上、下山開始。天候が非常に良かっただけに惜しい。中崎尾根ぞいに下山。登りの倍ぐらいのスピードで下山する。最後の方はシリセードの連続で面白かった。新穂高温泉まで着いてしまったのは、意外であった。温泉に入りのんびりする。

2/29 雪

早くも悪天に戻ってしまった。が、下山するので、もはや関係ない。

鋸岳→甲斐駒ヶ岳

参加者：四年 光永(L)、藤田 三年 溝西

二年 給田

日程：3月19日～3月22日

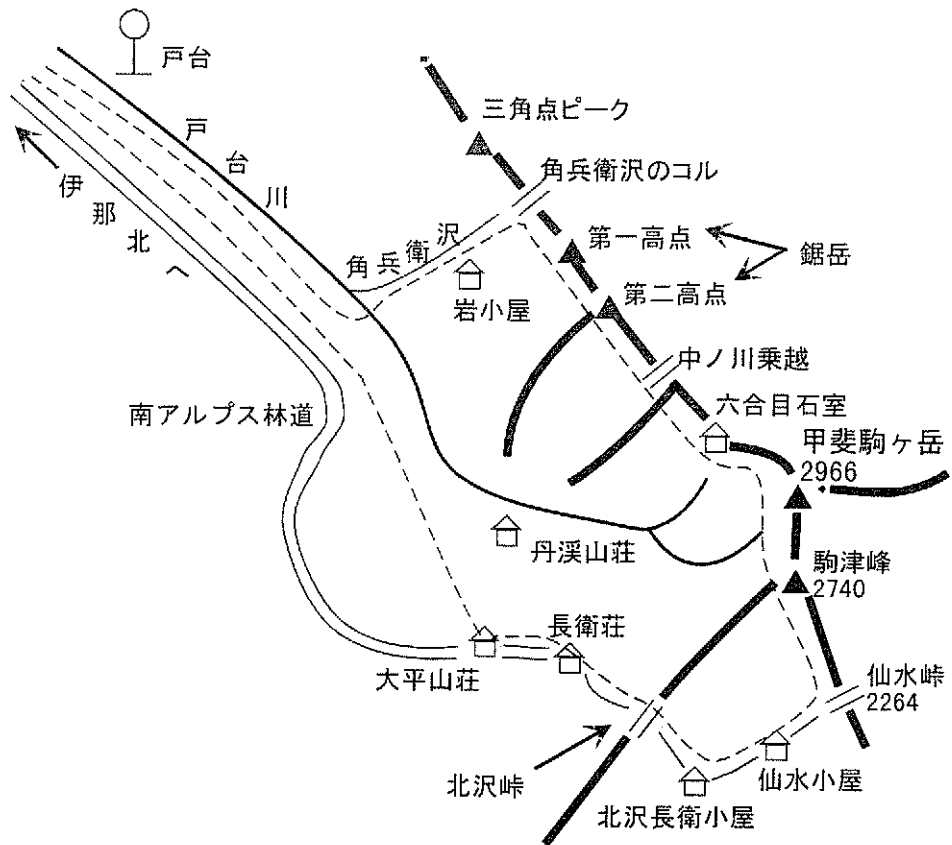
3/19 快晴

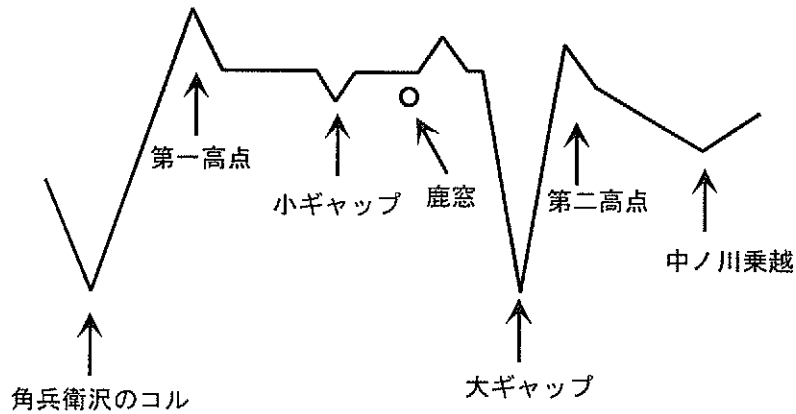
6：10戸台発→9：20角兵衛沢出会→
14：00大岩の下の岩小屋

最初、丹溪山荘まで行ってしまい、引き返す。一時間のロス。途中の徒渉で藤田と給田が川に落ちた。幸い怪我はなかったが、

注意しなければならない。角兵衛沢に入ってから光永がこけて口を切り、鼻血を出した。油断から生じたのだろうか。とりあえず14：00に天場につき、鍋をつついた。角兵衛沢は偵察の頃と違い、雪が積もっていた。むしろこのほうが進みやすい。この天場は見晴らしが良く日当たりもいいので、皆くつろいでいた。ラジオと

鋸岳、甲斐駒ヶ岳周辺概念図





鋸岳断面図

天気図から明日は天気が崩れるそうなので、小ギャップを越えるかどうかの判断に苦しむ。

3/20 曇のち雪

4:00起床→6:00出発→9:00角兵衛沢のコル→11:10第一高点→12:40C.S

コルから第一高点まで4P fixし、第一高点からC.Sまで1P fixした。天気がぐずっていたので、早めにドン。テントを張り終えた後に晴れてきて、飯を食べたら雪が降った。わけがわからない天気だ。小ギャップまで偵察し、1P fixを残置した。明日は天気が良さそうなので、大ギャップを越えたい。

3/21 快晴

3:30起床→6:00出発→6:20小ギャップ手前→9:00鹿窓→10:40大ギャップ手前→13:00第二高点→13:40中ノ川乗越

撤収が遅く、昨日より出発が遅れてしまった。しかし天候に恵まれて中ノ川乗越まで行けた。小ギャップで1P懸垂。小ギャップから鹿窓まで5P fix。鹿窓は、穴を通らず直接稜線に上がった。ここで1P fix。

この1Pはパウダースノーで怖かった。懸念されていた大ギャップの1Pの懸垂(50mダブル)は、風が弱いこともあり楽勝だった。さらに2P懸垂して第二高点へつづく斜面にたどり着いた。ここからルンゼを登り返して1P、ついに第二高点に到着した。

予想に反して、鋸岳はあっけなく軍門にくだった。しかしこれで鋸岳を縦走したんだ、と思うと思わず顔がほころんでしまう。皆で握手をしてお互いの健闘をたたえあった。そして中ノ川乗越まで進み、今日はここでドン。晩飯は藤田味つけの高野豆腐風雑炊だった。これを食べるにはかなりの精神力が要求されたが、他に食べるものがないせいか、皆黙々と食べていた。

明日の午後から天気が大きく崩れるらしい。できれば甲斐駒を越えたい。

3/22 曇のち雪

3:30起床→5:30出発→9:05六合目石室→12:15甲斐駒ヶ岳頂上→13:50仙水峠→15:05北沢長衛小屋

甲斐駒はニセピークが多く、しんどかった。やっとの思いで頂上に着く。ここで光

永がこのときのために秘蔵しておいた魚肉ソーセージを皆に振る舞った。もうすこし頂上で展望と余韻を楽しみたかったが、風が強いため結局そそくさと下りた。北沢長衛小屋に着いた頃から雪が本格的に降ってきた。もしまだ上にいたら結構厳しかっただろうな、と思いながら飯を食べた。明日は下山なので、食料大解放だ。

3/23 雪 下山

山は雪なのに、下界は晴れていた。毎度のことながらとても不思議だ。

(記 光永)

表銀座

中房温泉～大天井岳～常念岳～蝶ガ岳～上高地～沢渡

期間：3/19～3/23

参加者：寺田(C.L)、青木(S.L)、川口、尾崎、磯部

3/19 晴れ 宮城ゲート (6:20)～中房温泉 (10:40)～第2ベンチ (13:05)

タクシーの運転手に今合宿の危ういことを忠告されつつも出発する。春の気配の濃い林道を進んでいく。次第に雪が面積の大部分を占めるようになり、ようやく中房温泉に着く。地熱のゆえか小屋の回りは不思議と雪がない。このときすでにほとんどのものが疲労の色を隠せずにはいた。それでも一歩足を運び(我が力試さんとして)第2ベンチへとたどり着く。天気は非常に良く気温適性であった。ゲートから温泉の間には13.5kmの距離が存在するのである。

3/20 曇り後晴れ 第2ベンチ発 (5:15)～合戦小屋 (8:10)～燕山荘 (9:45)～蛙

岩 (11:10)～大下り頭 (13:10)

朝、空は高く薄曇りであった。遅々とした進みだが確実に高度を稼いでゆく。次第に天気は好転し、稜線に出る前から晴れとなる。稜線を境として東側に雲のうず巻く眺めを楽しむ。蛙岩、バツ印のついている側を選択し、ハーケンを打ち、懸垂下降する。3m程度の下降である。これより1ピッチ進んだ大下りの前にしばしの整地を行いテントを張る。予定の鞍部は偵察に言った尾崎によると狭すぎるとのこと。予想通り雪は少ない。しかし、遠望する大天井岳が岩雪を持って不安を歓喜するように圧巻を持ってそびえている。

3/21 快晴 大下り頭 (6:00)～切通岩 (7:35)～大天井岳 (9:10)～常念乗越 (12:15)

依然として行動中は快晴であったが昨日とは打って変わって非常に寒い。切り通し岩はクライムダウンで通過できた。大天井岳の登りもほとんど雪がなく簡単だった。こんどは常念岳がその威容をもって我らを圧倒しているのだ。およそ雪の量が少ないため、計画より早く常念乗越に着くことがなかった。まだ日没まではだいぶ時間があるが、冬期小屋に曳かれここまでする。一泊一人千円とのこと、あまりの高さに呆然とする。何やかやと理由を考えることにする。愚かなことに大半のポリタンが凍結しているのである。このようなことは今まであんまりなかったのに不思議である。

3/22 晴れ 常念乗越発 (5:40)～常念岳 (7:10)～蝶ガ岳 (11:00)～蝶ガ岳ヒュッテ (11:45)～徳沢園 (15:15)～小梨平 (18:10)

今日もまた視界を損なうほどの天気とな

らず、はっきり言えば好天である。危惧していた雪庇の発達は見られず、クラストもせず雪もそれほどない。よって上高地まで行く事にした。今これを書いているのはもはや薄暗い小梨平の入り口である。寒くなってきた、続きは後で。ミートスパゲティが素敵に旨い。もう九時である。ひたすらコールマンの生み出す火にあたる。

3/23 曇り 小梨平発 (9:00)～沢渡 (13:30)

撤収しながら山鳩とたわむれ、彼等が去ったころ出発する。昨夜少し降った雪が林道を薄く覆っている。釜トンネルを抜け中ノ湯に着いたところに穏やかに雨が降り始めた。これよりアイゼンをはずす。三人がみちすがらひたすらしりとりを楽しんでいる。私と磯部は加わる気にもなれず黙って歩く。いくつものトンネルを抜け、やっと沢渡に着く。足の裏が警報を鳴らしている。タクシーには乗れず、バスを選択する。今回は好天に恵まれ続け、計画よりかなり早く行動を終えることができた。したがって雪山を楽しむという点から見ればいくぶん面白みに欠けたとも言えよう。どうしてなれば、全般的に余りに積雪が少なかったからだ。しかしながら、やかましいしりとりのやり取りを聞き、痺れる足を引きずりながらもゆっくりと充足感に満たされていくのを感じるのであった。

(記 寺田)

白馬岳

参加者：三年 光永(L)、二年 尾崎、川口、
一年 磯部

日程：4月1日～4月2日

4/1 晴のち曇 入山

6:22 二股→10:30 小蓮華尾根取り
つき→15:30 2000m付近

雪が完全に腐っていて、思ったように進まなかった。天気図とラジオの天気予報から明日2ツ玉低気圧がくることがわかったので、敗退を決定。

4/2 雪のち曇

3:00 起床→5:00 出発→8:00 小
蓮華尾根取りつき→11:10 二股

夜半30cmの降雪があった。出発時ガスっていたが2ツ玉低気圧が来る前に下山しようと思い、出発した。降りてみると、下界は晴れまくっていた。後で天気図を見たら、2ツ玉低気圧は消滅していた。せっかく春の日本海を見ようとはるばるやってきたのに散々な出来だった。秘かに再戦を誓う光永だった。

(記 光永)

1994 年度活動記録

1994年度現役部員

C. L	光永正樹	(理・4)	[4]
	藤田哲史	(理・4)	[4]
	川上和幸	(基・4)	[4]
	前田 智	(文・4)	[4]
	寺田浩昭	(基・3)	[4]
S. L	尾崎夏樹	(経・3)	[3]
	中西英夫	(法・4)	[3]
	溝西 慎	(理・3)	[3]
	川口泰宏	(理・4)	[3]
	青木 成一郎	(理・3)	[3]
	中村 聡	(理・2)	[2]
	磯部 寛	(理・2)	[2]
	山田 茂	(理・2)	[2]
	給田俊文	(理・3)	[2]
	赤井知司	(工・4)	[2]
	加門洋一郎	(基・1)	[1]
	湯川正也	(経・1)	[1]

[]内は山岳部学年

新歓合宿

新人歓迎合宿 剣沢

期間：4月29日～5月4日

参加者：光永(L)、藤田、川上、青木、尾崎、溝西、給田、赤井、磯部、山田、加門、湯川、栃尾(OB)、田中(OB)、大倉(OB)

4月29日 雪 入山

室堂(10:00)～剣沢(15:00)

出発したときは晴れていたのだが、途中から吹雪だした。剣沢では風が強くテント設営に手間取った。

4月30日 晴のち曇

<雪訓>

剣沢上部の斜面で行う。帰幕後テント移動をした。

<前剣 剣岳>

四年 光永(L) 三年 青木

B.C 発(7:10)～武蔵の科尔(8:30)～平蔵の避難小屋(10:30)～剣岳本峰(11:30)～平蔵の避難小屋(12:30～13:00)～平蔵谷出合(13:40)～B.C(15:40)

武蔵の科尔で飯田に心ばかりのお供物を置く。ここは何度きても寂しい所だ。本峰に着いたが、ガスで何も見えなかった。しかしとりあえず雪の剣に登れたので、気分は上々だ。帰途の剣沢の登り返しがしんどい。

(記 光永)

5月1日 雪

<雪訓>

BC 付近の斜面を使って一回生以外で行う。fix 工作、スタカット、竹ペグ懸垂と田中さんの指導でコンテの練習をした。

5月2日 gas

沈殿。剣本峰はちつとも見えない。

<源治郎尾根>

5月2日 曇のち晴

四年 光永(L) 二年 磯部 大倉(OB)

B.C 発(6:30)～取付き(7:10)～1峰(11:40)～1峰下降開始(14:30)～長次郎出合(17:50)～B.C(20:00)

ガスのため視界が10m程で出発をためらったが、結局メンバーを編成しなおして出発した。取付きからのルンゼをつめたところでザイル1ピッチ。以後斜面を登ったが、ホワイトアウトして稜線が見つけられず、ルートファインディングに苦勞した。

トレースは降雪のためほとんど消えていた。1峰に着いたが1、2峰間ルンゼが見つけられず3時間ほど捜したが、結局見つからなかった。よって同ルート下降することにした。1峰から3時間のクライムダウン。すさまじい高度感と傾斜と腐った雪で非常な危険を感じた。何事もなく長次郎に降り、3名固く握手をした。帰途の剣沢の登り返しは息も絶え絶えという感じだったが、なんとか帰幕。星がキラキラまたたいていた。

(記 光永)

5月3日 晴れ

<源治郎尾根>(藤田、溝西、尾崎)

出発(5:30)～取付(6:00)～I峰(9:00)～本峰(11:50)～BC(15:00)

尾根の長次郎谷側の基部から取付く。下

部はブッシュもあり登りやすかったが、その後雪壁やナイフリッジになる。小岩峰を長次郎谷側からまくところではコンテを行い、またII峰付近の雪稜でも一度ザイルを出した。一部岩の出た急な雪壁などもあったが、天気も良く雪も安定しており快適に進むことができた。帰りは平蔵谷をシリセードでいっきに下った。

<立山遠足> (5月3日) 出発(6:00)
~剣御前小屋(7:00) ~雄山(10:00)
~BC(13:00)

今回の合宿でやっとまともに晴れたのがこの日だった。OBの大倉さんを含めた8人で行くことになる。せっかくの新歓合宿なのに一年生は初めての遠足だ。剣御前まで上がると打って変わって風が強くなり、顔が痛くなる。けれど結構人の出がありなんだか嬉しくなってしまった。周りの景色は雲が出たり引っ込んだりして時々遠くまで見渡せ、太陽の光を受けた北アルプスがきれいだ。雄山の登り下りが一年生には少し危なかったのも、神社までは行かず手前で大倉さんと別れてのんびりひきかえした。少し下をみるとスキーをしている人がたくさんみえた。

5月4日 晴 下山

出発(6:00)~室堂(10:00)

二つ玉低気圧が来ているはずだったが、風が強いだけで天気は良かった。室堂付近は観光客で大賑いだった。

プレ夏山

プレ夏山合宿

小川山

期間：7月17日～7月21日

参加者：尾崎(3)、磯部(2)

行動記録

7月17日 曇のち雨

JR 信濃川上駅(バス)→川端下(徒歩 80分)

→金峰山荘

午後 兄岩 途中で激しい雨が降り出す。

7月18日 曇のち雨

午前 兄岩

午後 雨のため沈殿

7月19日 曇

午前 マラ岩裏面フェース

午後 マラ岩表面スラブ

7月20日 晴

午前 兄岩 ラピュタの塔をさがすが見つからない。

午後 兄岩、弟岩

7月21日 晴のち曇

午前 父岩

金峰山荘→川端下→JR 信濃川上駅

感想

午後になれば必ず雨が降りそうな天気になることを除けば、涼しくて、環境もよかったのも、快適なクライミングを楽しめた。また、ルートも数多くあり、毎日どのエリアに行くのか悩んでいた。しかし、結局はアプローチの簡単な兄岩に行くことが多かった。周りで登っていた人達はうまい人が多く、難ルートをどんどんリードしていたのに対して、我々初心者はトッロープを張るために簡単なルートからまわり込んだりアブミを使ったりしたので恥ずかしい思いをした。今回の目標である

5.11 のルートをリードすることは達成できなかったが、練習さえすれば、近い将来登ることができるだろうという感触は得ることができた。

白山

参加者：給田(2)、山田(2)、加門(1)

7月17日(日) 晴れ

11:00 大阪出発～18:00 美濃白鳥

今日は給田が寝過ごして一時間おくれの出発となる。天気は終日快晴であったが長良川鉄道にのっているとき猛烈な雷雨があった。今日は駅のちかくの公園でのんびりピバーク。

7月18日(月)

4:30 起床 ～ 6:00 バスで出発 ～

7:20 上在所 ～ 8:30 いとしろ大杉

～9:00 出発 ～ 10:30 おたけり大杉 ～ 11:05 神鳩ノ宮避難小屋

天気は晴れのち曇り。林道があるいいるとき親切なおっちゃんにのせてもらう。登山口からあつというまに避難小屋について、もう先にはいかないと言うと登山客のおっちゃんにあきれられる。避難小屋には先客が一人。今日は定番のカレー。

7月19日(火)

5:30 起床 ～ 7:10 出発～ 7:

50 銚子ヶ峰 ～ 8:45 一ノ峰 ～

10:30 三ノ峰 ～ 12:40 別山 ～

15:05 油坂 ～ 16:30 南竜キャンプ場

今日は調子がよいので一日日程を縮めることにしたら、急に雨がふってきた。しかし少したつと小雨になり、キャンプ場につくころには晴れていた。山田がかっぱを拒

絶しずぶぬれになっていた。

7月20日(水)

4:30 起床 ～ 6:15 出発 ～ 室

堂 ～ 8:50 白山山頂 ～ 11:00

七倉山の分岐 ～ 15:15 白山釈迦新

道の登り口 ～ 16:30 市の瀬

今日はメインの白山の登り。室堂は立派なところでほんとに山の上かと目を疑った。白山はあつけなく登頂でき、上では雲海が一面にみわたせた。そのあと、さあ下ろうと歩きだしたが、なんと七倉山の分岐で道をまちがえてしまい釈迦新道を下ってしまう。30分ほどして気がついたがみんなつかれていてとても登り返そうとはいえず、地図で先の道を調べると今日下山できそうだと判断したため、そのまま下る。しかしこの下山路は思ったよりながく、みんな足ががくがくになりながらなんとか市の瀬についた。リーダーとしてなんともなさけない一日だった。

南アルプス深南部

蕎麦粒山～千石平～黒法師岳～丸盆岳～

不動岳～黒沢山

参加者：青木(3)、溝西(3)、湯川(1)

期間：7月16日～24日

7月16日 天気 晴

今日は出発の日だ。IBS とロッジにダッシュして買い物をし、電車で飛び乗る。給田が倉庫にきて梅田まで見送りにきてくれる。差し入れにチューハイとビールをもらう。

7月17日 天気ガス一時雷雨

大井川鉄道下泉駅～山犬の段(8:55)～蕎麦粒山(9:50)～高塚山分岐(12:00)～千石平

(18:20)

山犬の段への車道は状態が悪くタクシ一の運ちゃんは不機嫌だ。湯川は蕎麦粒山への登りは快調だったが、しばらくしての林道へ降りる分岐点あたりで疲れが見え始める。高塚山の分岐で溝西が方角を間違えて違う方向へ歩き始める。しばらく下りた後に気づいてトラバースする。少し行ってどうにもこうにも眠いので1時間ほど睡眠をとらせてもらう。少しすると、雷雨になり、また、雷も近いのでツェルトを張って待機する。うとうととしてしまう。千石平に近づいて行くに従い笹が深くなっていく。千石平は大きな木下で笹が切れていてテントは張りやすい。

7月18日 天気 ガス後雨時々晴

千石平(8:00)～房小山(13:40)～バラ谷の頭の手前(17:30)

今日も笹は深い。房小山の頂上には標識がない。三角点でそれと分かる。房小山の頂上付近は笹は浅い。それからしばらくは笹は浅いが、まただんだん深くなってゆく。なかなか進めず疲れる。バラ谷の頭の手前で時間となり、笹の上にテントを張る。

7月19日 天気 ガス時々雨午後時々晴

バラ谷の頭の手前(6:30)～バラ谷の頭(7:30)～黒法師岳(12:50)～等高尾根分岐(13:15)～丸盆岳(16:15)

バラ谷の頭への登り。相変わらず笹は深い。標識は字が消えて読めないプレートのみでガレの縁に立っている。ちなみにここからは笹は浅くなる。ガレを左に見ながら下ってゆくと鞍部に着く。鞍部から右に水場への分岐点が出ている。少し下ると水が出ている。殆どからのポリタンクに水を

満たしたのち出発する。ここの登りで湯川の靴擦れのダメージが現れてくる。鞍部からこぶを一つ越したところにテントを張れる平らなところがある。そこからだんだん笹が深くなってきてなかなか黒法師岳につくことが出来ない。黒法師岳の頂上からはガレを左に見ながら下ってゆく。ずっと進んでゆくとやつの事で等高尾根分岐に出る。それから滑りやすい下りをしばらく下ってひたすら進んでゆくと登りにかかる。登りきってしまったら丸盆岳の頂上だ。ガレ場が頂上付近まで続いている。今日はそこにテントを張ることにする。ちなみに黒法師岳と等高尾根分岐及び丸盆岳には立派な標識がある。去年来たときにはなかったのものでその後につくられたようだ。天気がよいので外で食事を作る。ついでに濡れたテントやシュラフなどを干す。

7月20日 天気晴午後ガス

丸盆岳(7:10)～鎌崩の頭(10:30)～鹿の平(11:30)～不動岳往復(1時間30分)～悪場(16:00)

今日は鎌崩の通過なので気を引き締めねばならない。天気は快晴で良い条件だ。但し暑いかもしれない。テント場からは昨日通ってきたところがよく見える。また、今日通ってゆくところもよく見える。鹿の平、不動岳がとても綺麗だ。テントを畳んで出発する。はじめの丸盆岳からはやせた稜線を気を付けながら下ってゆく。鎌崩への道はとても急な下りである。1ピッチかかって木の橋のようなものがかかったところに出る。去年に飯田とここまで見に来た。1つめのガレと言うものの判断がつかないので休憩中に偵察に見てくる。ここは通過することにする。急な斜面を登り、浮

き石の多いガレの縁を通過して上へと上がってゆく。稜線の通過が出来ない鎌崩れの手前の笹の平地の上で一回休憩を取る。ここから樹林の中を少し下るとガレへと出て行く道があるのでそれに沿って行き第一のガレを通過する。道をたどって行くと第二のガレへと入ってゆき、最後に滑りやすいガレの斜面と通って稜線へと出る。しばらくゆくと下りに入る直前に鎌崩の頭に着く。うれしいことにこの標識は高校の時の二年下の後輩によるものだった。鹿の平へは楽な道を下り少し登ると着くことが出来る。鹿の平のガレの縁あたりで鹿が10匹ほどひなたぼっこをしていた。近づくると一斉に逃げていった。鹿の平にザックを置いて水場を探しにゆく。不動岳への登りにかかる。低い笹で比較的登りやすい。倒木に気を付けながら登ってゆくと頂上に着く。見晴らしはよいが特にすばらしいと言う程ではない。さっさとザックのあるところへ戻る。しばらく休憩を取る。湯川の靴擦れは結構きつようだ。下りはガレに沿って行く。笹から樹林に入った頃に水をくみに行けるところに着く。汲みに行ったがひどく遠い。50分かかかる。出発すると尾根が二つに分かれているところに着く。右へ行く。左にガレが見えてくると悪場は近い。悪場には橋が架かっているがとてもではないが渡れない。(悪場の直前で右に入れば水が汲めるようだ。)悪場をすぎたところで湯川が靴擦れで動けないというので時間にもなったし、ここでテントを張ることにする。水場が近いので今晩はスパゲッティにする。寝心地は余り良くなかった。

7月21日 天気 晴夕方ガス

悪場(8:30)～六呂場山(10:30)～六呂場峠(11:30)～1762 m(13:30)～1814 m(18:00)

昨日の晩の飯で水が減っているので満タンにするために水場に汲みに行く。悪場から下降して水の音のする一番近いところに向かって行く。さっさと水を汲んで登り始める。水場の沢の左岸側は登れそうにないので右岸側を登る。登ってゆくと変なところを登っていることに気づく。地図を見ながら自分の位置を確認しながら登ってゆく。何となく不安を感じるが稜線に出るとそこは昨日水を汲みに下降したところであった。一安心して急いでテント場に戻る。そんなことがあったので出発が遅れてしまう。歩き始めるが湯川の靴擦れの調子は相変わらず悪いようでペースがあげられない。そうこうしている内に六呂場山に着く。テントは分散すれば2張ほどはれる。ごみが多い。峠へと下る。テントはかろうじて2張りはれる。そこからはやせた道で右側がガレのような地形になっている。傾斜がおさまってくると1762 mに着く。そこで最後のオレンジを味わう。とてもおいしかった。1814 mの登りは急で笹藪も激しい。なかなか疲れる。1814 mについたときには18:00になっていたのでテントを張ることにする。日が暮れるにつれてガスが濃くなってくる。とても寝心地が悪い。夜には雨も降る。

7月22日 天気晴午後(15:00頃ガス)
悪場(6:05)～1995 m(7:46)～黒沢山(12:16)
～2075 m(13:17)～2062 m(14:17)～2095 m(15:36)～2066 m(17:30)

朝、出発前に1995 mピークとの鞍部を確認する。今日は水場の関係で2066 mのピークまでは何としても行かねばなら

ない。1995 mのピーク付近は右側が2カ所ほどガレている。1901 mのピークとそれからの黒沢山への登りはかなり笹が深い。歩きやすい道は何処にあるんじゃーという感じである。2062 mピークまでは問題なし。ここから2095 mピークまでは笹が深く倒木も多い。頂上にははっきりしたものはないが、所々に赤布はある。頂上までは倒木がとても多い。頂上からは左折して少し下るとトラバースの道に入る。比較的歩きやすいトラバースの道を進んでゆくと稜線に出る。だんだんガスが出てきて雨が降りそうな感じだ。2066 mはテントが一張ほど張れる笹のないピークである。久しぶりに寝心地の悪くないテント場に着くことが出来た。今夜は睡眠がしっかりとれそうだ。湯川の靴擦れの調子が予想外に悪いので計画を変更して出来るだけ早く下山することにする。それで今夜の晩御飯は少し多めに解放する。カレーがすごく辛い。飯を食べて寝る。おやすみ。

7月23日 天気 快晴

2066 m(6:52)~2164 m(8:20)~2214 m(9:30)~林道(13:35)~ゲートから1キロの地点(18:30)

今日は快晴だ。2214 mピークから下降する予定。登っている最中でも2164 mピークから出ている尾根と中の尾根山、合地山、富士山、黒法師岳、バラ谷の頭などが見える。2214 mまでは特に問題なし。2214 mのピークはとて見晴らしがよい。ここから下降に移るので休憩を長く取る。目の前の中の尾根山、富士山、合地山などの写真を撮る。中の尾根山は目の前だが、残念ながら往復するだけの気力が残っていない。尾根沿いに急な下りを下る。上部はガ

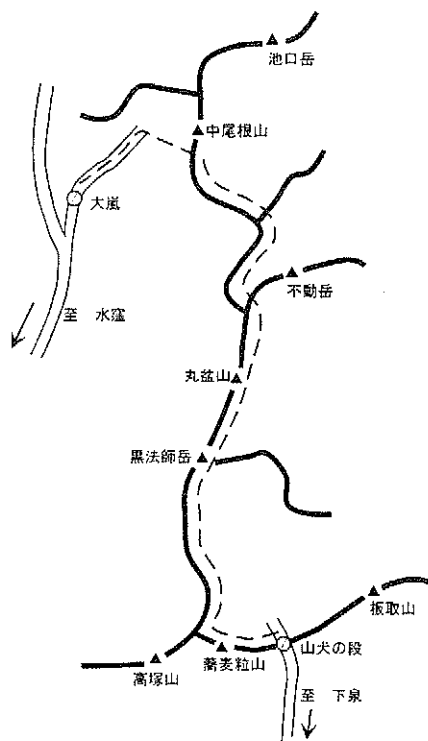
レの縁付近を通る。道は今までと比べるととても歩きやすい。樹林帯に入ると道はとても整備されている。笹のところも1メートルくらいの幅で刈ってある。途中、赤布の道は笹の刈ってある道からそれるが、その刈ってある道を行けばそのうち赤布の道と合流する。急な下降に入れば林道はもうすぐだ。林道に出ると自分の高校の山岳部の標識を見る。中の尾根山登山口と書いてある。林道の末端には壊れてしまった小屋の残骸があり、また水も近くにわき出ている。林道の状態はよい。林道を下ってゆくと営林署の小屋が至るところにある。山溪のガイドに出ていた小屋の近くのテント場の水場は堰堤のある水流のことであろう。そこで水を汲む。延々と林道を進むとカーブの所に橋がある。そこから三又山への登り口がでていいる。ここからは林道の状態はそれほど良くはない。石がいっぱい落ちている。しばらく行くと林道が陥没しているような所につく(工事中)。途中で水を汲んでひたすら歩く。そのうち行動時間も迫ってきたので張れそうな所にテントを張る。ゲートまで後1キロメートル。とりあえず上級生二人で確認に。ゲートまで行ってから帰る。今日は打ち上げだ。食べられる限り食べてから寝る。

7月24日 天気 快晴

ゲートから1キロの地点(8:30)~ゲート(8:20)~大嵐(10:20)~(車)~大野~(タクシー)~水窪(11:30)

大嵐を目指して歩いて行く。ゲートにはすぐに着く。それからひたすら歩く。大嵐はとて小さな集落でバスは一週間に一本しか来ない。公衆電話もないので仕方がないから歩く。そのうち舗装道路になる。

しばらく歩くと親切にも乗せてあげようと言う人が後ろから来た。あー、助かった。大嵐に住む人で今日は仲間と河原の岩でフリークライミングをするそうだ。深南部のことなどを話してくれた。水窪までは行かないので公衆電話で大野までタクシーを呼ぶようにとにとわざわざ車を止めてくれた。大野まで乗せてもらってからタクシーを待った。とても親切な人であって幸運だった。タクシーの運転ちゃんによれば濁水の影響はないそうだ。それにしても下界は暑い。水窪駅で電車を待つ。打ち上げは豊橋ですることにする。豊橋で風呂に入って飯を食べ、飲みに行く。それにしても閉まっている店が多い。景気が悪いようだ。打ち上げをして寝る。そして朝一番の電車に乗る。溝西と湯川を見送ってから自分は実家へ電車に乗る。



黒法師岳周辺概念図

夏山定着合宿

夏山定着 真砂

期間：7/31～8/13

参加者：C.L 光永正樹[4]、寺田浩昭[4]、S.L 尾崎夏樹[3]、溝西 慎[3]、川口泰宏[3]、青木 成一郎 [3]、中村 聡[2]、磯部 寛[2]、山田 茂[2]、給田俊文[2]、赤井知司[2]、加門洋一郎[1]、湯川正也[1]、森 (0. B)

7/31 室堂 (8:50) ～雷鳥沢出会 (10:05)
～剣沢テント場 (3:30)

この日は直射日光が差さないという程度の曇天であった。背中への荷駄が少々辛く感じられるようになった頃やっと天場に到着した。

8/1 剣沢 (8:50) ～真砂テント場 (12:30)

この日の行程はただ真砂の天場に辿り着くということのみであった。天気は非常によく、腕やら顔やらがすっかり赤焼けになってしまった程だ。勢い雪渓は腐っていて転ばないようにするのに少し緊張を要した。技術、体力の低さを認めないわけにはいかなかった。午後からは、明日よりの日程に備えての体休めの日とした。

8/2 出発 (5:25) ～雪上訓練開始 (8:50)
～終了 (11:50) ～池谷乗越 (13:50)
～三の窓 (15:30)

昨日より参加して下さった、田中さん、森さんを交えて出発した。5・6のCOL下の雪渓は痩せ細って無くなっていた。訓練は長次郎雪渓の熊の岩に向かった左側のやや傾斜の緩やかな場所で行った。この後、寺田、尾崎、磯部、給田、中村の五人は三

の窓にテントを設営するべく荷揚げを行った。長次郎沢の上部に行くに従ってガスの為次第に視界が利かなくなっていった。そして落石に肝を冷やしながらかの窓に到着した頃には雨が降りだしていた。

8月3日 晴時々雨 三ノ窓沈殿

3:30 に起きるが、視界が非常に悪く、時々雨が降ってくるので沈殿となる。

8月3日 曇時々雨 本峰遠足

出発(5:30)～長次郎出合(5:50)～池ノ谷乗越(10:20)(三ノ窓往復 1時間 10分)～剣岳(14:30)～平蔵ノコル(15:30)～平蔵出合(17:00)～真砂沢(18:00)

今日から本格的な活動開始。長次郎雪渓を登って池ノ谷乗越から本峰へ行く。熊ノ岩あたりからガスが出てくる。少し雨も降ってくる。とにかく池ノ谷乗越へ着く。水を三ノ窓のベースに補給しに行く。今日は岩登りには行かなかったようだ。本峰へは、ルンゼの右側に行く。ルートを探しながら何とか本峰へつく。光永は時間がないのですぐに池ノ谷乗越へ帰る。頂上では展望なし。ジュースを飲んで気を取り直してから下りへ。カニの横這いは相変わらず危ない。とにかく平蔵のコルについてアイゼンを履く。1年生では湯川は下りは好調。加門は下りのアイゼンはまだ不安らしい。右に寄りすぎて途中ガレ場などに出してしまうが左の方の雪渓を目指せば良かった。下の方でガスがはれたのでグリセードで下って行く。コルから出合いまで1時間くらいでつく。帰り道に源治郎尾根の取り付けをもう一度確認してから帰る。

8月4日 曇時々雨 源治郎尾根遠足

(出発(5:00)～取付(6:00)～稜線上へ(9:00)～一峰(10:30)～二峰(11:20)～懸垂開始

(12:10)～懸垂終了(12:50)～剣岳(14:00)～平蔵ノコル(15:00)～平蔵出合(16:10)～真砂沢(16:50)

今日、田中さん(OB)が帰る。源治郎尾根の取り付けまで一緒に。先行パーティーがいて、それは立命館大学であった。うちのパーティーはトップが余り良くないとところから取り付いてしまう。ルンゼをつめて稜線上に出たところでハーネスを付ける。多少危ないが、ザイルは出さずに進む。一峰につく。二峰の登りで立命館大学に追いつく。登りは結構急だ。すぐに二峰につく。二峰で立命館大学の懸垂の時間待ち。ここはダブルの懸垂である。岩トレの懸垂よりも長くて結構面白い。1年生の懸垂をしている写真を撮ってやる。それから延々と本峰まで登り続ける。岩がもろくて結構危ない。今日も展望はないが、一瞬だけチンネと小窓ノ王が見える。しばらくするとなぜか磯部と給田と尾崎がやってくる。一緒に帰ることに。平蔵ノコルで森さんと別れてアイゼンを着けてしばらく下って行くと立命館大学のパーティーがいる。一部雪渓が切れそうなどところがある。真砂沢に着いてからしばらくして森さんが帰ってくる(別山尾根経由)。

8月4日(木) ガス 時々 小雨

2:00 起床～9:00 チンネ取り付け偵察～沈殿

朝から濃いガスで、この日の行動をどうするか、となるが、結局沈殿として、とりあえず取り付けだけでも調べておこうとなる。テントに戻った後、寺田、尾崎、給田、磯部は計画通り真砂へ帰る。

8月5日 快晴 チンネ北新ルート→gクラック 光永 中村

4:00 起床→8:00 出発→9:00 取り付き→13:00 終了点→14:30 三ノ窓帰幕
gクラックの1ピッチ目でルートの間違え、少々てこずったが、問題なしの快適な登攀だった。

8月5日 晴後時々ガス チンネ左稜線
(出発(4:40)～長次郎出合(5:00)～池ノ谷乗越(7:00)～三ノ窓(7:20)～取付(9:00)～登攀終了(16:00)～三ノ窓(17:00))

今日からやっと岩登りが始まる。真砂沢から池ノ谷乗越まで2時間30分である。すぐに三ノ窓のテントにつく。光永達はもう取り付いているようでテントにはいない。左稜線は既に2パーティーが登っている。アイゼンは置いて取り付きへ。1ピッチ目は自分がリードする。しばらく岩登りをやっていなかったからか意外ときつい。それ以降は問題なし。景色がとても良い。上も下も。T5の手前のピッチで本当は右から巻くのになら左から巻いてしまって苦労する。T5で時間待ち。ザイルが足りないとか言っていて上と下で喧嘩している。目の前でトラブルを発生させないで欲しいものだ。精神面でのリズムが狂ってしまう。次のピッチは自分が行くことにする。ハングのところは仕方ないのでA0を使うことにする。スタンスが小さい。A0のところから先は問題ない。ハーケンなどはいっぱいある。チンネの頭で登攀具をしまつてコルから池ノ谷側へクライムダウンなどを使いながら下りて行き、三ノ窓へと帰って行く。OBの東條さんと大倉さんが小窓尾根からこちらへやってきていた。

8月5日、6日 快晴

二股ピバーク 山田、湯川

朝10時出発。11時二股着。時間もある

し、天気もよいので、仙人池へ。2時過ぎ着。ついでに池ノ平へ行くことに。3時頃小屋に着。少し休憩をとってから二股へ。湯川はかなり疲れているようだったが何となく二股まで行く。このとき時刻は16時40分であった。

次の日は朝4時30分起床。6時出発。7時真砂着。後、沈殿。

8月6日 快晴 剣尾根 光永 青木

3:00 起床→5:00 発→6:30 R7 取り付き→9:00 コル C→11:30 事故発生→12:50 門取り付き→15:00 剣尾根下半終了点→15:40 剣尾根上半取り付き→19:00 長次郎の頭→22:00 三ノ窓帰幕

下半についてだが、R5からつめていくアプローチのチョックストーンとその上の大岩で、ザイルを2ピッチ出した。コルCからの2ピッチは岩が堅く、高度感もあり快適だった。門に行く途中で池ノ谷右股に回り込んでしまい、ルートに戻ろうとして光永が懸垂下降したところアンカーが抜けて約15m落下したが、青木が制動をかけて止めた。幸い大した怪我もなく登攀を続行した。門からは問題なし。上半だが、非常にいやらしい。出だしと途中のルンゼで、計2ピッチザイルを使用した。そこらが核心らしいのだが、そこを過ぎてもいやらしい。とくに剣尾根の頭からのクライムダウンはザイルを出せる状況でなく、非常な危険が伴うだろう。長次郎の頭ではじめて無線交信をし、帰幕した。テントにたどり着くと、飯も食わずに紅茶を飲んで寝た。非常に疲れた登攀だった。

8月6日(土) 快晴時々ガス チンネ左下左方カンテ 溝西、中村

4:00 起床～5:00 出発～5:30 チンネの取り

付き付近～6:15 登はん開始～14:00 チンネの頂上～ 15:00 三ノ窓～16:15 三ノ窓発～18:30 真砂

初め取り付きを探すのに手間取った。そして登り始めるが、やはり間違っていて、途中から正規のルートに合流する。左方カンは人工で登るのが嫌だったので、その左側をフリーで登る。その上のピレイ点は悪く、ハーケンにぶらさがってのピレイとなる。次のピッチで左稜線に合流し、数ピッチで終了。

8月6日(土) C フェース RCC ルート

3:00 起床 ～ 4:35 出発 ～ 7:35 C フェースの取りつき ～ 9:00 登攀終了～ 13:40 B.C

今年一本目の岩登りですこし緊張したが、天気が晴れわたっていたので気分良く登れた。剣稜会ルートにはすでに2パーティ先客がいたが、RCC ルートには誰も取りついておらず、きれいにかわいた岩での登攀となる。ルートがわかりずらく、たびたびルート図を見て頭上に目をこらしながら登る。要所要所に新しいテープでアンカーがつくっており、それを頼りにピッチを切つてのぼっていくと気がついたら C フェースの頭に着いたという感じ。途中、妙に難しいハングギミのところがあり、すこし右に行きすぎたようだ。頭で剣稜会パーティを待ちながらすこし休んだ。やはり人が多い。

8月6日 C フェース 剣稜会ルート

尾崎 磯部 加門

BC(4:45)～取付き(6:50)～終了～(11:00)～BC(13:25)

剣稜会ルートには先行パーティが2隊、後続パーティが5隊あり、大変混雑してい

て、しかも後続の1隊には追い抜かれた。ルート自体は乾いていてピンも多く容易であったが、浮石が所々に目立った。又、一回生がいるためか、ペースが上がらず、岡山大山岳部のパーティーにピッタリと後ろにつかれて、せかされているみたいで苦痛だった。

8月7日 十字峡ビバーク(前) 寺田 尾崎 給田 加門

BC(6:45)～仙人池ヒュッテ(9:10)～仙人池温泉(11:45)～阿曾原温泉(15:40)～仙人ダム(17:10)

日が昇ってからぼちぼち出発する。仙人池ヒュッテで昼寝を少しして、仙人池温泉で湯につかってから阿曾原に向かう。阿曾原温泉では、小屋の主人の示唆で日大理工の山岳部のかたに下廊下のことを尋ねる。聞くと、先発隊からの連絡で通行可能であるとのことだった。阿曾原水平道を通り、仙人ダムを少し過ぎたところにツェルトを張ったが、高度が低かったので暖かい一夜を過ごせた。

8月8日 十字峡ビバーク(中)

BS(5:40)～十字峡(7:10)～内蔵之助平出合(12:20)～内蔵之助平(16:45)

快眠後出発する。下廊下は崩壊した箇所は丸太が組んで添えられており、岩肌にくり抜かれた通路や雪渓を難なく通過できた。内蔵之助平出合では大休止をとって、体を洗ったり下山時のルートの下見をしたりして過ごした。その後、空は曇ってきて、内蔵助平に着く頃には雷雨となった。

8月9日 十字峡ビバーク(後)

BS(5:30)～真砂 BC(7:50)

昨晩は雨が降ったため肌寒くて寝ずらかった。一夜明けてみると快晴で、ハシゴ

谷乗越から難なく真砂へと戻った。

8月8日晴 Aフェース魚津高～中大
出発(4:50)～魚津高ルート取付(7:00)～魚
津高ルート終了(9:25)～中大ルート取付
(12:00)～中大ルート終了(14:25)～真砂沢
(16:25)

今日は1年生をつれてAフェースを登る。
時間があれば二本登ることにした。取り付
きには一番に着く。五・六の科尔へ上がる
雪渓には雪は全くなかった。科尔の裏側
には雪がある。いらぬ荷物を岩陰の下に置
く。1ピッチ目は自分がリード。2ピッチ
目は磯部リードしているが何か手間取っ
ている様子。1ピッチ目のピレー点は岩に
頭を抑えられたところで左にトラバース。
2ピッチ目はそこからカンテ沿い。3ピッ
チ目はすぐに終わる。頭から懸垂の支点に
向かって少し下り、支点にダブルでセット。
懸垂終了後、荷物の所で少し休憩。中大ル
ートで順番待ち。しばらく待つ。1ピッチ
目磯部リード。バンドで左にトラバースす
るように言う。ルート図ではそうなってい
る。去年自分が川口と行ったときにはバン
ドから右のルンゼ沿いに登った。(ルート
図とは違うがルートはある。)バンドから
ルンゼに移るときが結構こわい。2ピッチ
目も磯部にまかせる。ピレー点がとても狭
い。浅いルンゼ沿いに登ると結構難しい。
左の大きなルンゼに入ってしまうと3級
ぐらいであろう。簡単になってしまう。大
きなルンゼの中にもハーケンはあるが。2
ピッチ目のピレー点はだいたいさっきの
魚津高ルートの2ピッチ目のピレー点の
すぐそばであった。したがって3ピッチ目
はさっきと同じ。同じように懸垂をして荷
物の所で登攀具をしまつて長次郎雪渓を

下って真砂沢へと帰る。

8月8日 快晴
六峰Cフェース剣稜会ルート
川口、中村

5:00 真砂出発～8:00 Cフェース取り付
き到着～8:30 登攀開始～11:30 登攀終了
Cフェースの頭～2:00 真砂到着

昨日入山したばかりなので、まずは雪訓
か遠足でもしようと考えていたのだが、誰
もいないので岩にする。同じCフェースを
溝西と山田が登るので一緒に行く。ところ
が、トレーニング不足の為、長次郎谷に登
るのにアイゼンを出さないと登れなかつ
た。取り付きを少し間違えた為、セカンド
の川口がいきなり登れずヌンチャクを残
置してきた。コースはそれほど難しくもな
く、中村のオールリードで快適に登る。C
フェースの頭で溝西隊と合流し、取り付き
まで戻る。無事ヌンチャクも回収し真砂ま
で下る。

8月9日晴 八ツ峰上半

出発(5:35)～五・六の科尔(8:50)～六峰
(9:30)～八ツ峰ノ頭(12:40)～真砂沢
(15:03)

八ツ峰上半は五・六の科尔から始まるの
でそこまで長治郎雪渓から登って行く。し
かし出合で湯川が氷に乗ってしまい転ん
で眼鏡のレンズを割ってしまう。目は何と
か大丈夫ようだ。真砂までアイゼンを履
かせて真砂沢に帰ることにする。5分ほど
休んで出発。五・六の科尔へ上がるために
ガレ場に入るところで休憩をとる。休憩を
とって、ハーネス、ヘルメットを着けて
五・六の科尔へ。稜線の比較的傾斜の緩い
ところまで行くところは結構危ない。六峰
まではCフェースの頭、Dフェースの頭の

付近を歩いて行けばよい。六峰の下降で懸垂。七峰、八峰ともに稜線上を登って下降は懸垂。ルート図通りに行けば問題なし。八峰の懸垂後は結構いやらしくて危ない。気を付ける。八峰の懸垂後の地点からはチンネの左稜線がよく見える。またクレオパトラニードルもよく見える。最後に八ツ峰の頭に登れば八ツ峰上半終了。しばらく休む。後ろからたくさんパーティーが来る。シングルの懸垂をして池ノ谷乗越へ。ちなみに懸垂はすべてシングル。いつものようにアイゼンを着けて下降をする。途中でアイゼンを脱いでグリセードを始める。何でも滑りにくい。そして真砂沢へ。

8月10日(水) チンネ左稜線

3:30 起床 ~ 4:40 出発 ~ 6:45 池ノ谷乗越し ~ 7:30 三ノ窓 ~ 8:30 登攀開始 ~ 13:10 登攀終了

天候のせいで計画通りにはチンネにのぼれなかったが、後の予定を調整して挑んだのがこの日の岩登りである。アプローチでどれだけ疲れるか心配だったが、とりつきに着いてしまうと疲れはあまり感じなかった。長丁場なので天候がもってくれるように祈りながら登り始める。ルート図を頻繁に見てなるべく慎重に登っていくとピナクルが目の前にあらわれる。足場は脆い岩肌で、赤茶けたギザギザの岩が所々突き出ている。ピナクルを右からまわりこんで裏の門のようなテラスに出るのだが、ザイルが岩にひっかかって登りづらい。テラスでピッチを切った後はやや左よりにルートを取り、容易なフェースと切り立った稜線をおりまぜながら慎重に登っていくと、チンネ左稜線で一番の難所、人工ピッチが見えてくる。足元からナイフのように

鋭くとがった岩肌が上までのび、その左側すぐ目の前に小さなハングが見える。右側はすっぱり切れ落ち恐ろしい高度感だ。とりついてみると難度と恐怖感でなかなか前に進めない。しかしアブミを使うハングにはピンがバシバシ打ってあり少し安心した。ここはアブミが回収しづらいから要注意である。ハングを越え途中の狭いテラスでピッチを切り一息つきながらも岩がぬれていたらと思うとぞっとした。長かった道のりもあとすこしだ。そこからは三級程度のフェースを左よりに登っていき、最後のピッチは切り立った稜線を慎重に通ればやっとチンネの頭である。寺田さんと握手をかわし二人で勝利の喜びをかみしめていると、とたんにガスがでてきた。どうもチンネとは相性が悪いようである。

8月10日 快晴

黒部別山遠足

青木、尾崎、山田

朝6時出発。7時頃ハシゴ谷乗越着。その後、ヤブこぎをし、休憩をとりながら黒部別山へ。11時頃目的地に着く。頂上はひらけていて、かなり快適なものがあつた。しばらく休んで1時30分頃出発。4時30分真砂着。ヤブこぎはしんどかつた。

8月10日 晴 仙人池

川口、溝西、湯川

真砂ベース(5:05)~二股(5:55)~仙人池(7:30)~仙人湯(9:15)~仙人池分岐(13:00)~真砂ベース(16:00)

湯川がメガネを無くしていたが、一度行ったことのある所なので、途中のへつりも問題なく通過し1ピッチで二股に到着。二股から仙人池までは結構大変だったが1ピッチちよつとで通過。前回は10:00真砂

発だったので、仙人池への登りは暑さとの戦いであったが、今回は真砂を 5:05 発ということで、その点は楽であった。仙人池から仙人湯への下りで去年はあったという雪渓は猛暑のせいであろうか全く、無かった。

仙人湯での露天風呂は大変に気持ちの良いものであった。仙人湯への遠足は長い定着の間の一時の休息として、真砂ベースの夏山定着では今後も愛され続けることと思われる。

8月10日 晴

チンネ左下カンテ左方カンテ

溝西、尾崎

出発 4:40～池ノ谷乗越(6:40)～三ノ窓(7:30)～取付(9:00)～登攀終了(15:20)～池ノ谷乗越(15:50)～長次郎出合(16:40)～真砂沢(17:00)

荷上げしておきながら天気が悪くてチンネを登れなかったメンバーとビヴァークへ出る中村、磯部たちとチンネに行くことになる。六人で出発する。溝西、尾崎はチンネ左下左方へ行く。他の4人は2パーティーに分かれてチンネ左稜線に行く。とりあえず池ノ谷乗越へは2時間で。三ノ窓で昨日の余りのジュースを飲む。今日は三ノ窓に張ってあるテントは少ない。天気はいいのに左稜線にさえ誰も取り付いていない。ラッキーだ。3パーティーに別れてそれぞれの取り付きへ。左下左方の取り付きの確認に手間がかかる。尾崎に確認してもらう。水場の左側にあるバンドを上がらずと左にトラバースしてぶち当たるルンゼを上がる。登攀具はルンゼの手前の安定したところを出す。ルンゼを上がってビレーするところがあるのでとりあえず

ザイルを出す。ルンゼの左側のトラバースはとても危ない。ノーザイルではいけない。バンドをトラバースして後、少し上へ行くとビレーできる。その次のピッチが人工のピッチである。結構大変だ。ピンは遠くないが完全にかぶっている。人工からフリーへの移りにはガバがあるので問題なし。次のピッチはルート図通りに行く。その次はもろい岩のリッジ沿いに上がって行く。次のピッチは右と左のルンゼの接合点のテラスまでは残念ながらザイルが届かないので行けない。途中の残置ハーケンと新しい打ったばかりで抜けそうなハーケンでビレー。新しい方はハンマーできくまで打ち込む。次のピッチは草と岩の混じったところをT5を見ながら上がる。左稜線の他のパーティーが見える。尾崎が適当にピッチを切って、次のピッチのリードをする。中央バンドに上がる。左方カンテの確認に時間がかかってしまう。中央バンドに上がったところから見える右端のリッジ沿いにルートがある。次は尾崎のリード。人工のピッチである。あぶみトラバース後ビレーする。次のピッチはそこから二つの小さなハングをあぶみで越えて行き、またフリーに移る。フリーに移るところはもろいがガバがある。もろいフェースを気を付けながら左稜線のルートと合流するところにする。それからは3ピッチでチンネの頭に着く。2ピッチ目の人工が一番大変である。左稜線のパーティーみんなが待っていてくれて申し訳ない。登攀具をしまつて池ノ谷ガリーへと下りて行く。ガリーに着いたところで中村、磯部と別れて池ノ谷乗越へ。二人は三ノ窓でビヴァークするそうである。途中からグリセードで下って真砂沢へ

と帰る。

8月10日 快晴のち曇 チンネ左稜線、熊ノ岩ビバーク 磯部、中村
B.C.(4:35)～池ノ谷乗越(6:44)～取り付き(8:10)～開始(8:53)～終了(14:10)～三ノ窓(16:07)～池ノ谷乗越(17:30)～熊ノ岩上部の洞窟(17:50)

全体的に3級程度の容易な登りが続く。核心はT5からの小ハング越えであるが、フリーで越えることができた。ただ登攀距離が長く、時間がかかるので注意が必要である。この日は熊ノ岩でビバークする予定だったが、さらに50mほど登った所にビバークするのに最適な洞窟があることを中村が発見していたので(D フェースから見ればすぐに分かる)、そこにツェルトを張り、ジフィーズ・スープで温まりながら寝た。

8月10日～11日 中村、磯部
17:50 洞窟着～翌日 7:00 発

前から目をつけていた熊ノ岩付近でビバークをすることにする。夜はやはり寒く2時間に1度の割合で目を覚ます。朝がきて暖かくなってきたときはホッとした。

8月11日 快晴 立山遠足

今日も快晴である。剣沢雪溪の登りも荷が軽いので楽すぎる。入山の時とは大違いだ。剣沢キャンプ場で休憩後とつと別山へ向かう。別山からは能登半島が奇麗に見えた。緩やかなup&downが続く。立山最高峰大汝山に到着、眼下には黒四ダムが輝いていた。雄山へ向かう途中中年の団体さんの中にプラ靴を履いている人がいた。雄山はめっちゃめっちゃ人が多い。休憩後真砂への帰路につく。

8月11日 快晴

D フェース富山大ルート

中村、山田

朝4時30分出発。7時頃Dフェースに着くが、先着が多く、しばらく寝て待つ。10時岩登り開始。2時過ぎ何事もなく終了。途中、中途半端な所で確保をしなければならなくなり大変だった。16時30分頃真砂着。

8月11日 晴 黒部別山

尾崎、山田、溝西

出発(7:30)～ハシゴ谷乗越(8:25)～最高点(12:30)(休憩1時間30分)～ハシゴ谷乗越(16:40)～真砂沢(17:40)

森さんが良いといつも薦めていたので黒部別山へ行くことにする。ハシゴ谷乗越までは全然問題なし。展望台から藪が始まる。一応トレースがあるのでそれを見ながら登って行く。赤布は役に立たないほどにしかない。(ほとんどない。)ちなみに上がるにつれてトレースは薄くなり、藪もひどくなる。一カ所だけ左側がガレていて開けた場所がある。とにかく稜線へ。稜線へでたところで下降点の目印に倒木にビニール袋を付ける。そこから左に行く。ここから間違えて稜線の左側を行ってしまい苦労する。(左側は樹林帯。)右側の草付のようなところを行けばまじだろう。最高点は草原のようになっていてとても見晴らしがよい。剣方面は最高点から少し下がったところからの見晴らしがよく、後立山方面は最高点から見晴らしがよい。そこで寝転がれる。蚊が多いが、しばらく休んで下降にはいる。ビニールを目印にしてハシゴ谷乗越への下降へ。1度違う方角に入ってしまった正しいところまでトラバースするのが大変だった。時間もあまりないので

さっさと下って行く。結構疲れてきた。昨日も今日も晩御飯は食べきれないくらいある。去年の食料とは大違いだ。おやすみ。満腹で苦しい。立命館大学が撤収祭をしている。頑張ってるなー。

8月11日 黒部別山本峰遠足
青木 尾崎 山田

BC(7:30)～ハシゴ谷乗越(8:20)～黒部別山(12:30)～ハシゴ谷乗越(16:40)～BC(17:40)

ハシゴ谷乗越まですんなり行き、そこからブッシュに入る。別山への踏み後などはなく、傾斜もありかなりきつく、300mのupに3時間程費やした。しかし山稜まで登ると急に辺りがひらけ山頂までなだらかな草原が広がっており、所どころに花が群生しててくつろげる場所であった。帰り道は先頭が道を誤って谷の方に下りてしまい尾根まで登り返すはめとなった。

8月12日 快晴のち曇
本峰南壁 A1 溝西、磯部、加門

BC(5:00)～取り付き(8:35)～開始(9:00)～本峰(13:35)～前劔(14:42)～一服劔(15:13)～劔山荘(15:30)～BC(16:33)

平蔵雪渓を登り、少し迷いながら取付点まで行く。登攀自体は容易で問題なかったが、岩がもろく、上部ではガレ場になるので、常に落石に注意しなければならなかった。実際にA2を登っていたパーティーはあきれほど落石を発生させていたし、ルンゼの方から登っていたパーティーは落石に遭い、うめき声をあげていた。

8月12日 晴 八ツ峰下半
出発(5:35)～取付(6:45)～二峰(9:25)～三峰(11:00)～五峰(12:40)～五・六のホル(14:15)～長次郎出合(14:55)～真砂沢

(15:10)

一・二のホルへは広いルンゼから上がる。ルンゼには水が流れている。雪渓からもろそうな岩へ移る。ルンゼは上部でいくつかに分かれるが右を目指して行けばよい。そのうちに一・二のホルに着く。一峰へ往復しようとしたが結構危なそうなので諦める。二峰を目指す。二峰の下りはシングルの懸垂1回とダブルの懸垂1回が必要だった。三峰の下りもダブルの懸垂1回。四峰もダブルの懸垂1回。下りたらガレ場をうまくトラバースして安定したところまで来たなら稜線を目指す。そして五峰につく。下りは長治郎側を気を付けてしばらく下る。ルート図通りの所にハイマツがあつてそこから懸垂。しかしこのハイマツは使えないので他のハイマツを使う。シングルの懸垂1回で下ってそこからトラバース。また懸垂支点があるのでそこからまたシングルの懸垂1回。そして五・六のホルに着く。そこからのガレ場を適当に下って雪渓に下りる。グリセードで下って真砂沢に帰る。

8/13 下山

出発(5:35)～ハシゴ谷乗越(7:40)～内蔵助平(8:50)～出会(11:20)～黒四ダム下(12:30)～バス乗り場(14:10)

道は歩きにくく、好天で良かったようなものの雨が降っていたならばどのような事になっていたかは想像に難く無い。苦勞を避けたいならば、悪天時は室堂に下るのが良かろうと思った。

夏山縦走合宿

夏山縦走合宿

南アルプス縦走

広河原～北岳～間ノ岳～塩見岳～荒川岳
～赤石岳～聖岳～光岳～寸又峽温泉

期間：8月15日～8月21日

参加者：青木、溝西、給田、湯川

8月15日 天気 晴夕方ガス

甲府～広河原(8:05)～二俣(10:30)～八本歯
のコル(12:00)～北岳分岐(13:45)～北岳
(14:30)～北岳分岐(15:00)～北岳山荘
(15:50)

広河原まではタクシーに乗って行く。
広河原で服装を整え、水を汲んで出発する。
沢沿いに歩いているときは涼しい。そのうち
沢が枯れてしまい暑くなってくる。一度、
沢(枯れ沢)の左側に行きしばらく行って
右側に戻る。沢の左側へいった所に慰霊碑
がある。昔、沢の右側に登山道があったと
きに落石に当たって死んだ人のものらしい。
比較的最近のものだ。高校の時に来た
ときは確か道で沢の左側に渡るような所
はなかったからその後変わったようだ。暑
い中をひたすら登って行けばその内二股
に着く。ここで八本歯のコル方面へ行く。
上部に行くに従って短いハシゴがでてく
る。コルから北岳の分岐まではすぐだ。そ
こにザックを置いて北岳まで往復する。
(行く前に少し寝てしまう。昨日の睡眠不
足がたたっているようだ。)北岳山頂の見
晴らしはまあまあ良い。ここにも大臣とか
何とか書いてある表札有り。剣岳にも同
パーティーのもの有り。適当に休んで戻る。

分岐からトラバースして北岳山荘まで行
く。水場は給田に行ってもらったが、結構
遠い。

8月16日 天気 晴

北岳山荘(6:50)～間ノ岳(8:30)～熊ノ平小
屋(9:37)～小岩峰(11:30)～北荒川岳
(12:40)～塩見岳(15:08)～塩見小屋(16:30)

間ノ岳まではてくてくと歩いて行く。
北岳と同じようにここも人でいっぱいだ。
さらに農鳥岳方面へ行く人たちも結構い
る。農鳥岳は去年暴風雨の中を行ったので
割愛して直接に熊ノ平小屋を目指す。去年
通ってきた仙丈岳から三峰岳までの稜線
がよく見える。低いところを歩いていたこ
とを改めて実感する。去年は三峰岳から間
ノ岳までの間を逆に来たがかなり長く感
じたものだ。なつかしい。熊ノ平小屋で水
を補給せねばならないので急ぐ。塩見小屋
の水場は遠いから水を汲んで塩見岳まで
ひたすら歩く。頂上で記念撮影。下りは下
りにくいので気を付ける。やっと塩見小屋
に着いたがテント場に追いやられる。遠
い。。。塩見岳から小屋に行く途中の小屋
への最後の鞍部から少し上がったところ
にあるテント場だ。今日は溝西が水を汲ん
できてくれた。この水場も遠いそうだ。

8月17日 天気 晴

塩見小屋(6:50)～本谷山(8:03)～三伏峠
(8:45)～烏帽子岳(9:30)～小河内岳(10:45)
～高山裏小屋(13:35)

三伏峠付近までは去年も来たところだ。
三伏峠からは人が少なくなる。小河内避難
小屋まではそのうちに着く。避難小屋があ
る。高山裏小屋はここからそんなに遠くは
ない。時間が少しあるがこれより先には行
けないので今日はここで泊ることにする。

テント場は小屋から先にしばらく行ってからもある。その方が水場に近い。水場が近いので今日はスパゲッティにする。今日までのところは天気がいい。

8月18日 天気 晴後上部ガス
高山裏小屋(6:14)～荒川前岳(8:26)～分岐(8:28)～悪沢岳(9:24)～分岐(10:42)～荒川小屋(11:45)～大聖寺平(12:15)～赤石岳(13:40)～百間洞露营地(15:50)

今日は朝からいきなり大変な登りだ。ちょっと体力をセーブすることにする。しかし、思ったほどではない。荒川中岳から少し行ったコルにザックを置いて悪沢岳まで往復する。一つ目の小さいピークに荒川避難小屋がある。1泊2500円と書いてある。それからずんずん下って悪沢岳へのコルに着く。ずっと登れば頂上だ。この日当たりからだんだん天気が悪化し始める。予定では赤石避難小屋に泊まるので荒川小屋で水を補給しようと急ぐ。しかし、荒川小屋では蛇口から水が出ず(下界での濁水の影響をここで初めて受けた。)、水を汲みに行っていたら30分は時間のロスがあるから汲みに行くのをやめて今日は百間洞露营地まで行くことにする。大聖寺平まですぐに着く。ここから赤石岳の登りだ。小赤石岳までも結構遠いがそこから赤石岳までもまた遠い。頂上まではガスに包まれているのが遠く感じさせるのだろう。また、ガスの中なので寒く、頂上では展望無し。一瞬だけ赤石小屋が見えたが、寒いので記念撮影をしてさっさと帰る。頂上の少し下に避難小屋がある。稜線の左側のガレのトラバースが終わるあたりでやっとガスの下に出る。下の天気は良く、今度は暑い。百間平からしばらくで百間平露营地

に着く。ここの水場はすごく近い。なかなかいいテント場である。旧百間洞山の家への道は荒れているようだ。通らない方がいいらしい。今日はぜんざいを食べることにする。さすがにおいしい。ぱくぱく。おやすみ。

8月19日 天気 晴午後雨
百間洞露营地(5:12)～大沢岳(6:00)～兎岳(7:55)～前聖岳(10:08)～奥聖岳(10:35)～前聖岳(10:56)～聖平小屋(12:16)

今日が3000メートルの山を登る最後の日だ。残るは聖岳である。大沢岳、中盛丸山を淡々と登って行く。小兎岳に登るときに後ろから結構速いパーティーがやって来る。負けてる。そのパーティーには先に行ってもらい、ゆっくり行く事にする。そのうちに兎岳に着く。兎岳の三角点まで給田と二人で行って来る。戻った後、しばらく4人で休んでいるとヘリコプターが飛んでいるのが見えた。荷物もなしでぐるぐる回っているのでテレビ局のヘリかと思っていたらそうだった。そのうちこちらを見つけて兎岳の頂上付近を旋回している。中で手を振っている。手を振れということらしい(静岡朝日テレビ)。こんなことは初めてだったので面白かった。頂上には自分たち以外にはおじいさんがいた。それから聖岳を目指す。頂上のすぐしたに避難小屋がある。黄色のペンキで「うさぎ」とひらがなで横に書いてある。コンクリート造りである。下りと登りの途中まではやせていて危険なので気を付ける。そのうち聖岳(前聖岳)に着く。そこから3人で湯川は待っているというので奥聖岳を往復してくる。三角点があるだけだけの頂上はガスで展望があんまりないのですぐに戻

る。頂上が段々騒がしくなってきたり落ちてくれないので記念写真を撮ってすぐに聖平へと向かう。聖平で水を汲まなければならないので急ぐ。聖平に着いてみると何か雨がぱらぱらと降ってきた。次のテント場まで湯川のペースだと不安があったのと去年のように濡れネズミにもなりたくない（上河内岳には雲がかかっている、天気が悪くなるのは目に見えている。）、今日はここ（聖平小屋）で泊まることにする。テント場代は後払い。天気が悪くなってきたのでさっさとテントを張る。何とか大降りには間にあってそれほど濡れずに済む。幸運だ。この日はにわか雨が続く。仕方がないのでコンロをテントの中でたく。今日の集金（テント場代）のおじさんもとても愛想がよい。水場もまあまあ近く、水が豊富で快適なテント場だ。明日の天気に不安を感じながら寝る。

8月20日 天気 晴午後雨

聖平小屋(4:55)～上河内岳(6:30)～茶臼岳(7:52)～仁田岳分岐(8:32)(仁田岳往復 40分)～易老岳(10:10)～光岳分岐(12:13)(光岳・光石往復 1時間)～百俣沢ノ頭(13:52)～柴沢吊り橋(15:30)～林道の途中で幕営(16:20)

今日は行けたら林道の末端まで下りてしまうことにする。上河内岳にはしばらくの登りで着く。分岐から頂上を往復する。この往復も3人で行く。湯川は体力をためておくと言う。ここでこの縦走で初めて動物を見る。かもしなが少しはなれたところにいた。残念ながら給田はタイミングが悪くて見ることが出来なかった。富士山などがよく見える。今回の縦走コースの景色が見られる最後かもしれない。分岐に戻る。

竹内岩や光岳までの道がよく見える。茶臼岳までもしばらくで着く。仁田池へいく途中で蛭を発見。変な色だ。仁田池の小屋は崩壊していて使いようがない。たぶんテント代はとられまい。まさか茶臼小屋から来るとは思えない。また、池と言っても水たまりのようなものだ。しかしこのようなどころによく池が出来たものだ。あたりは結構狭い。仁田岳の分岐までもすぐだ。分岐は希望峰というところからでている。少し光岳側に左側にきれいな道がでている。自分たちは藪の中の道を行ってしまい、途中から正しいの道にでるのに苦労した。少し行けば頂上に着く。ここでも湯川は留守番をしているので3人で。三角点は頂上の標識から少しハイマツの中に入ったところ。ここで一人で光岳の方から来たというおばさんがいて三角点がどの三角点を大きさを手で計っていた。そのおばさんによれば三角点の級によって大きさがあるそうだ。それにしてもたくましいおばさんだ。昔若い頃に山岳部なり、ワンダーフォーゲルなりに所属していたのであろう。分岐でさよならする。ここで休んでいると高山裏小屋テント場で見かけた大学生くらいの2人連れに追い抜かれる。自分たちが百間洞露営地に泊まった日に赤石避難小屋で追い抜いたパーティーだ。それから1ピッチで易老岳に着く。何とかさっきのパーティーに追いつく。イザルヶ岳は自分一人で往復してくる。みんなもういいと言っている。頂上付近は石を敷いたようなところでガスで展望無し。ガスがだんだんひどくなってくる。天気やばし。。。みんな先に光小屋に行っているというので急いで追いかける。合流した後林道への分岐ま

でそのまま行く。途中でさっきの2人パーティーが水場への道を見ているのが見えた。今日はここで泊まるようだ。分岐でザックを置いてみんなで光岳の頂上まで行く。頂上は樹林帯の中で展望無し。溝西と湯川の2人は展望台へ、自分と給田は光石へ行く。途中で加ヶ森山への分岐がある。深南部へはこの道に行く。まあまあはっきりしているようだ。分岐から光石方面へ。光石は樹林帯の中に突然現れた岩の固まりのようなものだ。岩はもろい。そのうえで休む。離れたところにもう一つある。ガスがでていて遠くは殆ど見えないが加ヶ森山らしきものが見える。しばらく休んで光岳の三角点へ戻る。誰もいないので分岐へ。途中で雨が強く降ってくる。分岐で雨具を着る。さっさと出発。しばらく上、下を繰り返しながら百俣沢の頭に着く。信濃俣方面は倒木で通行困難らしい。そのまま柴沢吊り橋方面へ。雨がだんだんひどくなってくる。眼鏡が曇り、またずぶぬれになりながら悪態をついて下って行く。吊り橋を渡って林道の末端に着く。まだ時間が有り、水も補給できそうにないのでとりあえずこのまま進むことにする。変なマウンテンバイクの集団が逆方向に行くのにすれ違う。こんな雨の中をよく行くものだ。水を汲んでテントを張れそうなところを探す。水場にまあまあ近いところでテントを張れそうなところがあったのでそこに張る。幸運にもテントを張るときには雨が上がっていた。今日は打ち上げだ。林道に下りてしまったので気分的にも楽になった。そのうち雨が降ってきたのでテントに避難。打ち上げをして寝る。

8月21日 天気 曇後雨

林道(5:40)～寝水の水(8:10)～大垂沢橋(10:55)～近道分岐(11:54)～千頭ダム(12:50)～ゲート(14:47)～寸又峡温泉(15:30)

昨日土砂降りだったので今日の天気が心配だったが朝は何とか持っている。また、寸又峡温泉の方は空が見えている。しばらくで釜ノ島に着く。何かの作業小屋がある。林道をひたすら歩くことになる。だいぶん歩いてから寝水の水という名水の湧いているところにする。近くにテントが張れそうなどころがある。昨日のあやしげな水をこの水と取り替える。ここからもだいぶん歩いてから大垂沢橋に着く。大垂沢橋まで結構遠いものだ。自分が山岳部にはいる直前にここに来たからなつかしい。大無間山の登山口である。ここでもしかを見る。こちらに気づいているのかいないのか全然気にしていない様子。展望台の看板などのある展望台からショートカットの道は始まる。道標がある。運動靴ではかなり下りにくい道だ。すぐに林道へ出る。そこから右の方へしばらく行くと、またショートカットがある。そちらはさっきほど歩きにくくはない。ここにも道標有り。下りたところは千頭ダムである。これまでは左岸林道を歩いてきたが、ダムの上を渡って寸又川右岸林道へ。そこで雨が降ってくる。今日もまたずぶぬれか。そのうち舗装道路になって、すぐにトンネルが現れる。道の横にある赤い標識に書いてあるキロ数はゲートまでの距離である。トンネルが何回かあつてずいぶん歩くとゲートに着く。ゲートの向こう側には展望台がある。観光客の領地に入って来たのだ。トイレもあつて水洗で紙もある。そこから少しで夢の吊り橋

への分かれ道に出る。橋を渡って対岸に出てしばらく行くと寸又峡温泉である。バスの最終は午後5時45分(だったと思う)なのでこの温泉に入る。入浴料400円。公営なので設備はあまり良くない。きれいではあるが。ちなみに露天風呂。最終のバスで帰る。乗客は少ない。千頭へ。千頭で大井川鉄道に乗り換える。とてもゆれる電車だ。1時間ほどで金谷に着く。ここは何にもない。コンビニエンスストアでさえ。9時頃までなら本屋やパン屋(コンビニの代わり)が何とか開いている。買い食いというむなし打ち上げをやって?。駅へ。時間があるので自分はこの日のうちに実家に帰ることにする。ホームへダッシュ。

(記 青木)

後立山

参加者：寺田、川口、尾崎、磯部、加門

期間：8月15日～8月19日

8月15日

扇沢の出合(6:30)～冷池山荘(12:10)

種池山荘までは木陰で涼しかったが、稜線に出てからは夏の日差しがきつかった。初日なのでのんびりと進み、昼過ぎに天場につく。まだ早かったので荷物を広げマットをだし各自思い思いの格好で日光浴を楽しむ。

8月16日

CS(4:00)～鹿島槍ヶ岳(5:00)～五竜岳(12:00)～唐松山荘(14:00)

昨年の経験から朝は2時起床で、鹿島槍までヘッドン行動で行く。頂上で御来光を拝んでから出発する。槍の下りで加門が転倒した他は、八峰キレットも慎重に通過し問題もなく唐松までつく。唐松山荘では雪

溪が枯れていて水代がいった。

8月17日

CS(5:00)～白馬岳(12:00)～赤男山(15:00)

不帰キレットは梯子もしっかりしていて、八峰キレットよりも容易に越せたが、そこから続く単調な登りは長くつらかった。天狗山荘で水を補給したあとは白馬でも水が手に入らず、そこから先は水場を求めてひたすら前進する。ようやく赤男山のふもとで沢を見つけてそこにテントを張る。

8月18日

CS(5:00)～朝日岳(7:00)～黄蓮の水場(14:00)

朝日岳を過ぎるとほとんど樹林帯で旅の終わりを感じさせる。日照りのために水場はあらかじめ枯れており、黒岩平でここが最後の水場と判断しスパを煮る。北又の水場は垂れる程度の水だったが根気よく給水して出発する。黄蓮の水場にはちょうどテントの張れそうな空き地がありそこを天場とする。黄蓮の水場はただの水溜まりで蛙が泳いでいた。

8月19日

CS(5:00)～日本海親不知(11:00)

白鳥山までは登りであったが、そこを過ぎるとあとはもうひたすら下るだけで、ブナ林を日本海めがけてひたすら駆け降りる。いったん車道に出て、再び森の中を行き、ほどなく親不知にたどりついた。

(記 川口)

個人山行

個人山行

安曇川ヘク谷

期間：10月2日

参加者：尾崎(L)、給田

10月2日 晴

ヘク谷出合い(9:35)～蓬莱山(15:00)～林道(16:40)

一昨日の台風のせいかわ水量が多かった。8m、12mの滝はルート図どおり登ったが容易でありザイルは出さなかった。15mの滝は2段めだけ登り最後の18mの滝は右側からまいた。途中から水は枯れて笹のブッシュこぎになり小女郎池に出て終わった。

奥鐘山西壁 浦島太郎ルート

期間：10月8日～10月10日

参加者：四年 光永(L)、東條(O.B)

10月8日 晴

岩小屋(11:00)～取り付き(12:30)～ブッシュライン(16:30)

下部は予想外に乾いていて、たいした苦労もせずブッシュラインに到達。しかしさすがにピンが少ない。日本シリーズ最終戦を聞きながらビバーク。下に見える焚き火がうらやましく見えてしかたがない。

10月9日 晴

登攀開始(6:30)～終了点(14:30)～京都ルート終了点(16:00)～帰幕(20:30)

ハングを次々に越えていく東條の技術

には脱帽である。乗っ越しの次のピンが遠くギリギリで届く程度だ。どうやって打ったのだろうか。止まり木ハングは高度感抜群である。途中、光永のルートファインディングミスにより、1時間のロス。しかし、フリーのピッチのピンが2本とは信じられない。京都ルート終了点から懸垂したが、なかなか終了点が見つからなかった。懸垂途中で日没となりまたビバークかと暗くなっていたところ、このルートの開拓者、藤原雅一に会い、藤原さんの先導で無事下降できた。まさに地獄に仏であった。下まで降りてようやく握手をかわした。

10月10日 晴のち雨

黒部川をジャブジャブ泳いで帰る。とにかく完登できて良かった。

(記 光永)

大峰山脈縦走

期間：10月7日～10月9日

参加者：中西(L) 寺田 川口 山田

10月7日晴 近鉄下市口駅でステーションビバーク。翌朝、駅長と口論があり、山田を除く3人は不快指数100。

10月8日晴 洞川バス停留所(9:00)～山上ケ岳(13:00)～竜ヶ岳(14:30)～大普賢岳(16:00)～七曜岳(18:00)

そもそもこの計画は3日の予定だったのだが、諸般の事情で2日で仕上げることになり、最後の1ピッチは、国見岳の鎖場をヘッ電行動することになる。あんまりお進めでない。

10月9日晴 出発(6:00)～行者還岳(7:20)～弥山(11:00)～天川川合(16:40)

弥山への急登は、スタート地点にたいそ

うな事が書いてあるが、大学山岳部の我々は、山参りに来た人々とは違う。ギアをトップに入れ、30分で突破した。山頂で大休止。しかし、この休みのせいで、バスに5分遅いで乗り遅れる。洞川から大和下市口へのバスは一日4本ほど。要注意。全般に、吉野の紅葉たなびく華麗(?)な山行だった。

[記 中西]

中央アルプス南部

摺古木山～安平路山～奥念丈岳～南駒ヶ岳～空木岳～須原

期間：10月8日～10月10日

参加者：青木、湯川

10月8日 天気 曇

飯田～摺古木休憩舎(10:50)～摺古木山(12:30)～シラビソ山(14:40)～安平路小屋(15:05)～安平路山(16:24)

飯田からタクシーに乗る。大平宿までは舗装道路である。そこから摺古木休憩舎までは未舗装の道である。しばらくいってもらったが休憩舎から歩いて1時間くらい手前の所でタクシーの運ちゃんがもういけないといいそこで降ろされる。タクシーが入るにはかなり荒れている道だ。1時間ほどで休憩舎に着く。摺古木山までは淡々とした登りだ。

そのうちに摺古木山に着く。何人か人が来ている様だ。シラビソ山から安平路避難小屋へと行くが特に問題なし。今夜は安平路避難小屋に泊まる予定だったが人が多いので安平路山のうで泊まることにする。

10月9日 天気 曇

安平路山(5:50)～浦川山(7:10)～松川乗越(7:30)～袴越岳(8:30)～奥念丈岳(9:54)～南越百山(12:05)～越百山(12:50)～仙涯嶺(14:40)～南駒ヶ岳(15:54)～南駒ヶ岳と赤檜岳のコル(16:28)～摺鉢窪避難小屋(16:40)

安平路山からしばらくは北の方向に下ってから稜線上へと戻る。今日は南越百山まではそれなりに笹が生えていて歩きにくい。浦川山へはいわゆる普通のやぶくらいである。松川乗越への下りが歩きにくい。笹の中のトレースに沿って水が流れていて道はえぐれて、笹で足下は見えないのに段差がいたるところにある。南越百山までも普通のやぶの道だ。特に問題なし。越百山では人が多かった。やっと展望がえられた。近くの町や下山ルートがよく見える。

ここからは町は目と鼻の先だ。ところで湯川が途中で落とした缶詰を拾った人に目の前で食べられてしまった。なんとも。仙涯嶺(クサリ場あり)をすぎ南駒ヶ岳をすぎ今日の目的地へと向かう。そのうちに摺鉢窪へ下り始めるころからガスがでてくる。着いてみれば今日は避難小屋がいっぱいになるくらい人がいる。そういえば越百山で会った人が昨日は木曾殿越の小屋には布団が二人で一つ使うことになるほど人が泊まったそう。なるほど多いわけだ。今日は湯川が疲れすぎて食欲がないという。今日は何となく暗い雰囲気のままフェードインしてしまった。

10月10日 天気 曇

摺鉢窪避難小屋(5:46)～赤檜岳(6:30)～空木岳(7:20)～木曾殿越(8:40)～八合目(9:15)～林道(10:46)～中八丁(12:02)～倉本(14:10)

避難小屋から稜線に戻ると今日は昨日より風が強いことが分かる。少し寒い。空木岳の上には異常なほど多くの人が出た。しばらく休んで景色を眺めていたが寒いしどンドン人が多くなってくるので下りることにする。次は木曾殿越から少し行った水場で休憩をとる。こちらにも結構多くの人が出る。えんえんと下ってゆくと林道へとでる。まだまだ道のりは長い。中八丁への上ぼり口へ。ここで急登を200mも登らないといけない。いままでの下りで足がクラッシュしているのでとてもきつい。中八丁へついたら今度は倉本への下りだ。こちらもえんえんと長い。やっと倉本(駅)へ着く。電車に乗って大阪へと向かう。(記 青木)

偵察合宿

偵察合宿

仙人山偵察山行 樺平～阿曾原小屋～池の平小屋

member : 藤田(4年)、前田(4年)、山田(2年)、加門(1年)

11月1日 離阪

11月2日 樺平(10:00)～阿曾原小屋(17:30)

晴れ 初めは景色もよく、気分よく水平歩道を歩いていたが、コースタイムよりも時間がかかり阿曾原小屋に着いた時は流石にバテていた。

11月3日 阿曾原小屋(6:00)～仙人湯(12:00)～池の平小屋(16:30)

雨 仙人谷は数ヶ所危険な所があり、さす

がに疲れた。当初は雨がふっていたがやがて雪へと変わり仙人池へと着くころには、あたりは一面銀世界であった。池の平の夜は物凄く寒かった。

11月4日

1)池の平小屋(6:00)～仙人山(9:00)

晴れ デボを置きに行った。

2)仙人山(9:30)～池の平小屋(10:00)～池の平山(11:00)

前田と藤田だけでアタック。

3)池の平小屋(11:30)～阿曾原峠(20:30)

出発時間が遅かったのと、ただでさえ危険な仙人谷が雪でコーティングされて、より危険となっていたため最後はヘッドライトでの行動となる。峠に着いた時はさすがにホッとした。

11月5日 阿曾原峠(6:00)～阿曾原小屋(7:00)～樺平(15:00)

晴れ 随分軽荷であったが、先の3日間で疲れが溜まっていたためか、余り歩が進まなかった。いずれにしても水平歩道はガラガラと長い。

仙人山偵察合宿 樺平～坊主山～仙人山～阿曾原～樺平

期間 : 10/29～11/3

参加者 : 光永 寺田 磯部

10/29 雨 樺平 (9:45)～デボ設置地点(11:00)～1122mピーク(13:20)～1200m下部平坦地(16:00)

デボは夏道沿いの二番目の鉄塔に設置した。そしてブッシュ漕ぎは其の直後より始まった。これより後の行程全般に言えることだが尾根はそこそこ狭く、傾斜も油断はできないといった程度のものであった。そ

して実際の地形が地形図より想像されるものと随分違うことに意外の感を持った。巨岩や崩壊が尾根どうしに進む事を阻む事もまま有ったがかわす事は容易であった。1122m ピークのやや西に下る急坂は本番においては fix 工作が特に必要であろうと考えられた。だが、今回は時間を惜しんで工作は行わなかった。テントを張ったのは 1200m より始まる急登の前の傾斜の無い部分であった。ブッシュや立ち木などの要素も加わり非常に狭かった。テントの端が尾根からはみ出て浮いていた。雪のつく冬に期待したい。

10/30 快晴 出発 (5:45) ~1667m ピーク (12:00) ~1667m ピークと第一ピークのコルより第一ピークへ 20m 登った無傾斜部 (15:10)

この日も昨日と同じく後の行程に比べれば比較的幅のある尾根の登りから始まった。その代わりというわけでは無いだろうが、恐ろしく高密度の笹と低灌木そして間隔狭く生えた杉のごとき大木とに悩まされたのだった。このピークはなだらかで広く、それ故敷を漕ぎつつも常に方位に気を配らねばならなかった。こぶよりの下りは、ブッシュゆえに緊張度は薄かったが一転して急傾斜となり危険味を増した。そして頻々と残置 fix が見受けられたのだった。最低コルは非常に狭くテントを二つ張るのは無理であろうとの感想を得た。

10/31 雨 出発 (6:00) ~第二ピークと第三ピークのコル (14:30)

この日で良かったことといえば、悪天ゆえに来し方行く末が良く見通せなかったという事位しか無い。もしはっきり見えていたならばやはり少々其の比率にダメ

ジを受けていたであろうからだ。この日から苔むし、落ち葉や倒木が堆積した巨岩のうえを縫って歩かなくてはならないといった地形が現れたという事、第二ピークの登りにおいて草しか生えていないなめ滝の如き場所を登らねばならなかったという事以外特に書くことは無い。相も変わらずの猛ブッシュ、細い稜線、急傾斜であった。

11/1 晴れ 出発 (7:00) ~第三ピーク (8:00) ~坊主山の肩のコル (17:00)

昨夜の冷え込みによる、青空を除くモノトーンの景色が快晴のもと見渡せた。一夜にして冬景色というわけである。しかしこの冬景色も日の出の到来とともに迅速にもとの秋景色へと戻っていった。このことと、後ひとつ、私が急登ブッシュ漕ぎに喘ぎつつ少しでも楽に進路を取りたいと顔を上げたとき常に目を射し視界を阻むうっとうしい陽光とが、我々が南方を指して進み続けている事を実感させてくれた。

昨日と同じ様な地形でもって第三ピークを越えた後、本合宿の目玉であるところの坊主山への登りにさしかかる事となった。ここで遂にザイルを出す事になったわけだ。これは今回最も冷たい経験だった。なんとなれば、陽が射さず氷が存在し続けたためだ。2ピッチで稜線にたどり着いた。この場所を下るには懸垂下降しか有るまいと判断された。ここより幕営地までは疲労とあいまって、切り抜けはしたものの一見絶望的とも思える地形が二三存在した。それ故になんとか狭いながらもテントが張れる場所に辿り着けた時の嬉しさはひとしおであった。

11/2 晴れ 出発 (6:00) ~坊主山 (7:00)

～仙人池の小屋 (16:30)

これまでの道のりで大体慣れてしまっていて、この日の地形に関しては特に危険とを感じる場所は無かった。ブッシュも若干ましになったもののまあ似たようなものだった。加えて、割と分かり易い地形で例え悪天と言えども方角を誤る危険は小さかろうと感じた。移動距離だけは稼げた一日であった。

11/3 雨 出発 (7:00)～阿曾原 (11:00)
～樺平 (16:20)

仙人温泉から少し下った辺りで藤田達のパーティーが登ってくるのに出会った。

阿曾原から樺平までの水平歩道をキスリングを担いで通るのには少々の注意が必要である。また、随所にトンネルが掘り抜かれているのも面白い。ちなみに樺平発のトロッコ電車最終便は五時半のものであった。

(記 寺田)

中央アルプス偵察山行

期間：1994年11月1日～5日

参加者：青木、赤井、中村

11月1日(火) 離阪。

2日(水) 晴れ時々曇り

北御所登山口(9:40)～蛇腹登山口(10:35)～
清水平(11:38)～ウドンヤ峠(12:24)～丁ヶ
池(13:37)～小屋場跡(13:50)

昨夜の”ちくま”はあまり眠れず。朝は非常に寒かったが、登山口に着いた時には暖かくなっていた。荷は約30Kg。初めは林道を1時間。かなりしんどく休憩が待ち遠しい。それでも無事予定地に着き、ほっとする。夕食のインドカレーが旨かった。

3日(木) 雨 with 強風後曇り

出発(6:30)～宝剣山荘(9:15)～千畳敷
(10:00)～発(10:42)～極楽平(11:17)～濁沢
大峰(12:28)～桧尾岳(14:03)～桧尾小屋
(14:16)

未明からポツポツと音がし始め、起きるとテントは浸水状態。中村はまさか雨が降るとは思っておらず、シュラフカバーを使用していなかったのも、非常にブルーな状態となった。上へ登るほどに風も強くなってくる。宝剣山荘では中で休みたかったが、300円いるので入口で我慢する。木曾駒ヶ岳は特に偵察の必要がないということ、宝剣岳はこの強風ではちょっと危ないということで、千畳敷に下る。ロープウェイ駅には色んな人がいる。ほとんどが登山者でないのだが、オレ(中村)がガタガタ腰が痛くなるほど震えているのに平気な顔をしてる。羨ましい。オレの体、カラッと乾いてくれよ。ロープウェイでそのまま下りてしまいたい思いを抑え、覚悟を決めて出発。天気がマシになってきた。駒ヶ根の町が見えるようになる。泊まる避難小屋が見えてからが結構長かった。小屋は貸切。中にテントを張る。手のむくみが見事である。コンロで暖まると快適で(服は乾いてないが)、昼間の辛さが嘘みたいだ。まあ逆に言えば、辛くても我慢してりゃまたテントに入って回復するってことなんだけどね。しかしその我慢がたいがいきついよなあ。結構根性いるぜ。

4日(金) 晴れ

出発(6:25)～桧尾岳(6:40)～熊沢岳(8:00)
～東川岳(9:14)～木曾殿越(9:30)～発
(10:50)～空木岳(12:45)～赤薙岳(13:57)～
南駒ヶ岳(14:46)

昨夜は衣類が濡れているため寝づらかった。外に出ると快晴。風は強いが。しかし眺望は素晴らしい。南アルプスから八ヶ岳、富士から低い山々まで。出発する。昨日と比べるとすごく快適だ。風は冷たいが。この日は、歩きながら見える山々や下界が気分を良くしてくれた。終わりの頃は、腹へってパワーの出ない状態。快適な天場に落ち着く。外は山ならではの素晴らしい星空と、駒ヶ根の規模こそ小さいが、きれいな夜景があった。

5日(土) 晴れ時々曇り

出発(6:32)～南駒ヶ岳(6:42)～2591m(8:11)～2411m(8:38)～ニワトリ小屋橋(11:00)～発(12:12)～伊奈川ダム14:00)～JR大桑駅 by taxi

赤井氏が誤って3:30に"起床!"と言ってしまい(飯を食い終るまで誰も気付かなかったのだが)、ひんしゆくを買う。これも愛敬。外は寒いが天気はいい。南駒ヶ岳の西側へ伸びる稜線を下る。花崗岩のゴミ捨て場みたいな所で、重荷にはつらい。2591m地点ぐらいから樹林帯に入る。道も楽だ。ただ、だらだらと長い。やがて急な下りが始まり、一気に下りる。下降時はずっと爪先が痛かった。林道へ出るとほっとした。沢の水も旨い。そこからの林道は、疲れのないのだが荷が肩に食い込み痛い。やけに水の青い伊奈川ダムに着く。山へ来るとよく思うのだが、終わった所が限界って気がする。今回もそう。ダムからは、珍しい女性タクシードライバーに駅まで送ってもらい、のんびり鈍行で帰る。

表銀座～槍

参加者：尾崎、溝西、給田

11月2日 晴れ後雪 白沢登山口(6:00)～稜線(10:00)～餓鬼岳小屋(14:45)

出発するころには明るくなり始める。沢を橋で右左しながら上っていく、魚止の滝の横のスラブ状の斜面を登り終えればしばらく整備の悪いルートが続いた。餓鬼岳小屋は完全に密封されており入り込むよちなし。夜半から雪が降り始める。

11月3日 晴 出発(6:40)～東沢岳(10:00)～燕岳(14:30)～燕山荘(15:00)

餓鬼岳の天場から見る東沢岳は前剣に似た鋭い岩峰に見える。夜の雪は大したことがなく出発してしばらくするとほとんど消えてくる。東沢岳手前からどんどん西側へ高度を落としていくので不安になるがガレで道が崩壊した後を過ぎるとそのうち稜線に戻った。東沢のコルは一応テントが張れそうだった。

11月4日 晴 出発(7:00)～大天井岳(10:20)～大天井ヒュッテ(11:50)～ヒュッテ西岳(16:10)

大天井までの道はくるぶしの上までの雪。コースは非常に良いのでいいペースでとばす。蛙岩、為右衛門吊り岩ともに問題なし、蛙岩は左から行けば懸垂の必要は全くなかった。大天井への登りはトラバース路を通る。風があるので凍りついたら嫌らしいが現在は問題なし。

大天井荘でちょっと休んで大天井から直下降ルートで下るが木も岩もないのっぺりとした大斜面でむちゃくちゃ気持ち悪い。クラストしたらアイゼン歩行となるが、スリップしたらあの世まで止まらないだろう。大天井ヒュッテからのルートは一応冬期ルート牛首尾根を通る。雪が少ないので春の状態を想像するのは困難、とにかく

今は楽なのでサクサク進む。赤岩岳の頂上からの下りものっぺりしていて嫌らしかった。頂上でカルピスウォーターで喉を潤す。地図上ではここから西岳ヒュッテまではすぐに見え、目の前に見えるのが西岳だと思って進むのだがなかなかなかなか到着しない。結局天気図には間に合わず、9時間行動で全員へろへろであった。途中、立命のパーティーを追い抜いたので彼らの為に小屋の完全占拠は控えたが彼等は謙虚にも外にテントをはっておられた。

11月5日 晴 出発(6:30)～槍岳山荘(10:15)～休憩出発(11:00)～奥丸山(14:15)～中崎尾根 1942m 付近(17:00)

好天だったので迷わず出発。かなり回り込む感じで稜線に向かう。稜線へはかなり急なスラブの中を下り雪が積もったら結構嫌らしそうだ。はしごも埋もれている場合、懸垂になるかもしれない。尾根自体は登り下りはあるが、それ自体それほど難しいとは思わなかった。雪が積もらず雪尻がなかったからかもしれない。12時には槍に着いてしまう。風もないので楽勝で穂先に登ってとっとと帰路につくことにする。奥丸山までは道はあったが中崎尾根への道はブツリ途絶えており、ところどころに赤旗がうってあるのを目安に稜線を頑張ってください。日が暮れたので奥丸と中崎の間くらいでどんする。

11月6日 出発(6:00)～新穂(13:50)

午前中には新穂高につく予定だったのにルートがむちゃくちゃ分かりにくいのとブッシュのせいでペースが遅いのに加え、中崎山からの下り(とあとでわかった)でルートを間違っただけでかなり西寄りに下りてしまいほぼ登り返しが不可能だったの

で、セオリー違反だが尾根が小さいことも分かっているので、苦しいブッシュを左に巻いてどうにか本道にでる。新穂の温泉卵は10円値下げしていたが茹で過ぎてぼそぼそだった。

僧ヶ岳偵察山行

期間：11月3日～11月5日

参加者：川上(L)、中西、川口、湯川

11月3日◎→● 宇奈月温泉(7:00)～僧ヶ岳登山道入り口(8:30)～1300メートル付近(13:30)

どうして入山の日は、こう雨になるのだろうか。また入口付近のブッシュがいやらしい。

やっとペースがあがってきたと思うと同時に空がより一層強く泣き始めた。最後はむりやりテント設営になだれこんだ。

11月4日◎→○ 出発(7:00)～僧ヶ岳ピーク(11:00) ピーク発(11:30)～1500メートル付近(13:00)

テントを出ると、外は一面の雪だった。尾根の上部は、所々に急登があるものの快適であった。ただしピークへのアプローチは、2・3のルートがあるようなので、冬はなるべく安全なルート選択を行う必要がある。ピークを過ぎた途端、尾根は両サイドが鋭く切れる。本番ここを通る場合は要注意だ。空模様がまた怪しくなる。昨日の轍は踏まずと幕営。

11月5日○ 出発(6:50)～片貝第5発電所(10:20)

最後の500メートル程は、道細で強烈な下降。お向かいさんの大明神の下りも似たようなものだったが、あちらはまだお助け

階段があった。向かって左の北又谷に、冬、落ちたら命の保証はない。東蔵への2ピッチ walking も、今となってはもう慣れた。

[記 中西]

アイゼン合宿

御岳アイゼン合宿

期間：11月23日～26日

参加者：光永(CL)、尾崎(SL)、藤田、溝西、川口、青木、給田、磯部、中村、山田、赤井、湯川、加門

11月23日 晴れ 八海山荘(9:40)～田の原(11:30)～王滝頂上(15:00)

光永を除く13人で入山した。入山直前に雪が降ったおかげで雪訓できるだけの雪はあった。

11月24日 快晴 出発(6:10)～剣ヶ峰(7:30)～二ノ池(8:00) 雪訓(8:20～14:00)

二ノ池北西斜面で雪訓を行う(アイゼン歩行、滑落停止、キックステップ、ピッケルストップ、スタンディングアックス、搬出訓練)が、訓練中に川口が右足を痛めた。また、この日、青木、磯部、湯川、藤田、川口、山田がビバークを行った。

11月25日 雪 出発(6:20)～摩利支天山(7:05)～飛驒頂上(7:30)～継子岳(8:20)～二ノ池(10:40) 設営撤収訓練(12:00～15:00)

川口を除く12人で継子岳へ遠足に行った。帰りは、悪天で視界が非常に悪かったので、サイノ河原周辺で少し迷った。この日にビバーク訓練に出かけたのは、溝西、

中村、赤井、加門である。

11月26日 晴れ 出発(8:30)～剣ヶ峰(10:05)～王滝頂上(10:40) fix 工作訓練(11:30～13:40) 出発(14:10)～八海山荘(16:40)

出発前に光永と合流した。川口の足は前の晩からかなり悪化していたので、剣ヶ峰直下の案内板までスキー板を使って搬送し、光永、藤田、赤井とともに先に下山した。その他の者は王滝頂上の噴気孔周辺でfix 工作訓練を行うが、気分が悪くなったものも数名出た。

冬山合宿

冬山合宿

宇奈月温泉～僧ヶ岳

期間：12/23～12/27

参加者：川上(C・L)、尾崎(S・L)、中西、川口、給田、中村、湯川

12/23 "きたぐに"にて離阪、中村が遅れそうになりひやひやする。

12/24 (晴れ)

宇奈月駅前にある派出所に計画書を提出し、スキー場から登りはじめる。1Pでスキー場の上にある観音様のところまでたどりつく。天気は良く僧ヶ岳のピークが雪煙に煙っているのが見えた。

林道から尾根上に入るとはっきりとしたトレースがあり、楽勝であった。なんと一日で1350mまでできてしまった。一日中天気は良く、気温も高かった。まるで春山のようにであった。危険なところは林道から

尾根に取りつく部分のみであとは問題はなかった。

12/25 (雪+ガス)

1350m～鳥帽子尾根とのジャンクション

前日とはうってかわって冬山らしい天候となった。小雪の舞う樹林の中をじわじわ進む。きのうに引き続き前のパーティーのトレースが見えておりラッセルは大したことはない。きのうだいぶ高度をかせいだので今日は早めにドンする。夕方ごろから天気は回復し夕方の冬山の美しい景色を眺めることができた。

12/26 (快晴 後 雨)

ジャンクション～僧ヶ岳アタック～1000m 付近

快晴の中を僧ヶ岳へ向かって出発する。さすがに稜線上は風がきつく雪はクラストしている。尾根自体が広いので雪庇はあるが問題にならない。山頂からは後立山、毛勝、富山湾が一望できた。冬山でこのような天気になるとは思ってもみなかっただけにとても感激した。予定通り昼までにアタックが終わったので、天気も良いとゆうことで下山を始める。今年は雪が少なくラッセルは全くたいしたことはない。すぐに 1000m 付近の林道の出会いに到着。夕方から雨が降り出し明日の下山が少し心配になった。

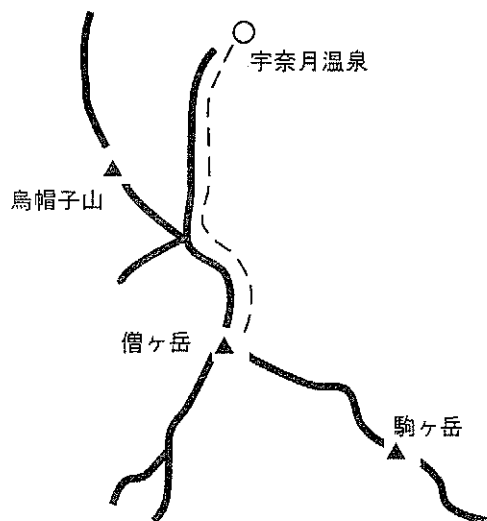
12/27 (曇り)

1000m～宇奈月温泉

雨も止み晴れ間がちらほらする中をのんびり下山した。下のスキー場は雪が少なく下草がのぞいていた。派出所で温泉に入れる場所を聞きみんなで入りに行く。我々の他にほとんど人はいなくて、のんびりく

つろぐことができた。

後で駅で出会った山岳警備隊の人から聞いた話では、我々が入山する一日前に実は山岳警備隊の訓練が僧ヶ岳であったらしく、結局そのトレースを使っていたことが分かった。天気も良く、トレースはビシバシでものたりなさは感じるが、頂上からのすばらしい景色がみれたとゆうことでまあよしとしよう。



僧ヶ岳周辺概念図

北仙人尾根

期間：12/27～1/5

参加者：寺田 藤田 青木 溝西 磯部

12/27 曇 宇奈月 (7:45)～樺平 (15:30)

20キロメートルのトンネルの中をひたすら歩いた。時々溪谷を横切る鉄橋のうえで、そしてわずかにある地上部分でだけ天候の推移を知ることができた。

12/28 晴れ後曇り 発 (7:05)～デポ铁塔

(12:40) ~1050m (15:00)

雪は思いの外深く、シングルラッセルで登ったのが祟って遅々と進まぬ。

12/29 雪 発 (7:00) ~1550m (15:30)

なかなか急登である。要所に赤布を結びつけながら進む。

12/30 晴れ 発(7:45)~1667 ピーク (10:00) ~P1 (15:00)

懐かしい後立山の山並みがよく見える。先日と同じでダブルラッセルでひたすらに登った。

12/31 雪 発 (7:00) ~P3 (13:30) ~ fix 工作終了 (15:30)

ピーク 3 がこの日に取りうる最後の幕営可能地点であったので、ここに張り後日に備えて偵察に出かけた。これまでの行程は偵察時に比して、概ね雪で均されてしまっていて問題になるのは急傾斜であるということだけであった。期待された残置 fix は雪に埋もれて役には立たなかった。コルまで進んでテントに戻った。

1/1 雪 沈殿

1/2 快晴 発 (7:00) ~fix 通過 (10:30) ~帰幕 (14:00)

アタック装備で出かけた。この重量ではこの難所も楽々通過である。12 時までピークに向けて進みそして引き返した。この日もよく山々が眺められた。

1/3 曇り後雪 発 (7:00) ~1500m (13:45)

起床時は星が瞬いていたが、天気は徐々に崩れやがて雪が降りだした。意外と速く進み 1667m ピークを越すことができた。

1/4 雨 発 (7:00) ~樺平 (11:15)

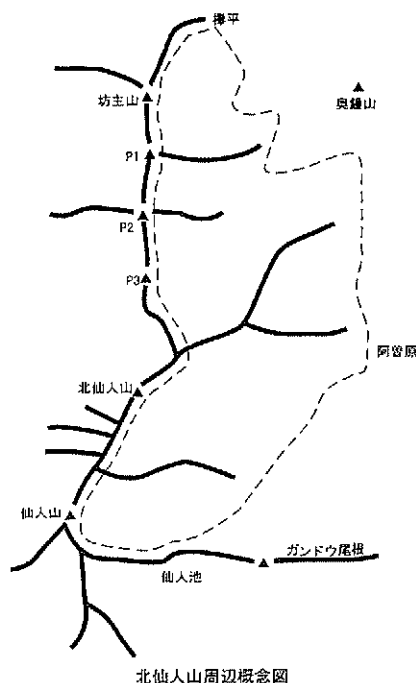
目覚めると何と雨が降っている。雪は水を含み重たく湿っている。崩れやすい急斜

面、そして股まで沈む雪崩後を緊張して通り過ぎ、樺平に着いたときは全身ぐしょぬれであった。

1/5 雪 発 (7:45) ~宇奈月 (14:00)

今度は下り坂となったトンネルを再びひたすら歩いた。赤い鉄橋が見えたときは結構嬉しかった。

(記 寺田)



Ⅱ．大阪大学山岳会の部

池ノ平小屋と田中正雄さんのこと

大工原 恭（歯 昭和38年卒）
（鹿児島大学歯学部教授）

北アの池ノ平小屋が一昨年の冬の雪のためにつぶされた。そして、長年のこの小屋の管理人をしていた田中正雄さんが、昨年（1991年）の9月6日に亡くなった。これは、私が30年近くつきあってきた池ノ平小屋と田中正雄さんへの追悼文である。

池ノ平小屋は、剣岳の北方稜線にある池ノ平山（2561m）から東斜面を約500m下ったコルにある。小屋の標高は約2100mで、小屋からは平の池がある草原をへだてて剣のハツ峰やチンネが指呼の間に望まれ、スイスアルプスの風景を箱庭的に縮小したような見事な眺めである。ここは第2次大戦中に池ノ平山のモリブデン鉱を採掘するための飯場があった所で、池ノ平山の北東斜面の絶壁の、どうやってそこまで行ったのかと思うような所に、今もその鉱口のあとがいくつか見られる。この飯場の廃材を利用して、ここに登山者のための小屋ができたのは昭和20年代の後半で、北アルプスの山小屋としては古い方の一つである。

私がこの池ノ平小屋に入ったのは、昭和36年（1961年）の夏山合宿中におきた大窓での事故がきっかけであった。時報第12号の記録によると、7月21日10時すぎ、宇野、桑原、大川君の3名のパーティが大窓から稜線ぞいに本峰へ向かう途中、大川君が約30mスリップして、額から鼻にかけての裂傷および足に捻挫を負った。丁度その時、池ノ平では古い小屋を壊して新しい小屋を建設している時であったため、桑原君の救援依頼に応じてそこに居合わせた大工、石工の3名が工事を中止して現場に急行して下さった。その後、真砂沢のBCに降りて来た桑原君の連絡を受けて、CLの酒井君と私が現場に向かったのだが、二股付近で東北学院のパーティからもう一つの事故（岡久君のチンネでの転落）を知った。そこでとりあえず酒井君がチンネへ、私が大窓へ向かうことになった。私が池ノ平小屋に着いたのは、18時頃であったと記憶する。小屋の管理人である田中正雄さんの本職は宇奈月町の棟梁なので、小屋建設の全般を指揮する一方、60人程あったお客さんの世話で多忙であったが、私はチンネの事故のことを説明し、あと何人かはBCから来るが、今夜中に何とか大川君を小屋に収容したいので協力して欲しい旨を田中さんをお願いした。先に現場に急行してくれた石工と大工さんの手で急造したタンカに乗せられて、大川君が大窓の雪渓と小黒部の出合まで下ってきたのは小屋から見えていたが、そこからの登りはバテてしまってもう無理な様子であった。

田中さんと丁度ボッカを終えて小屋に着いた竹山さんにBCから登ってきた3人を加えて、6人が小黒部へ下りはじめたのは19時を過ぎていたと思う。田中さんは長靴とピッケル、竹山さんは地下足袋とボッカ棒である。薄暗くなってきた雪渓を、田中さんを先頭に全員グリセードで下ったのだが、さすがに田中さんも竹山さんも見事なものであった。

いくつか大きなクレバスもあったが、いずれも田中さんの指示で難無く越えることが出来た。大川君達が待っている所に着いた時は、もう真っ暗である。それから全員でタンカを引き上げ、雪渓が切れた後は竹山さんが中心になって大川君をかついだのだが、小黒部の最後の急斜面ではボッカの竹山さんもバテてしまい、大川君をザイルで確保して引き上げることにした。大川君も痛みをこらえて頑張ってくれた。その頃には、懐電も暗くなって足元も見えない程になり、小屋のお客さん達が作ってくれた大きな焚き火と掛け声だけが頼りであった。小屋のあるコルに無事に着いた時はもう午前2時を過ぎていた。炊事のおばさん達が作ってくれた握り飯と熱い味噌汁の味は今でも覚えている。今思えば、田中さんも竹山さんも、そして大川君や私も若かった。

次の日は、石工や大工さん達もバテて新しい小屋の建設工事も中止であったが大川君に付き添って小屋に滞在した我々は、午後から新しい小屋のための石垣を積むのを手伝ったりし、7月23日に少しずつ歩けるようになった大川君と共に、阿曾原に下った。そして翌年の夏、私はお礼の一升ビンをかついで再び池ノ平に入り、新造の小屋に泊った。その時から、池ノ平小屋と田中さんとのつき合いが始まった。

私は物事に淫する性格のようであり、山でも気に入ると同じ所に何度でも出かける。池ノ平小屋で数日の夏休みを過ごすのが習慣のようになってしまったのも、池ノ平の風景とビールが丁度冷えごろになる谷川の水、古い山小屋の雰囲気を残した池ノ平小屋と田中さんの頑固親父ぶりに気が合ったからであろう。何しろ、この小屋では今でも着いた客にまず熱いお茶を出す。そのため、昔はいつもいりも大鍋に一杯のお茶が沸かされていた。これだけはさすがに15年程前からプロパンになったが、電気は遂に最後までなかった。発電機の音がうるさいと田中さんが言うのである。そして、もう1つの魅力は風呂である。これは、神経痛の気があった田中さんのためにかつぎあげた五右衛門風呂で、小屋の外の八ツ峰が見える側に屋根だけつけて据えてある。ほろ酔い気分でこの風呂につきながら、月光下の八ツ峰やチンネのシルエットを眺めるのは最高の気分であった。

むろんお酒のことを省くわけにはいかない。田中さんが酒好きなのを知った私は、池ノ平に入る時は必ず一升ビンをかつぎ上げることにしていたが、皆で一杯やっている内にいつの間にかその一升をあけてしまい、次の夜からは田中さんが大事にしている酒に手をつけて、3-4日滞在している間にさらに2-3本を空にしてしまうこともしばしばであった。もっとも、その一升ビンもいつの頃からか紙パックになり、さらに最近は事前にハガキを出してヘリコプターで上げておいてもらうようになった。それはともかく、今はもうどこの小屋でも見られなくなったいりりを囲んで、小屋の従業員の人やお客さん達と毎晩一杯やった。その一杯がきっかけとなって、今でもおつき合いいただいている方々が何人もいる。ボッカの竹山さんは、柄に似合わず人見知りする人であったが、一杯やっている内にぼつりぼつりと話すようになった。雨のシトシト降る夜、竹山さんが訥々と話をしてくれた怪談のいくつかは、今も忘れられない。その竹山さんも、事故のために10年以上も前に亡くなった。

昭和36年から30年余の間に、お客さんの量も質も変わった。前に書いたように、小屋を新築した頃は客の数も多かった。一晚に150人以上も泊ったことがあったそうである。しかし、関電の黒四ダムが完成するに伴い、関電黒部川上部軌道が部外者便乗禁止になった頃から数が減りはじめた。また、以前は純粋に山を楽しむ登山者が主流であったが、最近ではカメラやビデオを撮るために山に登る人が多くなった。どういうわけか、田中さんはこういうお客さんをひどく嫌い、愛想の悪い頑固親父になってしまうので、そういう人はもう2度とこない。最近では、私と家内の2人だけという夜もよくあった。従って、最近の経営はむろん赤字であったろう。それでも田中さんは、宇奈月に居れば大工の棟梁としての仕事がいくらでもあるのにもかかわらず、毎年夏の四ヶ月以上を池ノ平小屋で暮らすのである。こうなれば、小屋の管理は、田中さんの道楽と言ってよかった。

私も当然変わった。始めの内はもちろん黒部側から一升ビンと共に約30kgの荷を1日でもかつぎ上げた。それがだんだんきつくなって、次はもっと楽な室堂側から入ることにしたが、バス停から5時間で着いたこともある。それが今は、極力荷を減らしても同じコースに1日半かかる始末である。下山はこの所いつも黒部側だが、これも普通の1日コースの所を、いつの年からか2日かけて樺平にたどり着くようになった。そしてこの数年、池ノ平から下山する時もうこれで池ノ平の見納めかも知れないと思うようになった。私の体力もさることながら、長年の風雪に耐えてきた池ノ平小屋の傷みもひどくなっていったからである。

1990年の夏はアメリカに行く用件が出来て池ノ平に行くことが出来ず、その旨のはがきを田中さんに出したところ、富山の病院に入院中との知らせがあった。脳内出血の由であった。10月中旬に小屋を閉じる時、田中さんが長年の経験と大工の棟梁としての腕を生かして、小黒部側からの強風と池ノ平山からの雪崩でつぶされないように小屋の要所要所に柱や梁を入れ、補強してから下山することを知っていた私はその時、田中さんがいなければ池ノ平小屋はつぶされるのではないかと思った。果たして翌年(1991年)の夏、池ノ平に登るべく準備していた時に、池ノ平小屋は前年の雪でつぶされたとの知らせを受けた。

1991年の夏は、教室の人や学生も加わって総勢8人で剣に入った。田中さんが元気であったら、賑やかでさぞ喜んだであろうと思いながら、池ノ平から30分ほど離れた仙人池の小屋に泊り、次の日池ノ平小屋を見に行った。30年程前に私達がつんだ石垣等は無事であったが小屋自体は完全につぶされ、元通り再建するのはもう不可能である。小屋跡の元の入り口があったあたりに坐り、大川君の救援のために下った小黒部谷の雪渓を眺めながら、この小屋のこと、小屋で会った人達のこと、そして一緒に登った人達のことを思った。田中さんがいつも手入れを怠らなかつた北股ルートも荒れているらしく、登ってくる人もない。こうして快晴の半日を、誰一人として通らない静かな池ノ平で過ごした後、帰路の途中の小屋が見えなくなる曲がり角で池ノ平の方向を振り返った時、一緒に歩いていた家内が「来年もまた来ようね」と言ってくれた。しかし、下山してしばらくして、田中

さんの訃報を受けた。

小黑部谷に建設中の関電のダムが完成すれば、その道路を利用して擲平から池ノ平に直接入る登山道をつける案があり、池ノ平小屋再建の話も聞く。田中さんがいない池ノ平小屋の雰囲気は確実に変わるであろうが、私ももうしばらくがんばって、池ノ平の移り変わりを見守って行きたいと思っている。皆さんも、池ノ平に一度行ってみてください。人の少ないこと、高山植物の多いこと、そして景色と水の美味は保証します。

(1992. 6. 30)

1992年

アイランドピーク遠征報告書

序言

本遠征は、大阪大学山岳部OBである、紫藤、大倉、によって計画されたものです。本遠征の目標であるアイランドピークは大倉によって登頂が果たされました。この遠征の成功と経験が、次回のより大規模な阪大工学部の海外遠征にわずかなりとも役立てばと願っています。

参加者：紫藤圭介（25）文学部倫理学科三年（当時）

大倉徹雄（24）工学部応用化学M2（当時）

●行動報告ならびに登頂報告

3/10 大阪空港 17:20———バンコク 21:15

バンコクにつくといきなり白タクにつかまってしまう。エラク高いホテルで34ドルもかかってしまった。はなから痛恨であった。バンコクでの情報はまったく集めていなかったで、やはりチェックしておくべきだった。

3/11 バンコク 10:50 ———Kathmandu 13:05

カトマンドウのトリブバン空港に入り、荷物チェックを受けると、胸にカードをぶらさげ、いかにも空港のオフィシャルの人間であるかの様に装った男たちが群がってきた。口々に「インポート・タックス」と言いながら分け知り顔で手を差し伸ばしてくる。こっちは事情がよく飲み込めない。まだドルをルピーに換金してさえ無かったのである。タックスと言う言葉に当惑しながら茫然としていると、二人のザックは男たちに取り上げられて出口まで運ばれようとしていた。まったくこっちが混乱している間にひどい事をする。日本で、のほほんと秩序ある社会につかっていた愚かな二人を待っていたのは、しょっぱなから弱肉強食の世知辛いネパールの姿だった。ザックは男たちの手で次々と手渡しされていく。5mと運ばないのだ。その手順が余りにも早いのでとても取り返せない。ザックを取られた時点で勝負は既に終わっていたのである。ろくに運びもせず、ザックに触れ、手渡しただけで男たちは我々にチップを求めて手を差し出してくる。彼らに阻まれて我々は前に進む事もできなかった。我々は単なるカモだった。カトマンドウの感慨にふける余裕すら無くチップをふんだくられてしまったのである。しかもルピーが無かったのでドル紙幣で払ってしまった。後でわかったのだがその金額ならカトマンドウでは家族を数か月養えるらしい。こうした場合、はなからこういう連中には無視の一手に限るとの事である。

払うにしても、相場は1〜2ルピーだそうだ。痛恨である。カルチャーショックぎみによるめく我々を救ってくれたのは空港玄関で待っていたコスモトレックのネパーリーだった。彼らがポーターたちを追い払い、タクシーに乗せてくれたのである。ショック状態の我々には、コスモトレックの人がにっこり笑って挨拶しても、不信感に満たされてろくに返答もできなかった。

コスモトレックではオーナーの大津女史が我々を迎えてくれた。

日本人の顔を見て、我々はようやくほっとした。コスモトレックの庭前では群馬山岳会の人達がエベレスト南西壁冬期登攀から帰っていた。皆、興奮さめやらずといった面持ちである。アイランドピークに行く我々なぞ全く遊んでいる子供のようなのである。大津さんの話によると、最近ネパールの観光行政が流動的だということで、登山許可の手続きが複雑化したり、登山料が高騰したりして、数カ月単位で状況が変化しているとのこと。不慣れな我々は一切の手続きを国内線のチケットの入手も含めてコスモトレックに頼んだが、高くつくのは痛かった。一人につき548ドルも払うと、もう懐はさみしいのである。もし手続きを自分たちで取る自信があり、またそれだけの時間の余裕をもってカトマンドゥ入りするならば、そうすることに越したことはない。かなりの経費削減が可能だと思う。しかし、手続きが繁雑で数日間かかることをみこさなければなるまい。一般旅行客の数が激増しているのか、ネパールも恐ろしいスピードで変化しているのである。

一通りの説明を受けた後、我々はコスモトレックの紹介でカトマンドゥ滞在のためのロッジに向かった。タメル近辺のInternational Guest House というところである。主人は日本語が流暢で、清潔な建物なので快適であった。しかし宿泊料は高いのである。一泊二人で20ドル。自分で捜せばいくらでも安いところは見つかる。

この遠征を通して、経費削減という問題が常につきまとっていた。悲しいことに、ネパーリー達は日本人とみれば皆金持ちだと思っている。安くすまそうとすると、何か軽蔑にも似た視線をネパーリーから感じるのには参ってしまった。ミネラルウォーターを買って寝る。

3/12 準備

紫藤、大倉の両名とも初めてのカトマンドゥの朝を迎える。大倉は以前ブラジルに旅行したことがあるが、やはりカトマンドゥの朝は素晴らしい。部屋の窓を開けて外を眺めると、叫び声だの、壊れかけた車の音だの、調理の音など、音楽だの、とにかくエネルギー感に満ちあふれているのだ。ロッジのそばの貸自転車屋で自転車を借り、銀行にいったドルをルピーに替える。その足でコスモトレックにゆき、今回のガイドの紹介を受ける。ミスター・ダンバ・グルンである。警察官あがりだそうだ。ガイドの問題だが、これもヒマラヤ経験者ならつけなくてもよい。山城に入ってからいくらでもポーターはいるので個人的に交渉して雇えば良い。自信があればポーターさえいらぬ。道々で人に聞きながらゆけばよいのだ。ミスター・グルン(ネパーリーではグルン・ジと呼

ぶ。)は、後日ルクラに着くと、自分の知り合いのシェルパの少年を二人雇った。よく考えてみれば荷物は我々で運べば良かったのだ。不慣れなためについついガイドの意見に従ってしまうがそんな必要はまったくくない。自分達でやればよいのだ。とにかくも我々はトレッキングパーミッションを手に入れてロッジに帰る。足らない装備は殆どザイルからアックス、アイゼン、EPI カートリッジにいたるまでトレッキング途中のナムチェバザールでレンタルするか、買うことができるそうだ。要らなければ戻ってきたときに売れば良いとのこと。

ロッジに帰り、ダルバート(ネパールの基本的な定食、ライス、野菜のおひたし、シチューのようなもの)を食べる。食堂の隣人の日本人と話すうち、その一人が藤山さんの同級生であることがわかり仰天する。世界は狭い。部屋に上がって隣人の日本人と話をする。若いトレッカーだがバスでリジまで上がり、そこからクープを目指すということだ。時間と体力があれば、この方法が高度順応に最適だという。我々はいきなりルクラである。

我々の山にはいらぬ荷物は帰ってくることを前提にロッジに預かってもらう。

3/13

カートマンドゥ 11:00 ~ルクラ 12:00

朝五時半にグルン氏がタクシーで迎えに来る。チェックアウトして国内線の空港に向かう。しかし、ちょっと前に航空会社職員のストライキがあったそうで、最近の便が飛んでおらず、ルクラ空港行きの旅行者は皆待っており、空港窓口はごった返していた。しかも最近風が強く、一日四便は飛ばずの飛行機がどうやら一便しか飛ばないそうだ。空席が一つしかなかったので、大倉が乗り、先に飛び立った。紫藤は12時まで待ってすごすごとロッジに戻った。早くも離れ離れだ。

大倉はテレビ番組の撮影班の人達と一緒にいる。その中に群馬山岳会の秋山さんがいて、一緒にルクラをぶらつく。

3/14

この日も天候不順のため、紫藤とグルンはルクラ便に乗れなかった。旅行者のうち、志願者がそろえばヘリコプターを合費でチャーターできたのだが、人数がそろわずにこれも駄目だった。12時近くまで待って、紫藤はすごすごとロッジに戻る。ロッジに帰ると、他の日本人旅行者達が変に同情するので情けなくなってくる。このロッジは日本人好みなのか宿泊客はほとんど日本人だった。もともと日数がぎりぎりの計画なので、大変不安である。しかし仕方がない。

大倉は、ルクラで紫藤とグルンを持っていたが、一便だけついた飛行機に乗っていないので諦める。テレビ番組の撮影隊の人達は今日出発してしまった。その後、立教大のロブジェ隊が登頂に成功してルクラに下りてくる。

3/15 カトマンドウ 10:30---ルクラ 11:30 ルクラ発 13:00---Phakding 15:35

紫藤とグルンは今日も飛行機チケットは取れず、仕方なくヘリコプターを有志の旅客でチャーターした便でルクラへ向かう。大倉と合流し、グルンはポーターとしてシェルパの少年二人を雇う。名前はバサンとペンバという。ルクラの近くの村に住んでいる。中学生くらいの年齢なのだが、ペンバはどう見ても小学生にしか見えない。後で聞くと、彼等はポーターとして何度もカラパタールに行ったことがあるという。純粋な血統のシェルパが少なくなっていると聞いたが、それでもやはり凄いと思う。Phakding(2600m)までは谷沿いの道で、集落結ぶ道なので大変歩きやすい。途中、クスムカングルの西壁が谷の奥に見える。

3/16

Phakding 8:00---Jorsale 10:30---Namche Bazar 13:50 晴

心配していた頭痛はまだない。紫藤の頭がちょっと重い程度。ゆっくりと歩きだす。ロッジの宿泊料は食事代込みで、ガイド、ポーターも分も併せて 495 ルピー。これから高度が上がれば値段も上がってゆく。確かに、ガイド、ポーター無しなら大変な節約になるだろう。

歩んでゆく峡谷は厳しい。まわりにはいくらでも大岩壁がそびえている。この季節は意外に暖かい。日差しを受けると、日本の夏山を思わせる気候である。Jorsale にはすぐについた。ここからは国立公園である。兵隊が峠を守っており、パーミッションの提示を求められる。公園入園料は一人 650 ルピーで、これはつい最近倍額になっていたとのこと。さらに重量税 275 ルピーを取られる。

Jorsale を過ぎ、トレッカー達やヤクの群れとすれ違いながら川沿いに進むと、つり橋に出て、そこから尾根を登ってゆく。600m の登りである。日差しはきつい。途中尾根の陰からヌブツェ(7861m)が見える。その後ろから顔を出しているのは何とエベレストではないか。初めてこの目で見るエベレストはまだ小さかった。しかし、近寄れば化け物であろう。そんなこんなで登ってゆくと、こんな高地に信じられないような段丘上の集落に出た。Namche Bazar(3440m)である。すでに未経験の高地である。谷を挟んで向かいにはコングデが見える。とても美しい場所だ。ここは週に一回バザールが行われる土地である。あちこちにロッジがあり、トレッカー達がたくさんたむろしている。ダルパートをたらふく食べてロッジの部屋に入ると、グルンジが現れて、計画がきついため、予定であった翌日の Namche STAY を削って出発しようと提案する。確かに計画がきついで同意せざるをえない。グルンジは更に、自分をベースキャンプからのアタックに同伴させよという。そうすれば彼にはボーナスを出さなければならない。えぐいかげひきである。こちらは二人だけで登るつもりだと説明したが、不愉快そうである。

その晩、集落の中の登山用具店でアタック食料と EPI カートリッジ 4 つとスノーバー(併せて 1810 ルピー)、ザイル 8mm を 50m(2000 ルピー、高い)を買う。店の人間はグルンジの友人だ。安心して良いのか心配して良いのか良く分からない。

3 / 17 Namche 8:45---Phunki 11:30---Tangboche 14:00 曇

早朝、パイルとテントをレンタルして出発。ロッジ代は 624 ルピーで、レンタルのデポ料金として 1000 ルピーである。深い谷沿いに歩いてゆく。右手にはタムセ・ルクが雄大である。ゆくてにはアマ・ダブラム、エベレストが見える。いったん Phunki まで下り気味となるが、ここから大きく Tangboche(3980m)まで登らなければならない。それにしてもグルンジは人の金だと思って、休憩所で高いものを食うので困る。

登る途中、大倉の血圧が異常に上がったがすぐ落ち着く。紫藤は歩きながら、何か物の見方が酒でも飲んだときのように見えるのに気付く、軽い頭痛を感じるが、無視して Tangboche に向かう。ここには最も高いところにある仏教寺院がある。

3 / 18 (大倉 グルン ベンパ)Tangboche 9:40 --- Dingboche 14:30 快晴

頭痛のある紫藤と付き添いのパサンを残して出発する。日数がないため、もしも一日待って紫藤が上がってこれないなら大倉はグルンジと登るという取り決めを行っていた。特に問題なく Dingboche(4358m)に着くが、夕食まで待っていると大倉にも頭痛が少し起き始める。当然のようにグルンジとベンパはびんびんしている。このあたりのロッジのダルバートはひどい味である。すでにシェルパでさえ一年通して住めない高さである。彼らは季節が来ると下りてしまうのだ。それにしてもアマダブラブが目の前ですごい迫力である。ローツェ南壁も巨大な姿をさらしている。しかしこの辺りはまだ荒れた乾地で雪ひとつない。意外である。もう少し上がればようやく雪が現れる。

(紫藤 パサン)発 11:40 --- Pangboche 1:20

紫藤の眼底に昨夜から圧迫するような痛みあり。朝目覚めるとかなりの頭痛があったので出発前にちょっと一人で Phunki に下降してみる。休んで再び登り返し、Tangboche で休む。微熱があり、出発を遅らせることにし、大倉とグルンジ、ベンパに先に行ってもらう。高度障害によく効くという濃いガーリックスープを飲む。昼近くになって回復してきたので Pangboche まで上がる。今思えば、高度順化もろくろくせずに無茶だったと思う。Pangboche でもやはり頭痛はぶり返した。当たり前のことであった。

3 / 19 (大倉 ベンパ ボカルデへ Training) Dingboche 8:50 --- 5080m 10:50 --- Dingboche 11:40 晴れ

高所順化のためにボカルデから伸びてくる尾根を登る。しっかりと踏み跡があり、歩きやすいが、かなり息があがった。5080m まで登る。タボチェ、ロブチェが見え、遠くチョーポルの肩からマカルーが顔を覗かせている。さらにはボルンツェがカリ・ヒマールの右手に現れる。さて降りるとなるとベンパは恐ろしい速さで駆けてゆく。まったく凄い。大倉の体調は良かったが、ロッジでじっとしていると頭痛がする。

(紫藤 パサン)Pangboche 8:10 --- Dingboche 10:20

11:20~13:40 Pakalde Training

朝、やはり頭痛。しかし耐えられないことはない。ぼんやりした意識でなんとか歩いてゆく。パサンは元気だ。それでもローツェ南壁が大きくなってくると嬉しい。

Dingboche に着いてほっとする。かなり消耗しているように感じた。グルンジがミルクチャーを渡してくれる。水分をたくさん取れば、代謝が激しくなって高度障害が緩和されるのだ。しかし驚いたことが起こった。コップのチャーをすべてのみほしてじっとしていたら、突然胃袋から液体が逆流してきたのだ。まったく制御不可能である。素面でこんなことは初めてだった。なんとか口を一杯にしてこらえ、ロッジの裏手によろめいていくと、その途端、全部噴水のように噴き出してしまった。それもどンドンあふれてくる。すこしでも高度に慣れようとして、一人でポカルデに出かける。5000m まで上がったか自信はなかった。ぼんやりとアマダブラムを眺めて降りた。紫藤は結局ここが最高到達点となった。ロッジで頭痛と熱に苦しんで寝込む。ガーリックスープをたらふく飲む。

3 / 20 (大倉 グルン ペンバ) Dingboche 9 : 00 --- Chukung 10 : 40 --- アイランドピーク BC (5150m) 12 : 50 曇り

紫藤の調子が悪く、Tangboche におりることとなる。フライト予備日が残余一日だったので、グルンジに Climing Guige を頼み、ペンバを加えて三名で出発する。23 日に Namche で再会の約束である。

グルンジは Chukung で泊まっていたかかったようだが、翌日の High Camp までの登りが 800m もあり、それを考えて足を伸ばすことにする。すると一気にベース (5150m) に着いてしまった。荷物を何も持っていないので楽だがかなり寒い。隣には我々同様コスモトレックでガイドを頼んだ日本人パーティーがいる。彼らは結局高度障害で敗退するそうである。グルンジの提案で翌日は一気にピークを狙うことにする。

(紫藤 パサン) Dingboche 9 : 45 --- Tangboche 13 : 20

紫藤の頭痛がひどく、下降することにする。下降中はまったく問題無く、不思議にも Tangboche に着くころには頭痛がすっかりひいてしまった。高度障害とはこうしたものらしい。この高さには順応したようだった。しかしもう日数がない。残念である。高度障害の特効薬は数百 m 降りること。一番恐ろしいのは、我慢しすぎて自力では歩けなくなってしまいう状態である。突然症状がやって来るので、やはり甘く見ないで時間をかけて登らなければならないところだった。

3 / 21 (大倉 グルン ペンバ) BC 8 : 00 —— 氷河(5150m) 10 : 50 —— アイランドピーク山頂 13 : 30 —— 氷河 14 : 50 —— BC 16 : 00 —— Chukung 19 : 10 晴

朝 3 : 00 起床で 4 : 00 出発の予定だったが、頭痛がひどいので朝食をとり、薬を飲ん

で寝る。7:00に起床するとかなり楽になっているのでグルンジと二人で出発する。

BCから右手に見える尾根にまわり込むようにして取りつき、上がってゆくと正面にガレたルンゼが出る。このがれを越えると所々にテン場がある、どうやらここがHCらしい。ルンゼが狭くなったあたりで右手の尾根に取りつく。踏み跡があり、これに沿って高度をかせいでゆく。20mくらいの岩尾根を抜ければ氷河である。

5500mまでは草つきであり、氷河は5800mくらいであろうか。氷壁の硬さは夏の雪渓程度でクレバスに注意すれば問題無し。頂上直下の氷壁は10~20cmのフレーク状の氷が無数に立っており、これをつかんで登る。II級ほどか。雪壁を登りきってヤセ尾根を50mほどあがってゆくと頂上に到着する。今回はノーザイルでいったが、風が強い時はヤセ尾根なのでザイルが必要となるであろう。頂上は細長く同じ長さの四つのポコが90mおきぐらいに並んでいる。四つめのいやらしいポコを除いて一通り歩いた後に休息する。南にはマカルーが北には上部を雪に隠されたローツェ南壁が見渡せた。40分ほど休息した後、へとへとになりながら往路を引き返す。

BCに着いてから翌日一気にNamcheに下るべく、Chukungまで下っておく。すでに真っ暗であった。

(紫藤 パサン) Tangboche 9:30——Namche 12:50

Tangbocheで一緒になった佐藤さんとそのガイドのラジンと一緒に下った。よい天気で気持ちがいい。すこし大倉のことを心配する。Namcheは土曜のバザールが終わったところだった。

3/22 (大倉 グルン ペンパ) Chukung 8:00——Dingboche 9:00——Tangboche 13:40——Namche Bazar 16:40 快晴

クライミングが短かったのですぐに引き返すのは変な感じだ。

Namcheで先行の二人と再会する。その晩はチャンとロキシーで酒盛りとなる。チャンを3ポットも開けてしまった。山行を通して、病気を避けるため、水はすべてロッジで買い求めたミネラルウォーターであった。あるいはミルクチャーを飲んだ。チャン(どぶろくのような色の弱い家庭酒)、ロキシー(地酒の蒸溜酒)は人によってはあたるというので心配していたが我々は飲んで大丈夫だった。

(紫藤 パサン) Namche Stay

3/23 Namche Barzar 9:05——Phakding 12:10——Lukla 15:10 晴
朝ロッジの主人がザイルを買いいたいというので800ルピーで売ることにする。のんびり下ってからLuklaまでは早かった。途中でチャンを飲みながら下る楽しい下山である。

Luklaで改めてグルンジと酒盛りをする。グルンジも緊張が解けたのか、変にひとつ

こい。ところが彼は、コスモトレックからまだ航空チケットが送られていないので購入のため83ドル払えという。我々はまた悪い冗談だと笑い飛ばしていた。

3/24 Lukla 10:35——カートマンドウ 11:25

グルンジが朝やってきて、本当に一人83ドル払えという。半信半疑で払ってみると本当だった。まったく笑えない。

飛行機はひどく揺れるので落ちるような気がしてならない。中には吐いている乗客もいる。Kathmandu につくと、なにか懐かしい気分になる。ロッジに帰って日本食を詰め込み、シャワーを浴びてようやく人心地とりもどした。

25~27 Kathmandu Stay

旧王朝や寺院を観光したり、Tamel 付近をぶらついて過ごす。

28 Kathmandu 11:30——Bangkok 17:55

バンコクで、大倉の知り合いのドンチャイ氏に会い家に泊まらせてもらった。大変なお世話になった。

29 Bangkok 9:10~大阪 16:10

旅も終わり、二人は別れて体を休めることにする。

● 装備

今回、基本的な装備は日本から携帯していった。現地で調達した物には☆印を付す。

1. 共同装備

幕営用具		ザイル9 mm 40 m	1 ☆
		ハーケン	6 ☆
高所テント (2人)	1 ☆	捨て縄	10 m
ベーステント	1 ☆	フィックスバー	4 ☆
ツェルト	1 ☆		
雪ノコ	1	炊事用具	
スコップ	1 ☆		
ペグ	6	ポリタン (2個)	2
		EPI	1
登攀具		スーパーチャージャー	2

EPI 寒冷カート大、小	1 ☆
コッヘル (スコットで代用)	1 ☆

装備袋

食糧 (クライミング用)

ジフィーズ	6
ラーメン	6
粉末味噌	6
スープ	4
練乳	1
チョコレート	
ドライフルーツ	

ロウソク	1 ☆
リペアテープ	1 ☆
ガムテープ	1
ビニールテープ	1
裁縫具	
針金	
ペンチ	1
ビニール袋	5

2.個人装備

シュラフ、シュラフカバー、マット、下着上下、靴下2、手袋2、セーター、ヤッケ上下、オーバー手袋、スパッツ、目出帽子、雨具、アイゼン、ピッケル、ゼルプスト、カラビナ5、シュリング5、エイト環、ヘルメット、非常パック、スプーン、スコット、ヘッドライト、予備電池4、登山靴、カメラ、ライター、ナイフ、コンパス

● 会計報告

1 収入

隊員負担	501,072
山岳会援助	100,000
合計	601,072 円

2 支出

国内費		国外費	
渡航	352,240	滞在費（トレッキング）	25,047
食料	4,000	滞在費（カトマンズ）	26,000
医療	6,240	現地装備	10,830
小計	362,480	入園料	4,725
		ポーター代	10,450
		ガイド料	6,300
		ヘリ代	38,400
		航空費	39,840
		コスモトレック社への支払い	67,000
		雑費	10,000
		小計	238,592

合計
601,072 円

● 登頂者の弁

大倉徹雄 隊員

今回 20 日間という非常に短い日程で幸運にもアイランドピークの頂上に立つことができた。何が幸運だったかという点、ルクラ入りが遅くなり過ぎなかった事、アタック日に天候が穏やかであった事、そして何よりもひどい高度障害にならなかったことである。しかし、紫藤が高度障害により、敗退せざるを得なくなってしまった。この短い日程は全て私の都合によるもので全く申し訳ない。

今回の山行は最初は私の卒業旅行にトレッキングに行くという話から始まり、せっかくだから駄目でもいいから登ってみようということで計画されたものである。山を決めるにあたっては、①ルクラフライトが不安なもの、アプローチをトレッキングとして見た時に日程が手頃であり、何よりもエベレストが見れるという点でクープ方面にある山。②とにかく日数がなく、また登れる確率の低い山よりも確実に登れる山という点でアプローチに時間がかからず、登攀が容易な山。③できるだけ高い山がいいという点で 6000m 以上ある山、等の理由でアイランドピークを選んだのである。この様にして選び、実際に登ってみて技術的に困難のなかったアイランドピークだったが、登頂した時には何とも言えない喜びが込み上げてきた。やはり、山をやる者にとってヒマラヤは憧れの地であり、また行って後悔する事はないと思う。我が山岳会はサンゲマルマール以来部員不足という事もあって、大規模な遠征を行っていないが、ここ 1,2 年で部員の数も増え、中にはぜひ遠征に行きたいと言う者もいるようである。ぜひ行ってもらいたいものだ。

最後になりましたが、今回の遠征を行うにあたり、御援助下さいました山岳会の皆さんに厚く御礼を申し上げます。

編集後記

二年程前に時報の編集を任されて以来、合宿や授業の合間を縫って作業を進めてきましたが、原稿の回収が思うように行かず、とうとうこんなに時間がかかってしまいました。本当に申し訳ありませんでした。

原稿が集まりにくかった原因は、やはり今回初めて自分達で時報をワープロを使ってつくろうとしたからだと思います。できるだけお金をかけずに作ろうというところから生まれたアイデアだったのですが、結構大変な作業だと思い知らされました。今後、どの用な形で時報を作っていくかについては後輩諸氏次第だと思いますが、原稿が溜ると大変なので、できるだけ早く作るようにして欲しいと思います。

最後に、この時報を編集していた間に、せかして下さったり、協力して下さった OB の方々に心から御礼申し上げます。

編集委員 川上

平成 8 年 9 月

発行所 大阪体育会山岳部

〒560 豊中市待兼山町 1-1